桑原遺跡群2

―飛櫛貝塚第1次調査―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第480集

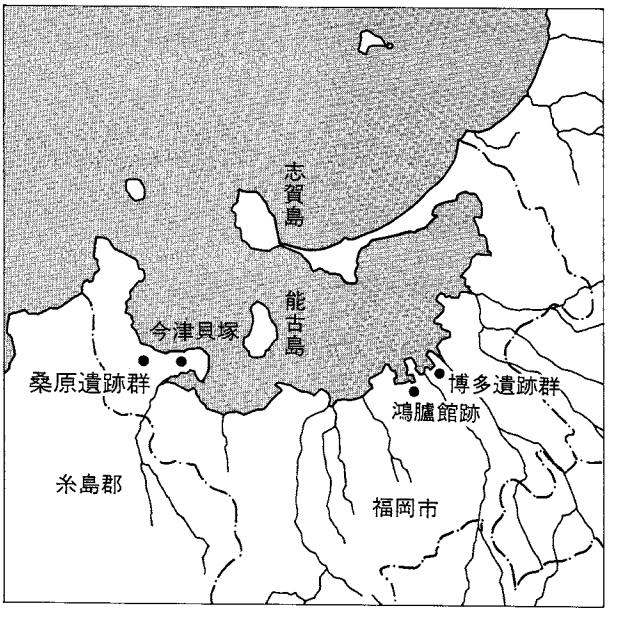
1996

福岡市教育委員会

桑原遺跡群 2

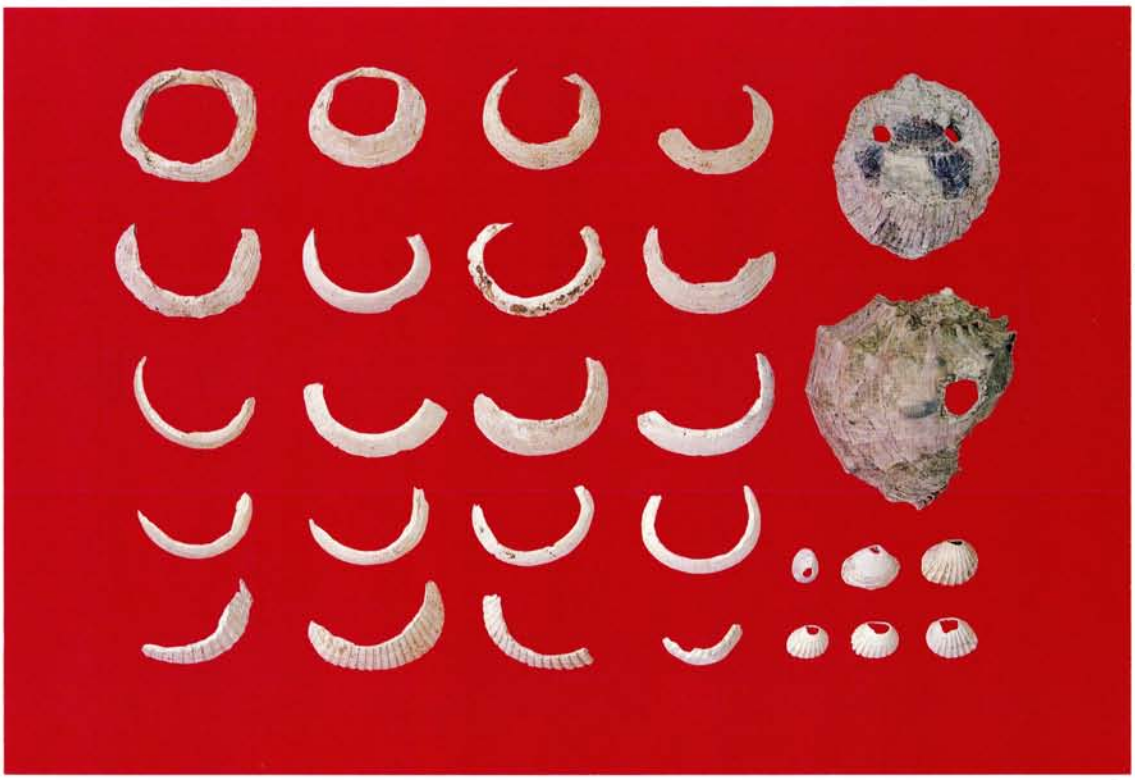
―飛櫛貝塚第１次調査―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第480集



1996

福岡市教育委員会



桑原飛櫛貝塚出土貝製品

桑原飛櫛貝塚出土獣骨

貝塚の検出状況　北から

土壙墓SR01　4・5号人骨出土状況　西から

序　　文

博多湾に面した福岡市は鶴翼状に拡がった都市ですが、豊かな自然環境と歴史的な遺産に恵まれています。特に西部地域は手つかずの自然景観を残しているところですが、近年における福岡市の著しい市街化によって開発を余儀なくされており、その姿を変貌しつつあります。

特に九州大学の移転事業に関連して、西部地域の開発計画は公共・民間事業を問わず枚挙に暇がない程です。福岡市西部地域の自然環境と歴史的遺産を保護し、後世に伝えてゆくために、日頃その保存に努めることは言うまでもなく、文化財や自然環境との調和のとれた開発が望まれるところです。

福岡市教育委員会では、今後、西部地域における各種の開発事業に伴い、失われゆく埋蔵文化財の保存・保護措置に努めていく所存です。

本書は平成4年度に発掘調査を行った桑原遺跡群の調査成果について報告するものです。この調査地点は、従来から周知されていた桑原飛櫛貝塚の分布範囲に位置しており、縄文時代貝塚の他、弥生時代から鎌倉時代までの遺構・遺物を発見することができました。なかでも貝塚の調査は、縄文時代後期の土器や石器・獣骨・人骨など豊富な遺物が出土しており当時の生活を知る重要な手懸かりになるものと考えられます。

本書が市民の埋蔵文化財へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成8年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾　花　　剛

例　　言

1．本書は西区桑原の市道拡幅工事に伴い、福岡市教育委員会が平成４（1992）年11月２日から平成５（1993）年１月23日の期間中に発掘調査を実施した桑原（くわばる）遺跡群調査報告である。
2．発掘調査は、文化財部埋蔵文化財課の井澤洋一、吉武学が担当した。
3．本書には桑原遺跡第１次調査の桑原飛櫛貝塚調査について収録する。平成６年度の第432集では弥生時代から鎌倉時代の遺構について報告した。
4．本書に掲載した遺構の実測は、井澤洋一、吉武学、西口キミ子、多田映子、福田小菊が行った。
5．遺物の実測は田中昭子、池田孝弘、福田が行った。尚、石器、獣骨等の自然遺物ついては器械実測を行い、吉田扶希子、廣嵜香、田中が担当した。
6．遺構の製図は牛房綾子が、遺物の製図は廣嵜、吉田、井澤が担当した。
7．遺構の写真撮影は井澤、吉武が、遺物の撮影は牛房が行った。
8．本書に掲載する遺物一覧表は池田孝弘、吉田扶希子、池田洋子が作成した。
9．本書作成にあたっては、西口、多田の協力を得た。
10．遺構番号は発掘調査中に於いて検出した順に番号をふり、本書では遺構略号を遺構番号の頭に付けた。遺構の略号として用いたのはSR（土壙墓）、SX（貝塚）である。
11．本書の遺物番号は遺構の種類毎に通し番号で示し、挿図・図版番号に一致させている。
12．本書に用いた方位は磁北である。
13．本報告にかかわる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
14．本書の執筆は井澤が担当し、編集は井澤が行った。

遺跡調査番号	９２４３			遺跡略号	KWR-1
地　　番	福岡市西区大字桑原字立浦762-1，877-1			分布地図番号	桑原129
開発面積	40,000㎡	調査対象面積	500㎡	調査面積	300㎡
調査期間	1992年（平成４年）11月５日～1993年（平成５年）１月23日				

本　文　目　次

第１章　はじめに……1
　１．発掘調査に至る経緯……1
　２．発掘調査の組織……1
　３．立地と歴史的環境……3
第２章　桑原遺跡第１次調査（桑原飛櫛貝塚）……7
　１．調査経過……7
　２．立地・環境……7
　３．第１地点の調査概要……9
　　(1)　概要……9
　　(2)　土層……9
　　(3)　遺構面……13
　４．遺構説明……21
　　(1)　概要……21
　　(2)　グリッドの設定……23
　　(3)　貝層……23
　　(4)　土壙墓（SR）……28
　　(5)　各グリッドの調査……29
　５．遺物説明……40
　　(1)　土壙墓出土遺物……40
　　(2)　グリッド出土遺物……40
　　(3)　その他出土の縄文後期土器……67
　　(4)　石器……67
　　(5)　土製品……67
　　(6)　貝製品……69
　　(7)　骨角器……70
　　(8)　自然遺物……70
付編
　１．桑原飛櫛貝塚出土の縄文人骨……81
　２．桑原飛櫛貝塚の自然遺物……97
　３．桑原飛櫛貝塚出土の脊椎動物遺体……111

挿　図　目　次

Fig. 1　桑原遺跡群と周辺の遺跡（縮尺１/2,500）……2
Fig. 2　新西部埋立場関係区域と遺跡分布図（縮尺１/16,000）……5
Fig. 3　桑原遺跡群と調査区位置図（縮尺１/2,000）……6
Fig. 4　桑原飛櫛貝塚第１次調査地点位置図（縮尺１/800）……8
Fig. 5　調査区南側谷土層模式図……9
Fig. 6　調査区壁面土層図（縮尺１/80）……11
Fig. 7　桑原遺跡第１次調査第１～３面遺構配置図（縮尺１/200）……12
Fig. 8　調査区第１～３面の遺構面断面模式図……13
Fig. 9　グリッド調査状況図（縮尺１/50）……17・18
Fig.10　グリッド貝層図（縮尺１/50）……19・20
Fig.11　グリッド割付図（縮尺１/300）……21
Fig.12　獣骨出土地点及び土壙墓配置図（縮尺１/200）……22
Fig.13　土壙墓(SR)01～05実測図（縮尺１/20）……25
Fig.14　土壙墓出土遺物実測図（縮尺１/３・１/２）……39
Fig.15　グリッドＢ２(G11) 出土遺物実測図（縮尺１/3）……41
Fig.16　グリッドＣ３(G10)・Ｂ３(Ｇ９) 出土遺物実測図（縮尺１/3）……43
Fig.17　グリッドＢ３(Ｇ９)・Ｃ４(Ｇ８) 出土遺物実測図（縮尺１/３）……44
Fig.18　グリッドＣ４(Ｇ８)・Ｂ４(Ｇ７) 出土遺物実測図（縮尺１/３）……45
Fig.19　グリッドＢ４(Ｇ７)・Ｃ５(Ｇ６) 出土遺物実測図（縮尺１/３）……46
Fig.20　グリッドＣ５(Ｇ６)・Ｂ５(Ｇ５) 出土遺物実測図（縮尺１/３）……47
Fig.21　グリッドＢ５(Ｇ５)・Ｂ６(Ｇ３)・Ｃ６(Ｇ４) 出土遺物実測図（縮尺１/３）……48
Fig.22　グリッドＢ６(Ｇ３)出土遺物実測図（縮尺１/３・１/４）……49
Fig.23　グリッドＣ７・Ｄ７(Ｇ２)出土遺物実測図（縮尺１/３）……50
Fig.24　グリッドＣ７・Ｄ７(Ｇ２)・Ｂ７(Ｇ１)出土遺物実測図（縮尺１/３）……51
Fig.25　グリッドＢ８(G15)・Ｃ８・Ｄ８(G16)出土遺物実測図（縮尺１/３）……52
Fig.26　グリッドＣ９・Ｄ９(G18)出土遺物実測図（縮尺１/３）……53
Fig.27　貝層内出土遺物実測図（縮尺１/３）……55
Fig.28　Ｉ区貝層内出土遺物実測図（縮尺１/３）……56
Fig.29　Ｉ区Ａトレンチ出土遺物実測図（縮尺１/３）……57
Fig.30　Ｉ区Ｂトレンチ、及びベルト内出土遺物実測図（縮尺１/３）……58
Fig.31　土製品実測図（縮尺１/３）……68
Fig.32　貝輪実測図①（縮尺１/２）……71
Fig.33　貝輪実測図②（縮尺１/２）……72
Fig.34　貝輪実測図③（縮尺１/２）……73
Fig.35　貝面、貝錘実測図（縮尺１/２）……74
Fig.36　骨角製品他実測図（縮尺１/２）……75
Fig.37　獣骨、糞石、サメ歯等実測図（縮尺１/３・１/２）……76

表　目　次

Tab. 1　桑原飛櫛貝塚出土土器一覧表……59
Tab. 2　桑原飛櫛貝塚出土石製品一覧表……66
Tab. 3　桑原飛櫛貝塚出土貝輪計測表……77
Tab. 4　桑原飛櫛貝塚出土貝錘計測表……78
Tab. 5　桑原飛櫛貝塚出土貝類の分析表……79
Tab. 6　桑原飛櫛貝塚出土貝類の各層出土状況表……79
Tab. 7　桑原遺跡獣骨・魚骨一覧表……80

第１章　はじめに

１．発掘調査に至る経緯

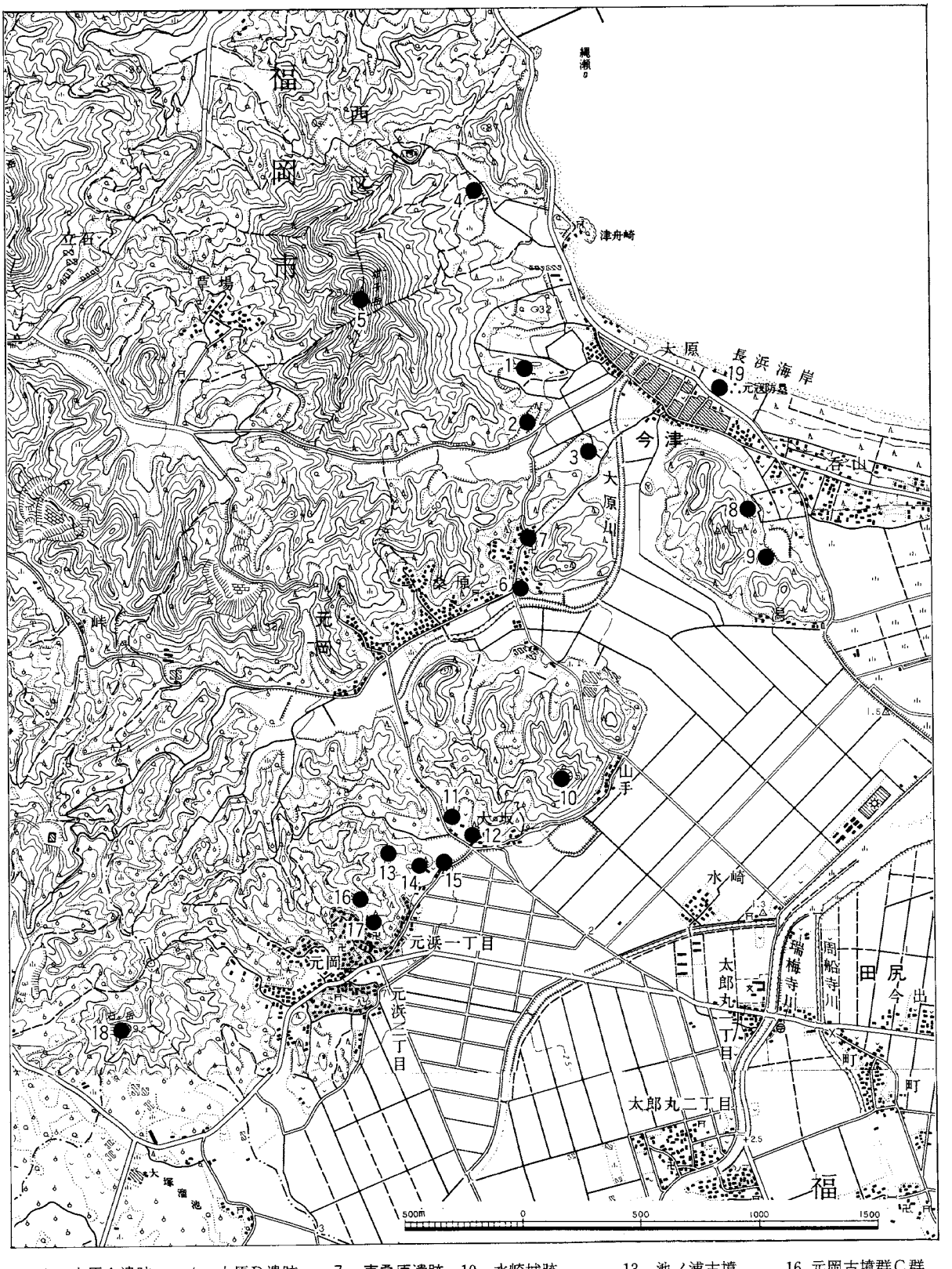
福岡市西区今津に所在するゴミ埋立処分場は平成７年頃に限界に達するため、新たに埋立処分場の用地が求められることになり、西区大原の柑子岳の北側山麓に約65,000m²を確保して、新西部埋立場の工事が進められることになった。又、同時にゴミ搬入道路の確保も重要な課題となり、元岡・桑原・大原に至る地域において既設道路の拡幅及び新設の計画がたてられ、平成３年度から工事着手の予定であった。埋蔵文化財課では、平成２年度から工事主体の環境局施設課と協議を継続して行い、平成３年より新西部埋立場の建設予定地の試掘調査を開始した。Ｉ期工事区域は柑子岳の東麓部における場内整備と周回道路の建設が予定されていた。試掘調査の結果、柱穴等を発見したので全面調査とした。平成３年から新西部埋立場内の発掘調査を行い、平成４年度には大原地区の大原Ａ遺跡に相当する搬入道路及び桑原遺跡の道路拡幅工事に伴う発掘調査を実施している。

当該地は元岡から桑原に至る間の搬入道路として既設道路の拡幅工事区間である。用地買収の関係から試掘調査が平成４年度にズレ込んだため、全体の工期の関係から試掘調査で遺跡を発見した場合は平成４年度中に発掘調査を対応しなければならない状況となった。

２．発掘調査の組織

調査委託　福岡市環境局施設部施設課
調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
調査総括　埋蔵文化財課長　折尾学（前任）
試掘調査　井澤洋一、吉武学
発掘調査　井澤洋一、吉武学
整理報告　井澤洋一（現福岡市博物館学芸課）
庶務　吉田麻由美（前任）、西田結花
整理補助　牛房綾子、吉田扶希子、廣嵜香、池田孝弘
調査協力者　橘良平、橘知子、吉川春美、横尾泰広、谷吉美、西口キミ子、坂本ハツ子、堀タケ子、多田映子、福田小菊、大神ハルヨ、柿木初子、重松トシコ、中村敦子、岡部和重、浜地優子
整理作業（平成７年度）　田中昭子、福田小菊、多田映子、西口キミ子、三浦明子

以上の他、地元において作業員の募集に関して、元岡公民館主事の中村勝利氏にご尽力をいただき、調査に際しては、桑原町内会長　中村安太氏(前)、中村祐雄氏、東桑原会長の中村純一氏にご協力をいただいた。排土置場の用地は地権者の中村勝利氏、大神幸男氏にお願いした。更に環境局施設課の小山田謙二、龍隆博、吉田信康の各氏をわずらわせたことに謝意を表するものである。



1．大原A遺跡
2．大原B遺跡
3．大原C遺跡
4．大原D遺跡
5．柑子岳城跡
6．桑原飛櫛貝塚（桑原遺跡）
7．東桑原遺跡
8．呑山古墳群
9．呑山遺跡
10．水崎城跡
11．桑原古墳群
12．元岡古墳群A群
13．池ノ浦古墳
14．元岡古墳群B群
15．元岡瓜尾貝塚
16．元岡古墳群C群
17．元岡古墳群D群
18．志摩城跡
19．元寇防塁

Fig.1　桑原遺跡群と周辺の遺跡（縮尺1/2,500）

3．立地と歴史的環境

福岡市は明治22（1889）年の市町村制の施行により、人口５万人、面積約５㎢でスタートしたが、その後、周辺町村を合併し１市30町村で形成され、現在その面積は336.81㎢に至っている。桑原地区は旧志摩郡元岡村に属しており、元岡村は昭和36年に福岡市に合併した。

福岡市最西端の西ノ浦岬は、博多湾の境でもあり、ここから西は玄界灘に面する。この地域は糸島水道を境にして、福岡市西部の早良平野・今宿平野とは地形の様相を異にする。かつては入江が複雑に入り込み、又、独立した島嶼群を思わせるものがある。今津湾は、今では江戸時代の寛文５(1665)年に始まった今津潟の干拓により狭められているが、古くは大原川河口から直接今津湾にでることができたと思われる。志摩郡の名称は、「日本書紀」に「島郡」がはじめてあらわれる。後に「續日本紀」では「志摩」と呼ばれ、郡内に「韓良」「久米」「登志」「明敷」「鶏永」「川辺」「志摩」の７郷があったといわれる。当該地は登志郷内にあたる。桑原地区は糸島水道の北側にあって、今津湾の西奥に位置し、北東方向の海岸部には大原の砂丘が存在する。山稜が海に迫り、小さな開析谷が複雑に形成され、この開析谷に水田が営まれる。遠く北に柑子岳(254m)、東に今津の毘沙門山(140m)、西に石ヶ岳(99.2m)に三方をへだてられるが、南に糸島水道が開け、交通の要衝にあたる立地条件にある。元岡・馬場・初を経由すれば引津湾へ届き、糸島水道を西に加布里湾へ至り、更に、北へ草場を経由すれば東林寺が所在する唐泊に至る。遺跡は今津湾を中心として多く存在しており、弥生時代の今津・長浜貝塚や、石斧製作地の今山遺跡や呑山遺跡等が存在する。この時代は周辺の引津湾や加布里湾岸において支石墓も多く発見されていることから、古くからの対外交流と交易を中心とした生業を営んでいたことが伺える。古墳時代は志摩縣に相当し、古代には、大宝２（702）年の川辺郷の戸籍中に志摩郡大領の肥君猪手がいたことが記されている。この肥君猪手は大宰府観世音寺の製塩を行っていたと云われる。平安時代末にはこの地域に怡土庄がおかれ、この時に皇室領の桑原庄もおかれたと云われる。又、仁平元（1151）年の博多・箱崎の大追捕により、一時衰えた博多貿易を今津湾を中心として負ってきたため、今津担過など中世遺跡や寺社も多く存在し、又、臨済禅と茶を伝えた禅僧栄西は誓願寺の創建に関わり、また、今津において宗教活動を行った。栄西が記した「盂蘭盆一品経縁起」が有名である。今津湾は古代・中世における中国・朝鮮交流との重要な拠点でもあり、軍事的拠点でもあった。鎌倉時代の文永の役は博多、筑前に多大な被害を及ぼしたが、元の襲来に備え幕府は日向国・大隅国に命じて、今津海岸・大原海岸に石築地を構築させている。南北朝から戦国時代を通じてこの地域も戦乱とは無縁ではなく、少弐、大友、大内氏といった守護大名の支配が目まぐるしく変わる中で、名主・国人層は対応を迫られた。筑前国守護少弐氏の衰退と共に、大友氏は筑前支配を強め、豊前国守護であった大内氏と博多貿易や筑前国の支配に関して対立し、柑子岳城を筑前西部の戦略拠点とした。又、その支城として桑原に水崎城をおき、元岡に志摩城をおいて、怡土の高祖城にいた大内勢と対向した。天文２（1532）年には大内義隆は柑子岳城を落とし、一時期城番をおいているが、その後は和睦によって大友氏一族の臼杵親連が入城し、大友氏が耳川の戦いで敗れ衰退するまで、この地域は大友氏と志摩７党による支配が行われている。

環境局の工事区域における遺跡は昭和57年発行の「福岡市文化財分布地図西部Ⅱ」によれば、北から大原古墳群Ａ・大原古墳群Ｂ・大原Ａ遺跡・大原Ｂ遺跡・大原Ｃ遺跡・桑原飛櫛貝塚が所在する。大原Ａ遺跡は平成４年度に圃場整備事業に伴い発掘調査を実施し、弥生時代の住居跡、古代の製鉄遺構・掘立柱建物、中世の掘立柱建物等を発見した。大原Ｂ遺跡は昭和51年に病院建設に伴って緊急発

掘調査した。弥生時代後期の住居跡１軒を検出し、住居跡内に投棄された土器の一群から鹿を描いた絵画土器が出土している。新西部埋立場内の試掘調査は平成３年度から実施されており、現在まで縄文時代晩期から中世までの遺跡が存在することが判明している。この遺跡群は新たに発見したもので総称して大原Ｄ遺跡の名称を与えている。平成３年度の第１次調査において、古墳時代後期の円墳、平安時代の製鉄遺構・掘立柱建物、時期不詳の焼土壙等を検出した。平成４年度の第２次調査では古代の製鉄関連遺構、縄文時代晩期の水路・土壙・埋甕を検出した。平成５年度の第３次調査では縄文時代晩期～中世の遺構が発見されている。又、大原Ｂ遺跡と大原Ｃ遺跡の間には新たに古墳時代の住居跡が存在する遺跡が発見されており、これは大原Ｃ遺跡を拡大してとらえている。更に、桑原飛櫛貝塚と大原Ｃ遺跡の間にも遺跡が存在し、南側の製鉄関係の遺跡を東桑原遺跡、北側の中世遺跡を大原Ｃ遺跡に含めた。

筑前國續風土記　巻之二十三

志摩郡

續日本記　元明天皇和銅二年、筑前國島ノ郡の少領に姓を給はりし事あり。是此郡の事國史に見えし始也。又萬葉集十五巻にも、筑前國志摩郡の韓泊とかけり。三代寛録巻二、貞觀元年正月、太宰府言、筑前國志摩郡兵庫鼓自鳴云云。此郡を志摩と名付し事、昔は今津のまへ、夷魔山の後の入海西へ通り、桑原元岡の前より前原にいたり、此間皆海にして西北の諸村諸山、海中にありし故、志摩とは名つけけらし。志摩とは島の字をわかちて二字にかける也。百年以前、入海やうやく田と成て、島に在し西北の諸村、今は皆陸地につらなれり。近年迄東西のはしは、猶斥残りしか、是又近年すでに新田となれり。昔の入海よりむかひに、泊村あり。是むかしの海の入江にて、船の泊りし所にして、唐船をも、こゝにつなげりと云。田の字にも浦の字の付たる名多し。又南に浦志村有。是又海邊にありし故に名付しならん。此入海なりし所の田のそこをかへせは、今もかきはまくりのから多し。陵谷變遷の理、古今其ためしすくなからす。むかしの入海なりし筋よりこなたにも、又志摩郡の内青木、女原、谷村、今宿、田尻、太郎丸、板持、高田、志登、池田、波多江、潤、浦志、前原等諸村あり。すべて中通と云。怡土郡と島郡入海の中間にあり。通路の左右にある所の村なれは、名付しならん。此諸村は皆むかしの入海より東南にありて、怡土郡の方につらなり、島の方にはつゝかざれども、入海のほとりに近けれは、志摩郡に属しけるにや。又此諸村むかしは怡土郡なりしを、後に亂世の時、みたりに領地をわかちとりて、志摩に属しけるにや。されは延喜式神名帳に、志登神社を怡土郡と書しも、志登村はむかしの入海より南にあれは、いにしへは怡土郡に属せしを、近代志摩郡に入れしにや。いふかし。凡怡土志摩は、其地相ならひ隣りて、國の西斎にあれは、同しくつらねて怡土志摩と稱す。然れとも怡土郡は山川そはなり、薪材多く、平原廣くして、良田多し。此郡は西北南三方に海をうける故、所々に漁家ありて、鮮魚多く、海味ともしからす。運送の便よしといへとも、山に林木なくして、柴薪材木ともし。山間及海濱に村里多くして、平原すくなく、地やせて良田すくなし。只麥豆によろし。海濱にある諸村は、大風の災あれは、秋穀みのらす。川小にして水災はなし。怡土郡に比し難きのみに非す。國中の諸郡にたくらぶるに、最下郡とすへし。

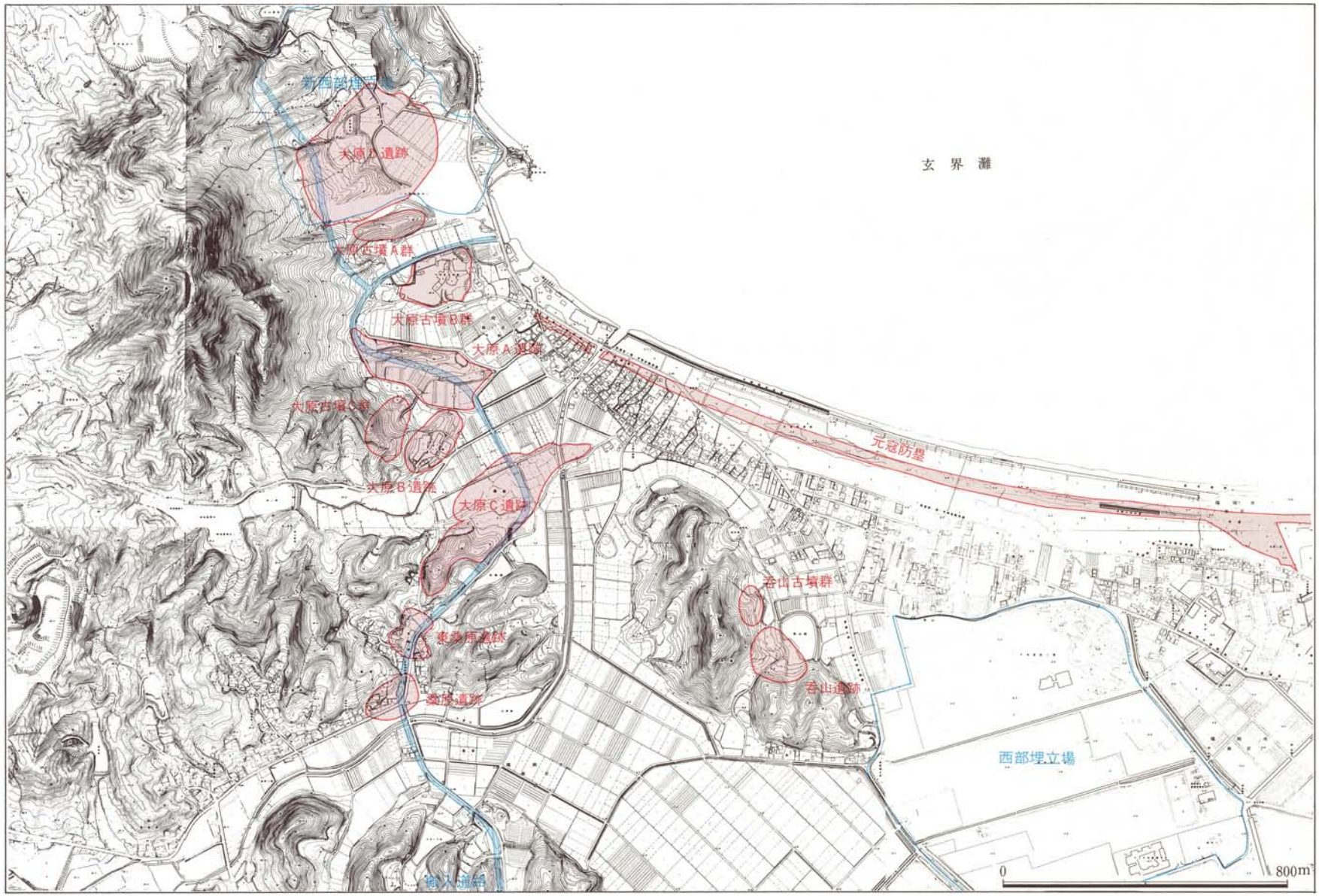


Fig. 2　新西部埋立場関係区域と遺跡分布図（縮尺 1 /16,000）

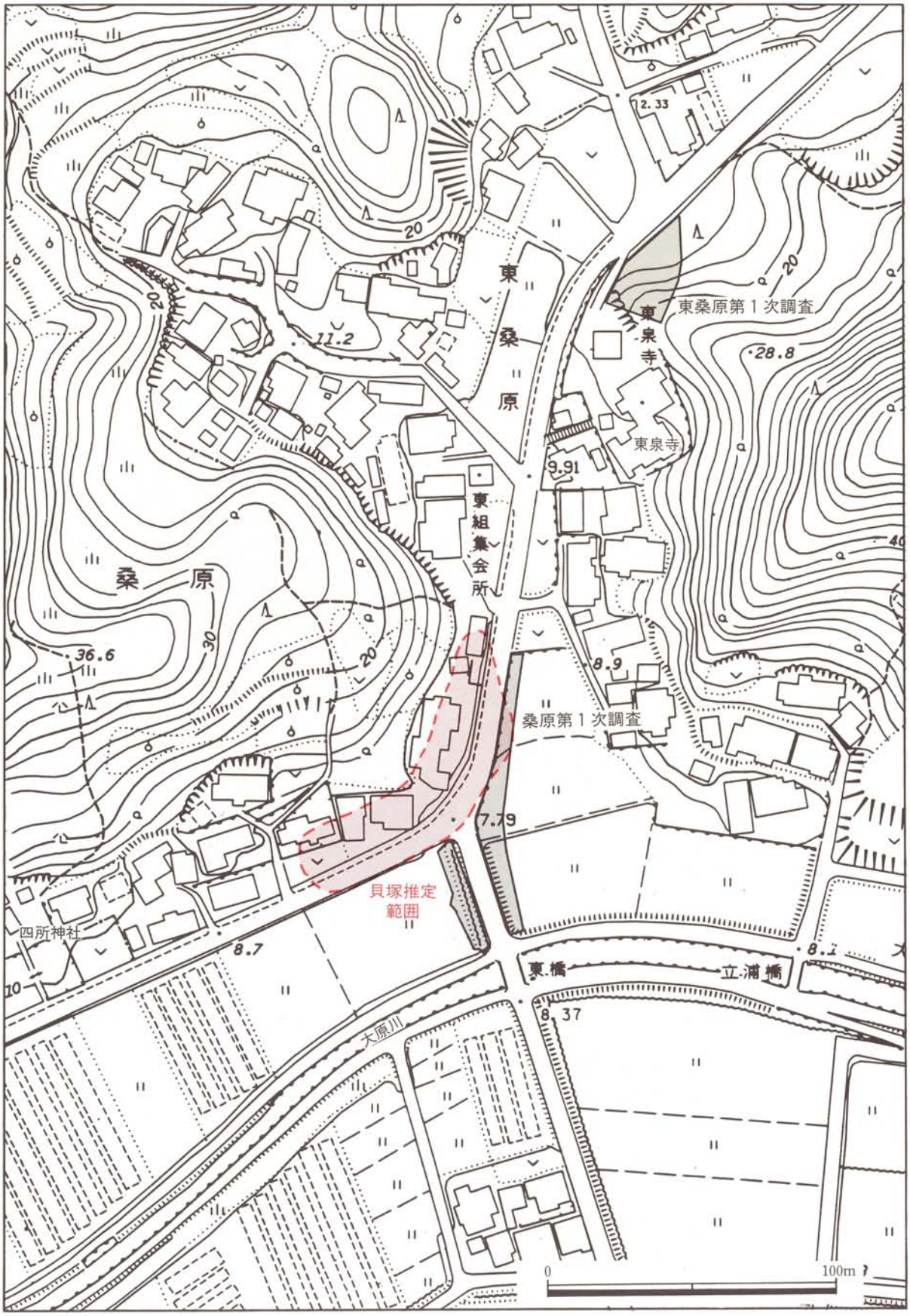


Fig. 3　桑原遺跡群と調査区位置図（縮尺１/2,000）

第２章　桑原遺跡第１次調査

１．調査経過

福岡市環境局は福岡市西区大原において今津のゴミ処理場に代る新西部埋立場の建設に計画着手しているが、この工事に伴い工事用道路や搬入路整備を余儀なくされており、計画では平成４年度から桑原地区の既設道路の拡幅工事に着手する予定であった。しかしながら、用地買収等の関係から平成４年度に工事がズレ込み、且つ、試掘調査によって遺跡が発見された場合は、当該年度中に調査を行わなければならない状況にあった。当該地は、桑原飛櫛貝塚の分布範囲内にあるため急ぎ試掘調査を行うこととなった。

現況の地目は水田である。試掘調査は平成３年10月29日に実施した。道路拡幅は４ｍ～10mであるが、現道との高低差が2.5mもあるために、重機を使用するには残土処理の問題や電柱等の障害物が存在した。このために試掘が充分に出来ず、Fig. 4のようなトレンチ配置となった。試掘の結果、工事予定地の北側及び南側は開析谷が存在することがわかった。開析谷の土壌はヘドロ堆積であったが、中央の第１トレンチにて耕作土の下より黒褐色粘質土の包含層を検出したため調査対象として保存協議を進める事となった。平成４年度の搬入道路工事は既に橋梁の架け替工事や遺跡が存在しない地域の拡幅工事が着工されていた。発掘調査期間は当初、貝塚の存在を確認できていなかったため、２週間程度とみていたので、事前審査の２名で発掘調査の対応をすることとなった。

発掘調査は平成４年11月５日～平成５年１月23日まで実施した。

２．立地・環境

遺跡の立地する台地は今津湾の西側に面しており、北側に浸食した長さ約400m、開口部広さは約100ｍを測る開析谷の開口部に相当し、今津潟の形成される以前は、湾の入江が迫っていたと考えられる。当該地はこの開口部の右岸にあって、標高約80mの山塊から東南方向へ延びた丘陵の舌状部分に位置する。舌状台地の南側は大原川による削平を受け低位段丘を形成している。南側の段丘面は現地表の水田面から約２ｍの深さに検出することができる。地山は頁岩で、上部に１～２ｍの堆積層が存在する。当該地の水田の標高は約６ｍを測る。又、台地北側は開析谷の浸食を受けて段落ちとなり、ヘドロ堆積が著しい。周辺では谷の北側奥に東桑原遺跡の製鉄遺跡が存在し、大原川を隔てた東側の水崎山には水崎城がある。

福岡市内の縄文時代貝塚は元岡瓜尾貝塚と桑原飛櫛貝塚の２ヶ所が確認されているが、いずれも現在まで発掘調査が行われておらず、遺跡の範囲も定かではない。

飛櫛貝塚については昭和47年に防火用水槽の建設工事中に発見され、人骨、獣骨、貝輪、土器等の遺物が採集されており、縄文時代後期に比定されている。元岡瓜尾貝塚は低い海岸段丘上に形成されており、永尾溜池(大阪の池)を築いた際に、池畔に貝層があらわれたと云われる。昭和43年２月３日に県史跡に指定された。この貝塚からは、土器、石器、骨角器、人骨、シカ・イノシシなどの獣骨等が出土しており、土器の時期から縄文時代後期に比定されている。元岡瓜尾貝塚は九州大学移転用地に含まれているところから、今後、規模や時期の確認調査が行われるものと期待される。

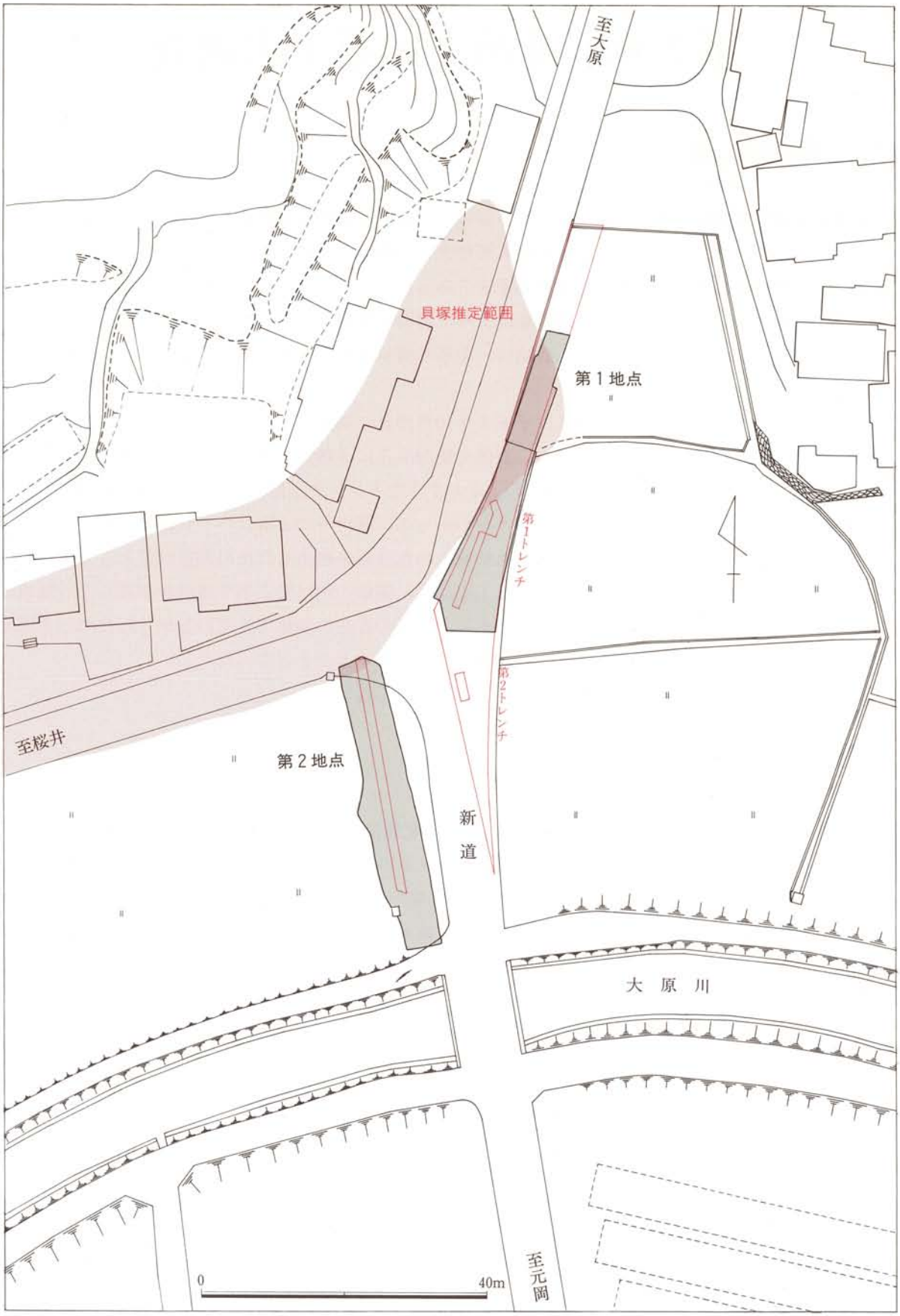


Fig. 4　桑原飛櫛貝塚第1次調査地点位置図（縮尺1/800）

3．第１地点の調査概要

（1）概　要

調査対象範囲は当初は現道の東側の道路拡幅部分であったが、発掘調査に着手したところ現道の西側も協議事項にない暗渠工事を実施されており、一部貝層が露出していた。このため、この場所を第２地点とし、急遽発掘調査を実施したが、掘削は終了しており写真撮影と実測図の作成にとどまった。第１地点は長さ100m、幅は４～10mの道路東側の拡幅部分である。現状は水田で、３枚に跨がっている。発掘調査に先立って試掘調査を行ったが、途中に電柱等が存在し、これらの障害物のために全域に及ぼすことができず、南側に１ヶ所、北側に２ヶ所の３ヶ所のみトレンチを設定した。その結果、Ｔ２では耕作土の下にヘドロ堆積がみられ遺構は存在しなかった。又、Ｔ１では、南側はヘドロ堆積であったが、北側では住居跡状の遺物包含層を検出したため調査の対象とした。試掘調査の時点では中世遺構及び、貝塚を確認できなかったため弥生時代～中世の遺構を対象とした発掘調査を考えていた。

遺構面の台地は西側の南北方向の開析谷と、東西方向に貫流する大原川の開析により、鋸歯状に東に突き出し、側縁部は段丘を形成している。弥生～古墳時代或いは中世の集落形成時には、貝塚や地山の削平、或いは客土を行っている。遺構面は鎌倉時代、弥生～古墳時代、縄文時代の３面が存在する。

貝塚はＩ区の中世整地層の下に検出した。南北の長さ18.8m、東西４m、深さ0.9mを測る。貝塚は上面を中世の整地のため削平を受けており、又、南側は弥生～古墳時代に深さ60cm程切下げられている。貝層の堆積状況は中央部はほぼ水平堆積であるが、北側の縁辺部分の堆積層の傾斜は強い。又、貝層内には旧表土層と考えられる薄い混土の貝殻破砕層が存在している。

発掘調査では調査対象地の中間部に電柱が存在したため、電柱から北側をＩ区、南側の包含層検出地域をII区、電柱が存在していた区画をIII区として設定した。II区では表土除去作業の結果、試掘調査で検出した住居跡状の遺構が包含層の一部であることが判明した。遺構面の検出は困難を極め、土層を徐々に下げながら遺構面の検出に努めた。遺物が出土する面を任意の遺構面としたが、土層状況とほぼ合致するものと考えられる。Ｉ区では１～４面、II・IIIでは１～３面の遺構面を検出した。遺構はＩ区にて平安末～鎌倉時代の掘立柱建物、縄文時代貝塚、土壙墓３基、II区にて古墳時代の住居跡５軒、土壙２基、縄文時代の土壙墓２基、III区では中世土壙２基、溝１条を検出した。

（2）土　層

Ｉ・II区に分けて土層の堆積状況を説明する。Ｉ区は第１層が耕作土、第２層が床土、第３層は灰黒色粘質土、第26層は灰黄色粘質土であるが、これは水田造成時の客土と考えられる。第28層は黄褐色粘質土で、この上面より柱穴を検出したので、この面を第１面とした。この面の北側は谷の浸食で段落ちとなる。南側II区では削平を受けて存在しない。II区第１面とは約40cmの段差がつく。又、第

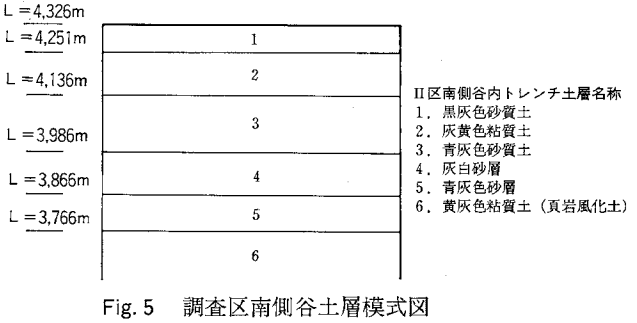
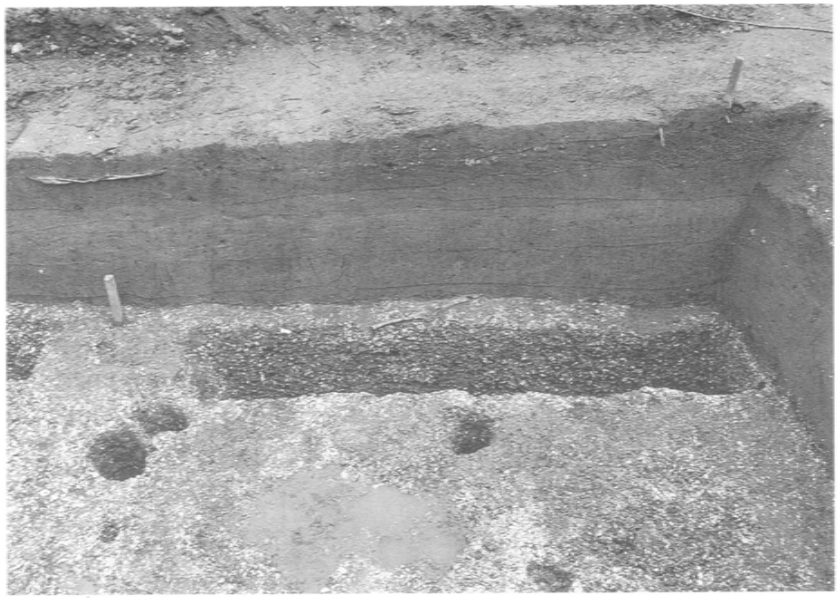
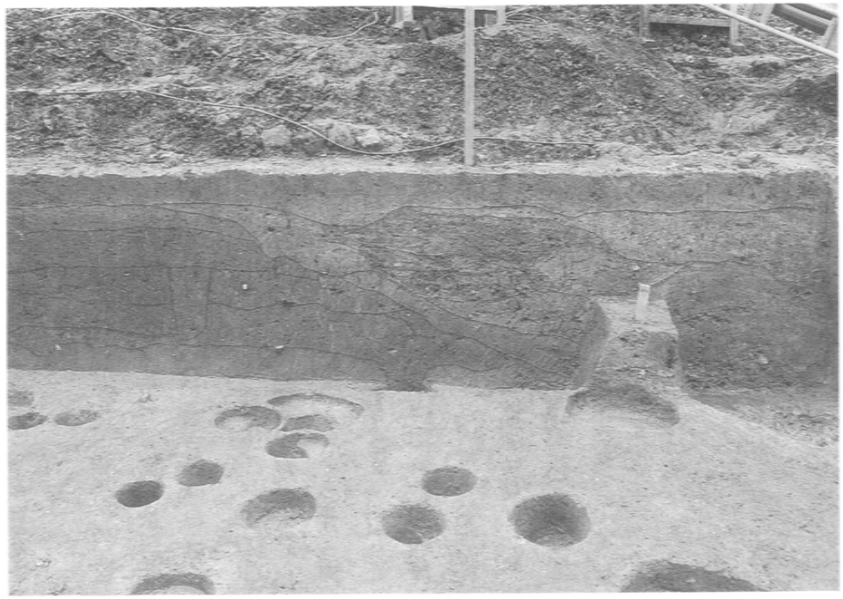


Fig. 5　調査区南側谷土層模式図



I区東壁南側土層状態（西から）

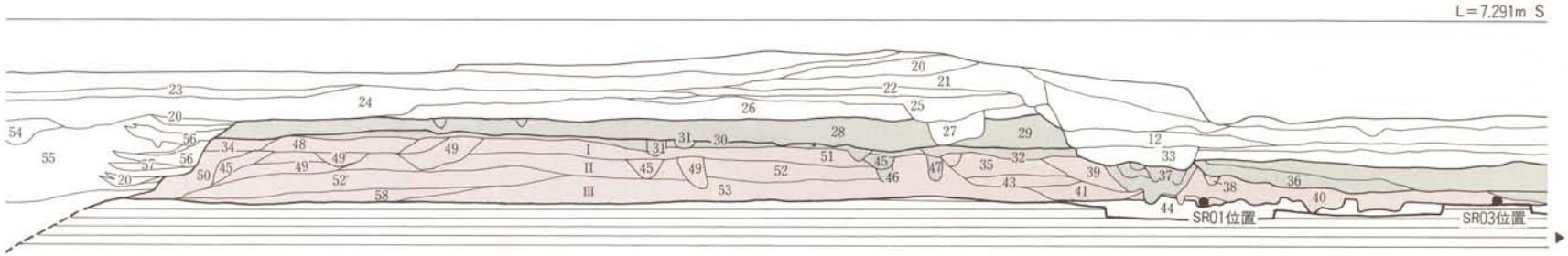
I区東壁北側土層状態（北西から）



II区東壁土層状態（西から）

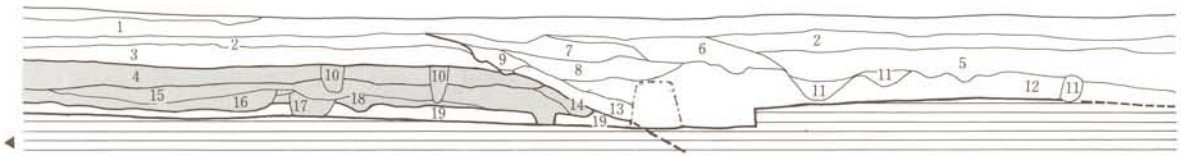
II区東壁北側土層状態（南から）

調査区東壁



調査区東壁土層名称

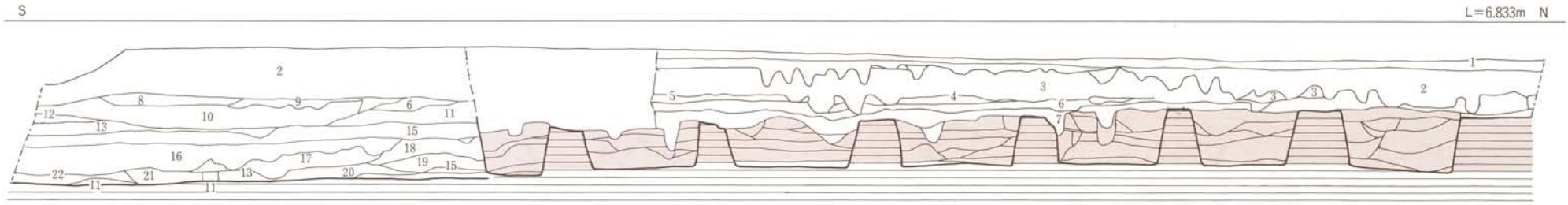
1．耕作土
2．灰黄色粘質土
3．暗灰黄色粘質土
4．灰黒色粘質土
5．灰黄色粘質土に青灰色土混入
6．灰黄色粘質土に青灰色粘土を多量に混入
7．茶褐色砂層
8．茶褐色砂層と灰青色粘質土の互層
9．黄灰色粘質土（砂粒を含む）
10．灰黒色粘質土に青色土混入
11．暗渠（現代）
12．青灰色粘質土
13．黒色粘質土（青色帯びる）
14．黒色粘質土
15．黒灰色粘質土に青色土混入
16．褐色粘質土
17．黒茶色粘質土（黒色が強い）
18．黒茶色粘質土
19．黄色帯びた灰青色粘質土
20．砂層
21．暗黄灰色土に青色土混入
22．暗黄灰色土
23．灰青色粘質土（青味が強く、締まりがない）
24．灰青色粘質土に青色土混入
25．黄灰色粘質土
26．灰黄色粘質土と青色土ブロックの混合土
27．灰青色粘質土
28．茶褐色粘質土
29．茶褐色粘質土
30．黒灰色粘質土
31．黒灰色粘質土（黒色が強い）
32．黒褐色粘質土に黄色土混入
33．黒灰色粘質土（青黒色）
34．暗黄色混土貝層
35．暗黄褐色粘質土
36．青灰色粘質土（黒に近くヘドロ状）
37．暗茶褐色粘質土に黒色土少量混入
38．黒色土（締まりがない）
39．暗黄色粘質土に貝殻混入
40．暗黄褐色粘質土に貝殻混入
41．茶灰色粘質土に貝殻混入
42．焼土層
43．黒青色粘質土混土貝層
44．黄色粘質土
45．青黒色粘質土
46．暗灰色粘質土
47．黒色粘質土に貝殻混入
48．黒褐色混貝土層
49．灰黒色の混土貝層
50．青黒色混土
51．貝層Ⅰ　黄灰色に汚染される
52．貝層Ⅱ　部分的に灰黒色に汚染される
52′．青黒く汚染
53．貝層Ⅲ　茶褐色、青黒色に汚染される
54．灰褐色粘質土に褐色土含む
55．暗青色粘土
56．灰青色粘土に砂粒含む
57．砂層と灰青色粘土層の互層
58．貝層Ⅲ　青黒く汚染

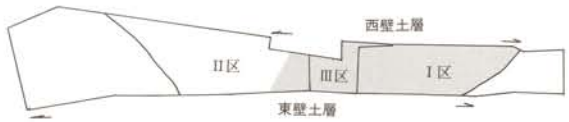


調査区西壁土層名称

1．耕作土
2．客土
3．灰黄色粘質土に灰色土ブロック含む
4．灰青色粘質土（鉄分沈澱）
5．4に褐色帯びる
6．灰褐色粘質土に焼土、鉄分含む（中世）
7．黒褐色粘質土に灰褐色土、焼土含む
8．砂利（客土）
9．混貝土層（客土）
10．青灰色粘土層（旧水田）
11．黄灰色粘質土（中世整地層）
12．黄褐色粘質土（床土）
13．暗茶褐色粘質土（床土）
14．黒褐色土に灰青色土含む
15．黒色粘質土で、茶色帯びる
16．黒色粘質土
17．黒褐色混貝土
18．暗茶褐色混貝土
19．灰黄色混貝土
20．18で、混貝量少ない
21．黒灰色粘質土で、茶色帯びる
22．焼土層

調査区西壁





0　4 m

Fig. 6　調査区壁面土層図（縮尺 1 /80）

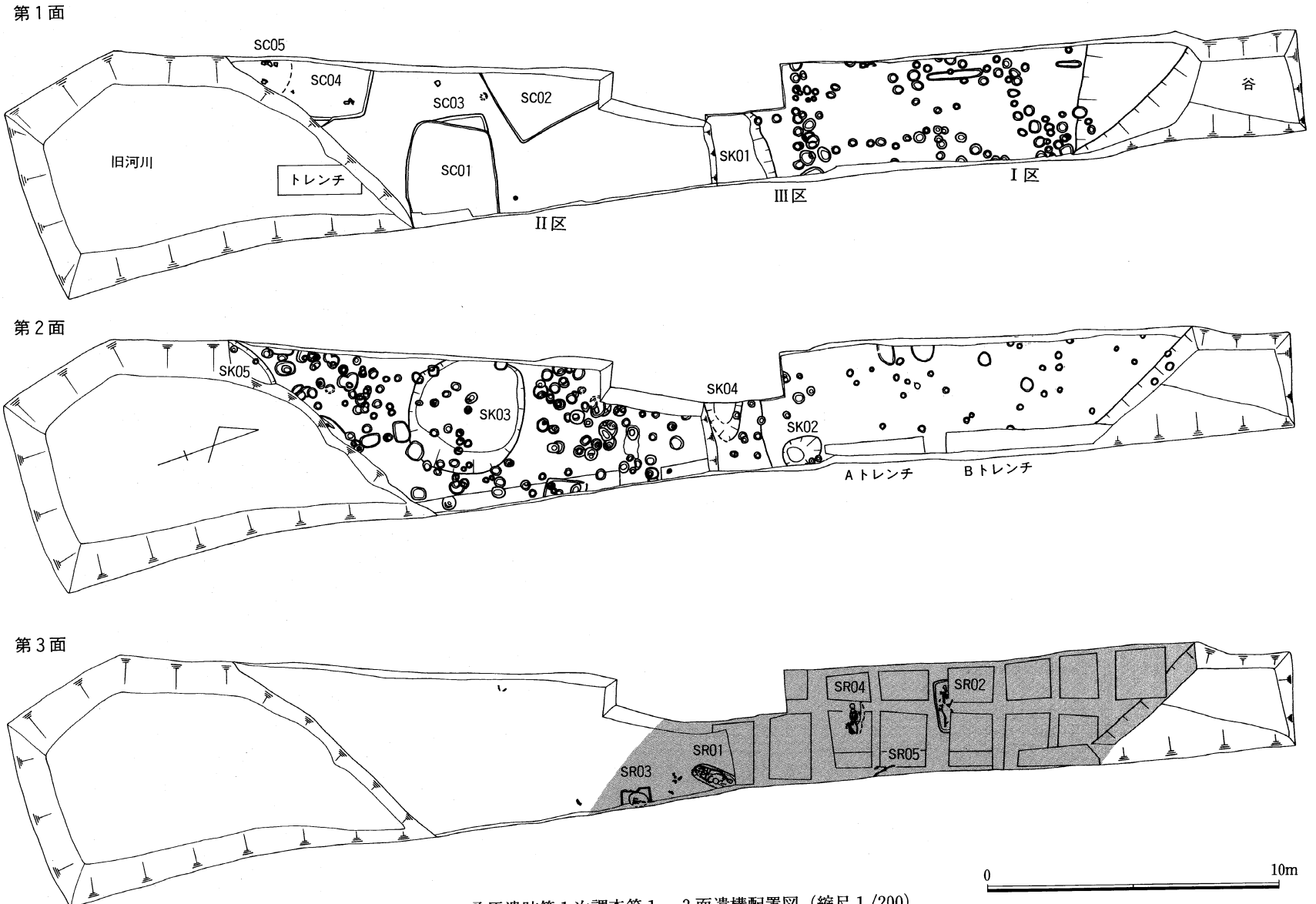


Fig. 7　桑原遺跡第１次調査第１～３面遺構配置図（縮尺１/200）

※アミは貝層の範囲を示す。

30層は黒灰色粘質土で、貝殻の破砕物を含んでいるが、この面においても柱穴等の掘り込みがみられるところから、これも遺構面とみなすことができる。

この第30層の下に縄文時代の貝層が存在する。貝層の北側は谷の浸食を受け、南側のII区では弥生～古墳時代の削平を受け段落ちとなっている。断面形は梯形状の堆積状となっているが、元来の貝塚の高さ、幅を示すものではない。貝層の下は黄灰色粘質土であるが、グリッド調査で貝層を掘り下げたところ幾つかのグリッドの地山面で焼土面及びPitを検出している。しかし、湧水が著しく調査まで至っていない。

III区は水田の地境にあたり、I・II区の水田面とは高さ約40cmの段差がある。II区は耕作土の上面に一部客土がなされている。第1層は耕作土で、床土は薄く、北側では下位に青灰色粘質土が堆積する。第2層は暗灰黄色粘質土で、この層も耕作土と考えられ、北側に幅130cmの排水溝が存在する。この層の南側は大原川の氾濫による浸食を受けている。第3層は暗灰黄色粘質土、第4層は灰黒色粘質土である。第4層上面にてPitが掘り込まれる。この上面を第1面とした。この層は厚く、遺物を多く含む。下層の第16層は黄灰色粘質土であるが、第15・8層の遺構状の落ち込みである黒色粘質土層やPit等の遺構が存在した。これを第2面とする。第3面は青味を帯びた灰黄色粘質土を遺構面としたが、遺構は小Pitのみで少なく、北側において縄文時代の獣骨・人骨を検出した。

II区南側の河川跡部分に設定した土層はFig. 5に示した。土層は水平堆積をしており、間に砂層を含むなど河川の堆積状況を示している。深さ5.6mに位置する第6層は頁岩質の風化土で、段丘面と考えられる。水田面からの深さは約7mを測る。

（3）遺構面

Fig. 8の遺構面模式図を参考にしていただきたい。I区第1面とII区第1面はII区の削平のため高低差がある。I区第1面のレベルは標高約6.2m、II区第1面は標高約5.6mを測る。I区第1面ではPit群を検出したが、これらは建物の柱穴と考えられる。柱穴内、及び整地層からは糸切り・ヘラ切り底の土師器皿・坏の他、龍泉窯系青磁、中国白磁が出土している。II区第1面は上層を削平されているが、古墳時代の住居跡を検出した。中世遺構、I区からの連続性はない。I区第2面とII区第1面はほぼ同一高さで、標高約5.9m～5.6mを測り、遺構面はI区からII区へ、緩やかに南に傾斜し、II区で

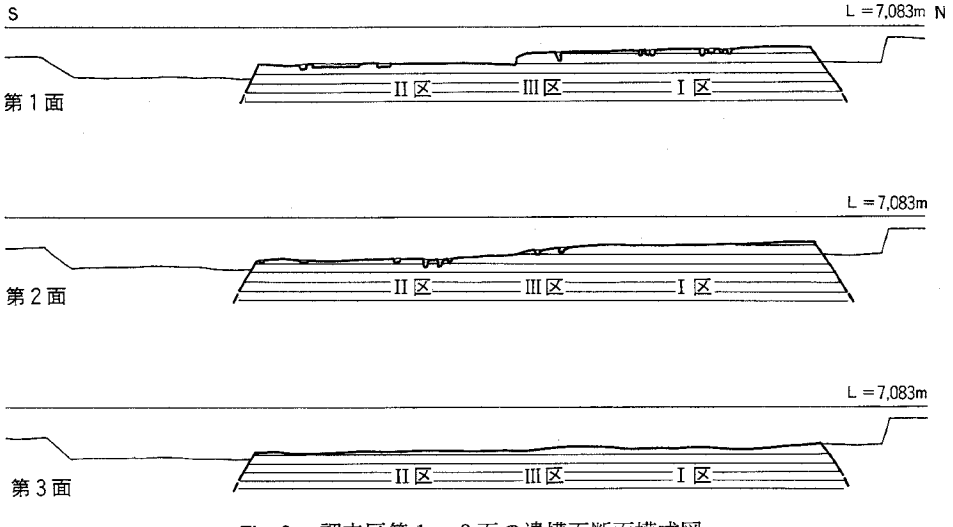
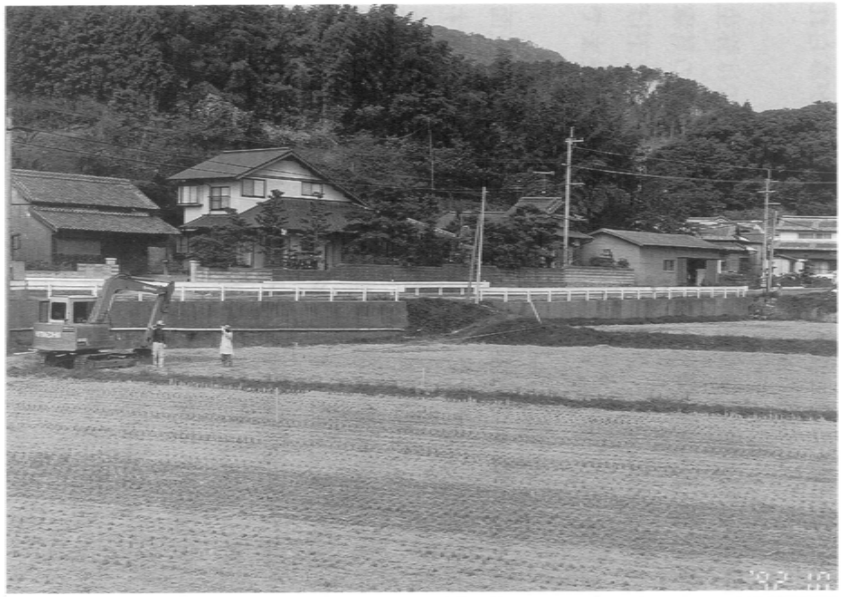


Fig. 8　調査区第1～3面の遺構面断面模式図



飛櫛貝塚調査地点全景　東南から

貝塚の検出状況　北から

貝塚調査終了の状況　北から

貝塚埋戻し作業　北から

東側壁面土層状況①　北側

東側壁面土層状況②

東側壁面土層状況③

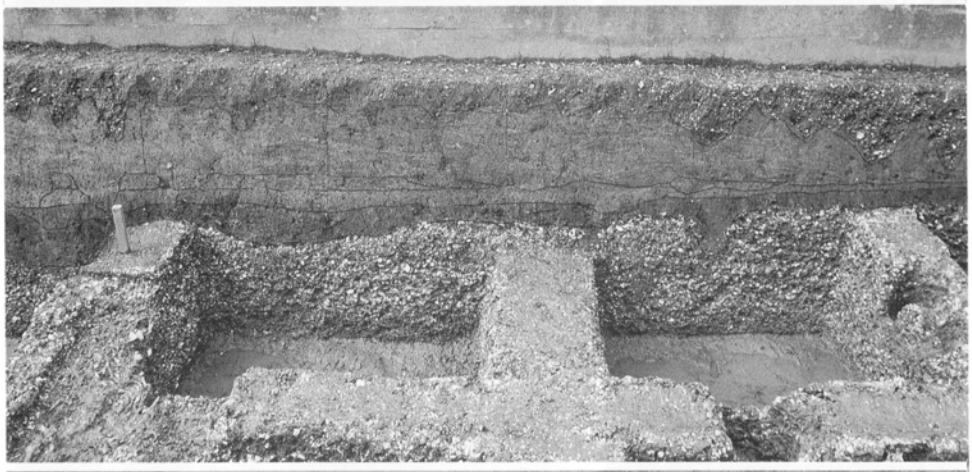
東側壁面土層状況④

東側壁面土層状況⑤

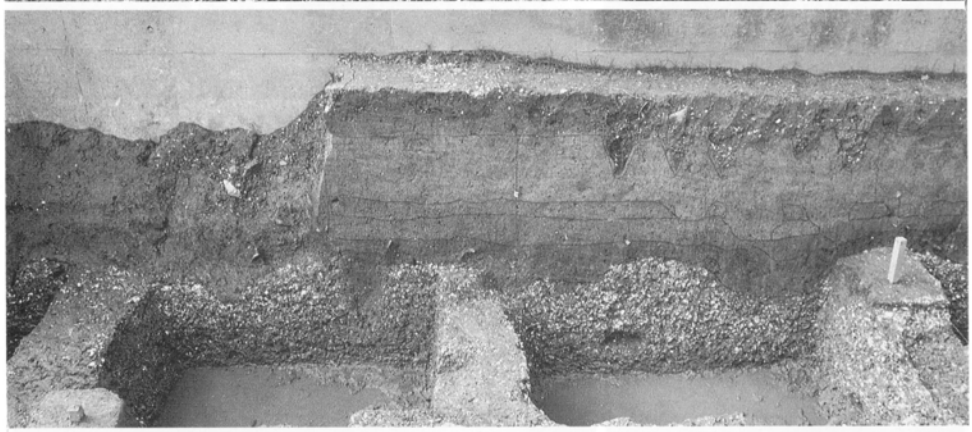
東側壁面土層状況⑥　南側

はPit群を検出した。出土遺物は弥生土器が多く出土した。Ⅰ区のPitからは中世遺物の他、縄文土器も出土している。Ⅲ区においては土壙SK01を検出したが、形状から溝状遺構の可能性をもっている。東

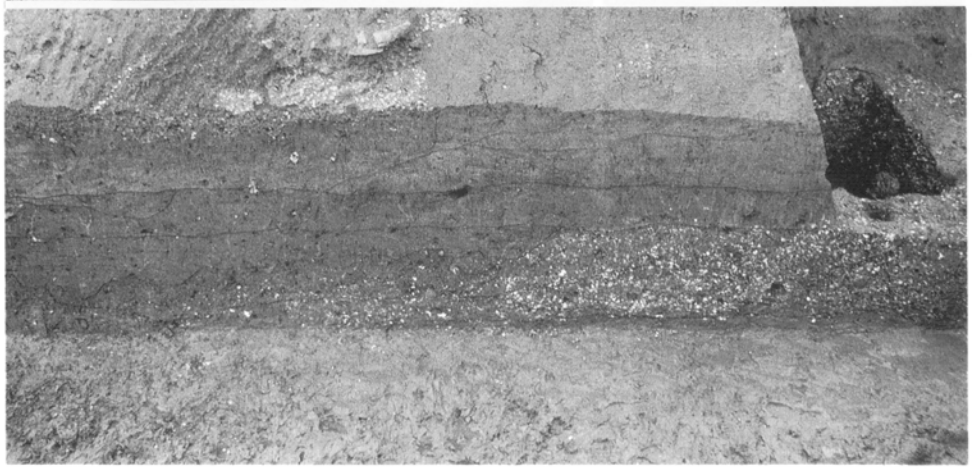
西側壁面土層状況①
グリッドＢ２・３西壁



西側壁面土層状況②
グリッドＢ４・５西壁

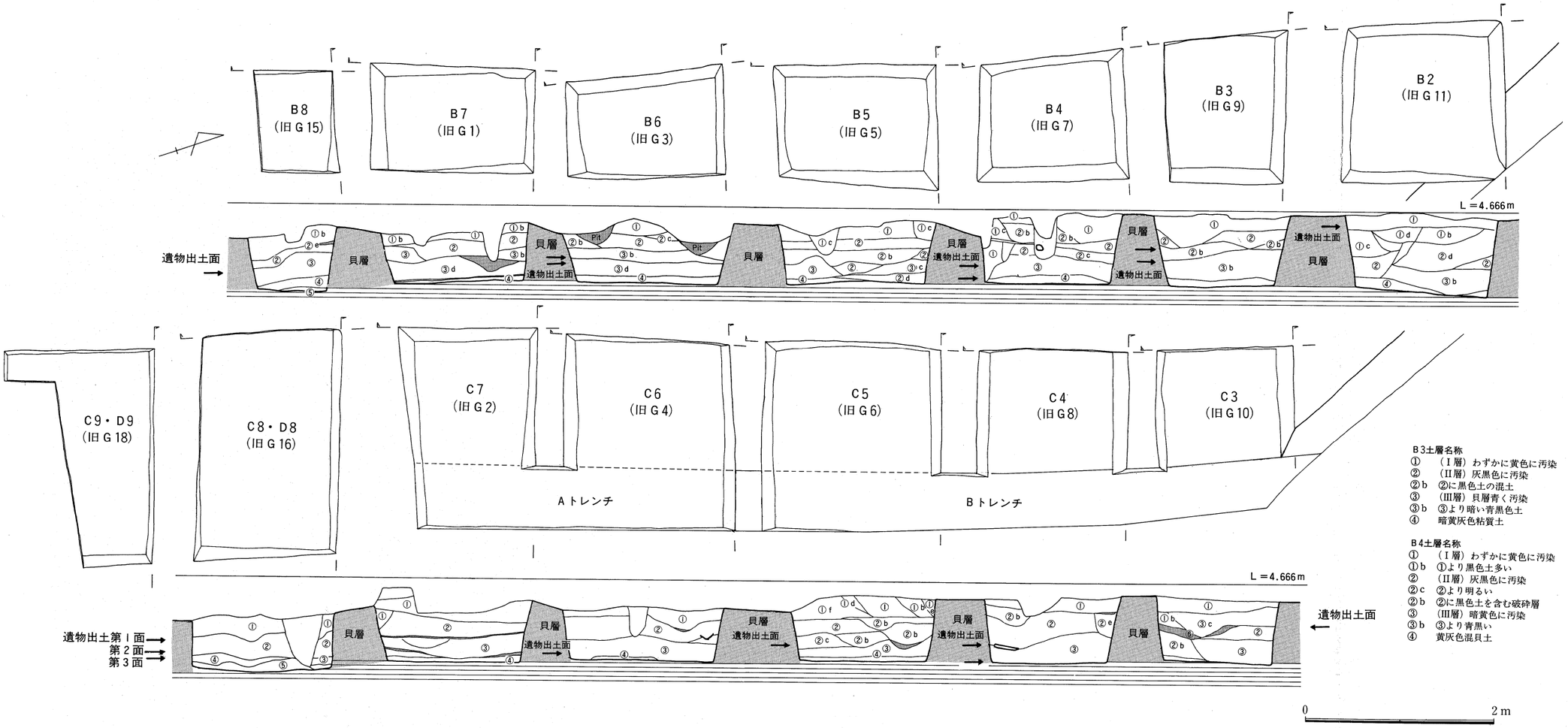


西側壁面土層状況②
グリッドＢ６・７西壁



西側壁面土層状況③
グリッドＢ８・Ｃ９西壁

Fig 9　グリッド調査状況図　(縮尺1/50)　※凡例　●は土器　▲は骨を表す
番号は表1の備考欄に記載



C3土層名称
① （Ⅰ層）わずかに黄色に汚染
② （Ⅱ層）灰黒色に汚染
②c ②より明るい
③ 黒色に近い暗青灰色に汚染、ヘドロの沈澱
③d ②より黒色が強い
③c 黄灰色土のヘドロ沈澱
③b ③に黒色土混入
④b 黒色土に炭化物混入

C4土層名称
① （Ⅰ層）わずかに黄色に汚染
①c ①に黄色混土
② （Ⅱ層）灰黒色に汚染
②c ②に黄色混土
③ （Ⅲ層）青黒色に汚染
④ 黄灰色混貝土

C5土層名称
① （Ⅰ層）わずかに黄色に汚染
①b ①より破砕貝が多い
①b ①に黒色土含む
①e ①より明るい、褐色土を含む
①a ①より明るい。
② （Ⅱ層）灰黒色に汚染
②c ②より明るい、貝の置存状態良い。
②b 黒色土多く含む
③ （Ⅲ層）暗青色に汚染
④ 破砕層

C6土層名称
① （Ⅰ層）
①b 黒褐色土混入
② （Ⅱ層）
②b 淡黒褐色土混入
②e ②に淡褐色土を含む
③c 黒褐色土混入
④ 灰白色粘土

B3土層名称
① （Ⅰ層）わずかに黄色に汚染
② （Ⅱ層）灰黒色に汚染
②b ②に黒色土の混土
③ （Ⅲ層）貝層青く汚染
③b ③より暗い青黒色土
④ 暗黄灰色粘質土

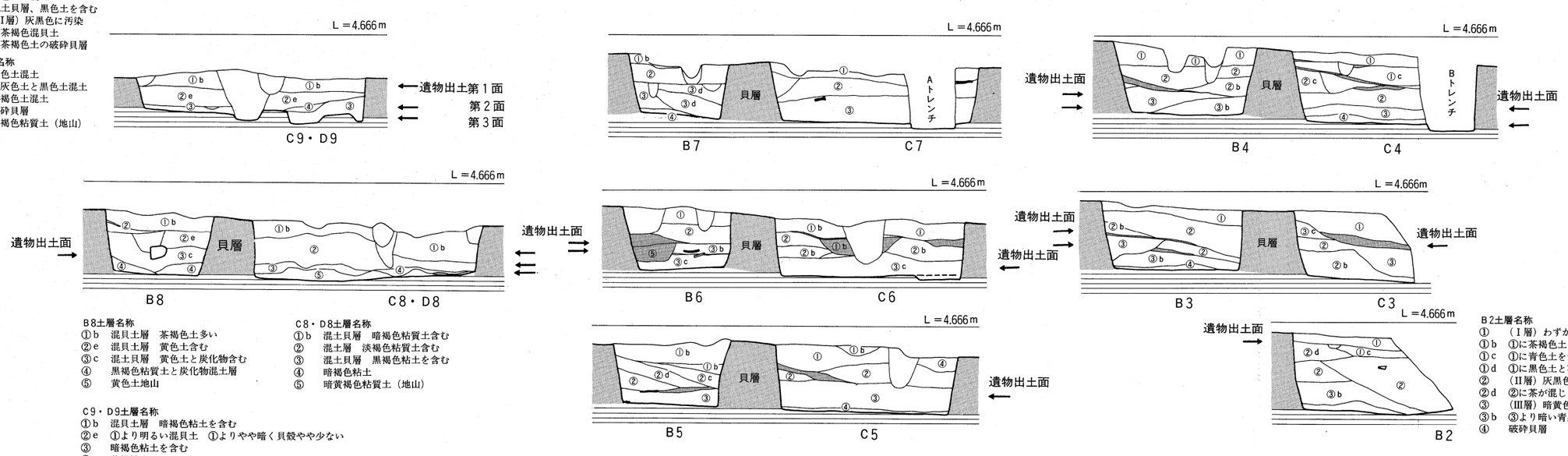
B4土層名称
① （Ⅰ層）わずかに黄色に汚染
①b ①より黒色土多い
② （Ⅱ層）灰黒色に汚染
②c ②より明るい
②b ②に黒色土を含む破砕層
③ （Ⅲ層）暗黄色に汚染
③b ③より青黒い
④ 黄灰色混貝土

B5土層名称
① （Ⅰ層）わずかに黄色に汚染
①b ①に黒色土を含む
①c ①より黒色土多い
② （Ⅱ層）灰黒色に汚染
②b 黒色土の混土
②c ②より明るい
②d ②より暗い
③ （Ⅲ層）
③c ③に黒色土混入
④ 黒色土に破砕貝を含む

B6土層名称
① （Ⅰ層）わずかに黄色に汚染
② （Ⅱ層）灰黒色に汚染
②e ②に褐色土多く含む
②c ②より暗い
③ （Ⅲ層）暗褐色土を含む
③d ③より暗い茶褐土を混入
④ 暗茶褐色混貝土（破砕貝層）
⑤ 炭化物と暗青色土を多く含む

B7土層名称
① 黒色土の混土
①b 混土貝層、黒色土を含む
② （Ⅱ層）灰黒色に汚染
③d 暗茶褐色混貝土
④ 暗茶褐色土の破砕貝層

C7土層名称
①b 黒色土混土
② 青灰色土と黒色土混土
③ 茶褐色土混土
③d 破砕貝層
④ 茶褐色粘質土（地山）



B8土層名称
①b 混貝土層 茶褐色土多い
②e 混貝土層 黄色土含む
③c 混土貝層 黄色土と炭化物含む
④ 黒褐色粘質土と炭化物混土層
⑤ 黄色土地山

C8・D8土層名称
①b 混土貝層 暗褐色粘質土含む
② 混土層 淡褐色粘質土含む
③ 混土貝層 黒褐色粘土を含む
④ 暗褐色粘土
⑤ 暗黄褐色粘質土（地山）

C9・D9土層名称
①b 混貝土層 暗褐色粘土を含む
②e ①より明るい混貝土 ①よりやや暗く貝殻やや少ない
③ 暗褐色粘土を含む
④ 黄褐粘土

B2土層名称
① （Ⅰ層）わずかに黄色土の汚染
①b ①に茶褐色土を多く含む
①c ①に青色土を含む
①d ①に黒色土と茶色土の混合土
② （Ⅱ層）灰黒色に汚染
②d ②に茶が混じる明るい。
③ （Ⅲ層）暗黄色土の汚染
③b ③より暗い青黒色に汚染
④ 破砕貝層

Fig 10 グリッド貝層図 （縮尺1/50） ※濃いアミは炭化物破砕貝層を含む層

西方向の溝とすれば中世遺構を区画するものであろう。II区の第３面の遺構は少ないが、北側に貝殻の破砕層が若干堆積し、又、遺構面において人骨、獣骨を検出した。Ⅰ区の第３面は貝塚を形成しており、厚さ約60～70cmの貝層の堆積が認められる。Ⅰ区第４面のレベルはII区第３面のレベルに一致する。この面を当初の基盤面（生活面）とみることができよう。

４．遺構説明

（１）概　要

Ⅰ～Ⅲ区における遺構面、及び遺構の概要については、桑原遺跡群第１次調査報告書の第432集にて既述しているので、ここでは除く。ここではⅠ～Ⅲ区の第３面に相当する縄文時代の貝塚、及び遺構出土遺物について詳述する。

発掘調査の対象となった貝塚はⅠ・Ⅲ区の中世整地層の下に存在するもので、整地の際に貝塚上面は平坦に削られている。Ⅰ区の北側は開析谷のため削平を受け、貝塚は断面を見せている。又、南側のⅢ区は弥生～古墳時代に地下げが行われており、ここでは、貝塚は大幅に取り除かれている。このためII区の最下層の遺構面においては、破損を受けた土壙墓や獣骨片を多数検出している。Ⅰ～Ⅲ区に亘って検出したこの貝塚は長さ約17m、深さ80cmを測り、断面形は逆梯形状のマウンドを呈している。調査面積は大略300m²である。

II区では既述したように、貝塚そのものは弥生～古墳時代に削平を受けており、Ⅲ区との境界でわずかに第39・40層にみられるように混貝土層が存在する。この混貝土層上面、及び下層の地山である

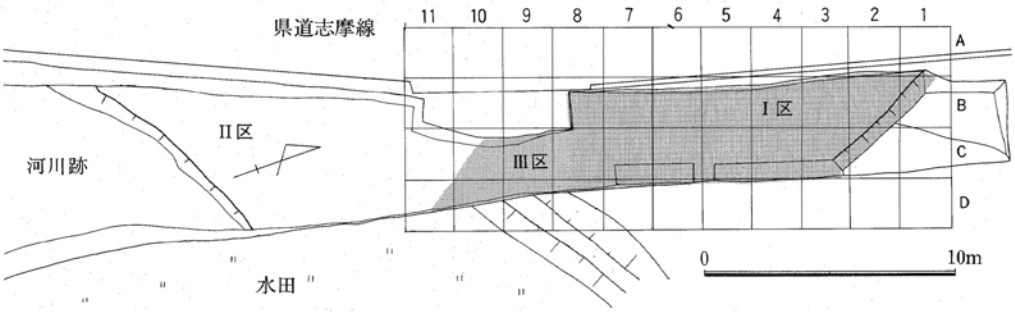
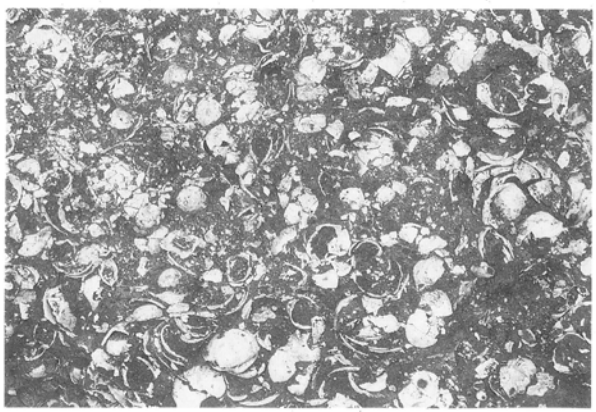
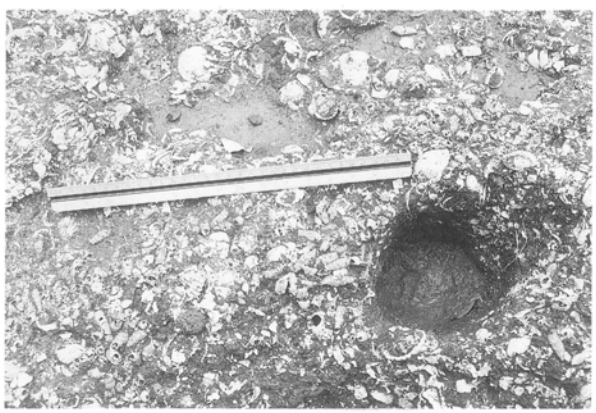


Fig.11　グリッド割付図（縮尺１/300）　※アミは貝層の範囲を示す。



貝層上面の状況（アサリ、ハイガイ）



貝層上面のフトヘナタリ堆積状況

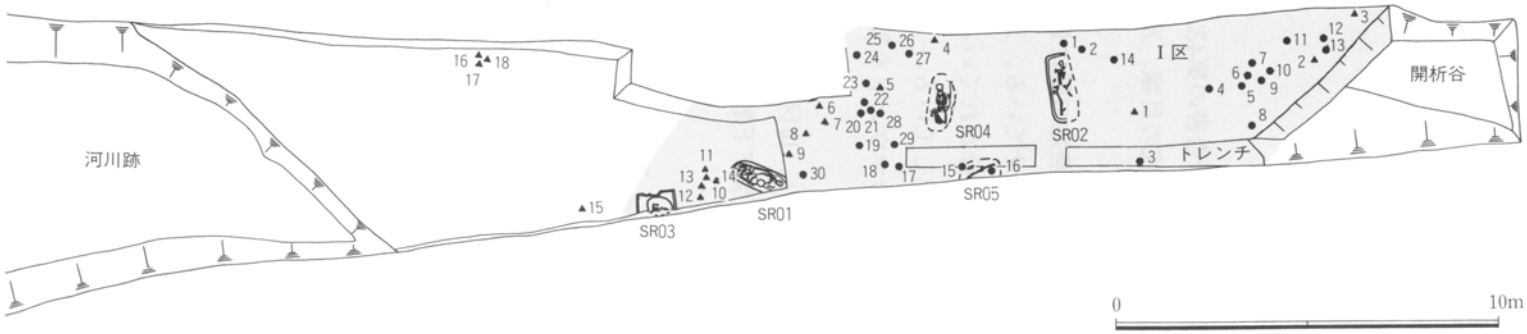


Fig.12　獣骨出土地点及び土壙墓配置図（縮尺 1 /200）　※アミは貝層の範囲を示す。

II 区　シカ寛骨　No. 10

II 区　シカ肩甲骨　No. 12

II 区　シカ下顎骨　No. 15

II 区　イノシシ下顎骨　No. 14

黄色粘質土上面において、土壙墓２基、其の他多数の獣骨片、石器類を検出した。２基の土壙墓の内、土壙墓SR01はⅢ区との境界地にて発見したが、湧水が著しいため人骨を検出するまでは土壙墓の存在に気付かなかった。土壙墓SR01は第40層の混土貝層から掘り込んでいる。土壙墓SR03は削平のため著しい破損を受け、人骨は頭部、下半身を失っている。

Ⅰ・Ⅲ区の調査はⅠ区の中世遺構の調査が終了した後、貝層の面を検出する作業を行ったが、この時にやっとⅢ区に存在した電柱の撤去が終了したため、Ⅰ区の貝層検出作業と、Ⅲ区の中世遺構の調査を同時に進めることとなった。

Ⅰ区の貝層面の検出作業時において、Pitを検出したが、このPitには中世整地層と同様の暗い灰黄色粘質土が充填されているところから、上層からの掘り込みと考えた。しかし、第28層の整地層上面から掘り込まれていたPitの内、掘り足らないものも一部あるものの、他は新規に発見したPitである。貝層上面は細かい破砕層を形成しているので、貝塚上面の削平整地によって一時的にこの面を生活面として利用しているものと考えられる。この面においては獣骨、土器等の散布が認められたがⅠ区の南側において、土壙墓SR04（１号人骨）を検出した。又、グリッド調査の初めに、Ｇ５・６にまたがって検出した土壙墓SR02（６号人骨）もこの面から掘られた遺構である。いずれも上面は削平を受けている。

Ⅰ区の貝層は純貝層で構成されていたと思われるが、上層の中世整地層等から浸みこんだヘドロ状の堆積物が、貝層内に沈殿している。又、南側のⅢ区に相当するG15・16では、貝層内の混土の量が多くなる傾向にあるが、南につづくG17・18では、混貝土層が主体となっており、Ⅱ区の土壙墓SR01周辺の混貝層と同じ様相を呈している。

（２）グリッドの設定

貝塚の調査に当たっては、最大で約２m幅の道路拡張部分の主軸方向に沿って２m×２mのグリッドを設定した。グリッドの主軸方向はN17°Eにとっている。狭い調査区のため２m四方のグリッドを組むことは困難であったが、東側列にかろうじて２m四方のグリッドが設定できた。

グリッドの調査は前述したように当初は、Ⅰ・Ⅲ区の貝塚調査を同時に着手する予定が電柱の撤去の関係で不可能な状況にあったので、取敢えずⅠ区のみグリッドを設定した。Ⅰ区のグリッド番号は便宜的に南側から北方向にＧ１～15の番号を付与した。Ⅲ区については中世遺構の調査終了後の貝塚の遺存状況を見極めて後、グリッドを設定するか否かの判断を行うことにした。中世遺構の撤去後にⅢ区ではⅠ区の南側のＧ１・２貝層の調査により貝層の連続性が認められるので、Ｇ１につづいて北側からG15～18の番号を便宜的に与えた。最終的にはFig.11のグリッド割付図に示すように、南北方向の軸を１～11番、東西方向の軸をＡ～Ｄとして、例えばG11はＢ２グリッドと云うように、正式なグリッドの名称におきかえた。又、グリッド調査を開始する前には、貝層の堆積状況を知るために、Ⅰ区調査区の東側に沿ってＡ・Ｂの２本のトレンチを設定し、南北方向の貝層堆積状況の把握を行った。又、各グリッドでは少なくとも南北方向、東西方向の２面の土層図を作成した。土層観察用としては、各グリッド間に幅40cmのベルトを残した。

（３）貝　層

貝塚は後背台地の縁辺を巻くように分布していると考えられ、今回の調査地点は、この貝塚の東側へ伸びた舌状部分に相当するものである。貝塚分布の推定範囲はFig. 3・4に示したとおりであるが、従来の調査例から低位段丘の縁辺に形成された長さ100m前後、幅20～30m程度の貝塚規模を考えるこ

とが可能である。

貝塚層位については、グリッドの調査以前に観察用として設定したA・Bの両トレンチによって大略を把握した。Fig. 6の土層図によれば、I・III区の貝層は厚さ32～57cmを測る中世の整地層の下に存在する。中世整地層は2面存在する。第1面は厚さ25～42cmを測り、南側の客土が厚い。これらは貝塚の高さが北から南方向へ最大で約20cm減じているためである。第2面は厚さ7～15cmを測るが、この層は貝塚上面を薄く覆う状態を示している。貝塚上面が北から南方向に傾斜しているため、この第2面も同様に南方向に傾斜し、II区の中世遺構面（第1面）のレベルに一致している。

貝層は純貝層を主体としているが、上部に中世包含層等が存在し、雨水によって浸み込んだヘドロ状の土が貝層内にからんでおり、混土貝層と誤認し易い状態にある。又、混貝土層や混土貝層と考えられる層は、北側の開析谷によって削平された貝層斜面上に流れ込む土層と、南側のII・III区が接した地域においてのみ存在する。北側の第34層の暗黄色混土貝層、第50層の青黒色混土（破砕貝）層は破砕貝を主体としており、2次的堆積物、或いは人為的な層とみることができる。南側の第52・53層との境をなす第35・43・39層との間は断層状の層位を形成している。第35層は暗い黄褐色土の混土貝層、第39層は暗黄色土の混土貝層、第38層は黒褐色土の混貝土層、第43層は黒青色の混土貝層、第41層は暗黄色土の混土貝層となっている。貝塚の主体となるのが第51～53層の純貝層であり、上記の第35・38・39・43層は貝塚から東南方向に流れ出した2次堆積層と見做せる。同様にFig. 6の西壁の貝層の堆積状況においてもこのことはうかがえる。

第40層の混貝土層中には土壙墓SR01・03が作られていることから、この貝層自体も元来は厚みのある堆積をもっていたものと思われる。純貝層の第51～53層（貝層I～III）の分離は、第53層が暗黄色土の汚染を受けていること、又、第51層はわずかに黄色土の汚染を受けている。第52層は灰黒色に汚染された部分をもち、これらの3層の間には薄い破砕層、又は黒色土層をかんでいることを主な理由とした。便宜的に第51層を貝層I、第52層を貝層II、第53層を貝層IIIとした。こられは更に混土状況や汚染状況によって細分した。又、土層の北側では第51層（貝層I）と第52層（貝層II）との間に第45・49層を挟んでいる。更に第53層（貝層III）と第52層との間に第58層を挟んでいること、更に貝層I～IIIの上面が東壁土層、西壁土層共に大略水平面を形成し、第52層（貝層II）の上面から掘り込まれたPitが多数あることなどから、分離が可能と判断した。

次にグリッド調査による南北方向、及び東西方向の土層を観察してみる。南北方向の貝層は上位の層については東壁と同じ層序であるが、下位の貝層については部分的に乱れがみられる。南側地域では純貝層のI・II層の下には混土貝層が存在する他、B2・B4ではPit状に落ち込んだ混土貝層が存在する。東西方向の貝層では、南北方向の貝層層序に対して必ずしも水平堆積の状況はみられない。B6・B7・C6・C7の各貝層がほぼ水平堆積を示すのに対して、B5・C5では下層は水平堆積しているが、上位の貝層は傾斜堆積の傾向がみられる。G2～4・C3・C4は全体的に傾斜堆積が顕著になっている。これは貝塚が台地の低段丘、或いは緩斜面に形成されるため、貝塚の中心をはなれた地域は傾斜堆積となるのであろう。又、間層として傾斜堆積した黒色土層や破砕貝の薄い層が存在する。貝層の中心は東西・南北方向の貝層が比較的水平堆積をしているB6・B7・C6・C7の間が相当するものと考えられる。貝層の堆積状況は作図の際にFig. 6の貝層土層図に示すように単純化してしまった。実際には、ヘナタリやマガキ、ツメタガイなどの小規模な単純層がところどころに存在していたが、これらを把握し、貝層を厳密に細分化することは時間的制約の中では不可能であった。

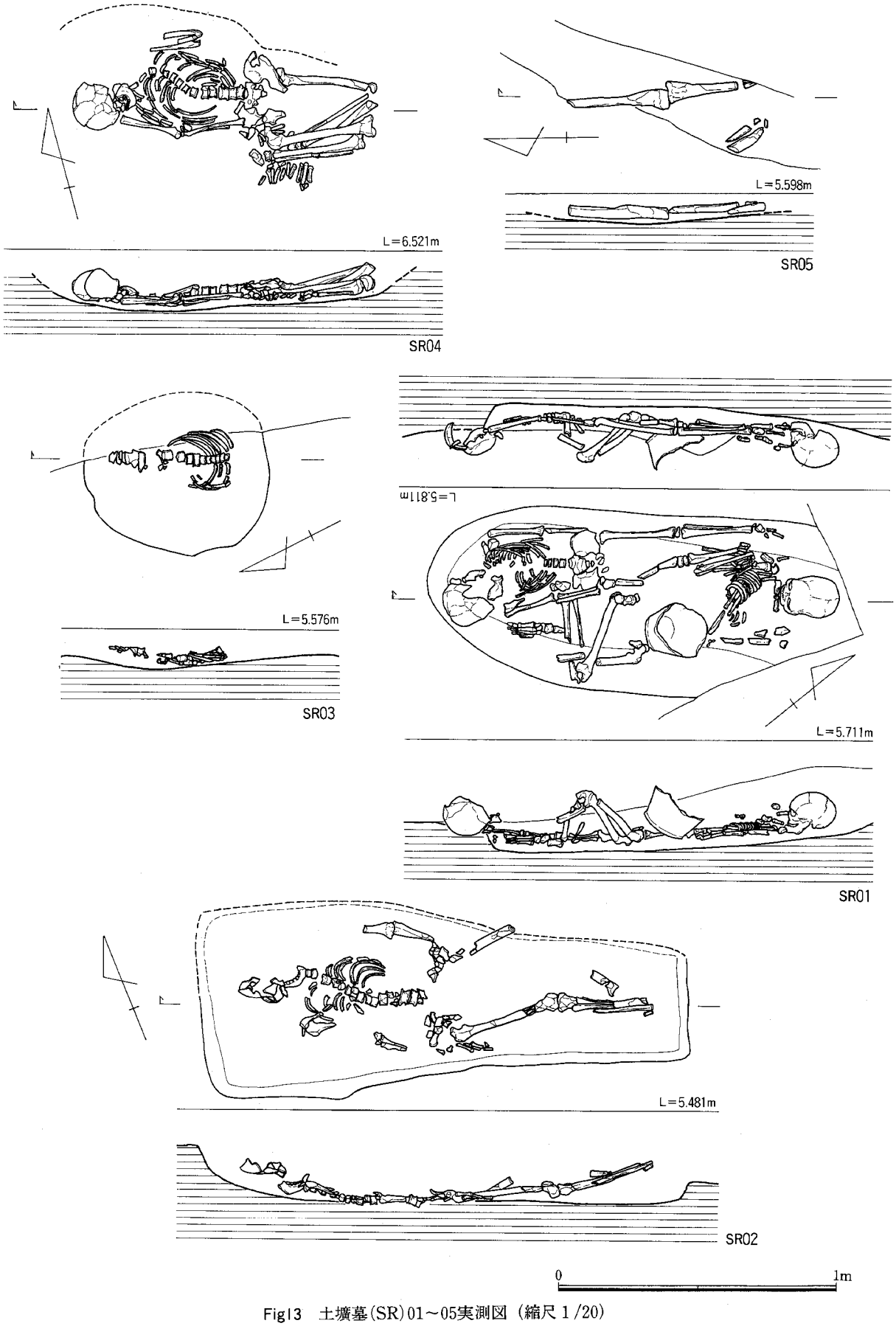


Fig13　土壙墓(SR)01～05実測図（縮尺 1/20）

Ⅰ区
土壙墓SR04
（1号人骨）
検出状況
南から

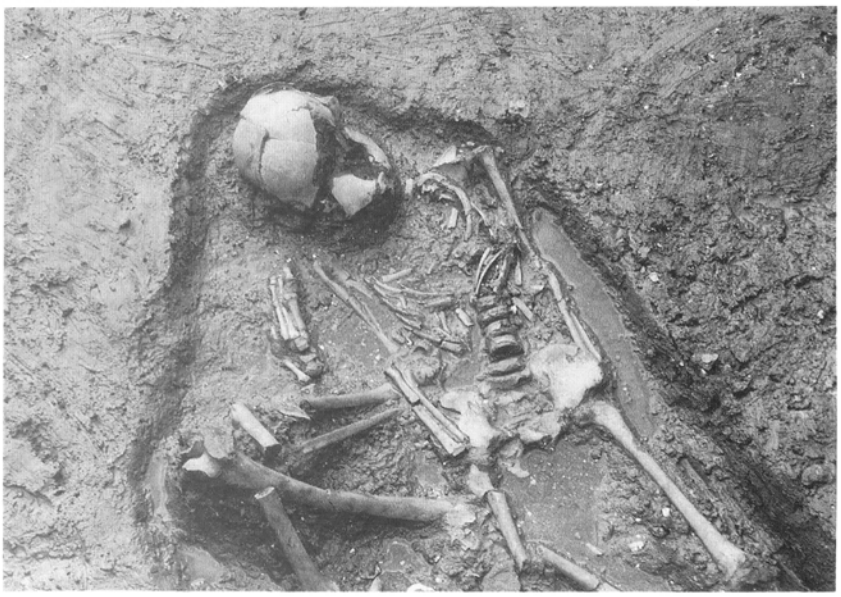
Ⅰ区
土壙墓SR05
（2号人骨）
検出状況
西から

Ⅱ区
土壙墓SR03
（3号人骨）
検出状況
西から

① 土壙墓SR01（4・5号人骨）
検出状況　西から

②土壙墓SR01（4号・5号人骨）検出状況

③4号人骨状態



④5号人骨の状態

土壙墓SR02（６号人骨）
検出状況
北から

（４）土壙墓（SR）

Ⅰ区及びⅡ区にて検出した。遺構として確認出来たのは５ヶ所のみであるが、其の他に人骨片は貝層中から多数出土している。

SR01（４・５号人骨）　Ⅱ区の北東側でⅢ区の境界に位置している。上部は削平を受けている。墓壙は楕円形を呈し、現存長約160cm、最大幅約65cm、深さ25cmを測る。底面は舟底状を呈している。この墓壙からは２体の人骨が出土した。人骨は、いずれもほぼ完全で、主軸方向は大略南北方向にある。但し、頭位置は各々逆転しており、すなわち４号人骨は頭位置を北東方向に向け、もう一体の５号人骨は頭位置を南西方向に向けており、交叉させた埋葬状況を示している。４号人骨は墓壙の東側に位置し、頭を北北東に向けた仰臥屈葬の姿勢をとった女性である。この４号人骨の腹部に相当するところには上部を欠いた粗製深鉢が置かれている。この深鉢の下からは腰骨片が出土しており、且つ土器周辺の人骨の欠損が大きいので、この土器が副葬として置かれたと考えるよりも、後の攪乱とみる方が妥当と思われる。下肢骨は膝で折り曲げて東側に倒した状態である。又、両腕は肘で折り曲げて、右肩付近に置いている。左前腕には14個の貝輪を装着していた。頸部には他の人骨の足の骨が乗せてある。５号人骨は墓壙の西側に位置し、頭を南西方向に向け、仰臥伸展姿勢の小児骨である。上肢は体に沿って伸ばし、下肢も伸ばしている。２体の人骨が同時埋葬であるか否かについては、付編１の考察に譲るが、ここでは４号人骨の上に５号人骨の左上肢が乗っていることを指摘しておく。

SR02（６号人骨）　Ⅰ区の貝層上面にて検出した。Ｂ５・Ｃ５を設定した後、一部を掘り下げ中に検出したもので、調査作業によって墓壙及び人骨の一部を失っている。又、上部からの攪乱による人骨自体の欠失部分も著しく、土圧によって細片化している個所も多い。墓壙は隅丸長方形を呈し、長さ186cm、最大幅65cm、深さ20cmを測る。足位置に比べ、頭位置の小口幅が広くなっている。底面は舟底状である。埋葬は、伸臥した男性人骨である。頭蓋骨の左半分、左右の上肢骨、左下肢骨、左右の足骨等の欠損がある。右大腿骨、下肢骨は真直ぐに伸びており、左上腕骨、上肢骨も同様に体に沿って伸びているので伸展葬と考えられる。断面形でみると、人骨の腹部に相当する部分が大きく下がり、弓なりの状態であることから、強い土圧を受けたことがうかがえる。

SR03（3号人骨）　II区の第3面の地山（黄褐色粘質土）上面で検出した。既述したように、このII区では弥生時代～古墳時代に貝塚を削平しているため、当時の状況は不明である。当該土壙墓は東側境界地に在るため全体形は不明である。現状の墓壙は不整円形である。人骨は頭部及び下半身の脊椎下位、腰骨、大腿骨を欠いている。仰臥位の姿勢をとっている。男性と推定されている。

SR04（1号人骨）　I区の貝塚上面で検出した。中世整地層を撤去した後、貝層上面の検出作業を行った際に、人骨を検出したもので、明確な土壙ラインを把握していない。中世の人骨ではないかの懸念もあったが、人骨の鑑定により、縄文人の特徴を備えているとのことであった。仰臥屈葬の男性人骨で、頭は西向きである。ほぼ完全に残っている。主軸は大略東西方向である。下肢を強く曲げ、膝、足首を合わせた状態で南側に倒れ込んでいる。右上腕骨は体に沿って伸ばされているが、左上腕骨は肘で強く曲げて手を上に向けている。背骨の上位が北側に弯曲していることや、頭蓋骨の一部が破損していることから、後世の影響を受けたものと考えられる。貝輪等の副葬品は出土していない。

SR05（2号人骨）　I区の貝塚上面で検出した。東側の境界地にあるため全体形は不明である。両足部分を検出した。大略の主軸は東西方向で、頭は東向きと思われる。仰臥伸展葬と考えられ、左大腿骨と両下肢骨を検出した。他の部分は東側隣接地に遺存している。

（5）各グリッドの調査

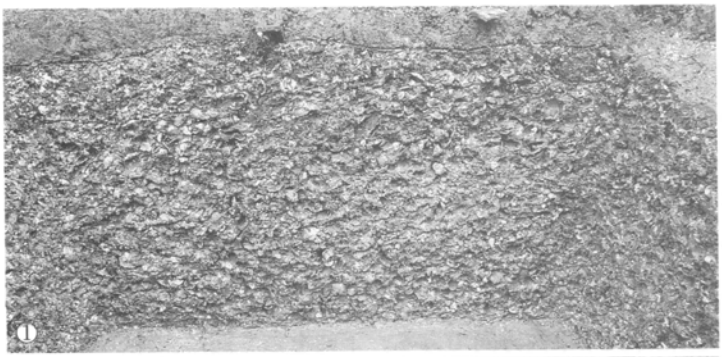
貝層の調査に先立って、東壁に沿って南北に設けたA・Bトレンチで観察した層序を参考にして各グリッドを掘り下げたが、基本的には10cm程度の厚さを目安として、貝層に変化がある場合、或いは遺物が同一面で多く散布する場合は面としてとらえた。又、出土遺物については、貝層を特定できる土器・獣骨等については出土状況を図化し、記録に努めた。

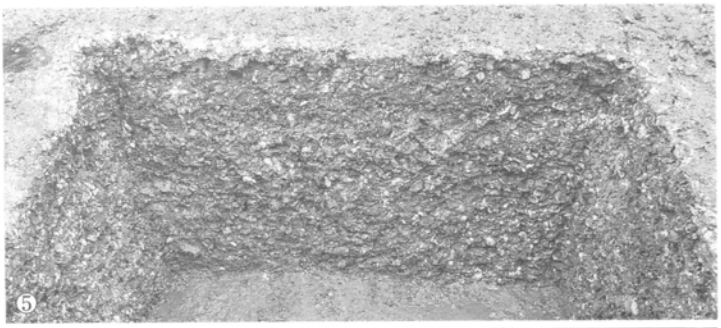
B 2 (Fig.10)　西壁の貝層は、①層は黒色土の混土貝層、①b層は茶褐色土の混土貝層、①d層は黒色土に茶褐色土を混入した層、③b層は青黒色の汚染を受けている。①b層の上面からの黒色土の混土貝層の落ち込みがみられる。北壁は傾斜堆積が顕著である。②d層は茶褐色土が混じる層、①c層は青色土が混じっている。②層は約50cmの厚さを測り、傾斜が強い。④層は破砕貝層である。遺物は①層の下位、及び地山直上の2面から出土した。

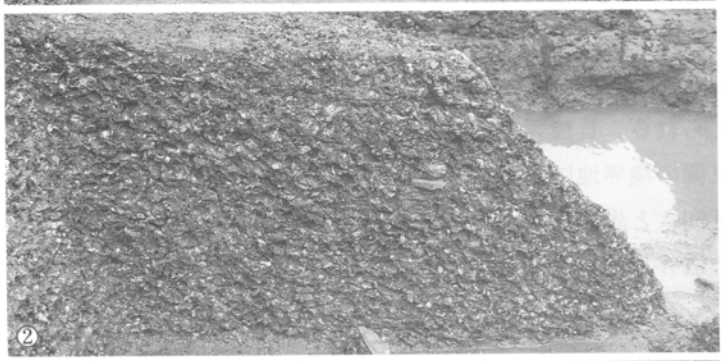
C 3 (Fig.10)　西壁の貝層に乱れがある。①層の下位には、黄灰色土混入の③c層と黒色土混入の③b層が存在する。この③b・③c層の下に炭化物が混入した黒色土の混貝土層が7～10cmの厚さに傾斜堆積している。北壁の貝層は傾斜堆積がより顕著になっている。①層と③c層・③層との間には混貝層の黒色土が存在する。この層には炭化物を多く含んでいる。③層は東側で急激に落ち込むが、暗灰青色のヘドロ状の浸み込みがある。②b層は黒色が強い層である。②層の上位にある③c層は黄灰色のヘドロが浸み込んでいる。遺物は②b層上面において粗製小型鉢が出土した。

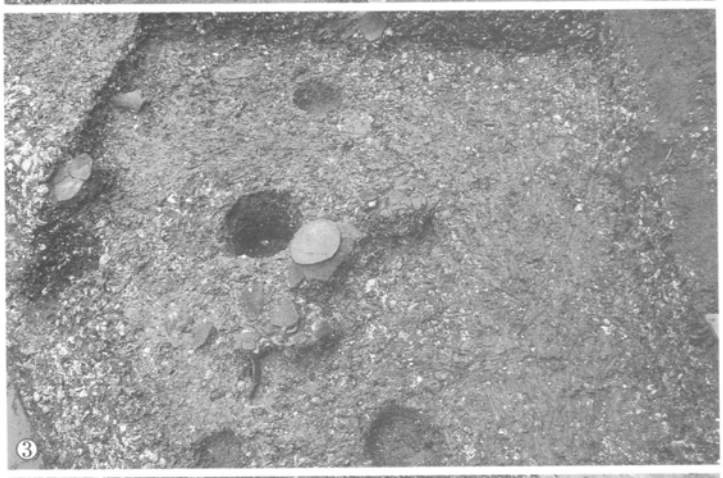
B 3 (Fig.10)　西壁の①層～③層はほぼ水平堆積である。②層は黒色土の混入具合で、明・暗があり、②b層は黒色土が多い。②層上面からは①層の貝層落ち込みがみられる。③層は青灰色に汚染されている。ヘドロ状の泥が付着している。北壁の貝層は全てが傾斜堆積である。②層は炭化物を含む破砕貝の間層が存在するため、大きく上下の2層に分離できる。③層は下位の②層と③b層を切り込んだ状態を示している。遺物は②b層上面の標高5.5m、③層上面の5.3mの間の範囲で出土した。中津式土器及び阿高系土器共伴の粗製土器がある。

C 4 (Fig.10)　北壁において①層の黒色土の混土貝層、及び①b層の黄色混土層は傾斜堆積を示している。①層と①b層の間、①b層と②b層の黄色土混入層との間には、各々炭化物を含む破砕層が存在する。又、②層には、青黒色の混土貝層の落ち込みがある。土器は③層上面及び、地山面の2面か

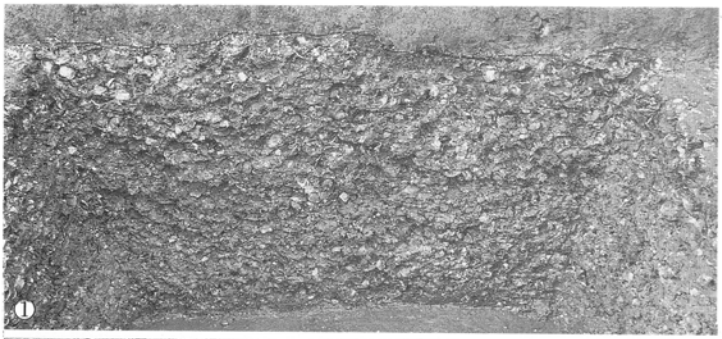








①グリッドＢ２　西壁貝層
②グリッドＢ２　北壁貝層
③グリッドＢ２　第Ｉ面遺物出土状況
④グリッドＢ２　地山面遺物出土状況
⑤グリッドＣ３　西壁貝層
⑥グリッドＣ３　北壁貝層
⑦グリッドＣ３　第Ⅲ面遺物出土状況
⑧グリッドＣ３　第Ⅲ面出土縄文土器

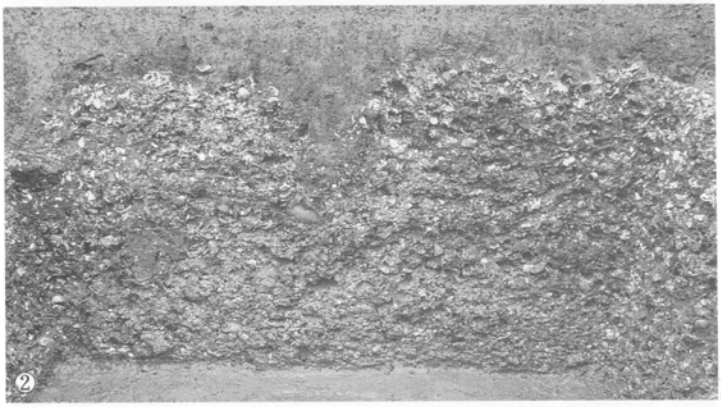


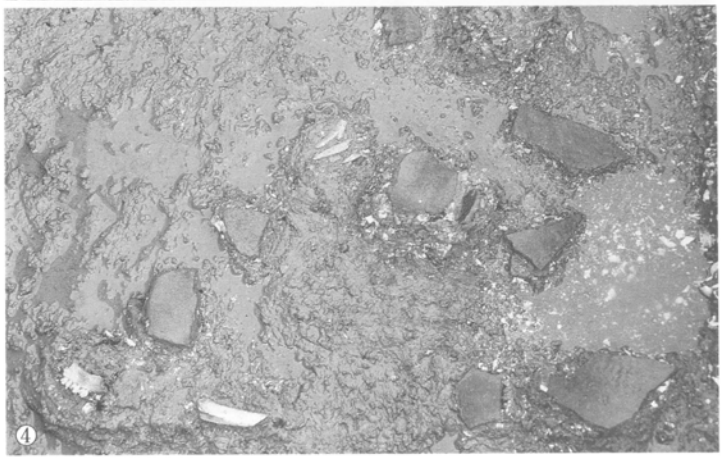
⑤グリッドＣ４　西壁貝層

⑥グリッドＣ４　北壁貝層

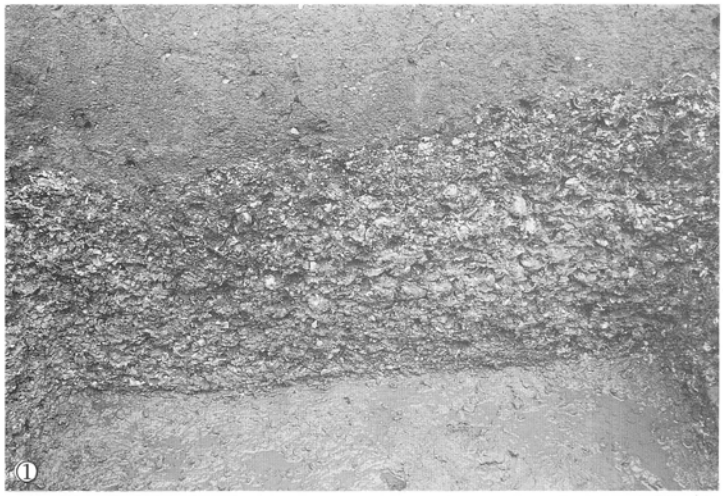
⑦グリッドＣ４　第Ⅲ面遺物出土状況

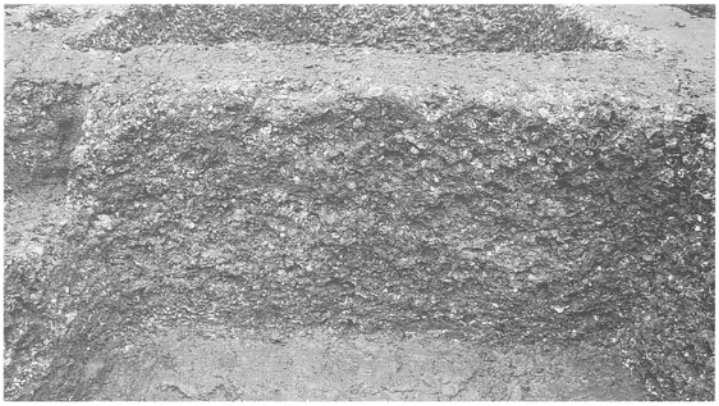
①グリッドＢ３　西壁貝層
②グリッドＢ３　北壁貝層
③グリッドＢ３　第Ⅱ面遺物出土状況
④グリッドＢ３　第Ⅱ面遺物出土状況





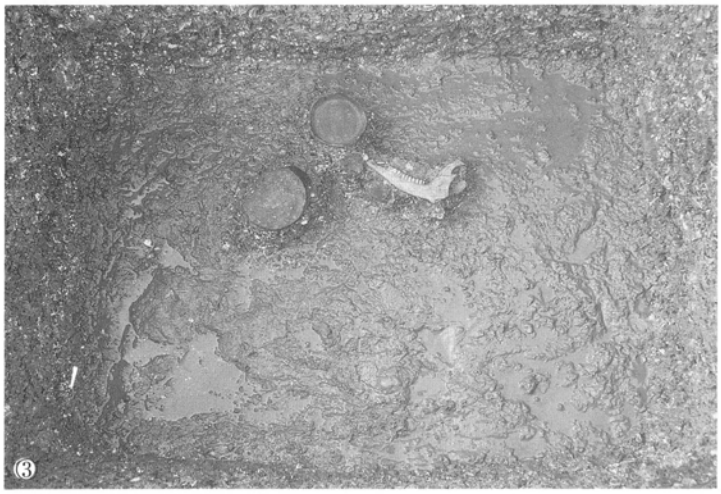
①グリッドＢ４　西壁貝層
②グリッドＢ４　北壁貝層
③グリッドＢ４　第Ⅲ面遺物出土状況
④グリッドＢ４　第Ⅲ面遺物出土状況
⑤グリッドＣ６　西壁貝層
⑥グリッドＣ６　北壁貝層
⑦グリッドＣ６　第Ⅲ面遺物出土状況
⑧グリッドＣ６　第Ⅲ面遺物出土状況

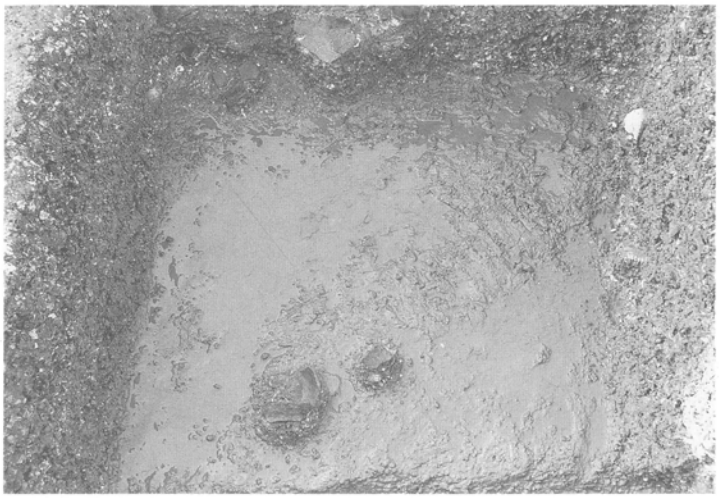




④グリッドＣ５　第Ⅲ面西壁貝層

⑤グリッドＣ５　第Ⅲ面北壁貝層

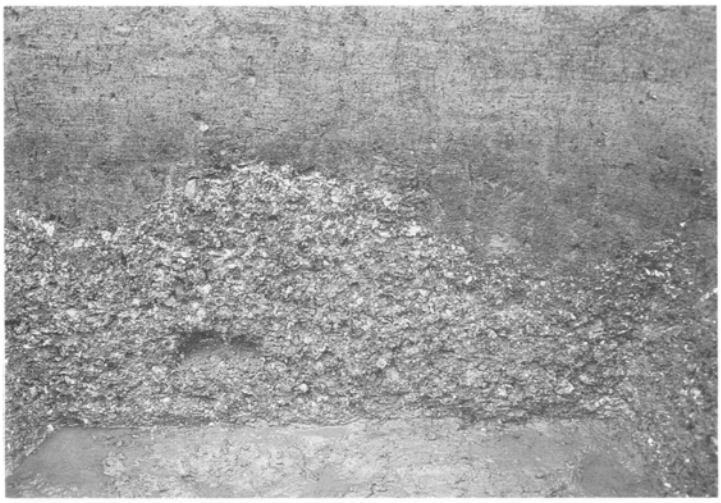




①グリッドＢ５　西壁貝層
②グリッドＢ５　北壁貝層
③グリッドＢ５
第Ⅲ面シカ下顎骨出土状況
⑥グリッドＣ５　第Ⅲ面遺物出土状況

ら出土した。

Ｂ４（Fig.10）　西壁土層は水平堆積であるが、上層では、②層の南側に黒色土の混貝層が入り込んでいる。②・③層は若干傾斜する傾向をもち、②層の南側には黄褐色土と①層の落ち込みが認められる。北壁は②層・②ｂ層と③層の間に炭化物を含んだ層が傾斜堆積が存在する。③層の北側は青黒く汚染を受けている。④層は黄灰色の混貝土層である。土器及びシカの下顎骨、裁断骨等の遺物は主として



①グリッドＢ６　西壁貝層

④グリッドＢ６　第Ⅱ面遺物出土状況

②グリッドＢ６　北壁貝層

⑤グリッドＢ６　第Ⅱ面出土縄文土器

③グリッドＢ６　第Ⅲ面遺物出土状況

⑥グリッドＢ６　第Ⅲ面シカ下顎骨出土状況

①グリッドＢ７　西壁貝層

④グリッドＣ７　西壁貝層

②グリッドＢ７　第Ⅰ面遺物出土状況

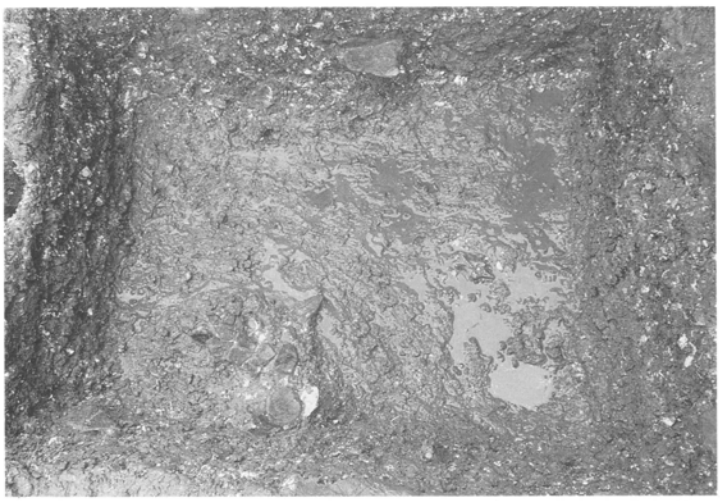
⑤グリッドＣ７　第Ⅲ面遺物出土状況

③グリッドＢ７　地山面

⑥グリッドＣ７　第Ⅲ面イノシシ下顎骨出土状況

①グリッドＢ８　西壁貝層

②グリッドＢ８　北壁貝層



③グリッドＢ８　第Ⅲ面遺物出土状況

④グリッドＣ８　西壁貝層　⑥グリッドＣ８　第Ⅲ面遺物出土状況
⑤グリッドＣ８　北壁貝層　⑦グリッドＣ８　第Ⅳ面遺物出土状況

①グリッドＣ９　西壁貝層

③グリッドＣ９・Ｄ９　北壁貝層

②グリッドＣ８・Ｄ８　地山面

④貝サンプル採集作業

③層の上位、及び②ｂ層との境付近から出土した。

Ｃ５（Fig.10）　西壁土層はほぼ水平堆積であるが、②層内に乱れがある。①層は黒色土の混土の状態によって幾つかのブロックに分かれる。②層の下位は②ｂ・②ｃ層のように黒色土の混入の多少、或いは貝の遺存状況により３層に分離ができる。③層の上面は波打った状態を示しており、上面には炭化物層の堆積がみられる。北壁では②層の間に炭化物層が間層として傾斜堆積している。土器は③層上面から出土した。

Ｂ５（Fig.10）　西壁はほぼ水平堆積であるが、グリッドＢ６からつづく③層は乱れており、ここでは黒色の③ｂ層が強い。②層の落ち込みがみられる。北壁では①～②層の傾斜が強いが、③層はほぼ水平堆積で、上面に炭化物を含む破砕層が存在する。この③層上面より土器底部及びシカ下顎骨が出土した。

Ｃ６・Ｄ６（Fig.10）　Ｂ６と同じく水平堆積の貝層がみられるが、②層の上面には薄い炭化物層と黒色土の混土貝層が存在する。②層上面から黒色土の混土貝層の落ち込みがみられる。③層内の標高5.03mの位置では土器、獣骨の散布がみられる。

Ｂ６（Fig.10）　西壁の①層の上部には純貝層が存在するが、下位は黒色土の混土貝層である。②層はやや暗い混土貝層で、南側に②ｂ層の黒青色に汚染された層がある。下層の③ｂ層は茶褐色土の混土

貝層、③層は炭化物を多く含む混土貝層、④層は破砕貝層となっている。西壁、北壁共にほぼ水平堆積であるが、西壁では炭化物を含む黒色土を多く含んだ落ち込みがみられる。③層の上面には黒色土の薄い間層がある。この黒色土層と③b層の上位から阿高系土器を主体とした土器散布がみられた。北壁では④層は存在しない。

C7・D7 (Fig.10)　C7・D7のグリッドを連結させて掘り下げた。西壁、北壁共に①層がわずかに傾斜堆積をしているのに対して、②・③層はほぼ水平堆積である。①層は黒色土が混入した混土貝層、②層は青灰色土と黒色土が混入した混土貝層、③層は茶褐色土の混土貝層である。西壁では③層の上面に炭化物層が乗っている。③層の下面にも炭化物層と厚さ3～8cmの貝破砕層が存在する。又、西壁において②層上面から掘り込まれた青灰色の濃い貝層の落ち込みがみられる。

遺物は各層から出土するが、特に③層からはイノシシ下顎骨、シカ中手骨、阿高系土器が出土した。ここでは中津式土器は少ない。

B7 (Fig.10)　貝層の上面の高さは標高5.7mを測り、貝層の最大の厚さは62cmである。①層は混土貝層、②層は純貝層で、ザルガイ、オキシジミ、アサリを主体としている。この②層の下には赤褐色(焼土)を呈した粘土層が50～100cmの範囲で広がっていた。③層は混貝土層で、この層の上面から炭化物を含んだPit状の掘り込みがある。③層の混貝土層は北壁面でみると東側へ傾斜する傾向がある。④層は暗茶褐色粘質土の混貝層で、貝は少なく、更に2層に分離できる。①層は暗茶褐色の破砕貝を含む混貝土層である。①層から阿高系土器の他、シカ骨等の獣骨が出土した。地山面の高さは標高約5.0mを測り、東及び南側に傾斜する。グリッドの南側隅には長さ約56cmの角石が存在し、周辺には鹿骨が散布していた。

B8 (Fig.10)　北壁の貝層も大略水平堆積をなすが、西壁は南側へ傾斜している。又、混土貝層、或いは混貝層が貝層の主体を占める。西壁の①層は茶褐色土の混貝層、②層は黄色土の混貝層、③層は黄色土と炭化物を含む混土層、④層は黒褐色粘質土に炭化物を含む混貝層である。純貝層的な要素は失われている。遺物は③層の下位から中津式土器、獣骨等が出土した。

C8・D8 (Fig.10)　C8・D8の2つのグリッドを連結して調査した。西・北壁の貝層は共に大略水平堆積であるが、北壁①層は暗褐色粘質土の混土貝層で、東側に傾斜している。②層は淡褐色土の混土貝層である。①・②層は混土貝層であるが、土の量は多くなっている。③層は黒褐色粘質土の混貝層で、少しの破砕貝を含む。④層は地山である。遺物は①層と②層の間から鯨骨、シカの頸骨、中津式土器が出土し、地山面の直上、及び④層上面から阿高系土器や獣骨が出土した。

C9・D9 (Fig.10)　C9・D9の2つのグリッドを連結して調査した。II区の境界に位置するため、このグリッドの南側はII区と重複している。重複部分は既に調査は終了している。II区では土壙墓SR01が存在した。北壁の貝層は水平堆積になっているが、西壁では南側方向への傾斜が強い。貝層は混貝土層が主体となっている。①層は暗褐色粘質土の混貝層、②層は①よりも暗い層で、貝殻は①層より少ない。③層は①よりも明るい混貝層。⑤層は暗褐色粘質土の基盤層である。この基盤層のレベルは北側では標高4.9m、南側では標高4.8mを測り、比高差は約10cmである。

遺物は、①層下位では獣骨や中津式土器、②層下位では獣骨の中手骨他、土器が多数出土。そして地山上面では、獣骨の大腿骨、阿高系土器が出土した。

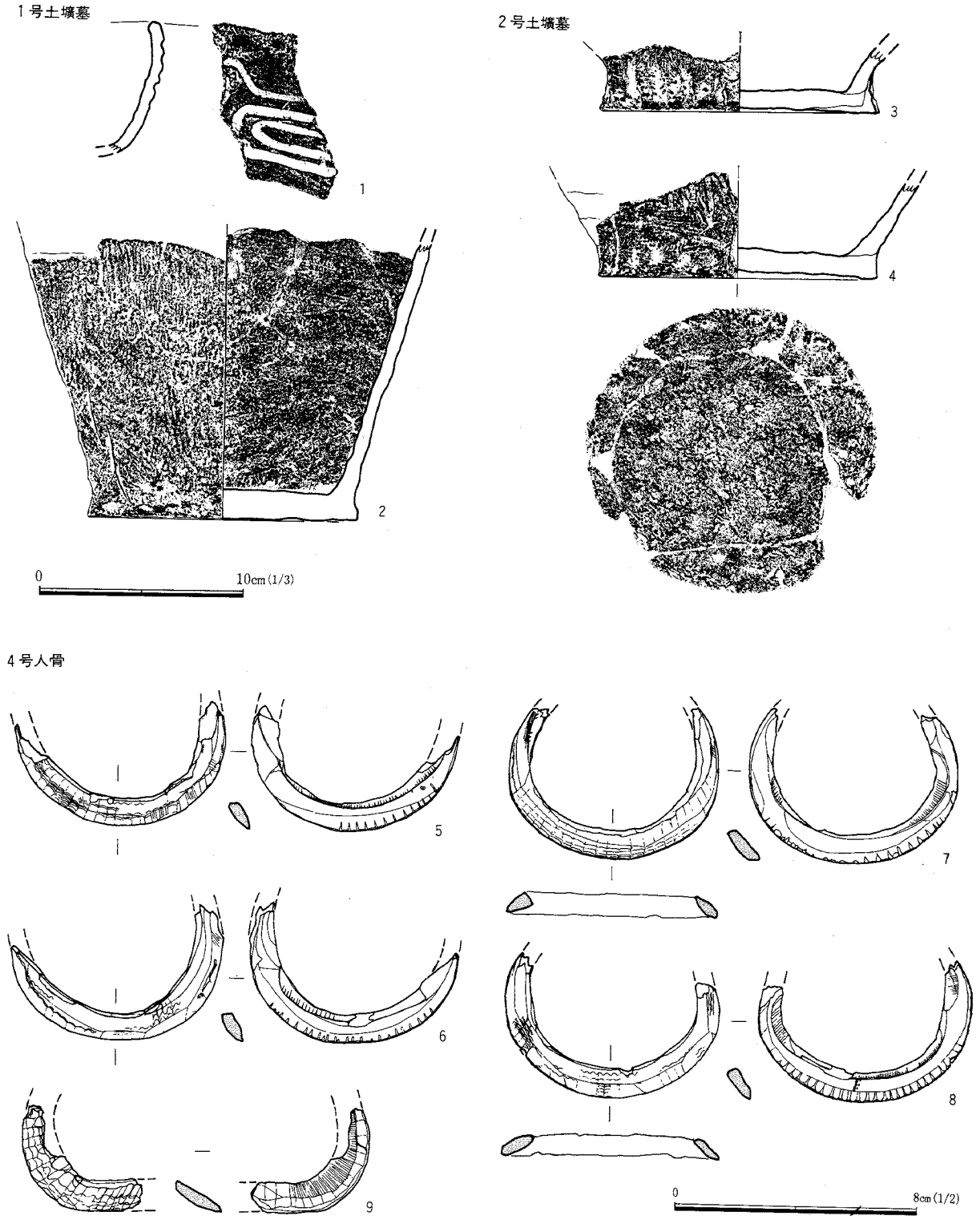


Fig.14　土壙墓出土遺物実測図（縮尺1/3・1/2）

5．遺物説明

（1）土壙墓出土遺物

土壙墓出土遺物（Fig.14）

①縄文時代後期の土器（1～4）

1・3・4は墓壙内覆土から出土した。1は扁平な渦文を沈線で施している。阿高系土器である。内面はナデ調整で、灰黄色を呈する。4はやや上げ底の底部で、外底端部に明瞭な指圧痕が残る。内外面はナデ調整である。褐色を呈する。2は4号人骨の腹部上に置かれていた粗製深鉢で、上部を欠損している。底部は平底で、外面はタテ方向の条痕を残し、内面はナデ調整である。

②貝輪（5～9）

右上肢骨に装着されていたもので、全部で14個である。いずれも風化が著しく、取上げの際に土ごと切り取ったが、貝が脆く、土から分離することが困難な状況にある。貝種は別表に示しているが、ベンケイガイを主としてクマサルボウの2種に限られている。

（2）グリッド出土遺物

①縄文時代後期の土器（貝層Ⅰ～Ⅲは土層図Fig.6の貝層51・52・53に一致する。）

B 2（G11）出土遺物（Fig.15）

1～3は第Ⅰ層出土。1は球体の胴部をもつ。精製土器で、内外面はミガキ調整である。2・3は粗製土器の底部で、2の外端部は刻み状の押圧痕がある。4～15は第Ⅱ層出土である。6～12は瀬戸内系の中津式土器である。外面に磨消縄文を施している。6の地紋はフトヘナタリの擬縄文で、口唇部には刻目を施す。13・14は阿高系土器で、14の外面は凹線の渦文を、13の口縁部外面上には列点文がある。13は口唇部にナナメ方向の刻みをもつ。4・5・7・15は粗製土器である。5は体部と口縁部がくの字形に屈折する。4・5の内外面は巻貝による条痕がある。15の底部外端部には刻目をもっている。9・16は第②c層出土。

C 3（G10）出土遺物（Fig.16）

17・18は第Ⅰ層出土で、粗製土器である。口唇部に刻目を有している。19～26は第Ⅱ層出土。19は波状口縁部と考えられる。口唇部に押引き状の竹管文を施し、外面に渦文を施している。並木式土器である。他に1点出土している。21は波状口縁部で、外面に磨消縄文を施している。巻貝のフトヘナタリの擬縄文が地紋である。中津式土器であろう。20・23は阿高系土器である。20は爪形状の楕円形列点文と短直線の凹線文を施す。23は体部が球体を呈し、口縁部は丸くなる。口縁部に突起をもち、刻目がある。内面はヨコの条痕がある。外面は沈線文である。22は波状口縁部で、波頂部に3ヶ所の刻みをもつ。又、口縁部外面に刻目をもった隆帯文がある。24～27は粗製土器である。24は小型鉢で、口縁部は緩やかな波状を呈する。口縁部径13cm、器高7.4cmを測る。内外面ナデ調整である。26は内外面は貝殻条痕である。25・27の口唇部には刻目をもつ。

B 3（G 9）出土遺物（Fig.16・17）

38・39は第Ⅰ層出土である。38・39は瀬戸内系土器で、磨消縄文土器である。38・39の地紋はフトヘナタリの擬縄文である。28～35は第Ⅱ層出土で、28～33は瀬戸内系土器の中津式土器である。28～31・33は外面に磨消縄文を施す。28は渦文、29は外反する口縁部で、口縁部の直下に沈線を廻らす。タテ

B2（G11）

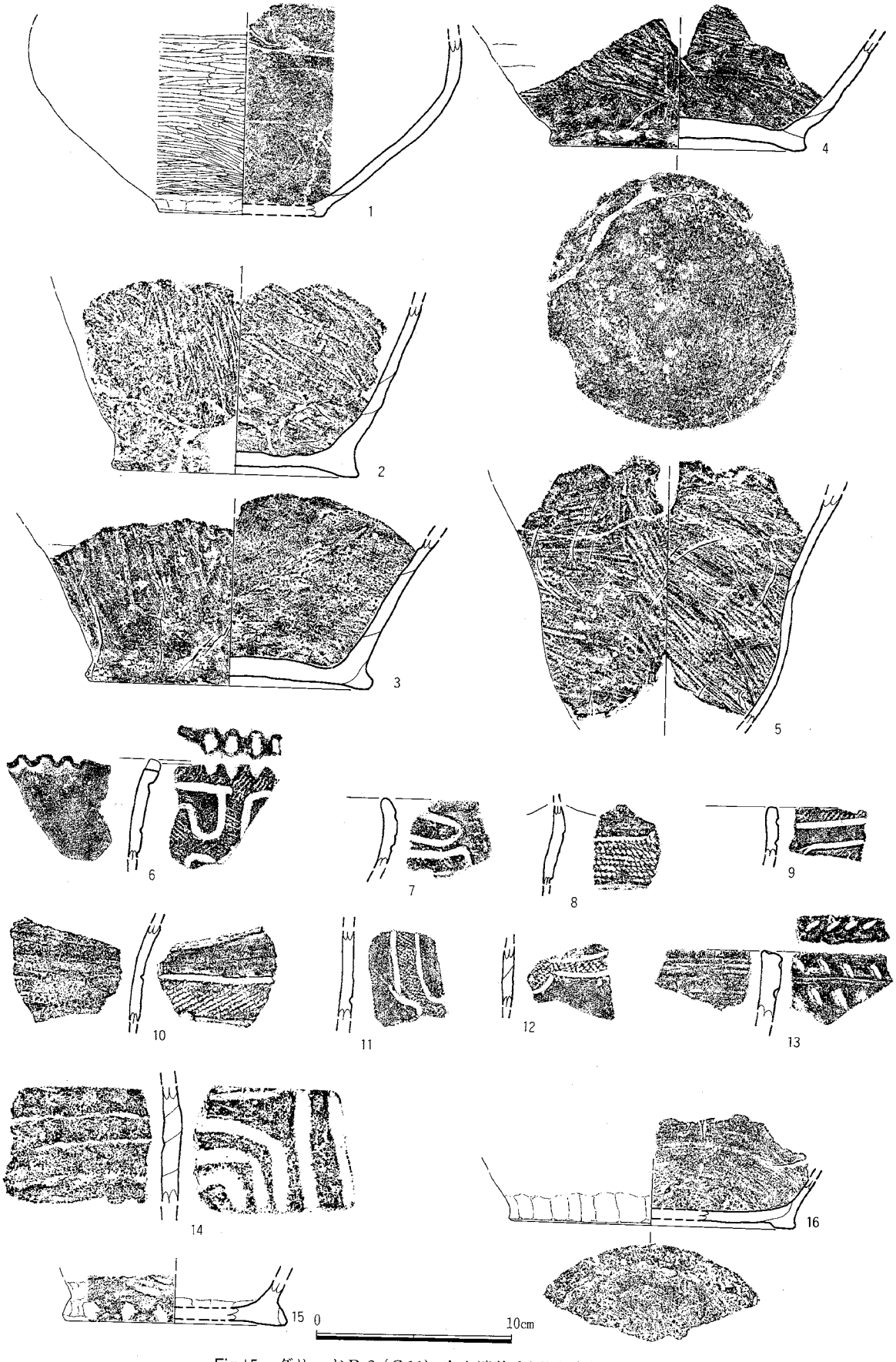


Fig.15　グリッドＢ２（G11）出土遺物実測図（縮尺１/３）

方向に擬縄文の磨消縄文を施す。砂粒を含み、硬質の焼成である。33は波状口縁部で、口縁部の形に沿った沈線を廻らす。33は波頂部に刻みをもち、外面は口縁部に沿って沈線を廻らす。ヘナタリの擬縄文である。30・31は内外面を研摩しており、30は波状口縁である。32はやはり瀬戸内系土器で、波状口縁部である。波頂部の外面にタテ方向に2重の隆帯文を貼付け、刻目を施す。34・35は粗製土器である。34は口唇部に刻目をもち、内外面に貝殻条痕がある。35は小型甕で、現存高13.4cmである。内外面はタテ方向の貝殻条痕である。36・37は第Ⅲ層の直上より出土した。37は阿高系土器で、凹線文の短直線と連点文を組み合わせている。胎土に滑石を多く含む。36は粗製土器で、口唇部に刻目をもっている。

C4（G8）出土遺物（Fig.17・18）

40は中津式土器で、磨消縄文を施す。調整は貝殻条痕である。41は粗製土器で、口唇部に浅い刻目を有している。43～54は第Ⅲ層出土である。43～48は阿高系土器である。45・46は凹線文で、内面はヨコナデである。43・44は口唇部に刻目を有し、口縁部外面上位に爪形状の楕円形の列点文を施し、43はその下位を沈線で区切っている。いずれも内面はヨコ方向の貝殻条痕である。47の内外面は貝殻条痕で、外面に爪形の列点文を施す。48は口唇部に刻目をもち、外面に爪形文状の列点がある。50は中津式土器である。胎土に砂粒を含む。49は口縁部外面を肥厚させており、3条のヨコ沈線文を施す。内面はヨコ方向の条痕である。52は小型鉢で、口径18.5cm、復元高11.5cmを測る。内外面ヘラミガキ調整で、C5出土の71と同一個体の可能性が強い。51・53・54は粗製土器の底部である。

B4（G7）出土遺物（Fig.18・19）

いずれも第Ⅲ層出土である。55～58は阿高系土器で、55～57の口唇部には刻目がある。55～57の外面上位には指押しの列点文を施す。55の内面は貝殻条痕である。58は凹線文の入り組み文状の渦文である。60は口径約26cmを測り、外面上位には爪形の列点文を施す。その下位にはヨコ沈線と、複線の鋸歯文帯を施す。調整は、外面はヨコ、ナナメ方向の貝殻条痕である。59は波状口縁で、内面は巻貝によるミガキ状のナデ、外面は貝殻条痕である。口唇に沿って沈線を施す。61・62は口唇部に刻目を施し、内外面は貝殻条痕である。

C5（G6）出土遺物（Fig.19・20）

63は第Ⅰ層出土。阿高系土器で、口唇部は刻目をもち、外面上位に爪形の列点文がある。滑石を含まない。64～75は第Ⅲ層出土。64～68は阿高系土器で、64・65は口縁部の外面上位に爪形状の楕円形列点文を、66～68には凹線文を施す。64・65の口唇部には刻目がある。この口唇部には押点を境にして沈線を施す。滑石は少ない。69は磨消縄文土器で、口縁部は波状を呈する。外面には口縁部の山形に沿って沈線を施している。瀬戸内系土器である。70・74は粗製土器である。70・71は小型の鉢で、70の口縁部は緩く外反する。外面は巻貝による条痕があるが、内面はナデ消している。口径17cmを測る。71は丸底で、胴部は丸みをもち、口縁部との境にくびれを形成する。内外面共にヘラミガキを行う。精製土器である。口径19.8cm、器高11.8cmを測る。72・73は口唇部に刻目をもつ。73の刻目の間隔は広く、内外面の上位は指ナデ、下半は貝殻条痕がある。74の外底部は貝殻条痕である。

B5（G5）出土遺物（Fig.20・21）

いずれも第Ⅲ層出土。79～81は阿高系土器で、78・79は口縁部外面上位に爪形状を呈した楕円形の列点文がある。77・78は口唇部に刻目をもつ。80・81は凹線文を施す。80は渦文である。82は口縁部外面に2条の隆帯文をもち、内面は貝殻条痕である。83～88は粗製土器で、83の内外面、84の外底部は貝殻条痕が残る。84・85は底部の外に張り出した端部に刻目を施す。

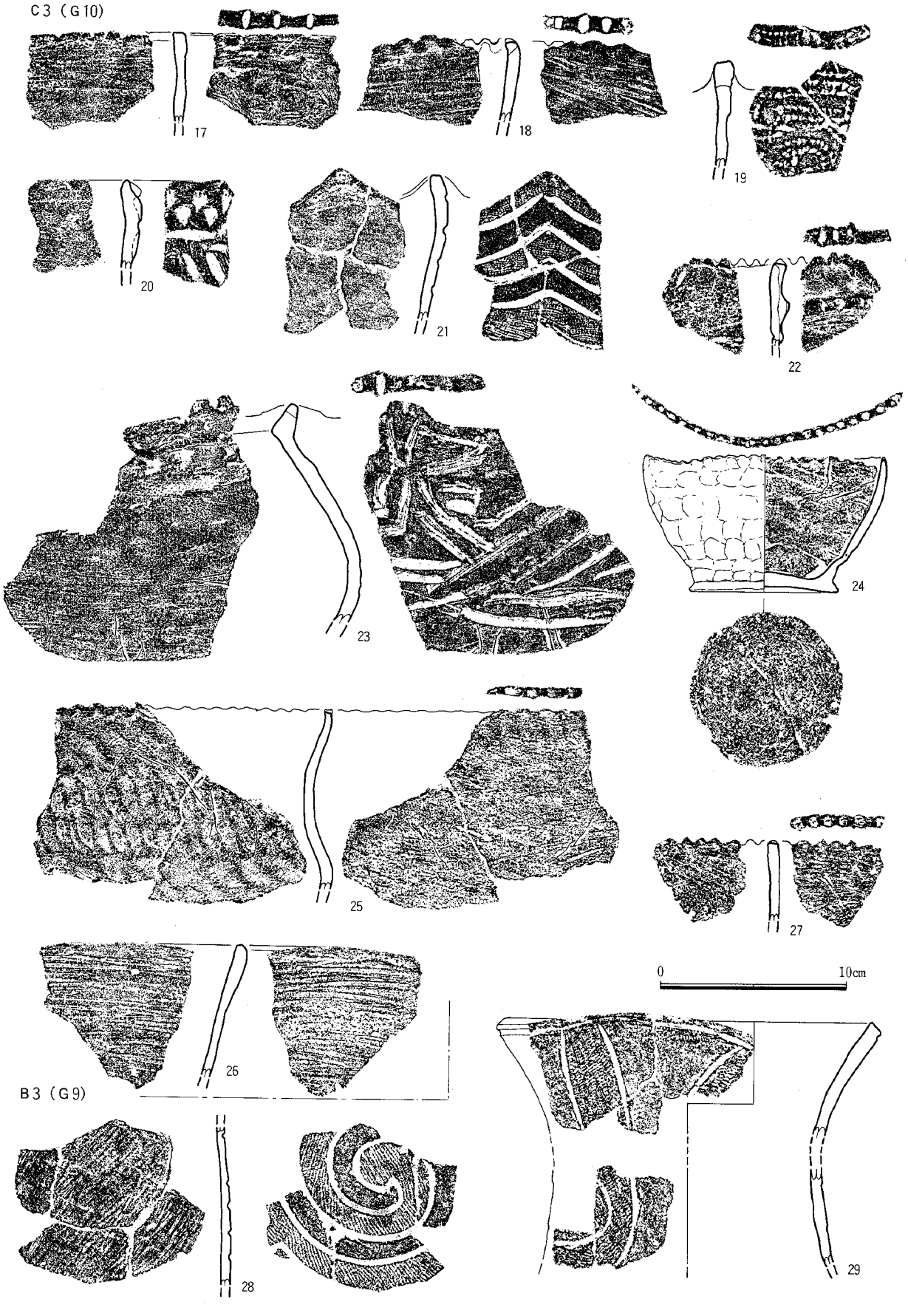


Fig.16　グリッドC 3 (G10)・B 3 (G9) 出土遺物実測図（縮尺 1 / 3 ）

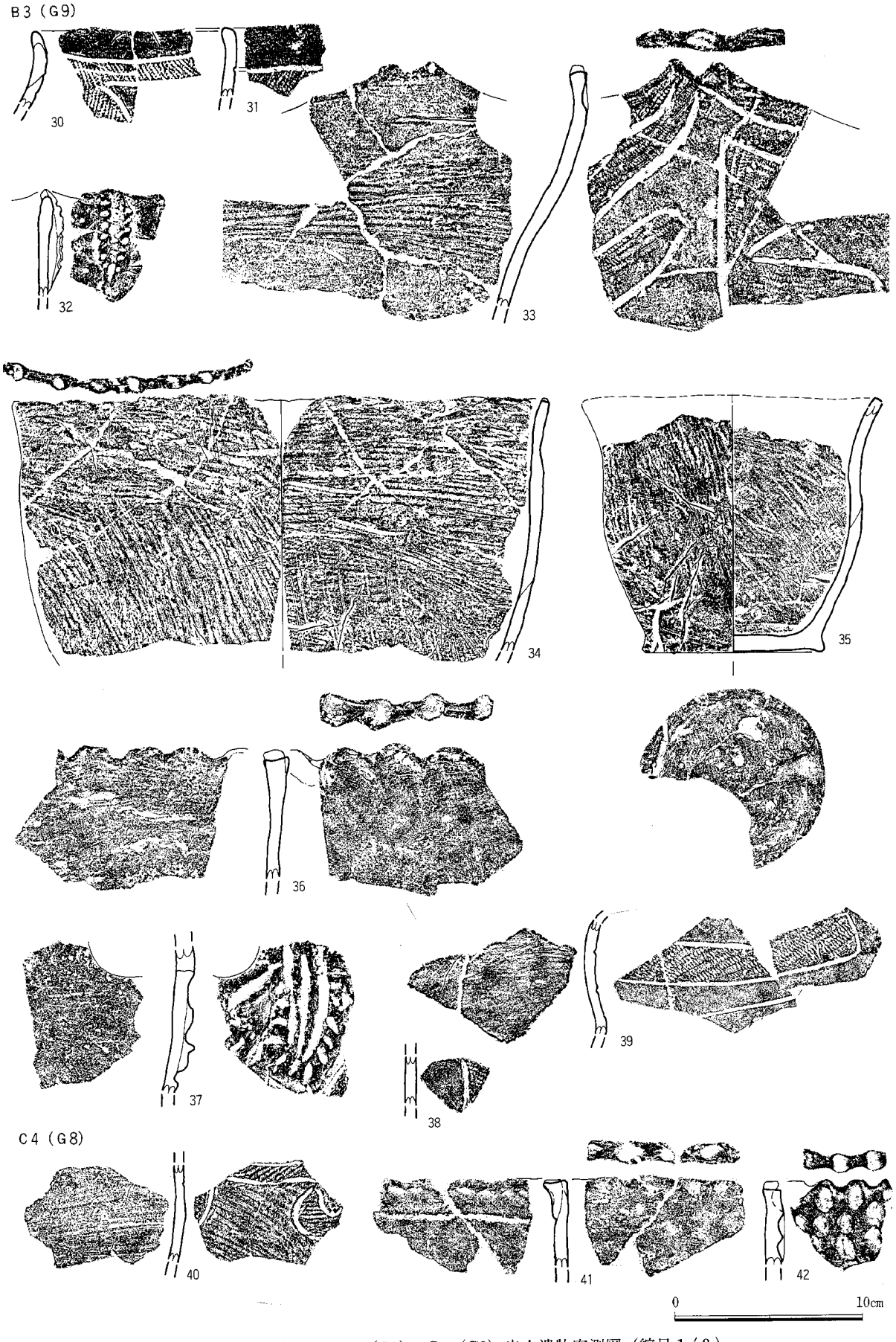


Fig.17　グリッドB 3 (G9)・C 4 (G8) 出土遺物実測図（縮尺 1 / 3）

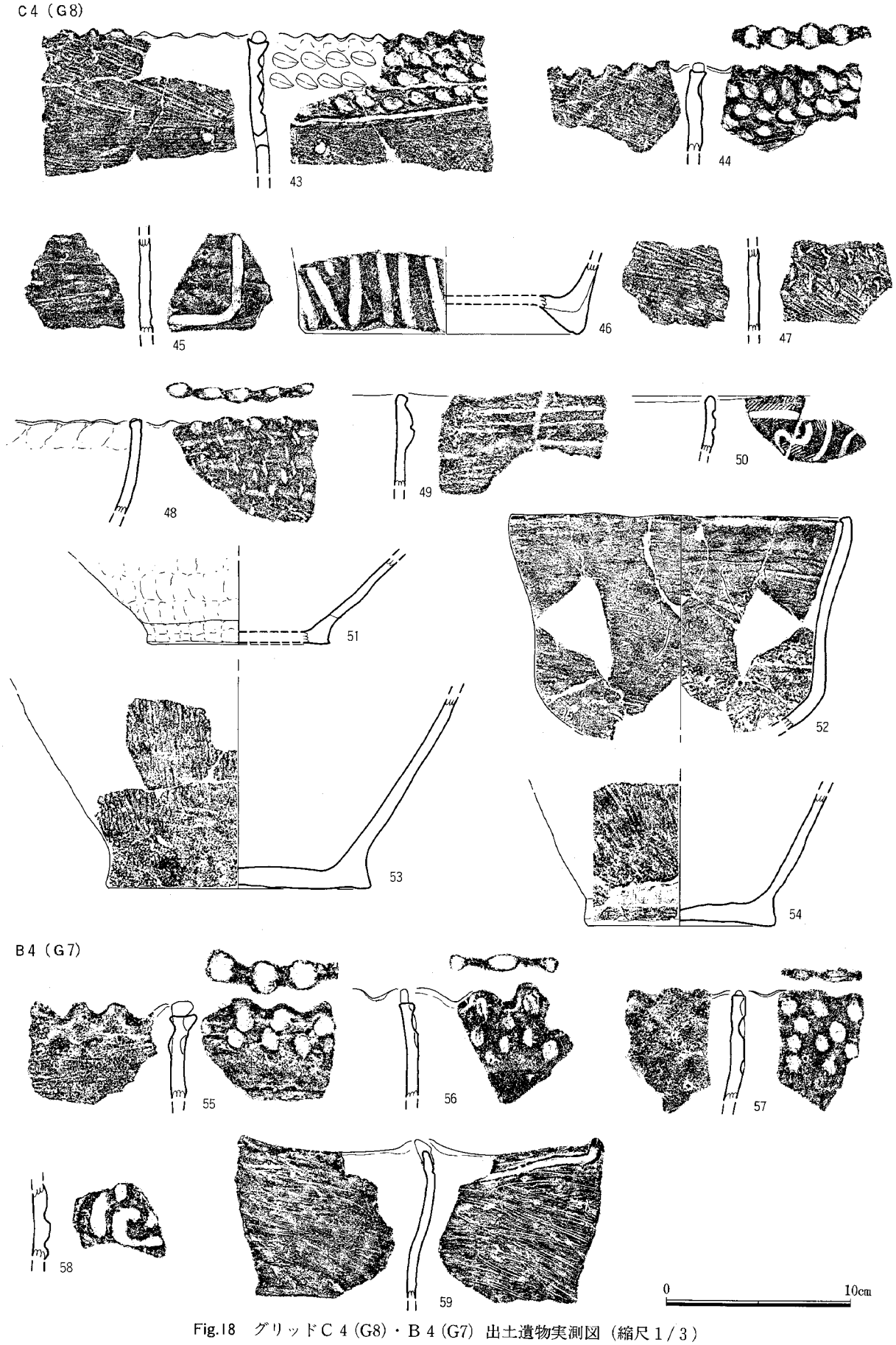


Fig.18　グリッドC 4 (G8)・B 4 (G7) 出土遺物実測図（縮尺 1 / 3 ）

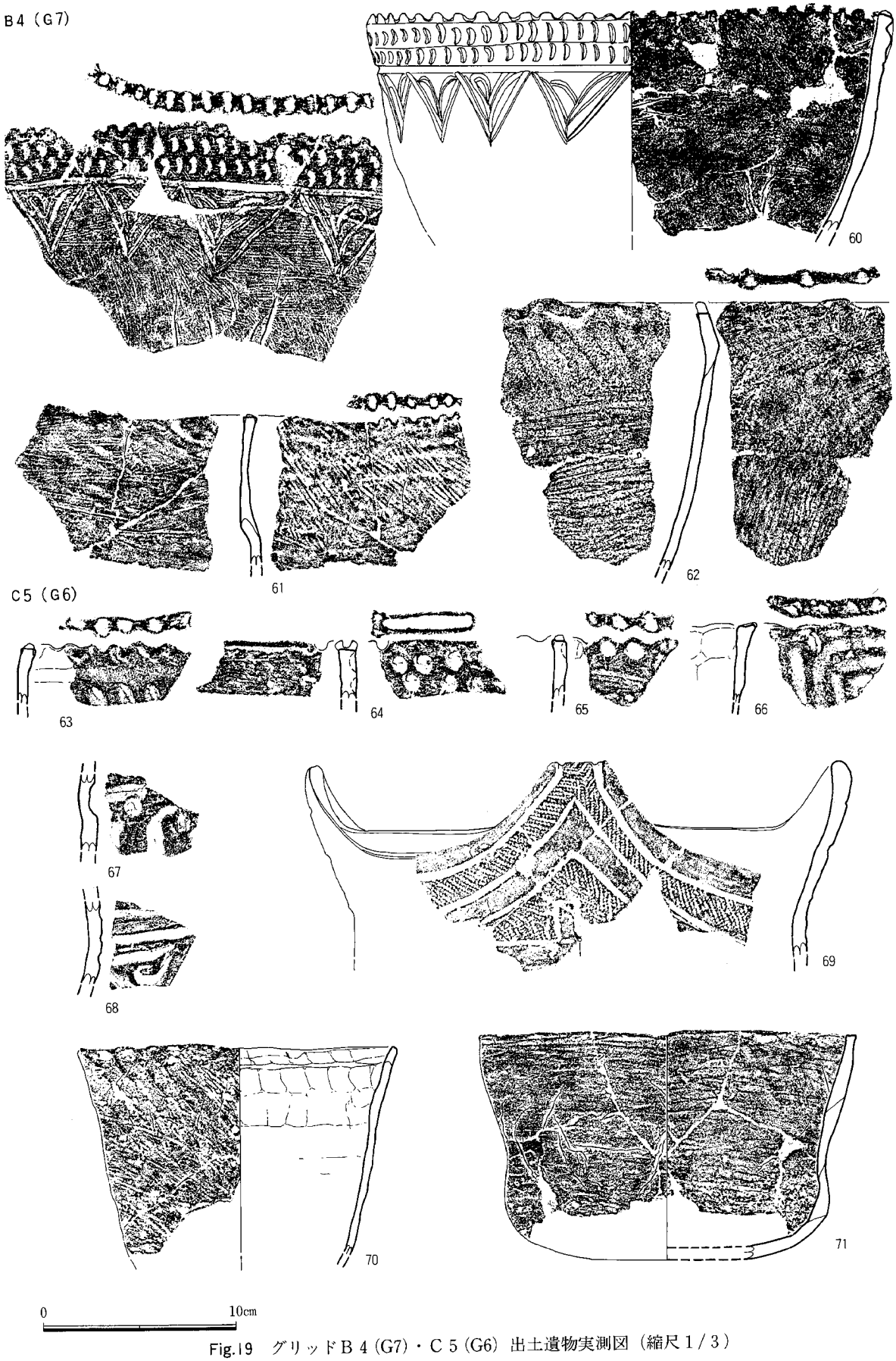


Fig.19　グリッドＢ４(G7)・Ｃ５(G6) 出土遺物実測図（縮尺１/３）

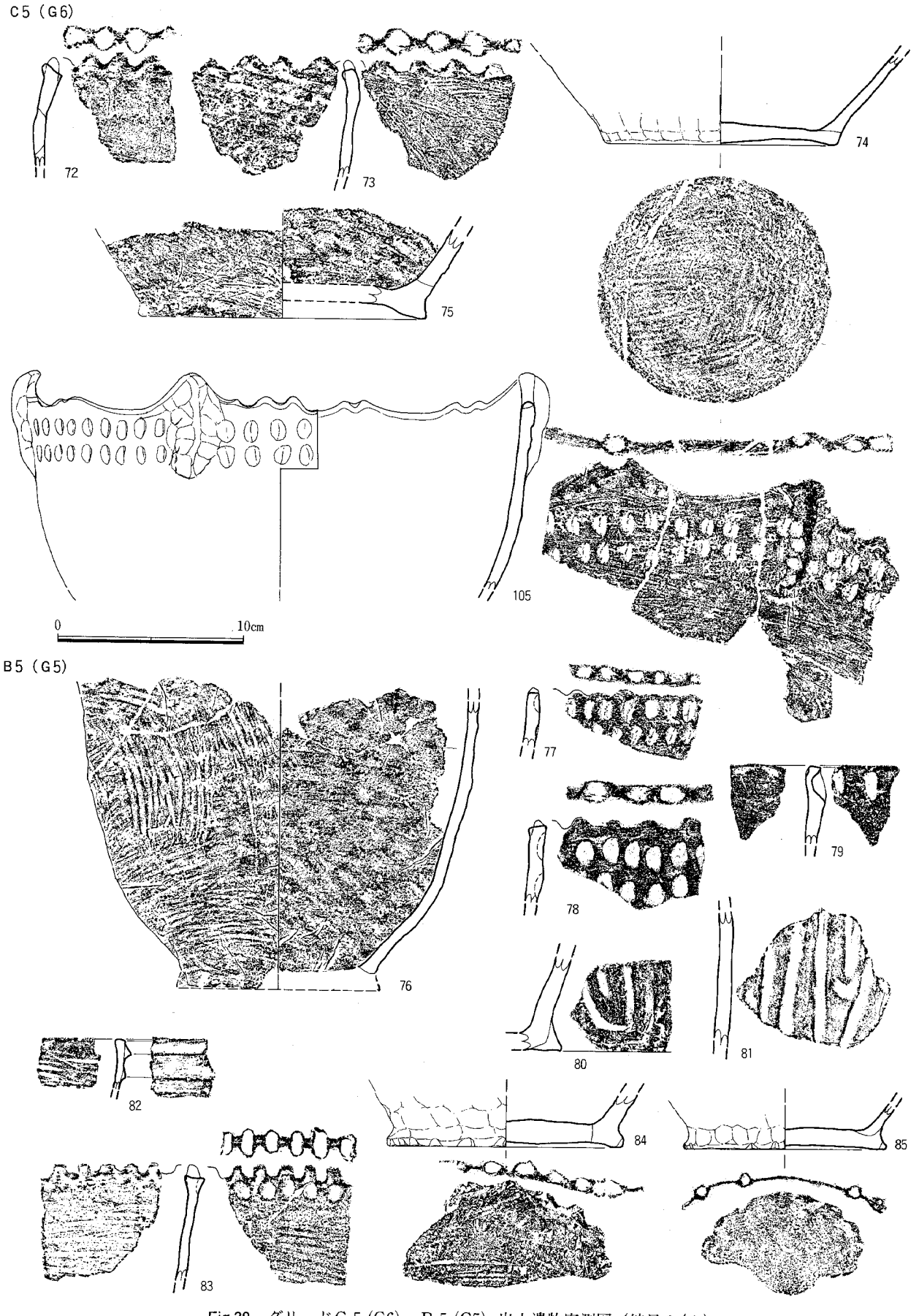


Fig.20　グリッドC５(G6)・B５(G5) 出土遺物実測図（縮尺１/３）

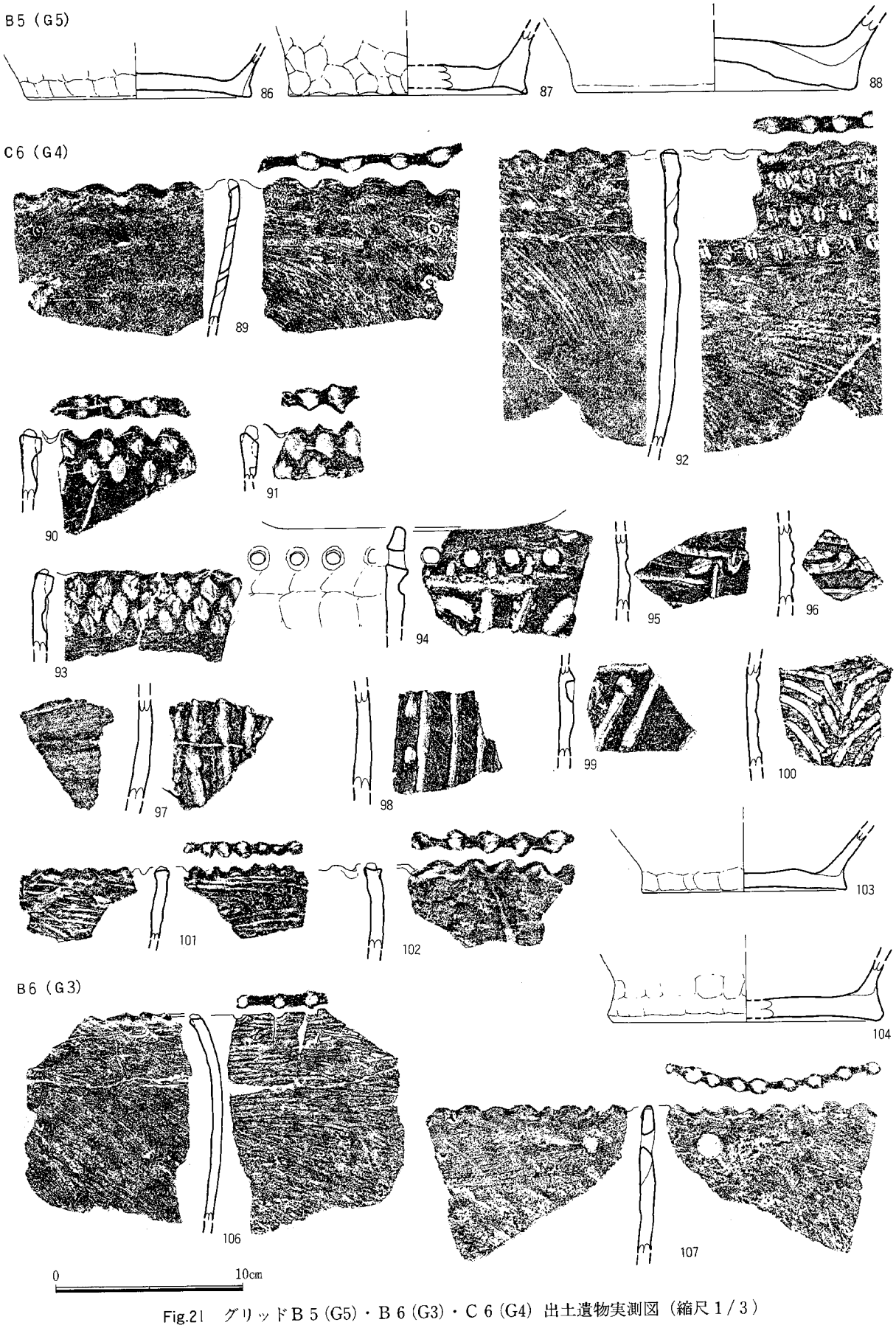


Fig.21　グリッドB 5 (G5)・B 6 (G3)・C 6 (G4) 出土遺物実測図（縮尺 1 / 3 ）

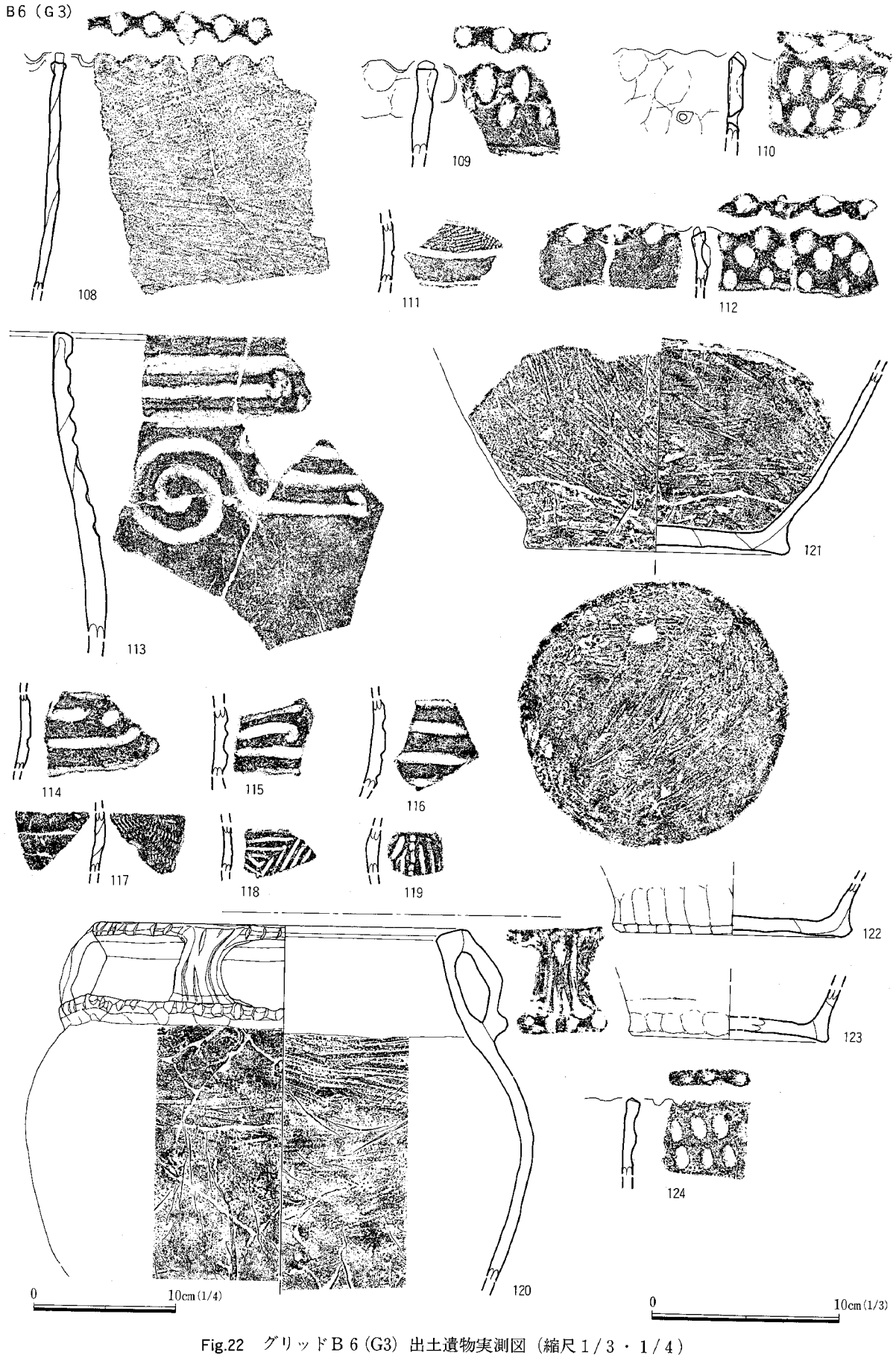


Fig.22　グリッドＢ６(G3) 出土遺物実測図（縮尺１/３・１/４）

C7・D7（G2）

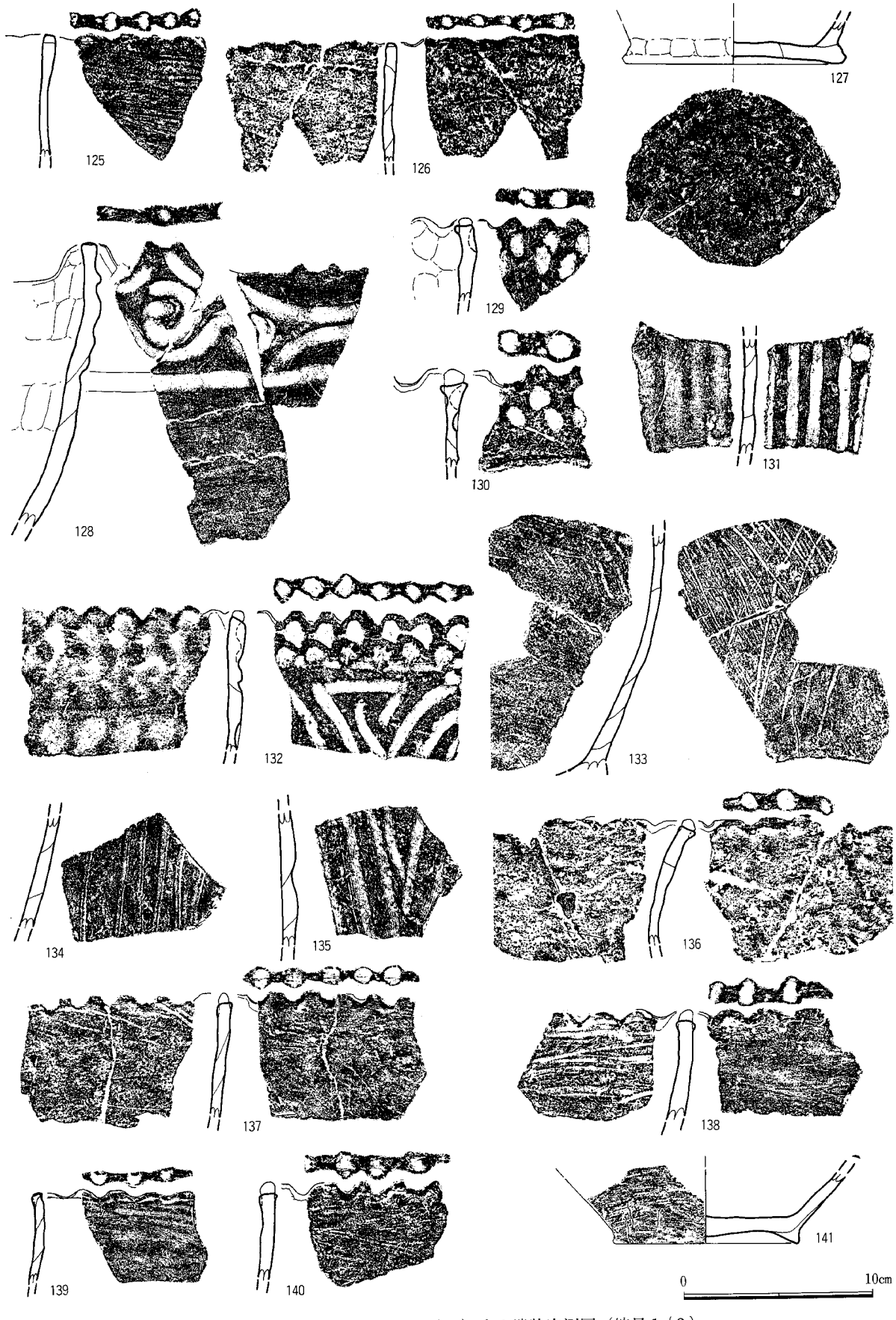


Fig.23　グリッドＣ７・Ｄ７（G2）出土遺物実測図（縮尺１/３）

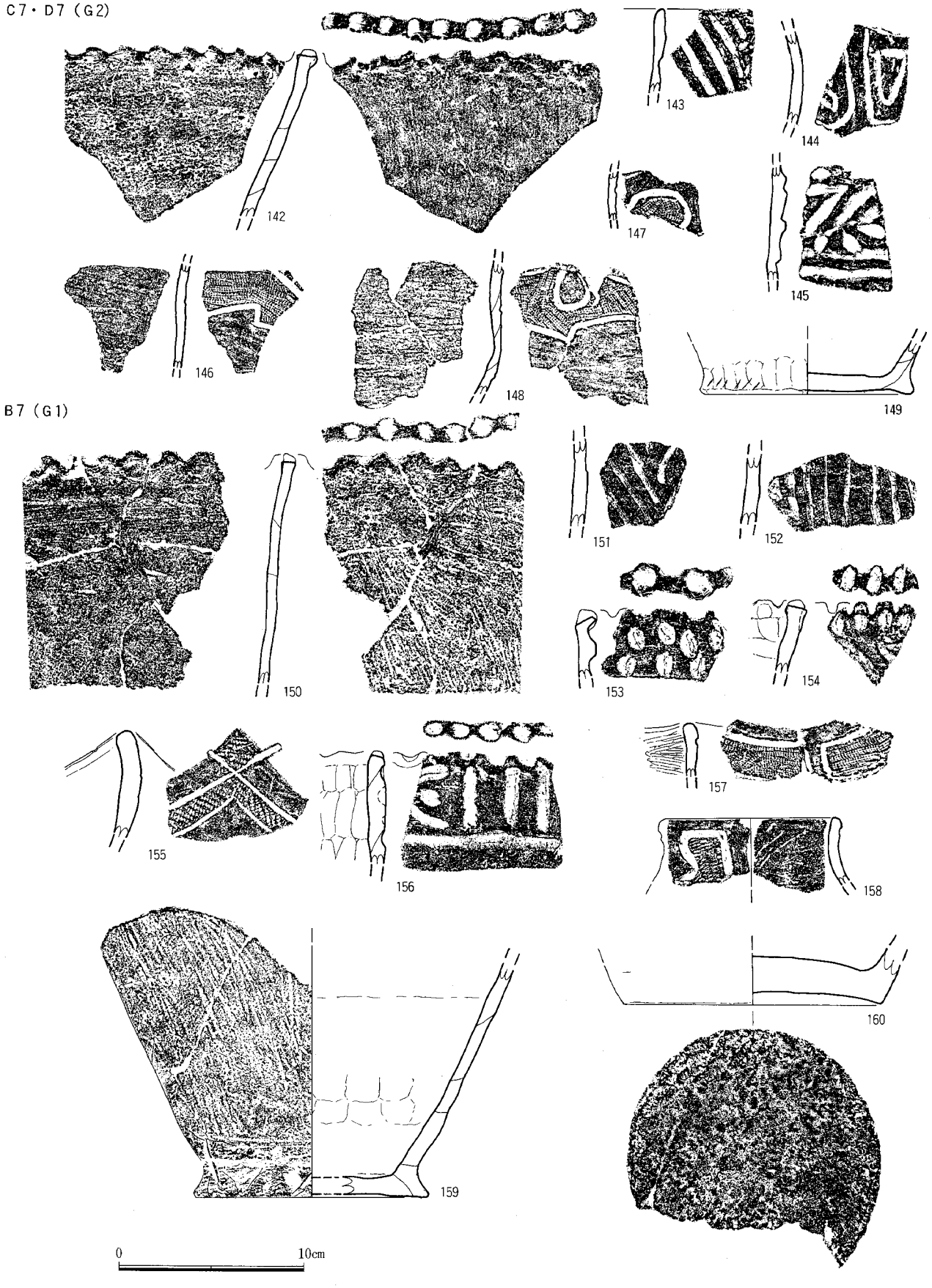


Fig.24　グリッドＣ７・Ｄ７(G2)・Ｂ７(G1) 出土遺物実測図（縮尺１/３）

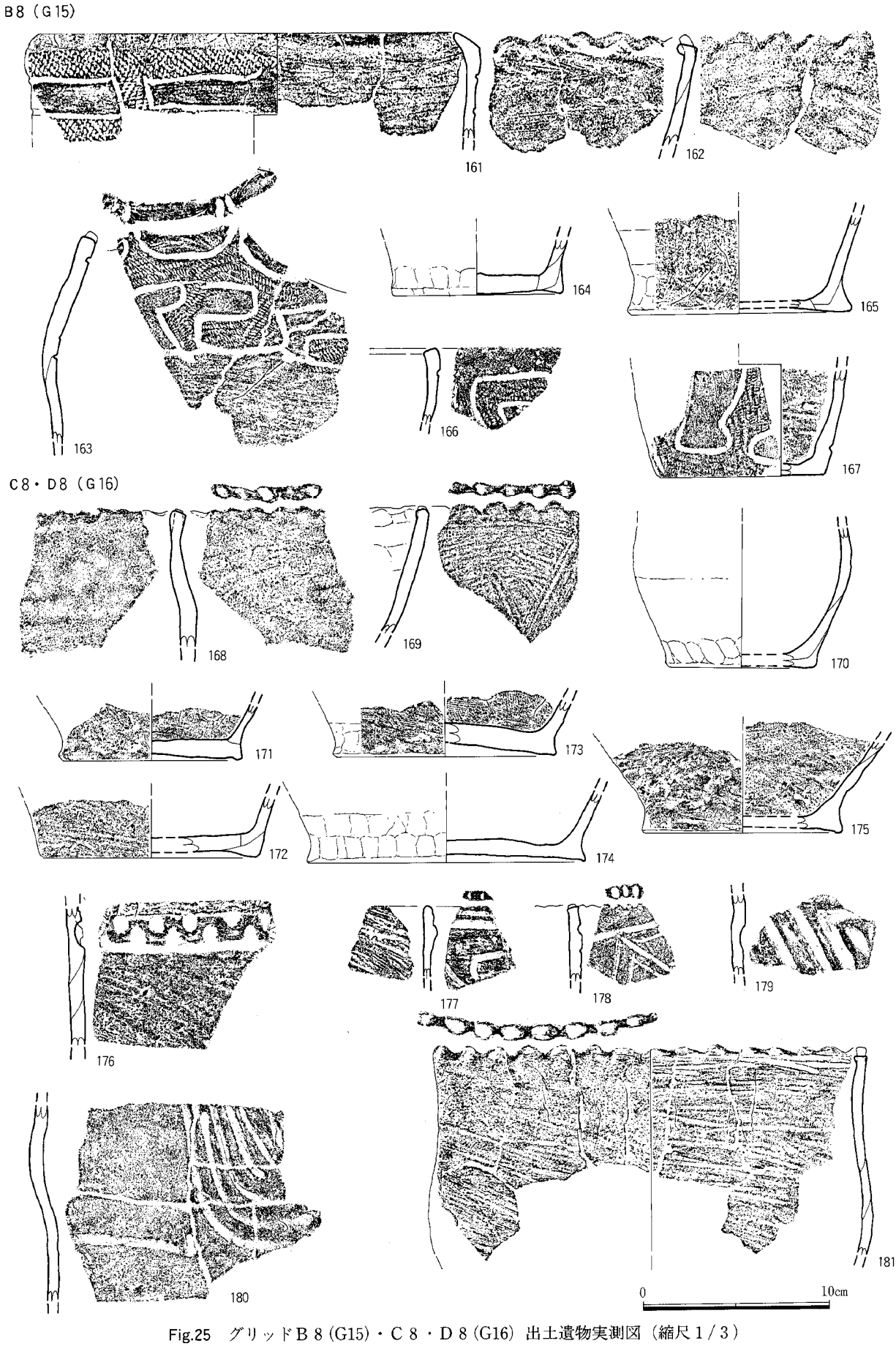


Fig.25　グリッドB８(G15)・C８・D８(G16) 出土遺物実測図（縮尺１/３）

Ｃ６（Ｇ４）出土遺物（Fig.21）

89・92は第Ⅰ層出土。89・92の口唇部には刻目がある。89は補修孔を有している。92の外面上位には３列の列点文がある。外面は貝殻条痕で、内面は上位のみ施す。胎土に滑石を含まない。90・95は第Ⅱ層出土。90の外面上位は列点文、95の外面上位は直線の凹線文と列点文の組み合わせである。91・92・94・96～104は第Ⅲ層出土。94～99は阿高系土器である。94は波状口縁と考えられ、外面上位に孔列がある。下位は凹線文である。91・93の外面は列点文、98・99はタテ、ナナメ方向の凹線文、96は渦文、100は逆山形状の文様である。89・90・92・93・98・100は滑石を含まない。又、90・100は黒褐色を呈し、金雲母を含む。100～104は粗製土器で、101・102の口唇部は刻目をもつ。101の内外面は貝殻条痕である。

Ｂ６（Ｇ３）出土遺物（Fig.21・22）

106～111は第Ⅱ層出土である。106～108は粗製土器で、口唇部に刻目を有している。106の口縁部は内弯しており、口唇部の刻目は小さい。107は内外面を、108は外面に貝殻条痕を施す。109・110は阿高系土器である。口唇部には刻目を有し、外面は指押しの楕円形を呈した列点文を２重に施す。色調は109が暗褐色、110が黄灰色で、胎土には滑石を含まない。111は磨消縄文土器で、内面はヘラミガキである。112～123は第Ⅲ層出土。112～116、118・119は阿高系土器である。112は口唇部に刻目をもち、外面は列点文を、113～116は凹線文を用い、ヨコ直線、ナナメ直線、渦文を描く。胎土には滑石を多く含む。118・119は沈線を用いて、重圏の三角文や直線文を描いている。胎土の滑石は少ない。117は磨消縄文土器で、巻貝のフトヘナタリを用いた擬縄文を施している。胎土には金雲母・微砂を含む。121～123は粗製土器の底部で、内外面及び外底部に２枚貝の条痕が残る。120は第Ⅲ層出土であ

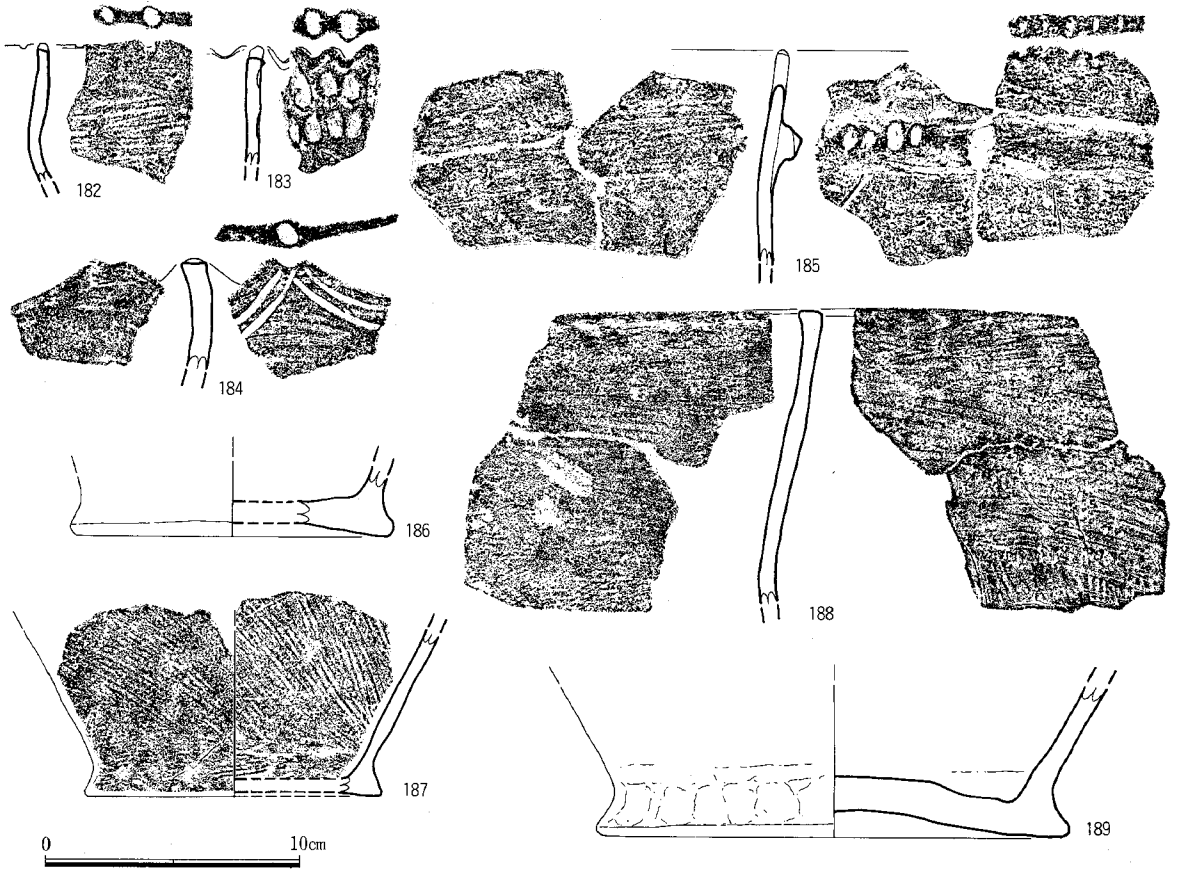


Fig.26　グリッドＣ９・Ｄ９(G18) 出土遺物実測図（縮尺１/３）

る。阿高系土器で、口縁部を内傾させて肩部を形成している。外面は口縁部と頸部に刻目取帯を設け、又、この間を渡すように幅3.5～5㎝の橋状取手を4ヶ所に付けている。

C7・D7（G2）出土遺物（Fig.23・24）

125～127は第Ⅰ層出土。いずれも粗製土器で、125・126の口唇部には刻み目を施す。127は上げ底で、外底端部は張り出す。128・131は第Ⅱ層出土。いずれも阿高系土器で、128は山形口縁部で、口縁部外面上位に渦文、又は弧文を組み合わせた凹線文を施す。131の外面にはタテ方向の凹線文がある。胎土は131は滑石が少なく、金雲母を含んでいる。129・130・132～140は第Ⅲ層出土である。132・134・135は阿高系土器で、132の口唇部は刻み目を持ち、外面には楕円形の列点文、その下位には逆山形の凹線文を施す。135の外面には斜行する浅い凹線文がある。いずれも胎土は滑石を多く含む。133・134は外面にヘラによる斜行する沈線文を施すが、134は巻貝によるものと思われる。133は二枚貝の貝殻条痕を施す。136～139は粗製土器で、口唇部に刻み目をもつ。141・143～149は出土層位が不明である。146～148は瀬戸内系の磨消縄文土器で、フトヘナタリを用いた擬縄文を施す。精製土器である。147・148は同一個体と考えられる。143～145は阿高系土器である。143は沈線文を、143・145は凹線文である。145はヨコ直線、短直線・列点文の組合せで、143は斜行直線文である。胎土は143は滑石を含んでおらず、粗砂が多い。143は金雲母を含む。145は滑石を多く含む。

B7（G1）出土遺物（Fig.24）

151・152は第Ⅰ層出土。153・155・156は第Ⅱ層出土、150・154・157・159・160は第Ⅲ層出土。158は地山面直上出土。151・152は阿高系土器で、タテ方向もしくは逆山形状に斜行する沈線を胴部に施している。沈線幅は0.4㎝である。153・156・160は阿高系土器で、153の口縁部外面には楕円形の列点文を施す。胎土には滑石が少ない。山形の口縁部外面上位にはヨコ方向の沈線を施し、この間にタテ方向の短い沈線を施し、その横にC字文と凹点がある。どちらも口唇部に刻み目がある。160は上げ底で、内外面ナデ調整である。155は瀬戸内系土器である。山形口縁の外面に口縁部に沿って2重の細い沈線を施し、その上位の沈線は交差させている。磨消縄文土器である。157は波状口縁と考えられ、フトヘナタリの擬縄文の磨消縄文土器である。155・157は中津式土器である。150は粗製土器で、内面はヨコ方向、外面はタテ方向の貝殻条痕を施す。口唇部に刻み目がある。154は口唇部に刻み目があり、外面には口縁直下に楕円形の列点文を施す。その下には斜行する沈線を有している。滑石を余り含まない。159は粗製土器の底部で、底部端部が大きく張り出す。外面は貝殻条痕である。胎土には滑石を多く含む。158はフトヘナタリの擬縄文の磨消縄文土器である。

B8（G15）出土遺物（Fig.25）

161・165は第Ⅰ層出土。164は第Ⅲ層出土。162・163は地山面直上出土である。161は第Ⅲ層出土の破片と接合した。口縁部外面を玉縁状に肥厚させており、外面に磨消縄文を施す。内面はヘラミガキである。163は波状口縁で、外面に巻貝による擬縄文を施した磨消縄文土器である。口縁部外面は、口唇部に沿って連弧文の沈線を施す。162・164・165は粗製土器で、162の口唇部には刻目がある。

C8・D8（G16）出土遺物（Fig.25）

166～175は第Ⅰ層出土である。166・167は瀬戸内系土器で、外面に磨消縄文を施す。ヘナタリの擬縄文である。168～175は粗製土器で、168・169の口唇部には刻目がある。169・172の外面、173・175の内外面には貝殻条痕がある。176～181は第Ⅲ層出土。176～180は阿高系土器である。176は外面に楕円形の列点文とヨコ凹線を施す。177・179は凹線文、178・180は沈線文で、178は山形状を呈する。177・178の口唇部は刻目がある。

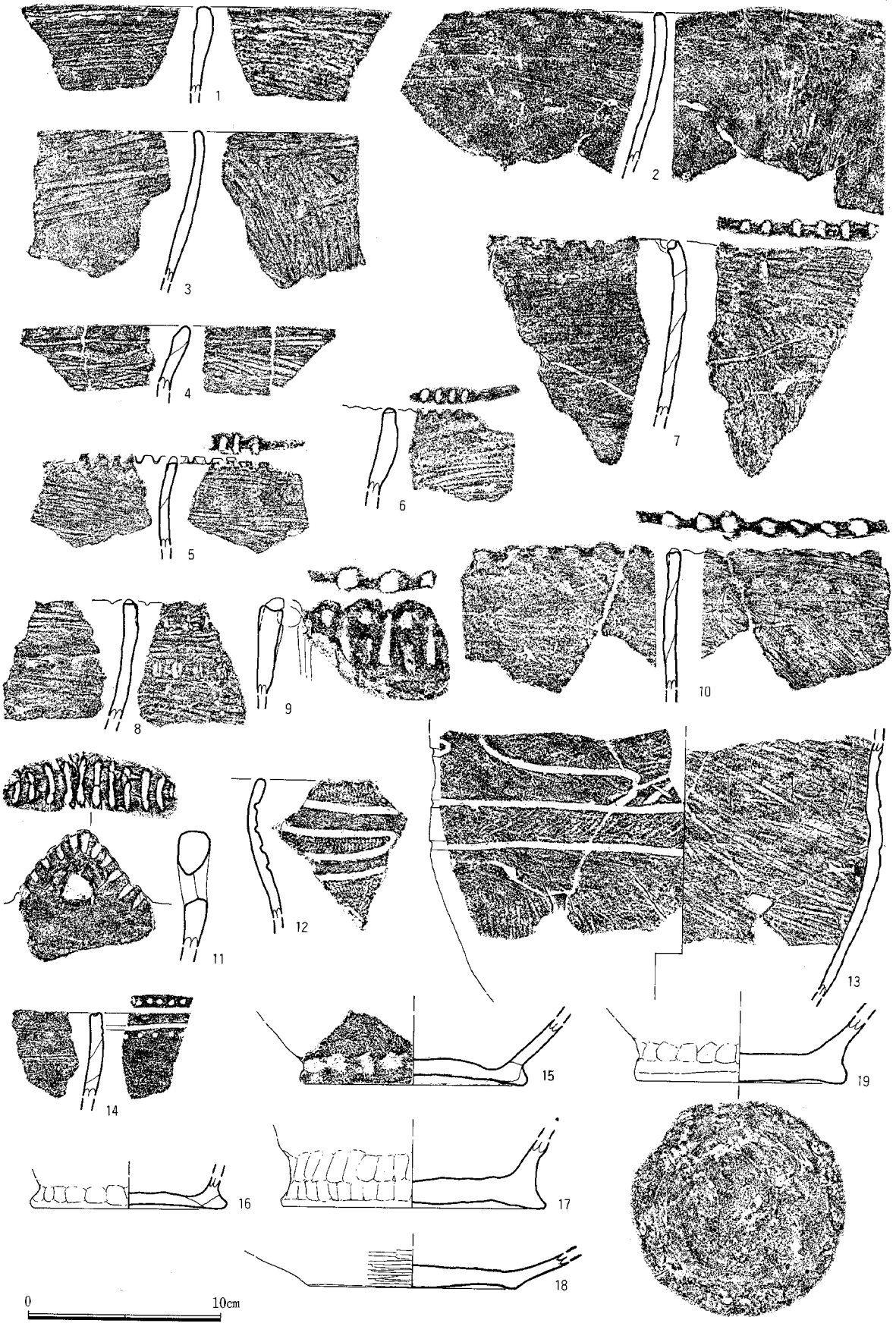


Fig.27　貝層内出土遺物実測図（縮尺１/３）　（Ⅰ区貝層上面　1～4・6・8・10・16
Ⅲ区貝層上面　5・7・9・19・18
貝層内　11～15　Ⅰ区貝層内19）

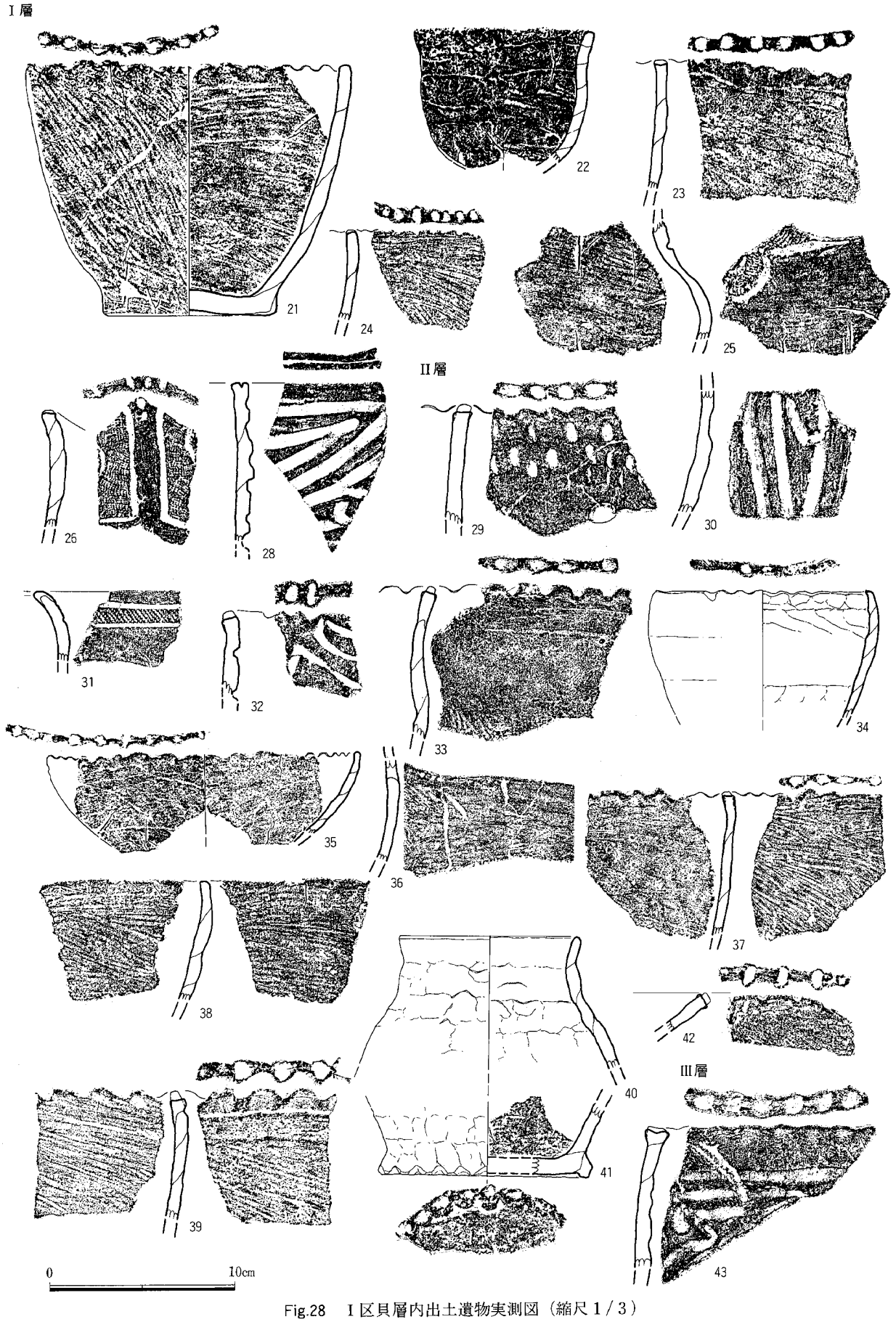


Fig.28　I区貝層内出土遺物実測図（縮尺１/３）

Aトレンチ

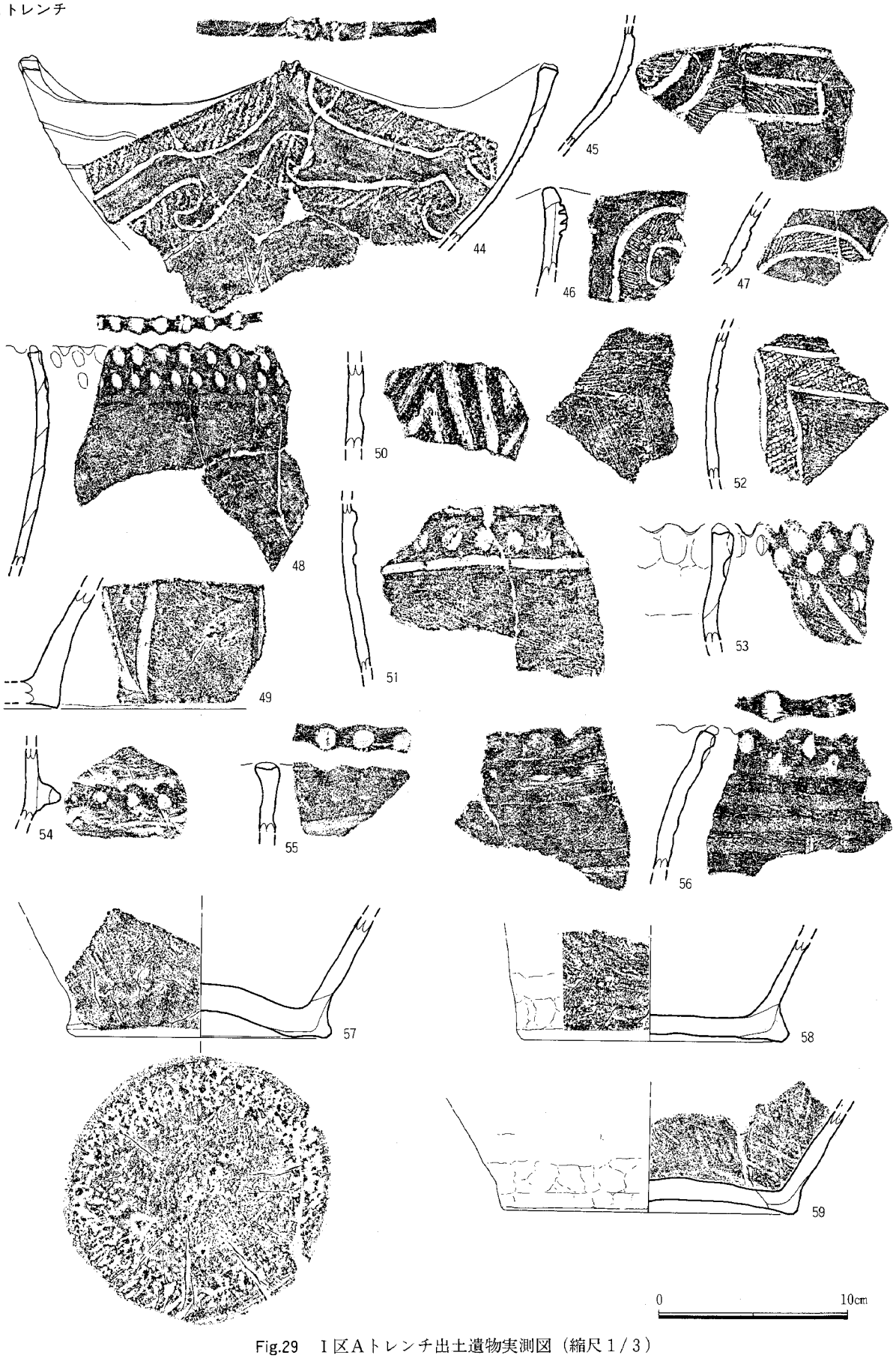


Fig.29　Ⅰ区Aトレンチ出土遺物実測図（縮尺1/3）

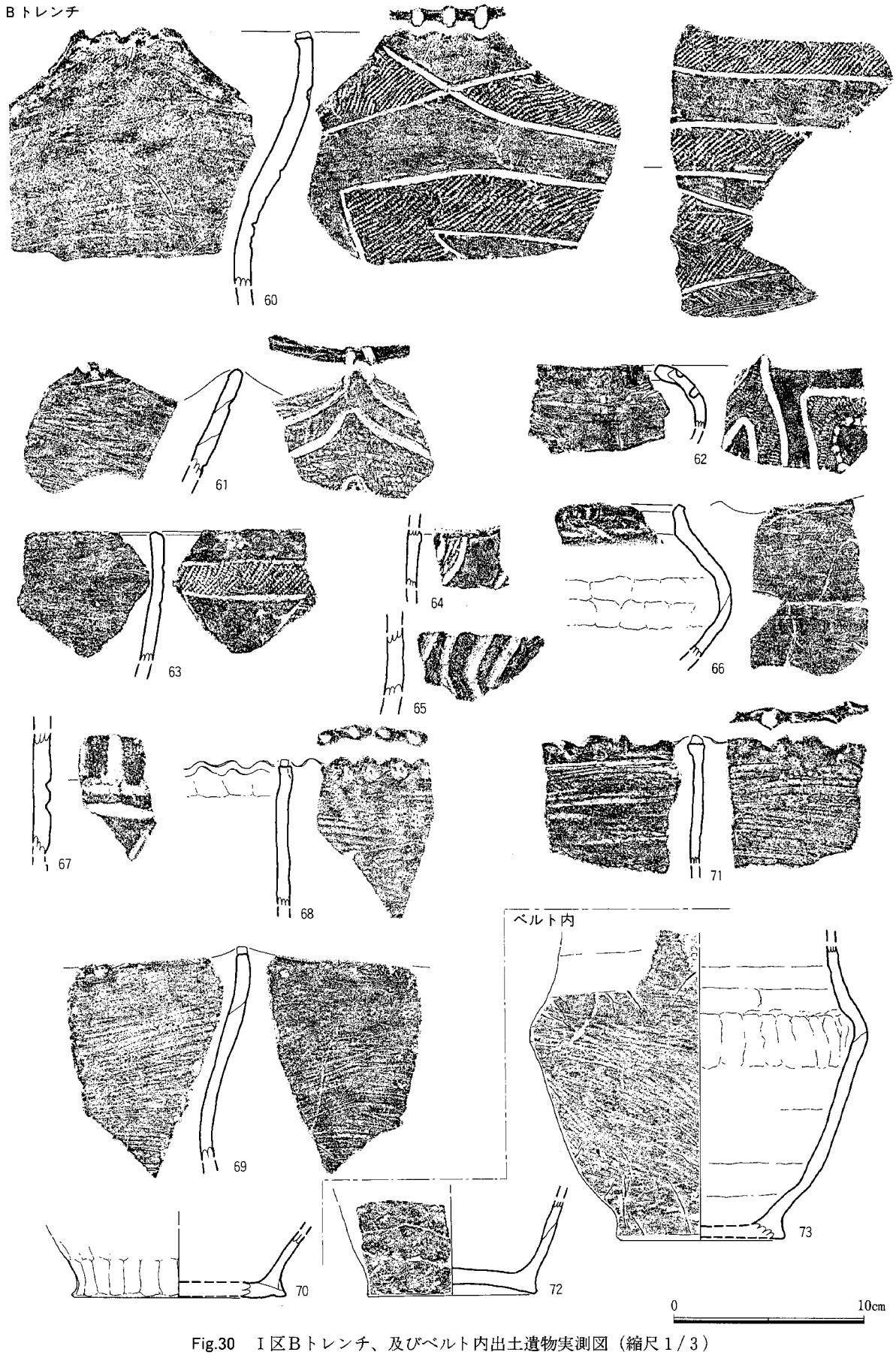


Fig.30　Ⅰ区Bトレンチ、及びベルト内出土遺物実測図（縮尺1/3）

Tab. Ⅰ　桑原飛櫛貝塚出土土器一覧表

挿図番号	遺物番号	登録番号	地区	出土層名	種　類	器種	計測値(cm)	内面調整及び文様	外面調整及び文様	形態の特徴・部位	色調・素地等	備考
14	1	00671	II	SR01	精製土器	鉢		ナデ	渦状の沈線文	波状又は、山形口縁	砂粒を含む。硬質焼成。灰黄色	黒班。阿高系
14	2	00672	II	SR01	粗製土器	深鉢	底径13.9	条痕ナデ消し	タテ方向の条痕。底部端部はヨコナデ。底部はナデ	底部片。平底。	カルシウム付着、暗黄灰色	
14	3	04502	I	SR02	粗製土器	深鉢	(底径14)	ヨコ方向のナデ	ナデ。底部はナデ	底部片。平底。底部端部に刻目。	金雲母、砂粒を含む。内外面は灰褐色。	
14	4	04501	I	SR02	粗製土器	深鉢	(底径14)	ヨコ方向の条痕。底部はナデ	タテ方向の条痕。底部端部はヨコナデ。底部はナデ。	底部片	貝殻粒を多く含む。褐色	
15	1	03303	I	B 2 第Ⅰ層	精製土器	深鉢	(底径8.8)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丸味を帯びた体部。	1～2㎜の砂粒を含む。暗い褐色。	Fig.9-3
15	2	03302	I	B 2 第Ⅰ層	粗製土器	深鉢	底径13	条痕。底部は条痕ナデ消し	タテ方向の条痕。端部に刻み状の押圧痕	底部片。上げ底	砂粒を多く含む。外面赤橙色、内面灰褐色。	二次火 Fig.9-4
15	3	03301	I	B 2 第Ⅰ層	粗製土器	深鉢	底径14.8	ヨコ方向の条痕。底部は条痕。	条痕。下部は指頭圧痕。ナデ	底部片。	2～3㎜の砂粒を多く含む。金雲母を含む。褐色	
15	4	03316	I	B 2 第II層	粗製土器	鉢	底径13.4	条痕。底部はナデ。	条痕。底部端部は指頭圧痕。底部はナデ。	底部片。平底。	砂粒を含む。暗灰褐色。	
15	5	03324	I	B 2 第II層	粗製土器	深鉢	口径18.3	ヨコケズリ後ナデ。下部は条痕。	タテヨコ条痕。下部はタテ方向条痕。	胴部片。体部と口縁部くの字状に屈折	砂粒を多く含む。灰黒色。	
15	6	03313	I	B 2 第II層	粗製土器	深鉢		ヘラミガキ	磨消縄文。沈線	口唇部に刻目	微砂を含む。外面は灰褐色、内面は黒灰色。	二次火 中津式
15	7	03321	I	B 2 第II層	粗製土器	鉢		ナデ	凹線文	やや内弯する口縁部片	砂粒を含む。暗茶褐色。	煤付着 中津式
15	8	03327	I	B 2 第II層	精製土器	深鉢		ナデ。指頭圧痕。	凹線文	胴部片	砂粒、金雲母を多く含む。灰茶色。	二次火 煤付着 中津式
15	9	03322	I	B 2 第II層	精製土器	深鉢		ナデ	磨消縄文、沈線	口縁部片	微砂含む。灰褐色。	中津式
15	10	03314	I	B 2 第II層	精製土器	深鉢		条痕後ナデ	磨消縄文、沈線	胴部片	微砂を含む。硬質焼成。茶褐色。	中津式
15	11	03325	I	B 2 第II層	精製土器	深鉢		丁寧なミガキ	磨消縄文、沈線	胴部片	微砂を含む。灰黒色。	中津式
15	12	03326	I	B 2 第II層	精製土器	深鉢		ナデ	磨消縄文、ミガキ沈線	胴部片	微砂含む。黒灰色。	中津式 Fig.9-2
15	13	03312	I	B 2 第II層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向ナデ	列点文と沈線	口唇部に斜め方向の刻み	砂粒を多く含む。茶褐色。	阿高系
15	14	03227	I	B 2 第II層	精製土器	深鉢		ヨコナデ	ミガキと凹線渦文	胴部片	滑石多い。灰褐色。	煤付着 二次火 阿高系
15	15	03315	I	B 2 第II層	粗製土器	深鉢	(底径11.8)	ナデ	ヨコナデ。底部端部に刻目。底部は条痕。	底部片	砂粒を多く含む。暗灰色。	
15	16	03323	I	B 2 第II層	粗製土器	深鉢	(底径15)	条痕	体部はヨコ方向条痕の後ナデ。底部はナデ。	底部片。上げ底。	砂粒を含む。茶褐色	二次火
16	17	03202	I	C 3 第Ⅰ層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向のナデ	ナデ	口唇部に刻目	砂粒を含む。金雲母を含む。灰黄色	
16	18	03201	I	C 3 第Ⅰ層	粗製土器	深鉢		条痕	フトヘナタリ条痕	口唇部に刻目	砂粒を含む。外面は黒褐色、内面は褐色	二次火
16	19	03228	I	C 3 第II層	粗製土器	深鉢		丁寧なナデ	渦文	口唇部に刺突文。押し引き状の竹管文	滑石を多く含む。黒色	並木式風化している
16	20	03226	I	C 3 第II層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向ナデ	爪形状楕円形列点文。短直線の凹線文	口縁外面に刻目	滑石を多く含む。外面は黒褐色、内面は灰褐色。	阿高系
16	21	03224	I	C 3 第II層	精製土器	深鉢		ヘラミガキ	フトヘナタリ条痕。ヘラミガキ。磨消縄文	波状口縁	砂粒を含む。黒褐色。カーボンのすり込みか。	中津式か？
16	22	03225	I	C 3 第II層	粗製土器	深鉢		ナデ	ナデ	外面に刻目をもった隆帯文。波状口縁。波頂部に3ケ所の刻目	砂粒を含む。金雲母を含む。淡灰褐色。	轟式？ 煤付着
16	23	03222	I	C 3 第II層	精製土器	鉢		ヨコ方向の条痕	貝の腹縁による沈線文	口唇部に刻目。体部は球体。	滑石を多く含む。褐色粒子。暗赤褐色。	阿高系 Fig.9-3
16	24	03221	I	C 3 第II層	粗製土器	小型鉢	口径13 器高7.4	ユビナデ	ナデ	波状口縁。口唇部に刻目。やや上げ底。	砂粒を多く含む。金雲母を多く含む。黄灰色。	Fig.9-2
16	25	03229	I	C 3 第II層	粗製土器	深鉢		ユビナデ	ユビナデ	口唇部に刻目。	砂粒を多く含む。金雲母を含む。灰黄色	
16	26	03223	I	C 3 第II層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕	ヨコ方向の条痕	口縁部片。やや外に広がる。	砂粒を含む。金雲母を含む。外面は灰褐色、内面は灰色。	
16	27	04067	I	C4とC3のベルト第III層	粗製土器	深鉢		条痕	ヨコ方向条痕	口唇部に刻目	微砂、金雲母を含む。赤褐色。一部黒変。	
16	28	03126	I	B 3 第II層	精製土器	深鉢		斜め方向の条痕	ヘラミガキ。磨消縄文。渦文	胴部片	砂粒を多く含む。褐色。	中津式
16	29	03124	I	B 3 第II層	粗製土器	深鉢	(口径10.2)	ナデ	磨消縄文。ヘナタリ条痕。口縁部直下に沈線	外反する口縁部。	砂粒を多く含む。硬質焼成	3128と同一Fig.9-8
17	30	03127	I	B 3 第II層	精製土器	深鉢		ミガキ。口縁に赤色顔料	口縁部は研磨。縄文。沈線	波状口縁。口縁部内傾	砂粒を含む。黒灰色	中津式
17	31	03103	I	B 3 第II層	精製土器	深鉢		ヨコナデ	研磨。沈線。縄文	口縁部片	暗赤褐色	中津式
17	32	03125	I	B 3 第II層	粗製土器	深鉢		ナデ	ナデ	波状口縁部。タテ方向に2重の隆帯文、刻目	砂粒を多く含む。暗褐色、黒変	二次火 中津式

※Ⅰ～Ⅲは発掘調査時の便宜的な層で土層図には対応していない。

挿図番号	遺物番号	登録番号	地区	出土層名	種　類	器種	計測値(cm)	内面調整及び文様	外面調整及び文様	形態の特徴・部位	色調・素地等	備考
17	33	03122	I	B 3 第II層	精製土器	深鉢		フトヘナタリ条痕	磨消縄文。フトヘナタリ条痕。ナデ。沈線	波状口縁。口唇部に刻目	砂粒を多く含む。粗い。暗い褐色	中津式
17	34	03123	I	B 3 第II層	粗製土器	深鉢	(口径28.8)	不整方向の条痕	ヨコタテ方向の条痕	口唇部に刻目	2～3㎜の砂粒を含む。やや暗い黄灰色	Fig.9-10
17	35	03121	I	B 3 第II層	粗製土器	深鉢	(底径10現存高13.4)	タテ方向の条痕	タテ方向の条痕。底部はナデ	底部片。平底。胴部が膨らむ。	2～3㎜の砂粒を含む。暗い黄灰色	Fig.9-4
17	36	03141	I	B 3 第III層上	粗製土器	深鉢		ヨコ方向のナデ	ナデ	口唇部に刻目	滑石を多く含む。褐色	Fig.9-1
17	37	03142	I	B 3 第III層上	粗製土器	深鉢		ヨコ方向のナデ	短直線の凹線文、連点文	胴部片。穿孔	滑石を多く含む。灰褐色	阿高系 Fig.9-2
17	38	03128	I	B 3 第I層	精製土器	深鉢		丁寧なナデ	磨消縄文	胴部片	微砂を含む。灰黄色	瀬戸内系
17	39	03101	I	B 3 第I層	精製土器	深鉢		研磨	磨消縄文。フトヘナタリ条痕。研磨。沈線	胴部片	微砂を含む。灰黄色	瀬戸内系
17	40	03002	I	C 4	精製土器	深鉢		貝殻条痕	磨消縄文	胴部片	微砂を含む。灰黒色	中津式
17	41	03001	I	C 4	粗製土器	深鉢		口縁部指頭圧痕。ナデ	条痕ナデ消し	口唇部に刻目。口縁部肥厚。	金雲母を含む。砂粒を含む。暗茶褐色	
17	42	04063	I	C 5とC 4 ベルト第I層	精製土器	深鉢		ナデ	爪形状列点文	口唇部に刻目	滑石は少ない。赤褐色	
18	43	03048-1	I	C 4 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕	爪形状楕円形列点文。沈線。	口唇部に刻目。体部に焼成後の穴	滑石は多く含まれる。外面は黒褐色、内面は茶褐色	阿高系 3048-2と同一
18	44	03048-2	I	C 4 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕	爪形状楕円形列点文	口唇部に刻目	滑石は多く含まれる。外面は黒褐色、内面は茶褐色	3048-1と同一
18	45	03049	I	C 4 第III層	粗製土器	深鉢		条痕後ヨコナデ	ヨコナデ、凹線文	胸部片	貝粒子を多く含む。黄褐色	阿高系
18	46	03045	I	C 4 第III層	精製土器	深鉢	(底径15)	ヨコナデ	凹線文。	底部片。上げ底	滑石は多い。褐色。	阿高系
18	47	03050	I	C 4 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向条痕	条痕の後爪形状列点文	胴部片	金雲母、砂粒を含む。暗褐色	阿高系
18	48	03047	I	C 4 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	浅い爪形状列点文	口唇部に刻目	滑石は少ない。暗褐色	阿高系
18	49	03051	I	C 4 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕	ヨコ方向の条痕 3条のヨコ沈線	口縁部肥厚	砂流の含む 赤橙色	二次火 石灰付着 Fig.9-2
18	50	03046	I	C 4 第III層	精製土器	深鉢		口縁部ヨコナデ条痕	磨消縄文、縄文(RL)。沈線	口縁部片	砂流を含む。金雲母を少し含む。黄灰色	中津式
18	51	03043	I	C 4 第III層	粗製土器	鉢	(底径10)	タテ、ヨコ方向の条痕、ナデ	ヨコナデ	底部片	砂粒を含む。硬質焼成。茶褐色。	二次火
18	52	03044	I	C 4 第III層	精製土器	鉢	(口径18.5 器高11.5)	ヨコ方向のミガキ	ヨコ方向のミガキ	丸味を帯びた体部下部	赤褐色	黒斑 2861と同一か?
18	53	03042	I	C 4 第III層	粗製土器	深鉢	底径14.4	ナデ	ナデ。底部は鯨の脊椎の圧痕	底部片。平底	砂粒を含む。金雲母を少し含む。外面は赤橙色、内面は灰黄色	Fig.9-1
18	54	03041	I	C 4 第III層	粗製土器	深鉢	底径13.4	ヨコ方向の条痕、ナデ	条痕。底部は条痕。底部端部に指頭圧痕。	底部片	砂粒を多く含む。金雲母を少し含む。褐色	Fig.9-2
18	55	02943	I	B 4 第III層	粗製土器	深鉢		貝殻条痕。指頭圧痕。	爪形状列点文。凹線文	口唇部に刻目	滑石は多い。黒褐色	阿高系 Fig.9-8
18	56	02944	I	B 4 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	爪形状列点文	口唇部に刻目	砂粒、金雲母を含む。暗灰褐色	阿高系 Fig.9-9
18	57	02942	I	B 4 第III層	粗製土器	深鉢		指頭圧痕	爪形状列点文	口唇部に刻目	砂粒を含む。滑石は多い。粒子大。褐色	阿高系 Fig.9-6
18	58	02947	I	B 4 第III層	精製土器	深鉢		ヨコナデ	凹線文。入り組み状の渦文	胴部片	滑石は多い。暗い褐色。	阿高系
18	59	02945	I	B 4 第III層	粗製土器	深鉢		巻貝による条痕。沈線	巻貝による条痕。沈線	波状口縁	砂粒を含む。茶褐色粒子。褐色	二次火
19	60	02941	I	B 4 第III層	粗製土器	深鉢	(口径26)	口縁部指ナデ。ヨコ方向条痕ナデ消し	2列の竹管文。貝による沈線。複線の鋸歯文帯。タテ方向の条痕	口唇部に刻目	砂粒を含む。暗い灰黄色	阿高系 煤付着
19	61	02946	I	B 4 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕。指ナデ。	斜め方向条痕	口唇部に刻目	砂粒を含む。硬質焼成。外面黒褐色、内面明褐色	外面黒斑
19	62	02842	I	B 4 第III層	粗製土器	深鉢		ユビナデの後にヨコ方向貝殻条痕	ヘナタリ条痕	口唇部に刻目	砂粒を多く含む。硬質焼成。暗褐色	
19	63	02801	I	C 5 第I層	粗製土器	深鉢		条痕ナデ消し	口縁部指頭圧痕。ヨコナデ。爪形状列点文	口唇部に刻目	金雲母を含む。微砂。外面は黒色、内面は灰茶色	煤付着 阿高系
19	64	02844	I	C 5 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向ナデ	爪形状楕円形列点文	貼付溝状口縁。口縁部に刻目	滑石は少ない。滑らか。金雲母を含む。灰褐色	阿高系
19	65	02846	I	C 5 第III層	粗製土器	深鉢		口縁部指ナデ。	条痕及びナデ。爪形状楕円形列点文	口唇部に刻目	金雲母が多い砂粒。暗茶褐色	阿高系
19	66	02843	I	C 5 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	口縁部は指ナデ。凹線文。沈線は浅い。	口唇部に爪形文	滑石、貝殻粉末を含む。黄灰色	阿高系
19	67	02851	I	C 5 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向ナデ。	凹線文と刺突文	胴部片	滑石は多い。黒褐色	阿高系
19	68	02850	I	C 5 第III層	精製土器	深鉢		ヨコ方向ナデ	凹線文	胴部片	滑石、金雲母を含む。褐色	阿高系
19	69	02848	I	C 5 第III層	精製土器	深鉢	(口径28.3)	丁寧なナデ	磨消縄文。沈線	波状口縁	1㎜大の砂粒を多く含む。灰色(黒色)	煤付着 瀬戸内系

挿図番号	遺物番号	登録番号	地区	出土層名	種　類	器種	計測値(cm)	内面調整及び文様	外面調整及び文様	形態の特徴・部位	色調・素地等	備考
19	70	02841	Ⅰ	C 5 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢	(口径17)	口縁部は指ナデ。体部は条痕、ナデ消し。	口縁部は指頭圧痕。体部は巻貝条痕、ナデ。	口縁部緩く外反	砂粒を含む。硬質焼成。灰褐色。	二次火 Fig.9-8
19	71	02861	Ⅰ	C 5 第Ⅲ層	精製土器	鉢	(口径19.8)	ヨコ方向のヘラミガキ	ヨコ方向のヘラミガキ	丸味を帯びた体部。丸底。口縁部との境にくびれ。	黄灰色。焼けて荒れる	
20	72	02847	Ⅰ	C 5 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	ナデ	口唇部に刻目	金雲母を多く含む。滑石を少し含む。灰黄色	煤付着 Fig.9-2
20	73	02845	Ⅰ	C 5 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢		条痕。ユビナデ	条痕。ユビナデ	口唇部に刻目	長石粒を多く含む。硬質焼成。茶灰色	
20	74	02862	Ⅰ	C 5 北壁	粗製土器	深鉢	底径13	ヨコナデ	条痕。底部は条痕	底部片。体部は大きく広がる	滑石はなし。砂粒を多く含む。褐色。	煤付着
20	75	02849	Ⅰ	C 5 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢	(底径16)	条痕	斜め方向の条痕。底部はナデ	底部片。上げ底	砂粒を多く含む。金雲母、滑石粉末入りか。褐色	Fig.9-1
20	76	02731	Ⅰ	B 5 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	タテ方向、ヨコ方向の条痕	胴部片	砂粒を含む。褐色土灰黄色	二次火 Fig.9-1
20	77	02741	Ⅰ	B 5 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	浅い爪形状列点文	口唇部に刻目	金雲母を含む。微砂。やや暗い褐色	
20	78	02740	Ⅰ	B 5 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢		指ナデ	爪形状楕円形列点文	口唇部に刻目	金雲母を少し含む。砂粒を少し含む。暗灰黄色	
20	79	02739	Ⅰ	B 5 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢		口縁部指頭圧痕。ナデ	深い刺突文。爪形状楕円形列点文。ナデ	口縁片	滑石を多く含む。黒色	阿高系
20	80	02732	Ⅰ	B 5 第Ⅲ層上面	精製土器	深鉢		見込み部分は指ナデ	浅い凹線文(渦文)	底部片	滑石を多く含む。淡赤褐色	阿高系
20	81	02744	Ⅰ	B 5 第Ⅲ層	精製土器	深鉢		ヨコナデ	凹線文	胴部片	滑石を多く含む。暗い赤褐色	阿高系
20	82	02738	Ⅰ	B 5 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢		条痕	2条の山形隆帯文	口縁片	砂粒を含む。硬質焼成。灰褐色	
20	83	02742	Ⅰ	B 5 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕	浅い爪形状列点文。ヨコ方向条痕	口唇部に刻目	砂粒を含む。金雲母を含む。灰黒色。ベンガラ・スリップか	
20	84	02735	Ⅰ	B 5 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢	(底径13)	条痕	指ナデ。底部はナデと条痕	底部片。底部端部に刻目	砂粒を多く含む。灰黄色	Fig.9-6
20	85	02737	Ⅰ	B 5 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢	底径11.2	ヨコナデ	指ナデ。底部は指頭圧痕とナデ	底部片。底部端部に刻目	金雲母を含む。微砂を含む。暗褐色	丁寧な作り
21	86	02733	Ⅰ	B 5 第Ⅲ層上面	粗製土器	深鉢	底径12.5	不規則条痕	ヨコナデ。底部はナデ	底部片。上げ底	砂粒を多く含む。貝殻は少ない。褐色	Fig.9-1
21	87	02736	Ⅰ	B 5 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢	(底径13)	ヨコナデ。使用痕か	ナデ	底部片。平底	砂粒を多く含む。大粒子。外面は黒褐色、内面は灰黄色	
21	88	02734	Ⅰ	B 5 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢	底径13.5	ヨコ方向の条痕	タテ方向条痕をナデ消し	底部片。上げ底	滑石は粒子大で多く含む。暗い褐色	Fig.9-2
21	89	02602	Ⅰ	C 6 第Ⅰ層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	フトヘナタリ条痕	口唇部に刻目。体部に補修孔	砂粒、金雲母を含む。外面茶褐色、内面灰黒色	
21	90	02622	Ⅰ	C 6 第Ⅱ層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	爪形状列点文。	口唇部に刻目。	砂粒、金雲母を含む。滑石はなし。黒褐色	
21	91	02646	Ⅰ	C 6 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	列点文。指によるナデ	口唇部に刻目	滑石、金雲母を含む。黒褐色	
21	92	02601	Ⅰ	C 6 第Ⅰ層	粗製土器	深鉢		斜め方向にフトヘナタリ条痕	爪形状列点文。指頭圧痕。条痕。	口唇部に刻目。	滑石はなし。金雲母、粗砂を含む。灰褐色。	Fig. 9-15,16
21	93	02643	Ⅰ	C 6 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	爪形状列点文	口唇部に浅い刻目	滑石はなし。微砂、金雲母を少し含む。	Fig.9-9
21	94	02647	Ⅰ	C 6 第Ⅲ層	精製土器	深鉢		ナデ	凹線文	波状口縁。口縁部直下に穿孔が並ぶ	滑石を多く含む。褐灰色	阿高系
21	95	02623	Ⅰ	C 6 第Ⅱ層	粗製土器	深鉢		ナデ	凹線文。列点文	胴部片	滑石は少ない。金雲母を含む。	阿高系
21	96	02648	Ⅰ	C 6 第Ⅲ層	精製土器	深鉢		ヨコナデ	凹線文(渦文)	胴部片	滑石は少ない。灰褐色。	阿高系
21	97	02649	Ⅰ	C 6 第Ⅲ層	精製土器	深鉢		ヨコ方向のナデ	凹線文	胴部片	滑石を含む。粒子大。灰褐色	阿高系
21	98	02650	Ⅰ	C 6 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	爪形文。凹線文	胴部片	微砂、貝殻粉末を含む。滑石はなし。淡褐色。	阿高系
21	99	02651	Ⅰ	C 6 第Ⅲ層	精製土器	深鉢		丁寧なナデ	押引文。凹線文	胴部片	滑石を多く含む。灰褐色。	阿高系
21	100	02653	Ⅰ	C 6 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	逆山形状文	胴部片	金雲母、砂粒を多く含む。滑石はなし。黒褐色。	
21	101	02644	Ⅰ	C 6 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢		粗い条痕	条痕。ナデ	口唇部に刻目	貝殻粉末、砂粒を含む。暗黄色。	
21	102	02645	Ⅰ	C 6 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢		貝殻条痕。タテナデ	ナデ	口唇部に刻目。	金雲母を含む。灰黒色。	
21	103	02642	Ⅰ	C 6 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢	底径11.2	ヨコナデ	ヨコ方向のナデ。底部端部は指頭圧痕	底部片。平底	雲母を少し含む。褐色	
21	104	02641	Ⅰ	C 6 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢	(底径15)	指ナデ	ナデ	底部片。平底	滑石を含む。粒子大。灰白色。	Fig.9-14
20	105	02743	Ⅰ	C 5 第Ⅲ層	粗製土器	深鉢	(口径28)	口縁部指頭圧痕。ナデ	浅い爪形状列点文	波状口縁。口唇部に刻目。隆帯	砂粒を多く含む。灰黄色。	Fig.9-1
21	106	02526	Ⅰ	B 6 第Ⅱ層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向条痕	ヨコ方向条痕	口唇部に刻目。口縁部内弯	金雲母を少し含む。黒灰色	

挿図番号	遺物番号	登録番号	地区	出土層名	種　類	器種	計測値(cm)	内面調整及び文様	外面調整及び文様	形態の特徴・部位	色調・素地等	備考
21	107	02524	I	B 6 第II層	粗製土器	深鉢		貝による粗いケズリ	条痕。粗いナデ	口唇部に刻目	粗砂を含む。暗灰黄色	
21	108	02525	I	B 6 第II層	粗製土器	深鉢		口唇部は指頭圧痕。条痕ナデ消し	ヨコナデ。ヨコ方向の条痕	口唇部に刻目	砂粒を含む。金雲母を含む。暗茶灰色。	煤付着
22	109	02522	I	B 6 第II層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ。	爪形状列点文。沈線。	口唇部に刻目	滑石はない。貝殻粉末を多く含む。暗褐色	阿高系
22	110	02523	I	B 6 第II層	粗製土器	深鉢		指ナデ	爪形状列点文。ヨコナデ	口唇部に刻目。焼成後穿孔	褐色粒子、砂粒を含む。滑石を含まない。黄灰色	阿高系
22	111	02521	I	B 6 第II層	精製土器	深鉢		ヘラミガキ	磨消縄文(LR)。沈線	胴部片	微砂。灰褐色。	
22	112	02544	I	B 6 第III層	粗製土器	深鉢		丁寧なナデ	列点文	口唇部に刻目	滑石は少ない。金雲母は多く含む。砂粒含む。灰褐色。	阿高系
22	113	02545	I	B 6 第III層	精製土器	深鉢		指ナデ	凹線文	口縁～胴部片	滑石は多い。金雲母、貝殻粉末を含む。粗砂。灰褐色。	阿高系 Fig.9-12
22	114	02546	I	B 6 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	凹線文	胴部片	滑石は多い。金雲母は多く含む。微砂。灰褐色。	阿高系 Fig. 9-4,5
22	115	02548	I	B 6 第III層	精製土器	深鉢		ヨコナデ	凹線文	胴部片	滑石は多い。金雲母は多く含む。微砂。灰褐色。	阿高系
22	116	02547	I	B 6 第III層	精製土器	深鉢		丁寧なナデ	凹線文	口縁部片	滑石を多く含む。灰褐色	阿高系
22	117	02551	I	B 6 第III層	精製土器	深鉢		指ナデ	フトヘナタリ擬縄文	胴部片	微砂を含む。金雲母を含む。暗黄灰色	中津式
22	118	02552	I	B 6 第III層	精製土器	深鉢		丁寧なナデ	沈線文	胴部片	微砂を含む。滑石は少ない。褐色	阿高系
22	119	02553	I	B 6 第III層	精製土器	深鉢		ヨコナデ	沈線文、刺突文	胴部片	微砂を含む。滑石は少ない。褐色	阿高系
22	120	02550	I	B 6 第III層	粗製土器	深鉢	口径27	ヨコ・ナナメ方向の条痕	ヨコ方向の条痕	肩部に刻目突帯。橋状把手6個。口縁橋部に刻目。	滑石を少し含む。茶褐色	阿高系 Fig.9 一括
22	121	02541	I	B 6 第III層	粗製土器	深鉢	底径14.4	二枚貝条痕	二枚貝条痕。底部端部は条痕ナデ消し。	体部～底部片	砂粒を含む。暗黄灰色	Fig. 9-9,10
22	122	02542	I	B 6 第III層	粗製土器	深鉢	底径13	二枚貝条痕	二枚貝条痕。底部端部は面取りケズリ。	底部片	粗砂を含む。外面は暗灰色。内面は茶灰色	Fig.9-1
22	123	02543	I	B 6 第III層	粗製土器	深鉢	(底径10.9)	二枚貝条痕	底部端部に指頭圧痕。二枚貝条痕	底部片	金雲母を少し含む。黄灰色	Fig.9-3
22	124	04057	I	B 6 と B 5 のベルト	粗製土器	深鉢		ナデ	ヨコナデ、爪形状列点文	口唇部に浅い刻目	砂粒を多く含む。	
23	125	02401	I	C 7 第 I 層	粗製土器	深鉢		指ナデ	条痕	口唇部に刻目	粗砂を含む。灰黄色	
23	126	02402	I	C 7 第 I 層	粗製土器	深鉢		条痕ナデ消し	粗い調整	口唇部に刻目	粗砂が多い淡褐色。	
23	127	02403	I	C 7 第 I 層	粗製土器	深鉢	底径11.6	条痕	ナデ。底部端部圧痕。底部はナデ。	底部片。上げ底。外底端部張り出す。	滑石はなし。粗砂を多く含む。淡茶褐色。	
23	128	02412	I	C 7 第II層	精製土器	深鉢		丁寧なナデ	凹線文。ナデ	山形口縁。口縁上に刻目。	滑石を含む。内外面は褐色。	阿高系
23	129	02454	I	C 7 第III層	粗製土器	深鉢		指ナデ	爪形状列点文	口唇部に刻目	滑石を多く含む。暗褐色。	
23	130	2447	I	C 7 第III層	精製土器	深鉢		ヨコナデ	凹線文、沈線	口唇部に刻目	滑石を多く含む。灰茶褐色。	阿高系
23	131	02413	I	C 7 第II層	精製土器	深鉢		ヨコナデ	凹線文	胴部片	滑石を少し含む。金雲母を含む。茶褐色。	阿高系
23	132	02442	I	C 7 第III層	精製土器	深鉢		指頭圧痕	爪形状列点文、凹線文	口唇部に刻目	滑石を多く含む。暗茶色。	阿高系
23	133	2441	I	C 7 第III層	粗製土器	深鉢		条痕	タテ方向の二枚貝条痕。沈線文		砂粒を含む。砂粒大。淡灰褐色	
23	134	02443	I	C 7 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向のナデ	タテ方向の巻貝条痕。沈線	胴部片	滑石はなし。茶褐色	阿高系 Fig.9-1
23	135	02444	I	C 7 第III層	精製土器	深鉢		丁寧なナデ	タテ方向の凹線文	胴部片	滑石を多く含む。暗褐色。	阿高系 Fig.9-2
23	136	02445	I	C 7 第III層	粗製土器	深鉢		粗いナデ	粗いナデ。指圧痕残る。	口唇部に刻目	砂粒を多く含む。茶褐色	
23	137	02451	I	C 7 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	ナデ	口唇部に刻目	粗い砂粒を含む。滑石はなし。暗黄灰色。	
23	138	02446	I	C 7 第III層	粗製土器	深鉢		条痕ナデ消し	ナデ	口唇部に刻目	滑石を多く含む。灰茶褐色	阿高系 Fig.9-3
23	139	02450	I	C 7 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向のナデ	条痕ナデ消し	口唇部に刻目	微砂を含む。灰褐色	
23	140	02449	I	C 7 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	条痕ナデ消し	口唇部に刻目	粗砂を含む。黒灰色	
23	141	04051	I	C 7 と C 6 のベルト	粗製土器	鉢	(底径10)	ナデ	条痕	底部片。上げ底。	金雲母、砂粒を多く含む。灰白色。	
24	142	02452	I	C 7 第III層	精製土器	深鉢		ヨコナデ	タテ条痕の後ナデ。沈線	口唇部に刻目	滑石を多く含む。灰褐色。	阿高系
24	143	02455	I	C 7 北壁	精製土器	深鉢		ヨコナデ	凹線文	口縁片	粗い砂粒を含む。滑石はなし。暗褐色	阿高系

挿図番号	遺物番号	登録番号	地区	出土層名	種　類	器種	計測値(cm)	内面調整及び文様	外面調整及び文様	形態の特徴・部位	色調・素地等	備考
24	144	02457	I	C 7 北壁	精製土器	深鉢		ヨコナデ	凹線文	胴部片	金雲母を含む。灰色。	阿高系
24	145	02456	I	C 7 北壁	精製土器	深鉢		丁寧なナデ	凹線文	胴部片	滑石を多く含む。灰褐色。	阿高系
24	146	02415	I	C 7 貝層	精製土器	深鉢		ヨコ方向ミガキ	磨消縄文。フトヘナタリ擬縄文	胴部片	砂粒を含む。暗褐色	中津式
24	147	02416	I	C 7 貝層	精製土器	深鉢		ヨコ方向ミガキ	磨消縄文。フトヘナタリ	胴部片	砂粒を含む。淡褐色	中津式
24	148	02414	I	C 7 貝層	精製土器	深鉢		ヨコ方向ミガキ	磨消縄文。フトヘナタリ擬縄文	胴部片	砂粒を含む。暗褐色	中津式
24	149	02453	I	C 7 北壁	粗製土器	深鉢	底径11.8	ヨコナデ	ナデ。底部外面ナデ	底部片。やや上げ底。	貝殻粉末を含む。灰褐色	
24	150	02342	I	B 7 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕ナデ消し	斜め方向の二枚貝条痕	口唇部に刻目	砂粒を含む。粗い灰黒色。	
24	151	02302	I	B 7 第 I 層	精製土器	深鉢		ヨコナデ	凹線文	胴部片	滑石は少ない。茶褐色。	阿高系
24	152	02301	I	B 7 第 I 層	精製土器	深鉢		ヨコ方向のナデ	凹線文	胴部片	滑石は少ない。茶褐色。	阿高系
24	153	02344	I	B 7 第II層	精製土器	深鉢		ヨコ方向のナデ	爪形文	口唇部に刻目	滑石を多く含む。茶褐色。	阿高系
24	154	02343	I	B 7 第III層	粗製土器	深鉢		指ナデ	爪形文	口唇部に刻目	砂粒を含む。滑石を含まない。茶褐色。	
24	155	02322	I	B 7 第II層	精製土器	深鉢		ヨコ方向のナデ	磨消縄文と沈線。縄文(LR)	波状口縁	滑石を含む。淡茶褐色。	中津式
24	156	02321	I	B 7 第II層	精製土器	深鉢		指頭圧痕	タテ・ヨコ方向の凹線文	口唇部に刻目	滑石を多く含む。淡茶灰褐色。	阿高系
24	157	02323	I	B 7 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕	磨消縄文。フトヘナタリ擬縄文と沈線	口縁端部研磨	砂粒を含む。茶褐色	中津式
24	158	02346	I	B 7 第IV層	精製土器	深鉢	口径10	ヨコ方向のナデ	磨消縄文。フトヘナタリ擬縄文と沈線文	口縁端部平坦	雲母と砂粒を含む。茶褐色。	Fig.9-1
24	159	02341	I	B 7 第III層	粗製土器	深鉢	(底径12.8)	ヨコ方向のナデ	斜め方向の巻貝条痕の後ナデ	底部片	雲母と砂粒を含む。茶褐色。	Fig.9-1
24	160	02347	I	B 7 第III層	粗製土器	深鉢	底径14.1	ヨコナデ	ヨコ方向のナデ	底部片。外面にクジラの脊椎痕。	滑石粉末を多く含む。小豆色。	阿高系
25	161	03701	III	B 8 第 I 層・B 7 第III層	精製土器	深鉢	(口径22.5)	ヘラミガキ	磨消縄文。沈線。ミガキ	口縁部内弯	微砂を多く含む。灰褐色。	
25	162	03712	III	B 8 第IV層	粗製土器	深鉢		条痕	条痕ナデ消し	口唇部に刻目	金雲母含む。褐灰色	
25	163	03713	III	B 8 第IV層	粗製土器	深鉢		粗い条痕	擬縄文。口縁部はナデ。条痕ナデ消し。	口唇部に刻目	砂粒を多く含む。黒灰色。	
25	164	03711	III	B 8 第III層	粗製土器	深鉢	(底径15.4)	ヘラナデ	底部端部に圧痕。ナデ。底部はナデ。	底部片	砂粒を多く含む。暗灰褐色。	石灰付着
25	165	03702	III	B 8 第 I 層	粗製土器	深鉢	(口径12.2)	ヨコナデ。見込み部は指頭圧痕。	タテ方向条痕。ユビナデ。底部はナデ	底部片	砂粒を含む。灰黄色。	石灰付着
25	166	03804	III	C 8 ・D 8 第 I 層	粗製土器	鉢		ナデ	磨消縄文。ヘナタリ。口縁部はヨコナデ	口縁部片	砂粒を多く含む。灰黒色。	瀬戸内系
25	167	03811	III	C 8 ・D 8 第 I 層	精製土器	深鉢	(底径の8.8)	ナデ	磨消縄文。ヘナタリ。ミガキ	底部片。平底。	砂粒を多く含む。灰黒色。	瀬戸内系二次火
25	168	03802	III	C 8 ・D 8 第 I 層	粗製土器	深鉢		ユビナデ	ナデ	口唇部に刻目	砂粒を多く含む。褐色	石灰付着
25	169	03801	III	C 8 ・D 8 第 I 層	粗製土器	鉢		ヨコナデ	不整方向の条痕	口唇部に刻目	微砂を多く含む。暗褐色。	
25	170	04056	I	C7とC8・D8のベルト第 I 層	粗製土器	鉢	(口径8.3)	ナデ	ナデ、一部ミガキ。底部端部に圧痕。	底部片。	微砂粒を含む。黒灰色。	外底石灰付着
25	171	03813	III	C 8 ・D 8 第 I 層	粗製土器	深鉢	(底径10)	条痕	条痕	底部片	貝粒粒子を多く含む。褐色。	
25	172	03812	III	C 8 ・D 8 第 I 層	粗製土器	深鉢	(底径12)	ナデ	ナデ。底部はナデ	底部片。やや上げ底。	砂粒を含む。褐色粒子を含む。褐色。二次黒変。	
25	173	03815	III	C 8 ・D 8 第 I 層	粗製土器	深鉢	(底径12.2)	条痕	条痕。底部端部に圧痕。	底部片。上げ底。	砂粒を多く含む。外面は黄灰色、内面は黒色。	
25	174	03816	III	C 8 ・D 8 第 I 層	粗製土器	深鉢	(底径15.2)	ユヒナデ、ナデ	ナデ	底部片	砂粒を多く含む。黄灰色。	
25	175	03814	III	C 8 ・D 8 第 I 層	粗製土器	深鉢	(底径11)	条痕	条痕。底部端部に圧痕跡。底部はナデ	底部片	貝殻粉末を含む。砂粒を含む。茶褐色。	二次火
25	176	03833	III	C 8 ・D 8 第III層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向のヘラナデ	沈線と爪形状列点文。斜め方向の条痕。	胴部片	滑石を多く含む。粒子は大きい。茶褐色。	阿高系煤付着
25	177	03835	III	C 8 ・D 8 第III層	粗製土器	深鉢		粗い条痕	ヨコナデ、凹線文	口唇部に刺突文	砂粒を多く含む。淡褐色。一部黒変。	阿高系
25	178	03803	III	C 8 ・D 8 第III層	粗製土器	深鉢		ナデ	沈線文	口唇部に刻目	砂粒を多く含む。灰黄色。	阿高系
25	179	03834	III	C 8 ・D 8 第III層	精製土器	深鉢		指頭圧痕	凹線文	胴部片	滑石を含む。粒子大。茶褐色。	阿高系
25	180	03832	III	C 8 ・D 8 第III層	粗製土器	深鉢		丁寧なユビナデ	ナデ、凹線文	胴部片	滑石を多く含む。粒子は大きい。暗灰褐色。	阿高系

挿図番号	遺物番号	登録番号	地区	出土層名	種　類	器種	計測値(cm)	内面調整及び文様	外面調整及び文様	形態の特徴・部位	色調・素地等	備考
25	181	03831	III	C 8 ・ D 8 第III層	粗製土器	鉢	(口径23.7)	ヨコ方向条痕	ヨコ方向条痕	口唇部に刻目	金雲母微粒子を多く含む。外面は暗褐色、内面は暗灰黄色。	Fig.9-3
26	182	04001	III	C 9 ・ D 9 第 I 層	粗製土器	深鉢		ナデ。口縁部は条痕。	ヨコ方向の条痕。口縁部は指頭圧痕。	口唇部に刻目	砂粒を含む。暗茶灰色。	
26	183	04003	III	C 9 ・ D 9 第 I 層	粗製土器	深鉢		ユビナデ	爪形状列点文	口唇部に刻目	砂粒を含む。貝殻粉末を含む。	石灰付着
26	184	04002	III	C 9 ・ D 9 第 I 層	精製土器	深鉢		ナデ	二枚貝による条痕。沈線。	波状口縁。口唇部に刻目	砂粒を含む。淡黒灰色。	
26	185	04022	III	C 9 ・ D 9 第III層	粗製土器	深鉢		条痕	条痕、ナデ	口縁部に突起。口唇部に刻目。外面に1条の刻目突帯。	砂粒を多く含む。金雲母を含む。灰褐色。	二次火 Fig.9-4
26	186	04011	III	C 9 ・ D 9 第II層	粗製土器	深鉢	(底径13)	ナデ	ヨコ方向の条痕。底部は条痕。	底部片。上げ底。	砂粒を多く含む。茶褐色。	石灰付着 Fig.9-1
26	187	04021	III	C 9 ・ D 9 第III層	粗製土器	深鉢	(底径11.9)	斜め方向条痕	斜め方向の条痕。底部端部は指頭圧痕。	底部片。平底。	微砂粒子を多く含む。赤橙色。	
26	188	04068	III	C8・D8とC9・D9のベルト第III層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕	ヨコ、タテ方向の条痕	口縁片。口縁端部は内側につまみ出す。	貝殻粉末を多く含む。茶褐色	
26	189	04023	III	C 9 ・ D 9 第III層	精製土器	深鉢	(底径19)	ナデ	底部端部は圧痕	底部片。上げ底。	滑石を多量に含む。赤褐色	阿高系
27	1	04205	I	貝層上面	粗製土器	深鉢		条痕	ヨコ方向の条痕	口縁片	微砂を多く含む。金雲母を少し含む。灰黄色。	
27	2	04201	I	貝層上面	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕。下部はヨコナデ	タテ方向の条痕。口唇部はタテ長の指圧痕	口唇部平坦	砂粒、金雲母を含む。淡黄褐色	Fig.9-9
27	3	04206	I	貝層上面	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕。下部はナデ	条痕	口縁片	微砂を含む。外面は暗い灰褐色、内面は灰褐色	
27	4	04202	I	貝層上面	粗製土器	深鉢		条痕	ヨコ方向の条痕	口縁片	砂粒を多く含む。外面は暗褐色。内面は黒褐色。	
27	5	01501	III	貝層上面	粗製土器	深鉢		条痕。口縁部はナデ	ヨコ方向の条痕。口縁部はナデ	口唇部は貼付のち刻目	金雲母を含む。淡褐色	
27	6	04203	I	貝層上面	粗製土器	深鉢		ナデ	ヨコ方向フトヘナタリ条痕。口縁部はナデ	口唇部に刻目。口縁に突起	砂粒を多く含む。黄褐色	
27	7	01502	III	貝層上面	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕。口縁部はヨコナデ	ヨコ方向の条痕。下部はタテ方向の条痕	口唇部に刻目	砂粒を含む。外面は灰黄色、内面は黒灰色	内面二次火
27	8	04204	I	貝層上面	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕	条痕。2の爪形状列点文	口唇部に刻目	砂粒を多く含む。暗い黄灰色	
27	9	01505	III	貝層上面	粗製土器	深鉢		ナデ	爪形状列点と短直線文	口唇部に刻目	滑石が多い。外面は褐灰色、内面は黒灰色	阿高系
27	10	04207	I	貝層上面	粗製土器	深鉢		口縁部はナデ。ヨコ方向は条痕ナデ消し	ヨコ方向、斜め方向の条痕	口唇部に刻目	砂粒を多く含む。暗褐色	
27	11	01706	III	貝層包含層	精製土器	深鉢		ナデ	ナデ	山形口縁。口唇部に刻目。中央に穿孔	微妙を含む。暗褐色	瀬戸内系
27	12	01705	III	貝層包含層	精製土器	深鉢		ヘラミガキ	磨消縄文。巻貝擬縄文	口縁片	微妙を含む。暗褐色	中津式
27	13	01553	III	貝層	粗製土器	鉢	(胴部径24)	条痕	磨消縄文。沈線。下部は条痕。タテ方向の条痕	胴部片	砂粒を多く含む。暗い褐色。器面が粗れている。	中津式 Fig.9-20
27	14	01704	III	貝層包含層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕	刺突文。ヨコ方向の沈線。その下に列点文	口唇部に刻点文	砂粒を含む。暗い黄灰色	
27	15	01552	III	貝層	粗製土器	深鉢	底径12	ナデ	ナデ。底部端部に爪形文。	底部片。上げ底	2～3㎜の砂粒を多く含む。外面は褐色、内面は黒色。	瀬戸内系
27	16	04208	I	貝層上面	粗製土器	深鉢	(底径10.4)	条痕	底部はナデ。底部端部は指頭圧痕	底部片	砂粒を多く含む。褐色	Fig.9-3
27	17	01507	III	貝層上面	粗製土器	深鉢	(底径14)	ヨコナデ。底部はナデ	ナデ。底部はナデ	底部片	砂粒を多く含む。外面は灰黄色、内面は灰茶色	
27	18	01506	III	貝層上面	粗製土器	浅鉢	(底径11)	磨滅	ミガキ	底部片。体部は大きく広がる	カルシウム付着。淡褐色	
27	19	04257	I	貝層第 I 層	粗製土器	鉢	底径11	条痕。底部はナデ	条痕後ナデ。底部はナデ	底部片	砂粒多く含む。暗い赤褐色	阿高系二次火
28	21	04259	I	貝層第 I 層	粗製土器	鉢	(底径9.6)器高13.8㎝	ヨコ方向の条痕	斜め方向の条痕ナデ消し。底部端は指頭圧痕後ヨコナデ	口唇部に刻目。底部はやや上げ底	砂粒多く含む。金雲母多く含む。黒灰色	二次火
28	22	04256	I	貝層第 I 層	粗製土器	鉢	(口径10)	ナデ	ユビナデ	丸味をおびた体部	1～3㎜の砂粒多い。黄褐色。器面に粘土紐の接合わかる	手づくね土器黒斑
28	23	04255	I	貝層第 I 層	粗製土器	深鉢		丁寧なナデ	指による強いナデ	口唇部に刻目	金雲母含む。2～3㎜の砂粒多い。黄褐色	
28	24	04251	I	貝層第 I 層	粗製土器	深鉢		ユビナデ	条痕	口唇部に刻目	砂粒を含む。茶褐色	
28	25	04258	I	貝層第 I 層	精製土器	深鉢		ヘラミガキ	磨消縄文。巾広いヘラミガキ。一部に縄文残る	胴部片	微砂を含む。やや暗い灰色	
28	26	04252	I	貝層第 I 層	精製土器	深鉢		ナデ・ミガキ	磨消縄文。フトヘナタリ擬縄文。口唇部から沈線文。口縁部刺突文。研磨	波状口縁。口唇部に刻目	金雲母を少し含む。砂粒多い。硬質焼成。褐色	
28	28	04254	I	貝層第 I 層	精製土器	深鉢		ヨコ条痕後ナデ	口縁部はナデ。凹線文	口唇部に沈線	滑石少ない。粒子大。灰褐色	阿高系
28	29	04306	I	貝層第II層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。爪形状列点文	口唇部に刻目	金雲母、砂粒多い。暗灰褐色	
28	30	04310	I	貝層第II層	精製土器	深鉢		ヨコナデ	凹線文	胴部片	滑石はやや少ない。粒は大きい。暗い灰褐色	

挿図番号	遺物番号	登録番号	地区	出土層名	種　類	器種	計測値(cm)	内面調整及び文様	外面調整及び文様	形態の特徴・部位	色調・素地等	備考
28	31	04303	I	貝層第II層	精製土器	鉢		丁寧なナデ	磨消縄文。沈線	口縁部は内弯	1～3㎜の砂粒多い。暗灰褐色	煤付着
28	32	04302	I	貝層第II層	精製土器	深鉢		ヨコナデ	ナデ。沈線の後ナデ	口唇部に刻目。	砂粒を含む。暗い灰色。	
28	33	04309	I	貝層第II層	粗製土器	深鉢		ナデ	条痕ナデ消し	口唇部に刻目	金雲母を少し含む。	
28	34	04312	I	貝層第II層	粗製土器	深鉢		粗いナデ。指頭圧痕残る	ナデ。指頭圧痕残る	口唇部に刻目。器体に粘土紐の接合わかる	砂粒多い。外面は褐灰色、内面は灰褐色	手づくね土器
28	35	04307	I	貝層第II層	粗製土器	鉢	(口径23)	指頭圧痕	ナデ。下部は条痕ナデ消し	口唇部に刻目。丸味をおびた体部	1～4㎜の砂粒を多く含む。外面は褐灰色、内面は灰褐色。	
28	36	04311	I	貝層第II層	精製土器	深鉢		ミガキ	ミガキ	波状口縁。口縁部に飾り穴	砂粒多い。黒色	
28	37	04308	I	貝層第II層	粗製土器	深鉢		ナデ	条痕	口唇部に刻目	貝殻粒子、長石等を多く含む。外面は暗い褐色。内面は黄灰色	二次火煤付着
28	38	04304	I	貝層第II層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕	ヨコ方向の条痕	口縁片	金雲母、砂粒を多く含む。硬質焼成。外面は褐色。内面は黒褐色	
28	39	04305	I	貝層第II層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕	ヨコ方向の条痕	口唇部に刻目	金雲母、砂粒を含む。外面は暗いこげ茶色、内面は灰褐色	煤付着
28	40	04313	I	貝層第II層	粗製土器	深鉢	(口径10)	ナデ。表面は凹凸している。	口唇部一部条痕。手づくね状、ナデ。指頭圧痕残る	口縁片。緩いカーブの頸部。	砂粒を含む。金雲母を含む。灰黄色	
28	41	04314	I	貝層第II層	粗製土器	深鉢	(底径12)	条痕	条痕。底部端部に刻目・底部ナデ	底部片。底部つまみ出し	砂粒を多く含む。硬質焼成。外面は暗茶灰色、内面は灰黄色	二次火
28	42	04301	I	貝層第II層	粗製土器	深鉢		ユビナデ	細かい条痕	口唇部に刻目。大きく外傾する口縁。	1～3㎜の砂粒を多く含む。灰褐色	
28	43	04402	I	貝層第III層	粗製土器	深鉢		ヨコナデ	浅い凹線文。入り組文かヨコナデ	口唇部に刻目	金雲母多く含む。砂粒多い。暗茶褐色	阿高系 Fig.9-13
29	44	04102	I	Aトレンチ第II層	精製土器	鉢	(口径29)	ヨコ方向ヘラミガキ	磨消縄文。縄文押圧。下部はミガキ	山形口縁	砂粒を多く含む。内面は暗茶褐色、外面は暗褐色。	中津式 内外黒斑
29	45	04120	I	Aトレンチ第II層	精製土器	鉢		ヨコ方向のミガキ	充填縄文。ミガキの後縄文。	胴部片	貝粒を含む。粒子大きいのは少ない。外面は褐灰色、内面は灰黄色。	中津式? 4123と同一
29	46	04103	I	Aトレンチ	精製土器	深鉢		ナデ	充填縄文。ミガキの後に縄文。外8個、内7個の刺突文が巡る。	波状口縁	砂粒を多く含む。暗茶褐色	
29	47	04121	I	Aトレンチ第II層	精製土器	深鉢		ミガキ	充填縄文。ミガキの後縄文。	胴部片	1～3㎜の貝粒を多く含む。暗茶灰色。	中津式?
29	48	04104	I	Aトレンチ第I層・第II層	粗製土器	深鉢		ナデ	口縁部は爪形状列点文、浅い凹線。下部は条痕。	口唇部に刻目	滑石はやや少ない。大粒子多い。外面は灰黒色、内面は暗茶褐色。	阿高系 二次火
29	49	04116	I	Aトレンチ第II層	精製土器	深鉢		ユビナデ	ナデ。沈線。底部端部に圧痕。	底部片	滑石やや少ない。粒子やや大。褐色。	阿高系
29	50	04119	I	Aトレンチ第II層	精製土器	深鉢		ナデ	凹線文	胴部片	滑石やや少ない。灰褐色。	阿高系
29	51	04106	I	Aトレンチ	粗製土器	深鉢		ヨコ方向ナデ	沈線内爪形状列点文。条痕。	胴部片	砂粒を含む。金雲母少し含む。外面は灰黄色、内面は暗灰色。	
29	52	04124	I	Aトレンチ第II層	精製土器	深鉢		条痕ナデ消し。下部は貝殻条痕。	充填縄文。ヨコ方向ミガキの後縄文。	胴部片	砂粒を多く含む。金雲母少し含む。	
29	53	04118	I	Aトレンチ第I層・第II層	粗製土器	深鉢		条痕	条痕ナデ消し。口縁部に爪形状列点文。沈線。	口唇部に刻目	滑石多い。褐灰色。口唇部は黒色。	阿高系
29	54	04138	I	Aトレンチ第III層	粗製土器	深鉢		ナデ	条痕。突帯部分はナデ。	1条の突帯に刻目	砂粒を多く含む。粒子大きい。外面は褐色、内面は灰黄色。	
29	55	04135	I	Aトレンチ第III層	粗製土器	深鉢		ナデ	浅い凹線。	口唇部に刻目。	砂粒を多く含む。黒色。	
29	56	04137	I	Aトレンチ第III層	粗製土器	深鉢		条痕後ナデ	条痕、浅い凹線、爪形状列点文も浅く、上から凹線のためつぶれる。	口唇部に刻目。口縁は外に広がる。	長石粒を多く含む。	
29	57	04133	I	Aトレンチ第III層	粗製土器	深鉢	底径13	ナデ	タテ条痕ナデ消し。底部端部は面取り。底部に籾の植物の圧痕と条痕。	底部片。上げ底。	砂粒を多く含む。滑石を少し含む。外面はやや暗茶褐色、内面は灰褐色。	
29	58	04132	I	Aトレンチ第II層	粗製土器	深鉢	底径14	ヨコ条痕。底部は磨滅。	ヨコ方向のナデ。底部はナデ。	底部片	砂粒を多く含む。外面は灰黄色、内面は褐灰色。	
29	59	04111	I	Aトレンチ第II層	粗製土器	深鉢	底径16	タテ条痕。底部はヨコ条痕。	ヨコ方向条痕ナデ消し。	底部片	砂粒、金雲母が多い。外面は暗茶灰色、内面は灰黄色。	
30	60	04182	I	Bトレンチ第III層	精製土器	深鉢		口縁部はナデ。体部はヨコナデ擬縄文	ナデ消縄文。ヘナタリ擬縄文と充填縄文。	口唇部に刻目	長石等砂粒多い。硬質焼成。外面は暗い褐色。内面は褐色	
30	61	04184	I	Bトレンチ第III層	粗製土器	鉢		ヨコ方向条痕	充填縄文。巻貝の条痕状。一部押圧。擬縄文。ナデ消し。	波状口縁。口唇部に刻目。	砂粒を多く含む。外面は灰黄色、内面は灰色。	
30	62	04187	I	Bトレンチ第III層	精製土器	鉢		ヘラミガキ	充填縄文。沈線。刺突文。フトヘナタリ擬縄文。	強く内弯する口縁	微砂を含む。褐色粒子。黒灰色。	
30	63	04189	I	Bトレンチ第III層	精製土器	深鉢		ナデ	磨消縄文。沈線。一部磨消が残る。	口縁部片	黒色粒子、微砂多い。暗褐色。	
30	64	04191	I	Bトレンチ第III層	精製土器	深鉢		丁寧なナデ	磨消縄文、沈線	胴部片	微砂を含む。灰褐色	
30	65	04188	I	Bトレンチ第III層	粗製土器	深鉢		ナデ	浅い凹線文	胴部片	滑石多い。黒色	阿高系
30	66	04183	I	Bトレンチ第III層	精製土器	鉢		口縁部は粗いナデ。ナデ	条痕後指頭圧痕	波状口縁。口唇部に刻み	砂粒を多く含む。外面は灰黄色。内面は黄灰色	
30	67	04162	I	Bトレンチ第I層	精製土器	深鉢		ナデ	凹線文	胴部片	滑石が多い。淡赤褐色。	

挿図番号	遺物番号	登録番号	地区	出土層名	種　類	器種	計測値(cm)	内面調整及び文様	外面調整及び文様	形態の特徴・部位	色調・素地等	備考
30	68	04161	I	Bトレンチ第Ⅰ層	粗製土器	深鉢		ナデ。下部はヨコナデ	口縁部爪形状列点文。条痕の後ヨコナデ	口唇部に刻目	金雲母、砂粒多い。こげ茶色。	
30	69	04186	I	Bトレンチ第Ⅲ層	粗製土器	深鉢		ヨコ方向条痕。口縁部はヨコナデ	ヨコ方向条痕。口縁部は条痕ナデ消し。	波状口縁	砂粒多い。灰褐色。	
30	70	04181	I	Bトレンチ第Ⅲ層	粗製土器	深鉢	(底径11.4)	ナデ	ナデ。底部はナデ	底部片	砂粒を多く含む。淡黄褐色	
30	71	04190	I	Bトレンチ最下	粗製土器	深鉢		ヨコ方向の条痕	ヨコ方向の条痕	口唇部に刻目	1～3㎜の砂粒多く含む。内外面やや暗い褐色。	
30	72	04066	I	C5とC4のベルト	粗製土器	深鉢	底径9.2	ナデ	ナデ。底部端部は圧痕。	底部片・上げ底。	砂粒を多く含む。暗灰褐色。	二次火
30	73	04065	I	C5とC4のベルト	粗製土器	深鉢	(底径9)胴部径18	ナデ。肩部に条痕。	頸部は条痕。胴部は巻貝条痕	やや肩が張る。	砂粒を含む。暗灰褐色。	二次火

Tab. 2　桑原飛櫛貝塚出土石製品一覧表

単位　cm

頁	遺物番号	登録番号	地区	出土遺構	器　種	長(現存長)	幅(現存幅)	厚(現存厚)	重量(g)	石　材	色　調	特　徴	備　考
68	1	05905	III	C8・C8第III層	石鏃	3.4	3.1	0.8	6	黒曜石	黒色	一方のかえりの先端を欠く。調整は丁寧。	
68	2	05042	I	B3第I層	石鏃	1.7	1.4	0.2	－	黒曜石	黒色	かえりの先端を欠く。未製品。	
68	3	05043	I	B3第I層	石鏃	1.9	1.5	0.4	1.7	黒曜石	黒色	三角鏃。調整は粗い。	
68	4	05018	I	C6第III層	石鏃	(1.3)	1.4	0.3	－	黒曜石	灰黒色	先端を欠く。抉りは深い。表面の調整は丁寧。	
68	5	05156	I	貝塚1層	石鏃	(2.0)	(1.4)	0.4	－	黒曜石	黒色	基部を欠く。側辺の一辺のみ調整。未製品。	
68	6	05012	I	B6第III層	石鏃	1.5	1.8	0.2	－	サヌカイト	濃灰色	抉りは深い。粗い調整。	
68	7	05019	I	C6第III層	石鏃	2.5	1.6	0.4	－	黒曜石	灰黒色	一方のかえりの先端を欠く。抉りは深い。丁寧な調整。	
68	8	05154	I	貝層第I層	石鏃	2.2	1.3	0.4	－	黒曜石	黒色	鋸歯鏃。一方のかえりの先端を欠く。裏面に未調整面。	
68	9	05441	II	SP74	石鏃	2.0	1.0	0.3	－	黒曜石	灰黒色	横長の剥片を利用。B面に大きな剥離面を残す。抉りは深い。	
68	10	05314	II	SC01	石鏃	(1.8)	1.4	0.5	－	黒曜石	黒色	基部を欠く。未製品。	
68	11	05315	II	SC01	石鏃	(2.0)	2.1	0.4	－	黒曜石	黒色	三角鏃で先端を欠く。B面は調整途中。未製品。	
68	12	05017	I	C6第II層	石鏃	2.7	1.9	0.6	2.2	黒曜石	黒色	未製品。両面とも粗い調整を残す。	
68	13	05456	II	2面SP106	石鏃	3.5	0.8	0.6	2	黒曜石	黒色	A面に自然面、B面に剥離面を残す。断面三角形を呈する。	
68	14	05002	I	B7第III層	石錐	1.9	1.0	0.7	－	黒曜石	黒色	先端を欠く。	
68	15	05316	II	SC01	石匙	(2.6)	2.2	0.5	－	黒曜石	灰黒色	横長剥片の一端に二方面から抉りを入れ、つまみ部状に作り出す。	
69	16	05756	II	2面獣骨No.6周辺	尖頭器	4.9	2.2	0.8	8.1	サヌカイト	灰色	B面に自然面。	
69	17	05036	I	C4第III層	石槍	10.5	2.9	1.3	46	粘板岩	濃灰色	A面風化著しい。	
69	18	05312	II	SC01	尖頭器	5.6	2.0	1.0	11	サヌカイト	濃灰色	主要剥離面の側辺に調整を加える。	
69	19	05001	I	B7第I層	石錘	7.4	3.2	1.0	37.6	火成岩	淡緑灰色	扁平な長方形の石の側面に調整を加え、紐かけの抉りを作り出す。	
69	20	05184	I	貝層上面	石匙	(3.7)	(7.2)	0.6	－	サヌカイト	灰色	一部を欠く。横長の剥片を利用。	
69	21	05918	III	C8・D8とC9・D9ベルト第II層	石匙	3.2	7.0	0.7	14.2	サヌカイト	濃灰色	横長の剥片を利用。1辺に刃部を作る。	
69	22	05006	I	C7・D7第III層	削器	3.9	2.7	0.9	9	サヌカイト	濃灰色	縦長剥片の2辺に調整を加え刃部を作る。	
69	23	05162	I	貝塚第II層	削器	(6.6)	6.3	1.4	－	頁岩	黒灰色	一部を欠く。2辺に調整を加え刃部を作り出す。	
69	24	05151	I	貝層第I層	削器	7.6	5.1	1.8	80	頁岩	灰黒色	縦長の剥片を利用。側辺に調整を加え刃部を作る。	
69	25	05011	I	B6第I層	石斧	8.0	4.1	1.7	73	玄武岩	灰色	磨製。一部を欠く。AB両面とも丁寧な研磨。	
69	26	05901	III	B8第I層	石錘	6.8	6.0	1.5	110	玄武岩	灰色	扁平な自然石の2辺に敲打を加え抉りを作り出す。	
69	27	05139	I	BT	装飾品	5.1	2.8	0.8	12.5	滑石	淡小豆色	4つの孔。丹塗り	

A面（表）　B面（裏）

Ｃ９・Ｄ９（Ｇ１８）出土遺物（Fig.26）

182～184は第Ⅰ層出土、186は第Ⅱ層、185･187～189は第Ⅲ層出土である。184は精製土器で、波状口縁部である。外面は口縁部に沿って２条の沈線を施す。183･189は阿高系土器で、183の外面に列点文を施し、口唇部に刻目がある。189は滑石を多く含み、赤褐色を呈する。183には滑石を含まない。185は外面にヨコ方向の隆帯文をもち、一部に刻目を施す。内外面ヨコ方向の条痕がある。182･186～188は粗製土器で、182の口唇部には刻目がある。

（３）その他出土の縄文後期土器　（Fig.27～30）

貝層内の出土土器（Fig.27－１～10、16～18）

１～13は貝塚の表面に表出、もしくは貼り付いた状態で出土した土器である。９は阿高系土器で、口唇部に刻目をもち、外面に列点文と短直線文の組み合わせ文がある。１～７・10は粗製土器で、５～７は口唇部には刻目がある。内外面に貝殻条痕が残るが、６は巻貝のフトヘナタリを用いている。８は内外面に条痕があり、外面には２段に爪形状の列点文を施している。18は浅鉢形の底部、16・17は深鉢の底部である。

11～13・15は瀬戸内系土器で、12・13は中津式土器である。13は内外面は条痕を施し、上位に磨消縄文を施す。11は山形口縁部を肥厚させ、口唇部に刻目を付ける。又、中央に穿孔がある。14は外面にヨコ沈線を施し、その下に列点文を配置する。口唇部に刻点文がある。

（４）石器　（P68・69）

貝層内から出土した石器の総数は58点である。この他、中世包含層中、或いはⅡ区の包含層より出土した縄文時代の石器を加えると164点に達する。Tab.２参照

（５）土製品

有孔円盤（Fig.31－42～45）　４点出土。縄文土器片の縁辺を加工調整して、不整円形の土板を作り、中央を穿孔している。縁辺は磨き等の調整を行っていない。44は孔が貫通していない。

（６）貝製品

貝製腕輪（Fig.32～34－１～48）

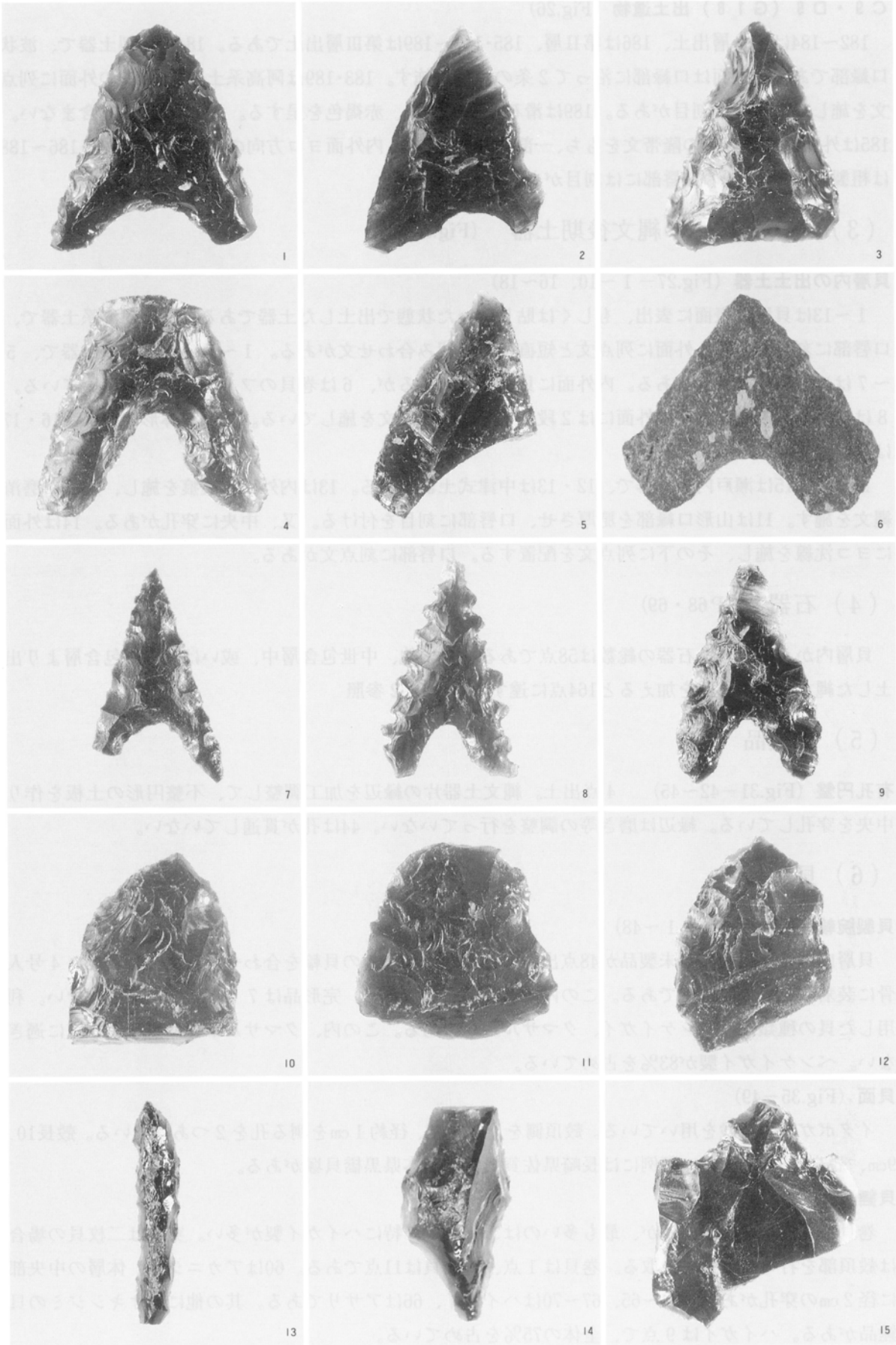
貝層内からは完成品・未製品が48点出土し、４号人骨装着の貝輪を合わせて62点出土した。４号人骨に装着した貝輪は14点である。この内未製品は25点である。完形品は７・11の２点にすぎない。利用した貝の種類は、ベンケイガイ、クマサルボウである。この内、クマサルボウは少なく６点に過ぎない。ベンケイガイ製が83％を占めている。

貝面（Fig.35－49）

イタボガキの右殻を用いている。殻頂側を上にして、径約１cmを測る孔を２つあけている。殻長10.9cm、殻高9.5cmを測る。類例には長崎県佐賀貝塚、熊本県黒橋貝塚がある。

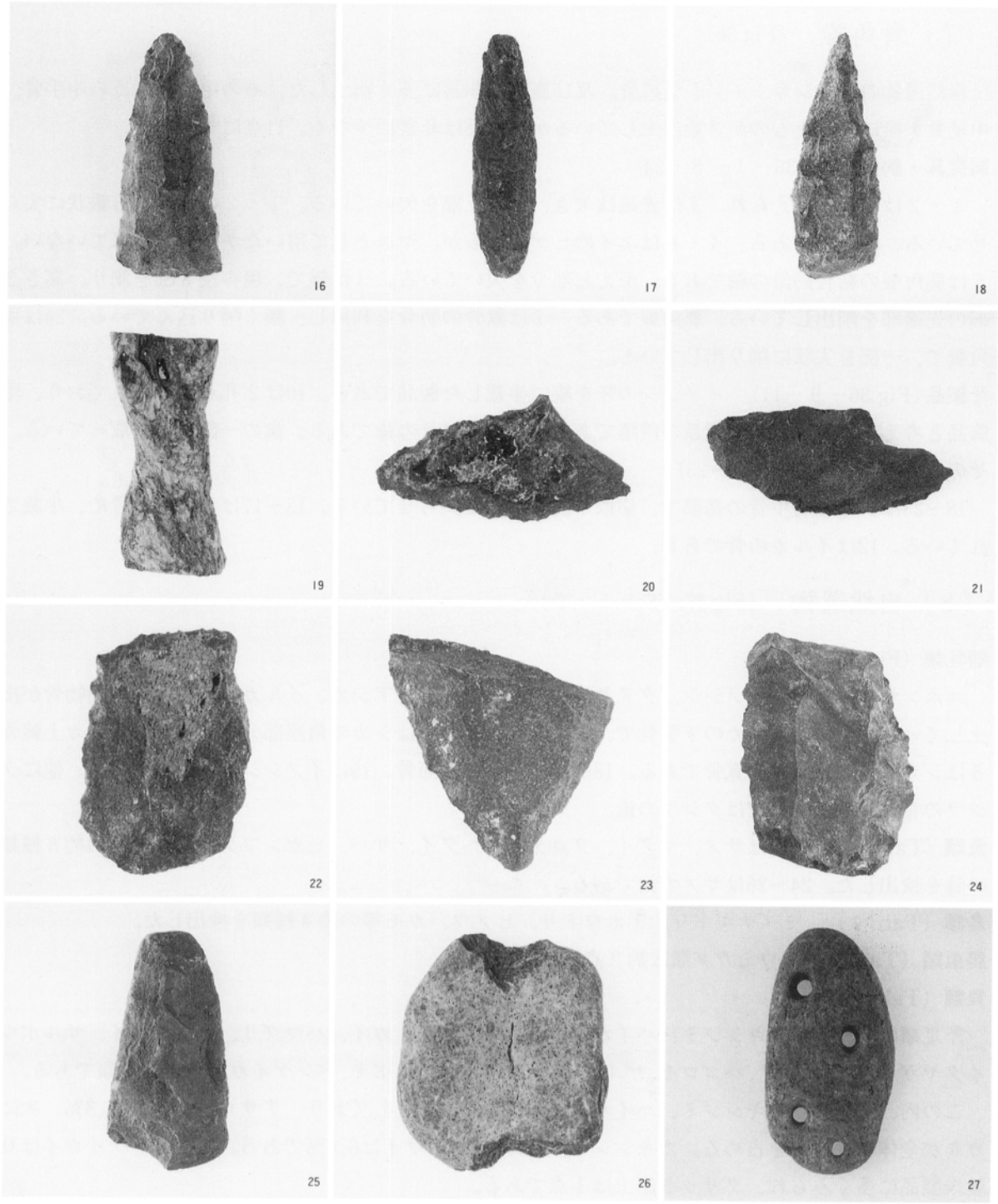
貝錘（Fig.35－50～70）

巻貝、二枚貝を利用するが、最も多いのは二枚貝で、特にハイガイ製が多い。穿孔は二枚貝の場合は殻頂部を打ち欠く手法を取る。巻貝は１点、二枚貝は11点である。60はアカニシで、体層の中央部に径２cmの穿孔がある。64～65、67～70はハイガイ、66はアサリである。其の他に、オキシジミの貝錘品がある。ハイガイは９点で、全体の75％を占めている。



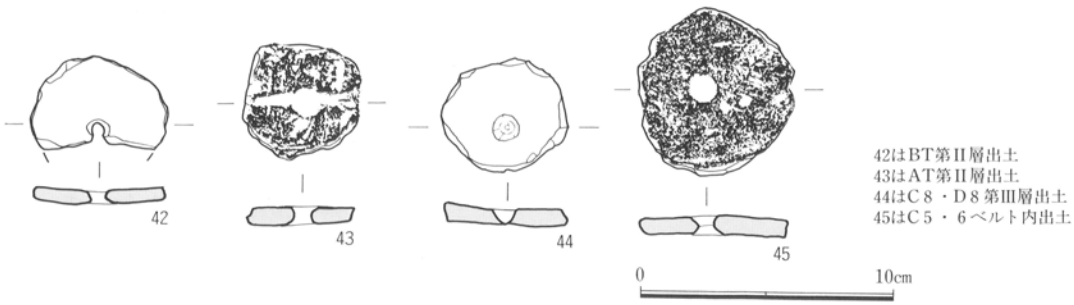
石製品①

※番号は表と一致する



石製品②

※番号は表と一致する



42はBT第Ⅱ層出土
43はAT第Ⅱ層出土
44はC８・D８第Ⅲ層出土
45はC５・６ベルト内出土

Fig 31　土製品実測図（縮尺1/3）

（7）骨角器　(Fig.36)

自然遺物の中でシカ、イノシシの骨、及び鹿角は非常に多く出土した。その中でもシカの中手骨、中足骨を縦に割ったものが多数出土しているが、製品は非常に少なく、11点にすぎない。

刺突具・釣針（Fig.36－1～8・24）

1・2はヤスと考えられ、1は先端は欠き、2は上部を欠いている。1・2の基部は方錐状に尖らせている。鹿角製である。4・8はエイのヒゲであるが、ヤスとして用いたかは判断出来ていない。5は鹿角製の結合釣針の軸である。かえし部分を欠いている。3は錐で、現存長8㎝を測り、高さ3㎜の先端部を削出している。鹿角製である。7は獣骨の肋骨を利用し、細く削り込んでいる。24は鹿角製で、一部を尖状に削り出している。

牙製品（Fig.36－9～11）　イノシシの牙を縦に半裁した製品である。10は2孔が穿けられており、垂飾品と考えられる。11は未製品の段階である。9はクジラの歯である。歯の一部を切り取っている。

その他の製品（Fig.36－12～23）

18～23はシカの肩甲骨の基部で、切取り面を削って尖らせている。13～17はシカ中足骨で、半裁されている。12はイルカの骨である。

（8）自然遺物　(Fig.37、Tab.5・7)

哺乳類（Fig.37）

ニホンザル、シカ、イノシシ、タヌキ、ネズミ、クジラ、アシカ、イルカ等の7種類の動物骨が出土している。1～2はシカの下顎骨で、右・左である。3はシカの角座部分である。5はシカ上腕骨、6はシカ肋骨、11はシカ寛骨である。18はイノシシの基節骨、19はイノシシの中節骨である。他にクジラの脊椎骨がある、12はクジラの歯、

魚類（Tab.7）　魚類はサメ、マダイ、クロダイ、ヘダイ、サバ、ヒガンフグ、スズキ等の約8種類の骨を検出した。24～26はサメの歯である。

鳥類（Tab.7）　ミズナギドリ、アホウドリ、ヒメウ、カモ等の約4種類を検出した。

爬虫類（Tab.7）　ウミガメ類は約2点出土した。

貝類（Tab.5）

斧足類はアサリ、オキシジミ、ハイガイ、マガキ、カガミガイ、ハマグリ、オオノガイ、サルボウ、イタヤガイ、ネズミノテ、ハゴロモ、ザルガイ、ナミマガシワモドキ、ベンケイガイ等の14種類である。

この内、アサリ、オキシジミ、ハイガイ、マガキを主体としており、アサリが全体の27.3%、次にカキが全体の18.8%を占める。オキシジミは4.7%、ハイガイは6.8%である。又、ベンケイガイは貝輪未製品に多くみられ、グリッド出土は1点である。

腹足類はカワアイ、ウミニナ、イボウミニナ、フトヘナタリ、スガイ等の小型巻貝を主体として、カワニナ、アカニシ、テングニシ、サザエ、イシダタミ、クボガイ、ツメタガイ、レイシ、オオコシダカラ、ガンガラ、ツヤギセルガイ、クチギレガイ、ヤカドツノガイ、ヘビガイ、バイ等の19種類がある。ウミニナは全体の12.6%、イボウミニナは8.3%、フトヘナタリは7.7%、カワアイは7.1%を占める。

尚、ウミニナ、イボウミニナ、フトヘナタリ、ヘナタリは螺塔部先端を打ち欠いている。

糞石（Fig.37－23）　23は糞石で、1点のみの出土である。分析は行っていない。長さ3.4㎝、最大径2.6㎝を測る。

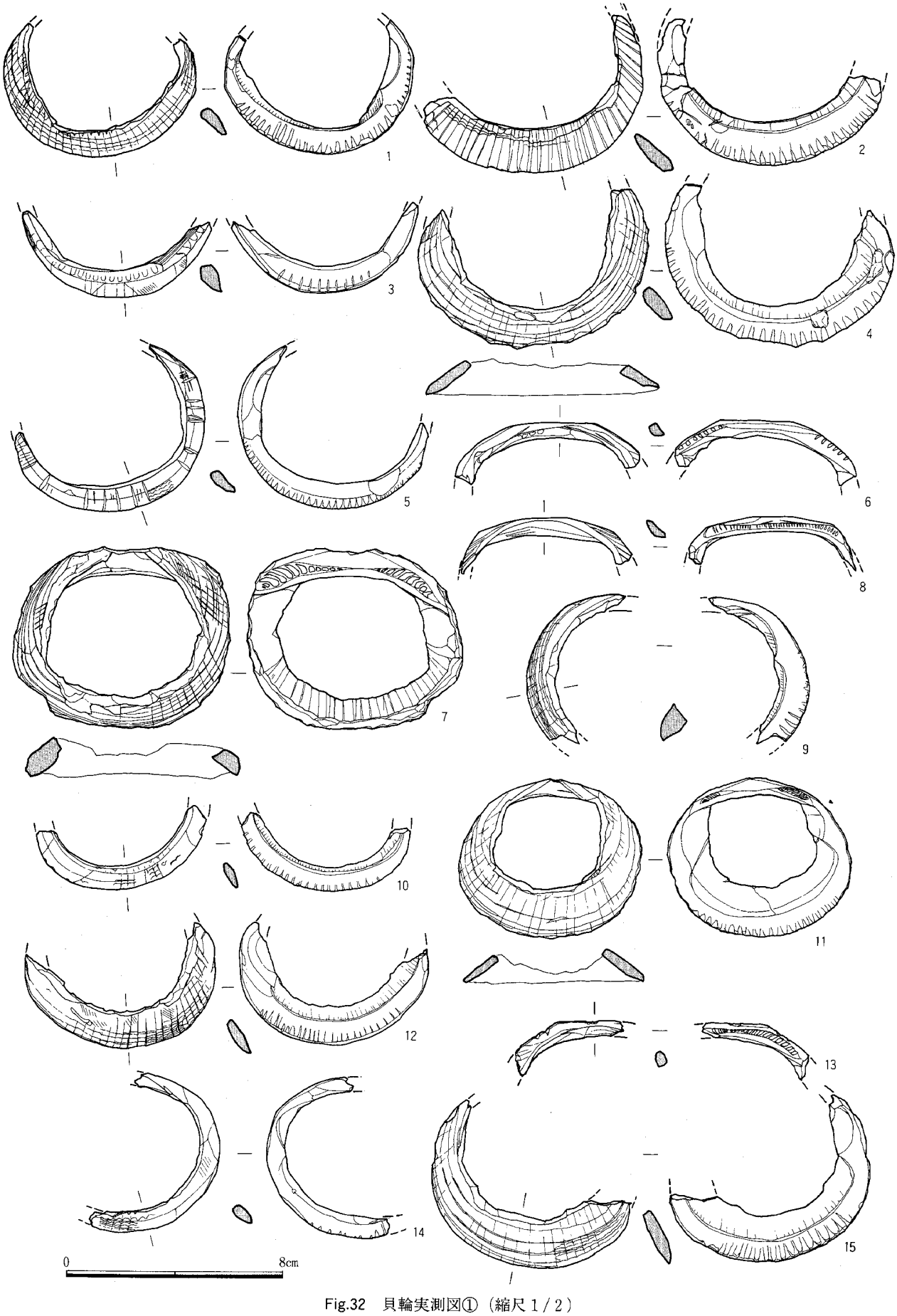


Fig.32　貝輪実測図①（縮尺１/２）

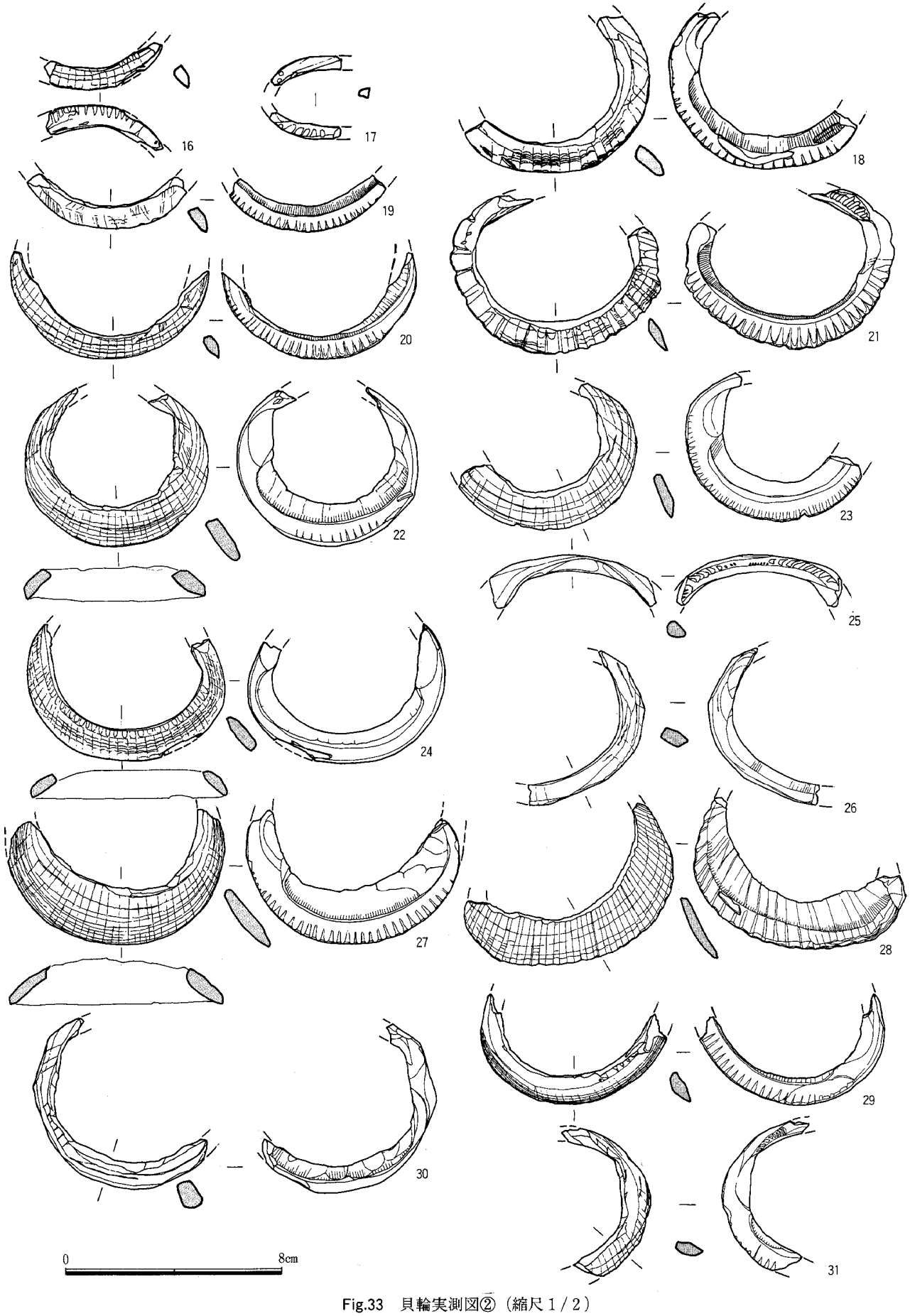


Fig.33　貝輪実測図②（縮尺１/２）

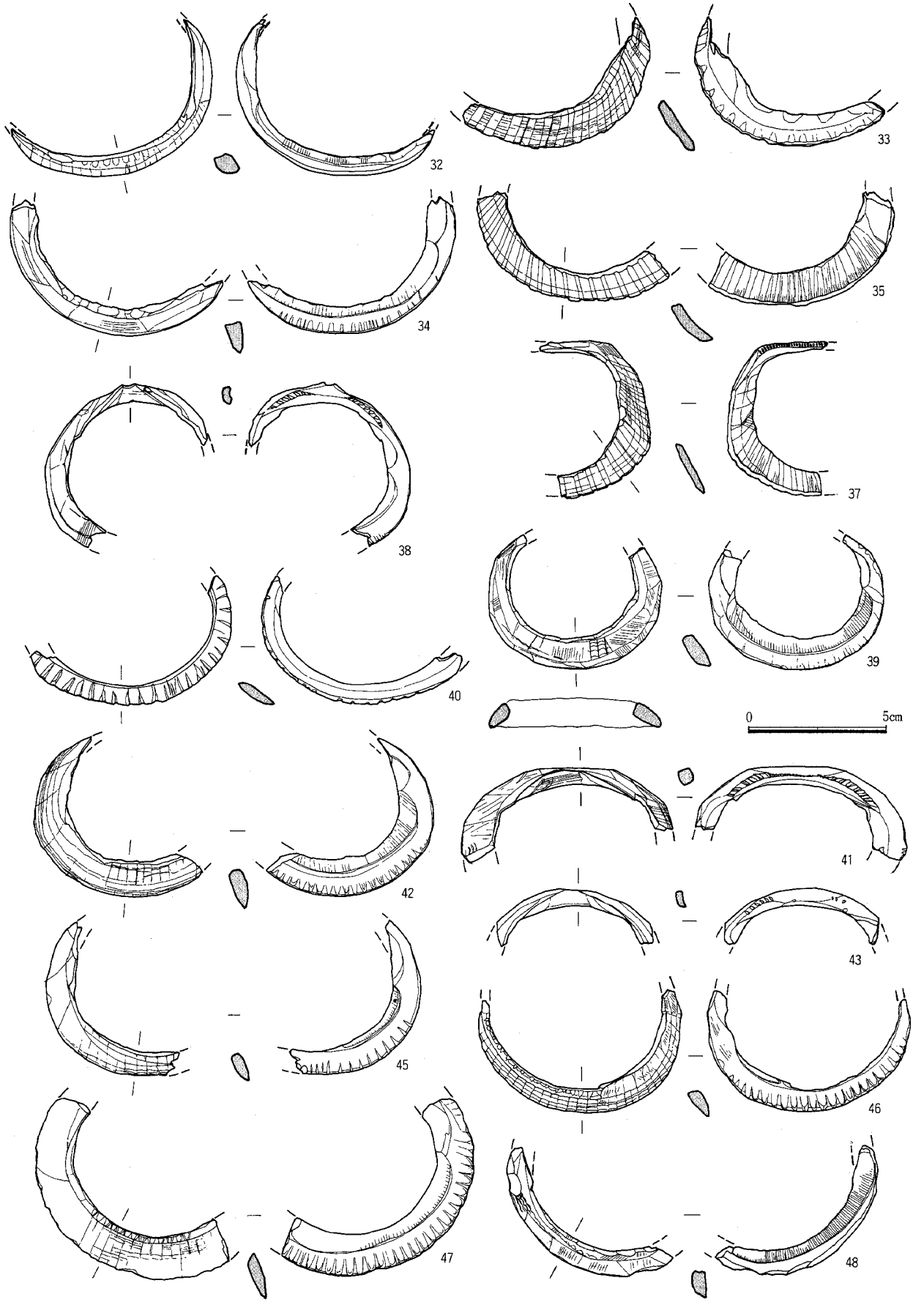


Fig.34　貝輪実測図③（縮尺 1 / 2）

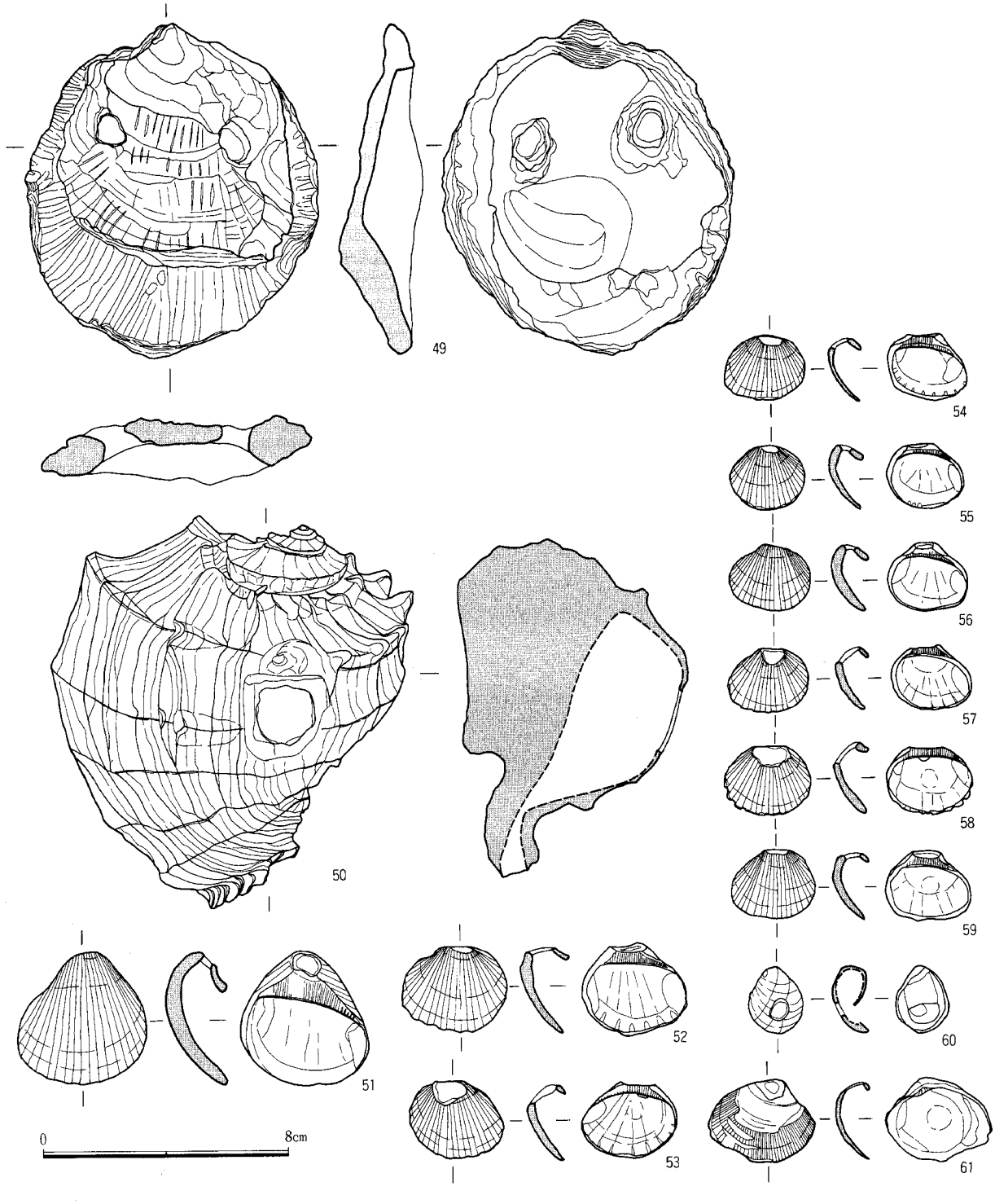


Fig.35　貝面、貝錘実測図（縮尺１/２）

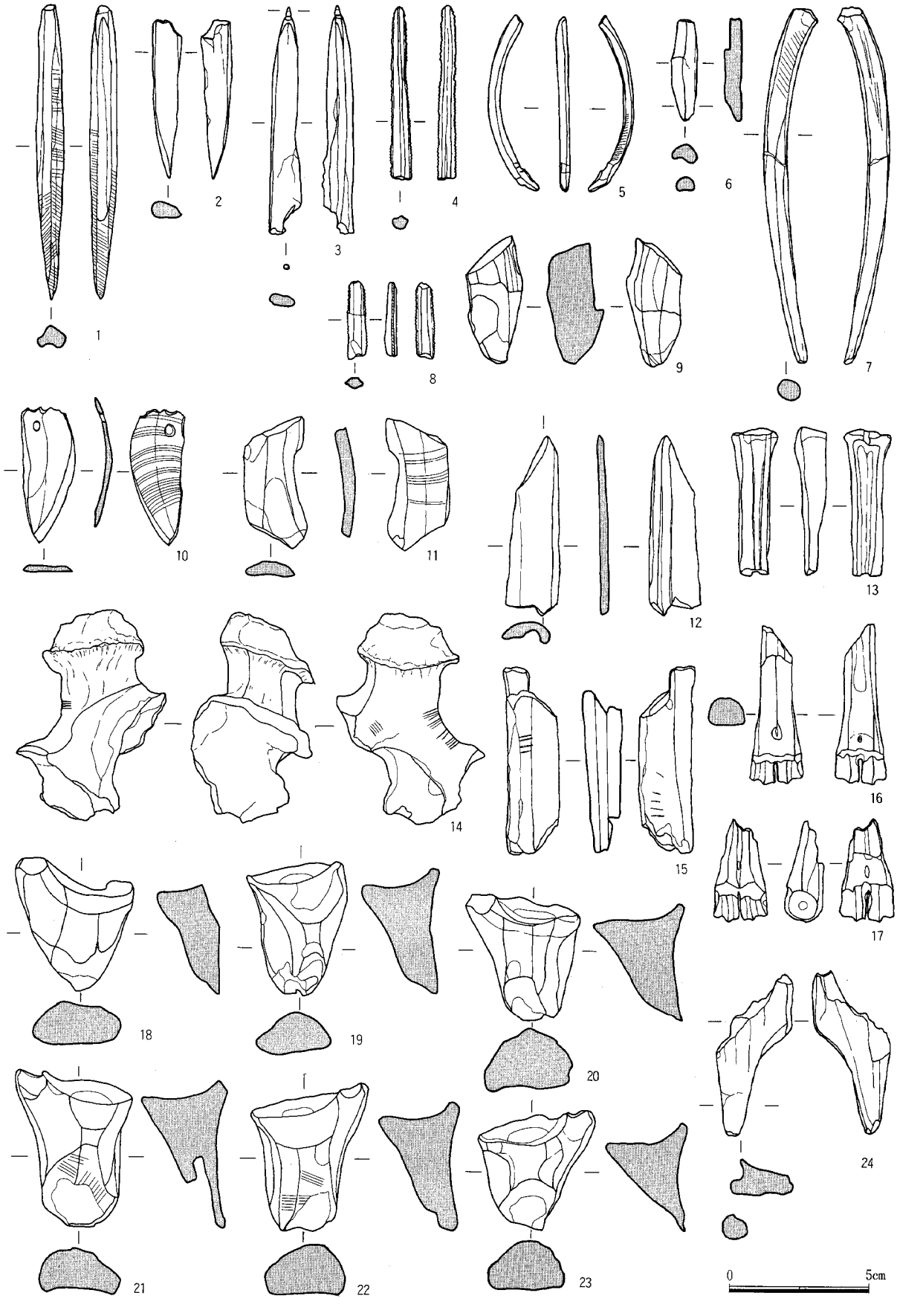


Fig.36　骨角製品他実測図（縮尺１/２）

Fig.37　獣骨、糞石、サメ歯等実測図（縮尺１/３・１/２）

Tab.3　桑原飛櫛貝塚出土貝輪計測表①

挿図番号	登録番号	地区	遺構・層位	残存率	外径(cm)		内径(cm)		厚さ	器壁	重量	貝　名	殻	備　考
					殻長	殻高	殻長	殻高	(cm)	(cm)	(g)			
33-1	61040	I	AT	3/4	7.1	(5.8)	5.4	(4.9)	1.2	0.4	8.0	ベンケイガイ	左	未製品　破損
33-2	61041	I	AT下層	1/2	8.8		6.3		1.9	0.5	14.0	ベンケイガイ	右	完成品　破損
33-3	61046	I	中世包含層	1/2	7.8		5.9		1.1	0.7	6.5	ベンケイガイ	－	完成品　破損
33-4	61044	I	BT第Ⅲ層	3/4	8.6	(7.4)	5.5	(6.5)	1.5	0.5	21.5	ベンケイガイ	右	未製品　破損
33-5	61043	I	BT第Ⅲ層	3/4	7.2	(5.9)	5.9	(4.8)	1.2	0.4	8.0	ベンケイガイ	右	完成品　破損
33-6	61045	I	BT	1/4					0.6	0.4	5.0	ベンケイガイ	－	完成品
33-7	61042	I	BT	1	8.1	6.7	5.8	4.6	1.6	0.8	38.5	ベンケイガイ	右	未製品　完形
33-8	61038	I	貝層第Ⅰ層	1/4					0.9	0.3	4.0	クマサルボウ	－	完成品　破損
33-9	61039	I	貝層第Ⅰ層	1/4					1.2	0.7	8.0	ベンケイガイ	左	完成品　破損
33-10	61002A	I	B7第Ⅱ層	1/4					1.0	0.3	4.0	ベンケイガイ	左	未製品　破損
33-11	61001	I	B7第Ⅱ層	1	6.8	6.0	4.0	3.5	2.1	0.4	14.0	ベンケイガイ	右	未製品　完形
33-12	61003	I	B7第Ⅲ層	1/2	7.1		4.9		1.5	0.4	10.0	ベンケイガイ	右	未製品　破損
33-13	61002B	I	B7第Ⅱ層	1/5					0.5	0.4	1.0	ベンケイガイ	－	完成品　小片
33-14	61004	I	C7・D7下層	1/3					0.9	0.4	5.0	ベンケイガイ	右	未製品　全体に加工
33-15	61034	I	C7・D7・C8・D8B第Ⅱ層	1/2					2.1	0.5	14.0	ベンケイガイ	左	未製品　破損
34-16	61009	I	C6第Ⅲ層	1/5					0.9	0.4	1.0	ベンケイガイ	－	完成品　破損
34-17	61011	I	C6第Ⅲ層	1/6					0.3	0.3	0.5	ベンケイガイ	－	－
34-18	61006	I	C6第Ⅱ層	1/3					1.5	0.5	13.0	ベンケイガイ	右	未製品　破損
34-19	61008	I	C6第Ⅲ層	1/4					1.0	0.45	4.0	ベンケイガイ	右	未製品　破損
34-20	61005	I	C6第Ⅰ層	1/3					0.9	0.4	7.0	ベンケイガイ	左	未製品　破損
34-21	61033	I	C7・D7・C6B第Ⅱ層	3/4	7.7	(6.1)	5.9	(4.5)	1.4	0.4	9.5	ベンケイガイ	左	完成品　破損
34-22	61037	I	C7・D7・C6B第Ⅲ層	3/4	6.8	(6.2)	4.6	(5.8)	1.8	0.5	17.5	ベンケイガイ	右	未製品　破損
34-23	61035	I	C6・C5B第Ⅱ層	1/2	(6.8)		(4.3)		1.7	0.4	8.0	ベンケイガイ	右	未製品　破損
34-24	61036	I	C6・C5B第Ⅲ層	2/3	7.3		5.5		1.5	0.5	12.5	ベンケイガイ	右	完成品　破損
34-25	61010	I	C6	1/4					0.7	0.5	4.5	ベンケイガイ	左	完成品　破損
34-26	61007	I	C6第Ⅱ層	1/3					0.9	0.5	5.8	ベンケイガイ	左	完成品　破損
34-27	61051	I	C5第Ⅰ層	1/2	7.9		5.7		2.6	0.5	20.5	ベンケイガイ	左	未製品　破損
34-28	61013	I	C5第Ⅲ層	1/2	8.2		6.4		2.7	0.4	17.5	クマサルボウ	右	未製品　破損
34-29	61012	I	C5第Ⅲ層	1/3					1.2	0.5	7.5	ベンケイガイ	右	完成品　破損
34-30	61015	I	B3第Ⅰ層	1/2	(7.6)		(6.8)		1.0	0.7	10.5	ベンケイガイ	左	未製品　破損
34-31	61016	I	B3第Ⅰ層	1/4					1.0	0.4	4.0	ベンケイガイ	左	完成品　破損
35-32	61014	I	B3第Ⅰ層	1/2					0.8	0.7	9.0	ベンケイガイ	右	完成品　破損
35-33	61017	I	C3第Ⅰ層	1/3					2.1	0.4	12.0	クマサルボウ	右	未製品　破損
35-34	61019	I	C3第Ⅱ層	1/3					1.1	0.5	10.0	ベンケイガイ	右	未製品　破損
35-35	61018	I	C3第Ⅱ層	1/4					1.7	0.4	11.0	クマサルボウ	左	未製品　破損
	61022	I	B2第Ⅰ層	1/4					0.7	0.5	4.0	ベンケイガイ	－	完成品　破損
35-37	61027	I	B2第Ⅱ層	1/3					2.1	0.2	6.5	クマサルボウ	左	未製品　破損
35-38	61025	I	B2第Ⅱ層	2/3	(6.2)	(6.5)	(4.4)	(4.8)	1.1	0.3	5.0	ベンケイガイ	－	未製品　破損
35-39	61024	I	B2第Ⅱ層	3/4	6.3		4.6		1.4	0.5	11.0	ベンケイガイ	右	未製品　破損
35-40	61026	I	B2第Ⅱ層	1/3					1.5	0.3	7.0	クマサルボウ	右	完成品　破損
35-41	61028	I	B2第Ⅱ層	1/3					1.3	0.3	7.5	ベンケイガイ	左	未製品　破損
35-42	61023	I	B2第Ⅱ層	1/3					1.6	0.5	9.0	ベンケイガイ	右	未製品　破損
35-43	61031	Ⅲ	C8・D8第Ⅰ層	1/4					0.6	0.25	1.5	ベンケイガイ	－	完成品　破損
	61030	Ⅲ	C8・D8第Ⅰ層	1/5					0.6	0.6	1.0	ベンケイガイ	－	完成品　破損

※貝層Ⅰ～Ⅲは発掘調査時の便宜的な層で、
土層図には対応していない。
※Tはトレンチ。Bはベルト

桑原飛櫛貝塚出土貝輪計測表②

挿図番号	登録番号	地区	遺構・層位	残存率	外径(cm)		内径(cm)		厚さ	器壁	重量	貝名	殻	備考
					殻長	殻高	殻長	殻高	(cm)	(cm)	(g)			
35-45	61029	III	C8・D8第I層	1/3					1.1	0.4	5.5	ベンケイガイ	右	完成品 破損
35-46	61052	III	C8・D8第II層	2/3	7.4		6.3		1.1	0.4	5.5	ベンケイガイ	右	完成品 破損
35-47	61053	III	C8・D8第III層	1/3					1.6	0.5	8.5	ベンケイガイ	左	完成品 破損
35-48	61032	III	C9・D9第I層	1/3					1.0	0.5	5.0	ベンケイガイ	―	未製品 破損
14-5	61061	II	SR01(4号人骨)	1/3					1.1	0.4	4.0	ベンケイガイ	右	完成品 破損
14-6	61062	II	SR01(4号人骨)	1/2					1.1	0.4	5.5	ベンケイガイ	右	完成品 破損
14-7	61064	II	SR01(4号人骨)	2/3	7.0	(6.2)	5.5		1.4	0.4	6.0	ベンケイガイ	左	完成品 破損
14-8	61063	II	SR01(4号人骨)	1/2	7.1		5.5		1.1	0.4	4.5	ベンケイガイ	左	完成品 破損
14-9	61065	II	SR01(4号人骨)	1/4					1.7	0.3	2.0	クマサルボウ	右	完成品 破損
	61066	II	SR01(4号人骨)											未計測 完成品 破損
	61067	II	SR01(4号人骨)											未計測 完成品 破損
	61068	II	SR01(4号人骨)											未計測 完成品 破損
	61069	II	SR01(4号人骨)											未計測 完成品 破損
	61070	II	SR01(4号人骨)											未計測 完成品 破損
	61071	II	SR01(4号人骨)											未計測 完成品 破損
	61072	II	SR01(4号人骨)											未計測 完成品 破損
	61073	II	SR01(4号人骨)											未計測 完成品 破損
	61074	II	SR01(4号人骨)											未計測 完成品 破損

※I～IIIは発掘調査時の便宜的な層で、
土層図には対応していない。
※Tはトレンチ。Bはベルト

Tab. 4　桑原飛櫛貝塚出土貝錘計測表

挿図番号	遺物番号	地区	遺構・層位	残存率	殻長	殻高	孔径(cm)		器壁	重量	貝名	殻	備考
					(cm)	(cm)	外径	内径	(cm)	(g)			
36-50	61151	I	C3第II層	1	12.8	11.8	2.0	1.8	0.3	29.6	アカニシ	―	
36-51	61152	I	B7第I層	1	4.1	4.3	0.7	0.6	0.5	18.0	ハイガイ	右	
36-52	61157	I	C6第II層	1	2.3	2.8	0.8	0.6	0.4	5.0	ハイガイ	右	
36-53	61158	I	C6第II層	1	3.1	2.5	1.1	0.8	0.3	3.0	ハイガイ	左	
36-54	61159	I	C6第II層	1	2.6	2.1	0.9	0.5	0.2	2.0	ハイガイ	右	
36-55	61153	I	B7第I層	1	2.4	2.1	0.4	0.3	0.2	1.0	ハイガイ	右	
36-56	61155	I	C6第III層	1	2.6	2.1	0.4	0.3	0.3	2.1	ハイガイ	右	
36-57	61154	I	B7第III層	1	2.6	2.0	0.9	0.7	0.3	1.8	ハイガイ	右	
36-58	61160	I	B4第III層	1	2.8	2.2	1.2	1.0	0.3	2.0	ハイガイ	右	
36-59	61161	I	B3第I層	1	2.6	2.2	0.9	0.5	0.3	2.4	ハイガイ	右	
36-60	61166	I	C6第II層	1	2.2	1.8	0.7	0.6	0.2	2.0	不明	―	
36-61	61156	I	C6第I層	1	3.4	2.2	0.6	0.5	0.2	2.4	アサリ	右	

※I～IIIは発掘調査時の便宜的な層で、
土層図には対応していない。
※Tはトレンチ。Bはベルト

Tab. 5　桑原飛櫛貝塚出土貝類の分析表

（単位　%）

種類	貝名	G 1			G 4			G 9			総計
		1層	2層	3層	1層	2層	3層	1層	2層	3層	
腹足類	ウミニナ	22.4	18.8	12	5.1	15.1	18.3	6.2	11.8	10.3	12.7
腹足類	イボウミニナ	2.4	2.6	8	1.6	8.6	21.3	12.3	7.9	1.1	8.7
腹足類	ヘナタリ・フトヘナタリ	5.9	14.2	10.1	3.9	10.5	9.3	5	6.2	4	7.7
腹足類	カワアイ	3.2	7.2	3.6	1.3	3.1	3	4	14.5	14.1	7.5
腹足類	スガイ	8.2	6.1	6.3	1.7	3.2	1.8	1	1.4	3.3	2.7
腹足類	カワニナ	0.4	0.9	1.5	0.1	0.5	1.4	0.2	0.2	0.1	0.5
腹足類	クボガイ	0.5	0.4	0.3	0.8	0.5	0.2	0.2	0.8	0.1	0.5
腹足類	ツヤギセルガイ	0.4	0.5	0.4	0.8	0.7	0.7	0.3	0.1	0	0.4
腹足類	アカニシ	1.1	0.6	0.9	0.2	0.3	0.4	0.2	0.3	0.1	0.4
腹足類	ツメタガイ	0.3	0.2	1.1	0.1	0.8	0.9	0.1	0.1	0	0.3
腹足類	クチギレガイ	1.7	0.8	0.2	0	0.4	0.2	0.2	0.1	0.1	0.3
腹足類	イシダタミ	0.1	0.2	0.1	0.2	0.3	0.2	0.1	0.1	0	0.1
腹足類	レイシ	0.2	0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.3	0.1	0.1	0.1
腹足類	オオコシダカラガンガラ	0	0.1	0.1	0	0.1	0	0	0.2	0	0.1
腹足類	サザエ	0.1	0.1	0.2	0	0	0	0	0	0	0.1
腹足類	ヤカドツノガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
腹足類	バイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
腹足類	ヘビガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
腹足類	テングニシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
腹足類	ホソウミニナ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
斧足類	アサリ	18.9	20.2	21	53.7	30.5	18.8	27.2	31.2	34.7	25.9
斧足類	マガキ	23.6	20.3	19.6	23.1	14.9	8.1	22.4	25.2	21.8	19.4
斧足類	ハイガイ	2.2	2.2	7.9	1.6	4.7	9.6	13.7	8.2	4.4	7.2
斧足類	オキシジミ	7.5	3.6	4	4.8	4.7	5.4	6	4.5	5.6	4.7
斧足類	ハマグリ	0.1	0.2	0.2	0.1	0.2	0.2	0.4	0.6	0.1	0.4
斧足類	オオノガイ	0.3	0.4	0.3	0.4	0.8	0	0.1	0.2	0.2	0.3
斧足類	ネズミノテ	0.3	0.3	1.7	0	0	0	0	0	0	0.1
斧足類	カガミガイ	0.1	0.1	0.2	0	0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
斧足類	サルボウ	0	0	0.1	0	0	0.2	0.1	0	0	0.1
斧足類	ナミマガシワモドキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
斧足類	ザルガイ	0	0	0.1	0	0	0	0	0	0	0
斧足類	クマサルボウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
斧足類	ホクロガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
斧足類	ハゴロモ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
斧足類	ベンケイガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
斧足類	イタヤガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
斧足類	キンチャク	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
斧足類	サトウガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		99.9	100.0	100.0	99.6	100.0	100.2	100.1	100.1	100.2	99.9

Tab. 6　桑原飛櫛貝塚出土貝類の各層出土状況表

種類	貝名	第1層	%	第2層	%	第3層	%	合計	種類別%	合計%
腹足類	ウミニナ	2901	8.9	12203	13.1	4600	15.9	19704	30.3	12.7
腹足類	イボウミニナ	3062	9.4	5763	6.2	4576	15.8	13401	20.6	8.7
腹足類	ヘナタリ・フトヘナタリ	1637	5.0	7788	8.4	2542	8.8	11967	18.4	7.7
腹足類	カワアイ	1153	3.5	9088	9.8	1318	4.6	11559	17.8	7.5
腹足類	スガイ	747	2.3	2530	2.7	852	2.9	4129	6.4	2.7
腹足類	カワニナ	77	0.2	378	0.4	352	1.2	807	1.2	0.5
腹足類	クボガイ	106	0.3	543	0.6	60	0.2	709	1.1	0.5
腹足類	ツヤギセルガイ	134	0.4	294	0.3	159	0.5	587	0.9	0.4
腹足類	アカニシ	117	0.4	297	0.3	128	0.4	542	0.8	0.4
腹足類	ツメタガイ	37	0.1	231	0.2	233	0.8	501	0.8	0.3
腹足類	クチギレガイ	148	0.5	279	0.3	49	0.2	478	0.7	0.3
腹足類	イシダタミ	29	0.1	130	0.1	34	0.1	193	0.3	0.1
腹足類	レイシ	74	0.2	80	0.1	22	0.1	176	0.3	0.1
腹足類	オオコシダカラガンガラ	12	0	103	0.1	10	0	125	0.2	0.1
腹足類	サザエ	16	0	55	0.1	21	0.1	92	0.1	0.1
腹足類	ヤカドツノガイ	3	0	1	0	0	0	4	0	0
腹足類	バイ	2	0	1	0	0	0	3	0	0
腹足類	ヘビガイ	2	0	1	0	0	0	3	0	0
腹足類	テングニシ	0	0	2	0	0	0	2	0	0
腹足類	ホソウミニナ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小計		10257	31.3	39767	42.7	14956	51.6	64980	99.9	42.1
斧足類	アサリ	9393	28.7	24410	26.2	6177	21.3	39980	44.6	25.9
斧足類	マガキ	7419	22.7	19010	20.4	3581	12.4	30010	33.5	19.4
斧足類	ハイガイ	3383	10.4	5206	5.6	2475	8.5	11064	12.3	7.2
斧足類	オキシジミ	1994	6.1	3717	4	1487	5.1	7198	9	4.7
斧足類	ハマグリ	109	0.3	380	0.4	55	0.2	544	0.6	0.4
斧足類	オオノガイ	56	0.2	312	0.3	35	0.1	403	0.4	0.3
斧足類	ネズミノテ	19	0.1	71	0.1	110	0.4	200	0.2	0.1
斧足類	カガミガイ	20	0.1	55	0.1	28	0.1	103	0.1	0.1
斧足類	サルボウ	19	0.1	32	0	33	0.1	84	0.1	0.1
斧足類	ナミマガシワモドキ	11	0	15	0	1	0	27	0	0
斧足類	ザルガイ	0	0	0	0	4	0	4	0	0
斧足類	クマサルボウ	0	0	2	0	1	0	3	0	0
斧足類	ホクロガイ	2	0	0	0	1	0	3	0	0
斧足類	ハゴロモ	1	0	0	0	1	0	2	0	0
斧足類	ベンケイガイ	1	0	1	0	0	0	2	0	0
斧足類	イタヤガイ	0	0	1	0	1	0	2	0	0
斧足類	キンチャク	0	0	0	0	0	0	0	0	0
斧足類	サトウガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小計		22427	68.7	53212	57.1	13990	48.2	89629	99.8	58.2
合計		32684	100.0	92979	99.8	28946	99.8	154609	199.7	100.3

Tab. 7　桑原遺跡出土獣骨・魚骨一覧表

※△は出土番号を示す

地区／層	B 2 (G11)	B 3 (G 9)	B 4 (G 7)	B 5 (G 5)	B 6 (G 3)	B 7 (G 1)	B 8 (G15)	C 3 (G10)	C 4 (G 8)
1層	シカ－臼歯2 イノシシ－門歯2 アシカ類	シカ－仙骨1、臼歯		イノシシ	シカ－角1	シカ－歯1 イノシシ－橈骨1 サメ－歯1 アシカ（△1） カメ（△2）	シカ－角1、椎骨1 イノシシ	シカ－下顎骨(右)1、臼歯3、肩甲骨1 イノシシ－基節骨	イノシシかシカ－肋骨1
2層	シカ－肋骨1、臼歯1、顎骨片1 イノシシ－顎骨、臼歯 クジラ1 ウミガメ類1 エイ	シカ－角1、下顎骨(左)1、小臼歯1、臼歯1、椎骨1 イノシシ－上顎骨、臼歯3 イノシシかシカ－臼歯1 サメ－歯1 トリ		シカ－角2、基節骨1 イノシシ－基節骨1 クロダイ	シカ－頸椎1 クジラ－脊椎1	シカ イノシシ－下顎骨(左)1 サル－大腿骨（左)1 カモ－上腕骨1 アホウドリ－橈骨1 マダイ		シカ－角2、臼歯3	
3層		マダイ－腹椎	シカ－角、歯、橈骨 イノシシ－脛骨 クジラ－歯	シカ－下顎骨(左)(△1)、門歯1、橈骨1 イノシシ－基節骨1、上顎骨(左・右)2、臼歯1、小臼歯1、大歯1 イノシシかシカ－疑鎖骨1 ウミガメ類－甲 マダイ フグ ヒガンフグ	シカ－橈骨2、頸骨1、肩甲骨1、下顎骨1、右肩甲骨1	シカ－基節骨1、中節骨1、歯1、大腿骨1、角1 イノシシ－下顎骨1、大腿骨（左）1	シカ－椎骨2		シカ－角2、頸骨2、中足骨1 イノシシ－臼歯4、距骨
4層（破砕層）	シカ－下顎骨（右）	シカ				シカ－脛骨1			

地区／層	C 5 (G 6)	C 6 (G 4)	C 7 (G 2)	C 8 (G16)	C 9 (G18)	A・BT	I区	II区	III区
1層	シカ－中足骨1、中手骨、臼歯	シカ－角1、中足骨 イノシシ－距骨 トリ	シカ イノシシ	シカ－角(△1)2、頸骨1、肋骨1、肩甲骨1、中足骨1、上腕骨1 イノシシ－下顎骨（右）1 クジラ－歯1、脊椎1、指骨(△1)(△3)1 アシカ類	シカ－中節骨1、基節骨1、踵骨(左)1、頸骨1 マダイ	シカ イノシシ－基節骨1 左切歯1	シカ－頸骨、下顎骨（右）1、中足骨、角1、左肩甲骨1 イノシシ－基節骨、中節骨、下顎骨（左・右）2、脾椎1 イノシシかシカ－上顎骨 タヌキ－尺骨 ネズミ類－寛骨1 サメ マダイ ヘダイ クロダイ サバ－尾椎骨 スズキ－尾骨		シカ－脛骨1 イノシシ－基節骨 アシカ類 トリ
2層	シカ－基節骨1、上腕骨1 イノシシ－門歯1、肩甲骨1	シカ－尺骨1、上腕骨1、前頭骨右1 イノシシ－歯1 ミズナギドリ－上腕骨1	シカ－角2、脛骨1、基節骨1、下顎骨歯1 イノシシ－牙1 臼歯1	シカ－角1、椎骨2、指骨1 イノシシ－下顎骨（右）1、基節骨1 イノシシかシカ－距骨1 ウミガメ－甲1	シカ－頸椎骨1、椎骨(△1)、 マダイ	シカ－下顎骨(右)1、肋骨1、寛骨2、肩甲骨1、尺骨1、踵骨1、基節骨1 イノシシ－距骨1、大腿骨1、脛骨1、大顎臼歯1 タヌキ－腰椎骨1 マダイ－顎骨 フグ ヒガンフグ	シカ－肩甲骨1、下顎骨(左)3、胸骨1 イノシシ－下顎骨、距骨 イノシシかシカ－肋骨 マダイ	（1面下・2面） シカ－寛骨1、中足骨1、小臼歯1、橈骨1、顎骨1、下顎臼歯1、下顎骨(△17)1 イノシシ－脛骨1、踵骨、基節骨(△11)1、肩甲骨1 ヒメウ－橈骨1	
3層	シカ－角5、歯3、後頭骨1、中足骨1、上腕骨(左) イノシシ－門歯1、距骨1、橈骨1、基節骨1 トリ マダイ フグ	シカ－椎骨2、基節骨1 イノシシ－大歯1右切歯1 サメ－歯1 イルカ－下顎骨1 マダイ クロダイ	シカ－中節骨1、大腿骨1、後頭骨1、腰椎1 イノシシ－下顎骨2、大歯、臼歯、門歯、肩甲骨3 フグ	シカ－頸椎1、橈骨1、尺骨1、肋骨1 イノシシ－下顎骨1 エイ	シカ（△2）1 アシカ	シカ イノシシ フグ		（2面下） アシカ類－指骨1 アホウドリ－橈骨	シカ フグ
4層（破砕層）				サメ	シカ－腿（右）1		シカ	シカ－角1、右第1臼歯1 イノシシ－下顎骨1、距骨1、中足骨1	

桑原飛櫛貝塚出土の縄文人骨

中橋孝博（九州大学大学院比較社会文化研究科）

はじめに

北部九州は、朝鮮半島に最も近いその地理的環境から、大陸との文化的、人的交流を考える場合には特に注目される地域となっている。当地域から大量に出土する弥生人については、渡来系集団、もしくはその遺伝的影響を受けた人々との認識が近年ようやく一般化しつつあると言えようが、そうした渡来人問題の議論の中で、常に問題点としてあげられてきたのが、当地の縄文人資料の不足であった。縄文時代から弥生時代にかけて、この地域の住人にどのような形質変化が起きたのかを明らかにすることは、弥生人問題、ひいては永年議論されてきた日本人の成立に関する疑問を解明する上で重要な懸案となっている。

そうした縄文から弥生への移行を考える上で、先年、福岡市の西端に位置する糸島半島において、興味深い発掘例が報告された。古くからこの地域には朝鮮半島由来の支石墓の散在することが知られていたが、1986－1987年度の発掘調査によってその一つの新町遺跡（糸島郡志摩町）の支石墓から、ようやく被葬者の遺骨が回収された(橋口、1987)。しかもその人骨の形態的特徴は、いわゆる渡来系弥生人とは異なって西北九州弥生人に近いことが明らかとなり、さらに下顎切歯を対象とした縄文的抜歯風習の痕跡も確認されるなど、渡来系の墓の被葬者としてはその解釈に色々と議論を呼ぶ結果がもたらされた（中橋・永井、1987)。

1992年末から翌年にかけての福岡市教育委員会による発掘調査によって、この糸島半島から新たに６体の縄文人骨が出土した。貝塚に埋葬されていた遺体であるため、骨質の保存状態は非常に良好だが、後世の攪乱などの影響によってかなりの損傷を受けており、残念ながら詳しい検討はその一部に限られた。しかし、縄文から弥生への移行問題で特に重要な地域と言える北部九州の、それも糸島半島での出土例であり、その意義は大きい。ここに人骨の詳しい検討結果を報告する。

遺跡・資料・方法

遺跡：桑原遺跡は、福岡市の西端、糸島半島の福岡市早良区桑原飛櫛に所在する。1992年冬、道路拡張工事中に検出され、翌年にかけて福岡市教育委員会による発掘調査が実施された。当地を流れる桑原川沿いの、現在の標高で約２m、河口から4～500mの地点に形成された貝塚中に見い出された遺跡である。

資料：土器や多数の動物骨と共に、計６体の人骨が出土した(表１)。内一体は、左前腕に多数の貝輪を装着した状態で出土した。

所属時代は、伴出土器などに関する考古学的考察から、いずれも縄文時代後期のものと考えられている。

方法：計測はMartin-Saller（1957）に従い、その他、頭蓋についてはHowells（1973)、鈴木（1963)、山口（1973）の方法を、四肢の脛骨には一部、森本（1971）の方法を用いた。性判定には筆者らの方法（中橋・永井、1986：中橋、1988）を援用した。

表Ⅰ．桑原飛櫛貝塚出土縄文人骨

番号	性	年齢	所属時代	保存部位	頭位	埋葬姿勢	副葬品・その他
1号	男性	熟年	縄文後期	全身	西	仰臥屈肢	抜歯
2号	男性	成人	縄文後期	下肢骨片	北？	仰臥伸展？	抜歯不明
3号	(男性)	(熟年)	縄文後期	軀幹骨	南	仰臥	抜歯不明
4号	女性	熟年	縄文後期	ほぼ全身	北東	仰臥屈肢	貝輪、抜歯なし
5号	不明	小児	縄文後期	ほぼ全身	南西	仰臥伸展	
6号	男性	熟年	縄文後期	頭、四肢骨片	西	仰臥伸展？	抜歯なし

結果

1．1号（男性・熟年）

出土状況：下肢を強屈した仰臥状態で検出された。右上肢は体側にそって下方に伸ばされているが、左上肢は肘で強屈し、手を左肩付近に置いている。また、大腿部はほぼ平行に下方に伸ばされているが、下腿部は膝で強屈して、その両足部はほぼ右寛骨外側付近に揃えられている。左手部など部分的な欠損は認められるが、ほぼ全身骨が遺存している。

頭蓋：眉間部の膨隆、鼻根部の陥凹が強く、眼窩上縁も直線的で水平に近いなど、全体的に縄文人的な顔貌を見せている。

計測結果を表2に、また主要計測項目について比較群と共に表3に示した。脳頭蓋については、頭長、頭幅あるいは水平周など、水平径がやや小さい点が目立つ。ただし頭長幅示数は78.1で、中頭型に入り、他と大差ない。一方、頭高は比較的高く、その示数も比較縄文集団を上回ってやや高頭傾向を示している。

顔面部では、顕著な低顔傾向が認められる。顔幅は縄文人としては少し狭いが、上顔高は著しく低く、その顔面各示数も小さくて後世の北部九州弥生人とは特に大差が見られる。鼻骨は彎曲が強く、その彎曲示数は79.6で、この点でも、当地域の弥生人の平均値（鼻根彎曲示数：88.5）との相違が明らかである。眼窩は上述のように四角く、低眼窩傾向を見せ、鼻示数も広鼻型に入っている。突顎性は弱い。

下顎は脱落歯が多いこともあって、やや華奢な外観を見せている。残存歯には強度の咬耗が見られ、切歯などは上・下顎とも歯頸部近くまで達して、僅かに歯根を残すだけの状態になっている。

以下に歯式を示す。

$\dot{M}^3$	$\dot{M}^2$	M^1	P^2	P^1	C	×	I^1	I^1	×	○	P^1	P^2	M^1	／	／
×	×	×	○	P_1	○	／	○	○	I_2	C	P_1	×	×	×	×

（○：歯槽開放、×：歯槽閉鎖、／：欠損、・：遊離歯）

上顎両側の側切歯の歯槽が閉鎖し、それぞれの犬歯に近心への傾斜が認められる。歯槽閉鎖部に病的変化像が見られず、風習的抜歯の可能性が高い。また、下顎右小臼歯には、外下方への強い傾斜咬耗が見られた。通常のそしゃくだけではない、何らかの生業作業との関連が想起される。

四肢骨：表５、７に計測結果を比較群と共に示した。また、表９に身長の推定結果を表示した。

全体的にやや華奢な傾向が見られる。骨体諸径は縄文人男性としては比較的小さく、他の縄文集団の平均値に比べて下回るものが多い。ただし、三角筋粗面など筋付着部の発達はかなり良好で、上腕骨、脛骨には扁平性が、大腿骨には強度の柱状傾向が認められた。

また、大腿骨と脛骨の長径比は84.1となり、北部九州弥生人（81.3）とは差が大きく、津雲（83.4）や吉胡（82.5）といった縄文集団との類似傾向が認められる。

推定身長は、大腿骨最大長にピアソンの推定式を適用すると、158.2cmで、低身長である（表９）。

２．２号人骨（男性・成人）

左大腿骨と両下腿骨のみ出土した。出土状況から見て、一応、仰臥伸展位と推察されるが詳細は不明である。

下肢骨の計測結果を表７に示した。大腿骨はそれほどでもないが、脛骨はかなり屈強な特徴を見せ、その周径は比較群を大きく上回っている。１号同様、柱状、扁平傾向が認められる。

３．３号人骨（男性？・熟年？）

下位胸椎から仙椎、及び下位肋骨のみが出土した。肋骨や脊椎の出土状況からみて、仰臥位であったと推測できるが、詳細は不明である。下位腰椎の大きさ、並びに老年性の骨棘増成の状況からみて、恐らく年輩の男性のものと推察される。

４．４号人骨（女性・熟年）・５号人骨（小児）

４号は頭を北東に、５号は南西に向け、身体を交叉させた状態で検出された(別項参照)。４号の体部骨は全体的にかなり乱されており、欠失部も多い。そのほぼ腹部にあたる部分から鉢底部が出土したが、さらにその下から４号の腰椎片が出土している。右腕は肘で強屈して手を右肩に、左腕も肘で曲げて手をやはり右肩辺りに置いている。その左前腕には、貝輪が14個装着されていた。下肢は膝を立て、左に倒した状態になっている。

５号は、上肢を体側に沿って伸ばし、下肢も伸展した仰臥位で見いだされた。歯の萌出状況から判断して、９－10歳の小児骨である。

４号の右足骨の上に５号の右上肢が乗っており、埋葬順位としては少なくとも４号が先で、後に５号が埋葬されたものと考えられる。ただし、それが同時埋葬なのか、それともしばらく期間を置いての埋葬だったのかは、後世の古墳時代に攪乱を受けていることもあって、骨の出土状態のみでの断定は困難である。つまり、４号の乱れ、骨の欠失が、古墳時代の攪乱によるものなのか、それとも、あるいは５号埋葬時に乱されたものなのか、現状ではいずれとも判断が困難なためである。４号腹部の鉢をいずれの（あるいは両者の）副葬品とするか、によっても解釈が分かれよう。少なくとも、この鉢も底部しか残っていない事実から、攪乱はかなり４号の骨にも影響を与えた可能性が強いこと、しかし鉢の下から４号の腰椎片が幾つか出土しているが欠失部が多く、その骨盤も鉢と一諸に後世の攪乱を受けたと考えるにしては破壊、欠損が多すぎるように思えること、またその一方で、４号の右足と５号右上肢は、殆ど間層を置かずに接していたことから、４号埋葬後に新たに５号を埋めるための墓壙を掘ったとすると、かなり慎重な作業を要したであろうことを指摘しておきたい。

5号は小児なので、以下に、4号人骨についての検討結果を記す。

頭蓋：鼻部など、一部に欠損はあるが、保存状態はかなり良好である（図版参照）。眉間部の膨隆、鼻根部の陥凹は共にごく弱く、乳様突起、外後頭隆起の発達も弱い。

計測結果を表2、4に示す。脳頭蓋の長、幅径は比較縄文集団と大差ないが、頭高については1号男性同様、少し高い傾向がみられる。長幅示数は80.0で、短頭型の下限値となり、この点でも他の縄文群とは類似する。

顔面部はやや幅径が狭い傾向があるが、上顔高は北九州縄文人にこそ及ばないものの、津雲や吉胡縄文人の平均値より上回っている。その各顔面示数は顔幅の狭さも影響して比較的高値をとる。ただ、北部九州の弥生人に比べれば、いずれも大きく下回り、両者の差は明らかである。眼窩は比較的高いが、鼻型についてはかなり広鼻型に傾く。突顎性はやはり弱い。

歯は歯頸部近くまで強く咬耗しており、酷使していた状況が窺える。以下に歯式を示す。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。

×	×	M_1	○	○	C	○	○	○	○	C	P^1	○	M^1	×	×
×	×	○	P_2	P_1	C	I_2	I_1	○	I_2	C	P_1	P_2	○	M_2	○

四肢骨：計測結果を表6、8に示した。また推定身長を表9に示した。
全体的に女性としてはやや頑丈で、長大な傾向が見られた。長径、骨体諸径のいずれも比較縄文集団の平均値を上回るものが多い。ただ、前腕の骨体断面示数に、他集団とは異なる特徴、つまり橈骨は前後に厚く、尺骨は前後方向に扁平という、縄文人の一般的な骨幹断面形とは異なる点も見られた。大腿骨については比較群と大差無い。

推定身長は148.9cmで、当地の弥生人に比べればやはり少し低い。

5．6号人骨（男性、熟年）

欠損が多く詳細は不明だが、一応、上、下肢とも伸展した仰臥位で埋葬されていたものと見なされる。恐らく後世の攪乱によってかなりの部分が失われており、残存部も、土圧のためか小片化が目立つ。

頭蓋：破片のみ回収され、詳しい特徴は不明である。抜歯痕は見られない。

四肢骨：計測結果を表5、7に示した。

全体的にかなり頑強な特徴が窺える。比較縄文集団の平均値を上回る計測値が多く、例えば大腿骨の中央周は92mmに達し、太い骨体を持つことで知られる北部九州弥生人の平均（90.8mm）をも上回っている。その最大長（424mm）も、当地の弥生人（平均430.9mm）程ではないが、縄文人としては比較的長い。

推定身長（表9）は161.0cmで、かなりの高身長である。

総括・考察

1992－3年度の福岡市西区桑原における発掘調査によって、貝塚中から6体の縄文後期所属の人骨が出土した。福岡市区からは、初めての保存良好な縄文人骨の出土例である。その検討結果は以下のように概括される。

・出土人骨は、男性4体、女性1体、小児1体の計6体で、4号女性と5号小児骨は頭位を逆にした

合葬状態で見いだされた。また、この４号女性は、その左前腕に14枚の貝輪を装着していた。
・頭蓋では、男女（１、４号）とも低顔傾向が見られ、他の縄文人との類似性、及び北部九州弥生人との相違が明らかである。
・１号男性の鼻根部は陥凹が顕著で、鼻骨の彎曲も強いが、４号女性の同部は平坦性が目立つ。
・眼窩型には男女で異なった傾向が見られたが、鼻型ではいずれも広鼻傾向が顕著である。
・歯槽性突顎は弱い。
・一体の男性人骨に（１号）に、上顎の両側、側切歯の風習的抜歯痕が見いだされた。
・四肢骨の骨体断面では、上腕骨や脛骨の扁平性、大腿骨の柱状性が強い。
・一体の男性（１号）において、脛骨が大腿骨に比べて相対的に長い傾向が認められる。
・６号を除いて、腓骨は比較的細い。
・推定身長は、６号男性（161.0cm）がやや高いほかは、他の縄文人に類似して、比較的低身長である（１号男性、158.2、４号女性、148.9cm）。

地理的に朝鮮半島に最も近く、また、弥生時代には周知のように著しい高顔、高身長の弥生人が出現する北部九州域に、どの様な縄文人が居住し、縄文の終わりから弥生時代にかけてどの様な推移を見せたのかを明らかにすることは、当地域における人類学上の重要な課題の一つである。

これまで北部九州で出土している縄文後期を中心とする資料で見る限り、一応、津雲貝塚人をはじめとする他の縄文集団との類似性が認められ、何らかの当地域特有の特徴といったものはまだ明らかにされていない。今回出土の縄文後期人骨もまた、そうした従来の結果を追認するものと言えよう。図２に津雲貝塚人を基準線とした偏差折線を、図１にペンロースの形態距離の計算結果（頭蓋11項目、Martin №：１、８、17、45、46、47、48、51、52、54、55）を示した。ペンロースの形態距離において、例えば津雲貝塚人との差がかなり大きく示されているが、これは図２に明らかなように、脳頭蓋での大差が影響した個体変異に帰し得る結果と考えられ、より時代性の現れる顔面部についてはその低顔性などに津雲との明らかな類似性が認められる。鼻根部の陥凹の強さ、鼻骨の彎曲の強さ、歯の咬耗の強さなどにも、縄文人としての時代特性が窺えよう。

北部九州の縄文人については、今回の資料を含めてもなお、重要な顔面各部の計測数は10例に満たず、有意の議論は困難な状況であり、とりわけ弥生時代との関係でより重要視される縄文晩期の資料はいまだ皆無に近い。今後の資料追加が待たれるところである。

最後に今回の結果で注目される点として、一体の男性人骨に、風習的抜歯痕が検出されたことを上げておきたい。これまで福岡県下発見の山鹿貝塚などの縄文後期人には抜歯痕が発見されたことはなく、初めての事例といえる。また、その形式が上顎両側の側切歯を対象としたものだという点も注目される。この形式は、土井ケ浜弥生人に多いこと（中橋、1990）が明らかになっているが、福岡県はもとより、周辺の九州、山口辺りの縄文後、晩期からはこれまで殆ど類例が出土していない。僅かに１体ではあり、現時点での詳しい検討は無理だが、同形式が中国新石器時代人の抜歯形式（韓・藩、1981）に共通することは興味深い。この点についても今後の資料追加が切望される。

謝辞

当人骨を研究する機会を与えて頂き、発掘から整理、分析にいたるまで種々御教示と御助力頂いた福岡市教育委員会の諸先生、諸氏に深謝致します。また、発掘には、九州大学医学部放射線科の古賀英也先生にも多大な御助力を頂いた。記して心から謝意を表します。

文　献

阿部英世（1955）：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」、人類学研究２。

原田忠昭（1954）：「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」、人類学研究１。

橋口達也（1987）：「新町遺跡」、志摩町文化財調査報告書７、志摩町教育委員会。

Howells,W.W.（1973）：Cranial variation in man. Pap. Peabody Mus. Archaeol. Ethnol., vol.67, Harvard Univ.

池田次郎（1988）：「吉備地方海岸部の縄文時代人骨」、考古学と関連科学（鎌木義昌先生古希記念論集）

鑄鍋命達（1955）：「九州人下腿骨の研究」、人類学研究２。

石沢命達（1931）：「吉胡貝塚人骨の人類学的研究、第３部、下肢骨の研究」、人類学雑誌46。

金関丈夫・永井昌文・佐野一（1960）：「山口県豊北町土井ケ浜遺跡出土の弥生式時代人頭骨」、人類学研究７。

韓康信・藩其風（1981）：「我国抜牙風俗的源流乃其意義」、考古1981－1。

金高勘次（1928）：「吉胡貝塚人頭骨の人類学的研究」、人類学雑誌43。

清野謙次・平井隆（1928）：「津雲貝塚人骨の人類学的研究、第３部、上肢骨の研究；第４部、下肢骨の研究」、人類学雑誌43。

清野謙次・宮本博人（1926）：「津雲貝塚人人骨の人類学的研究、第２部、頭蓋骨の研究」、人類学雑誌41。

Martin-Saller（1957）：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.

松下孝幸（1981）：「佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨」、大友遺跡、佐賀県呼子町文化財調査報告書１。

溝口静男（1957）：「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」　人類学研究４。

森本岩太郎（1971）：「脛骨横断指数の算出をめぐって－Martin法への反省」、人類誌79。

内藤芳篤（1971）：「西北九州出土の弥生時代人骨」、人類学雑誌79。

中橋孝博（1987）：「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」、人類学雑誌95。

中橋孝博（1988）：「古人骨の性判定法」、日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）、六興出版。

中橋孝博（1990）：「土井ケ浜弥生人の風習的抜歯」、人類学雑誌、98。

中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。

中橋孝博・永井昌文（1987）：「福岡県志摩町新町遺跡出土の縄文・弥生移行期の人骨」、志摩町文化財調査報告書、７。

Nakahashi, T. and M.Nagai（1986）：Sex assessment of fragmentary skeletal remains. J. Anthrop. Soc. Nippon,94.

中橋孝博・永井昌文（1989）：「弥生人の形質」、弥生文化の研究１、雄山閣出版。

中橋孝博・土肥直美・永井昌文（1985）：「金隈遺跡出土の弥生時代人骨」史跡金隈遺跡、福岡市埋蔵文化財調査報告書123。

大場秀夫（1935）：「吉胡貝塚人骨の人類学的研究、第４部、上肢骨の研究」、人類誌50。

専頭時義（1957）：「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」、人類学研究４。

鈴木尚（1963）：「日本人の骨」、岩波新書477。

Yamaguchi, B.（1973）：Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. Bull. Natn. Sci. Mus. Tokyo, 16.

表２．桑原遺跡出土縄文時代人骨・頭蓋計測値

Martin No.		男性（１号）	女性（４号）
M 1	頭最大長	178	176
M 8	頭最大幅	139	141
M17	Ba-Br高	138	134
M 8／1	頭長幅示数	78.1	80.0
M17／1	頭長高示数	77.5	76.1
M17／8	頭幅高示数	99.3	95.0
M 5	頭基底長	106	94
M 9	最小前頭幅	96	95
M11	両耳幅	125	123
M12	最大後頭幅	113	105
M23	頭蓋水平周	508	511
M24	横弧長	316	306
M25	正中矢状弧長	—	367
M40	顔長	(100)	89
M43	上顔幅	106	100
M44	両眼窩幅	100	95
M45	頬骨弓幅	139	128
M46	中顔幅	(104)	96
M47	顔高	(116)	(108)
M48	上顔高	64	64
M47／45	顔示数（K）	83.5	84.4
M47／46	顔示数（V）	111.5	112.5
M48／45	上顔示数（K）	46.0	50.0
M48／46	上顔示数（V）	61.5	66.7
M51	眼窩幅（左）	42	41
M52	眼窩高（左）	33	34
M52／51（L）	眼窩示数（左）	78.6	82.9
M54	鼻幅	26	26
M55	鼻高	48	47
M54／55	鼻示数	54.2	55.3
M50	前眼窩間幅	20.7	—
MF	鼻根横弧長	26	—
M50／F	鼻根彎曲示数	79.6	—
M57	鼻骨最小幅	10.7	—
M72	全側面角	85	85
M73	鼻側面角	90	89
M74	歯槽側面角	72	72
H.VRR	Vertex Rad.	126	128
H.NAR	Nasion Rad	94	85
H.SSR	Subsp Rad.	94	85
H.PRR	Prosth Rad.	98	90
M65	下顎頭間幅	—	126
M66	下顎角幅	103	101
M68	下顎骨長	74	72
M68（1）	下顎骨長	—	100
M69	オトガイ高	33	28
M69（3）	下顎体厚（左）	—	14
M70	下顎枝高（左）	—	58
M70a	下顎頭高（左）	—	56
M71	下顎枝幅（左）	35	34
M71a	最小下顎枝幅（左）	35	34
M79	下顎枝角	—	116
M71／70	下顎枝示数（左）	—	58.6

表3．主要頭蓋計測値の比較（男性）

		桑原（縄文）1号	北九州[1]（縄文） N	M	津雲[2]（縄文） N	M	吉胡[3]（縄文） N	M	北九州[4]（弥生） N	M	西北九州[5]（弥生） N	M	西南日本[6]（現代） N	M
1	頭蓋最大長	178	12	184.6	37	185.3	42	183.2	118	183.7	21	182.8	108	181.4
8	頭蓋最大幅	139	13	144.2	44	146.0	43	145.0	117	142.4	20	144.9	108	139.3
17	Ba-Br高	138	8	134.5	33	133.3	12	137.7	101	137.7	15	134.6	108	139.3
8／1	頭長幅示数	78.1	12	78.3	37	78.8	38	79.2	104	77.7	20	79.2	108	76.6
17／1	頭長高示数	77.5	8	72.9	32	71.7	11	75.4	91	75.3	15	74.2	108	76.9
17／8	頭幅高示数	99.3	8	93.7	33	91.1	12	95.7	91	97.0	14	93.1	108	100.1
45	頬骨弓幅	139	6	145.5	21	143.8	9	140.1	103	140.0	12	138.4	106	134.5
46	中顔幅	(104)	8	107.6	28	103.6	22	104.1	114	104.7	17	105.0	107	99.9
47	顔高	(116)	8	117.1	26	115.5	13	116.1	80	123.8	14	117.1	66	122.2
48	上顔高	64	8	68.8	28	65.8	15	64.3	114	74.8	17	68.1	92	71.8
47／45	顔示数（K）	83.5	5	78.8	18	79.9	5	81.2	71	88.4	12	84.6	64	91.4
47／46	顔示数（V）	111.5	8	109.1	20	112.6	10	108.8	74	118.4	14	111.8	65	122.2
48／45	上顔示数（K）	46.0	5	46.9	19	45.9	4	45.1	95	53.3	12	49.3	90	53.5
48／46	上顔示数（V）	61.5	8	64.0	21	64.8	14	60.5	105	71.5	17	64.8	91	71.8
51	眼窩幅（左）	42	7	42.6	30	43.5	20	43.1	89	43.2	15	43.1	108	43.0
52	眼窩高（左）	33	7	32.7	28	33.8	17	33.1	93	34.5	15	32.8	108	34.4
52／51	眼窩示数（左）	78.6	6	77.4	27	77.4	13	76.7	86	79.9	15	76.2	108	80.2
54	鼻幅	26	7	27.9	30	26.9	21	26.6	117	27.1	16	27.8	108	25.9
55	鼻高	48	8	49.5	30	49.8	15	48.0	116	52.8	16	51.0	108	52.2
54／55	鼻示数	54.2	7	56.2	27	53.7	14	55.0	113	51.4	16	54.4	108	49.8
72	全側面角	85	5	84.6	13	81.9	6	80.8	85	84.5	15	82.0	92	83.8
74	歯槽側面角	72	5	75.8	13	70.9	7	68.6	83	69.8	—	—	107	70.7

1）中橋・永井（1989）　2）池田（1988）；清野・宮本（1925）　3）金高（1928）　4）中橋・永井（1989）
5）内藤（1971）　6）原田（1954）

表4．主要頭蓋計測値の比較（女性）

	桑原（縄文）4号	北九州（縄文）		津雲（縄文）		吉胡（縄文）		北九州（弥生）		西北九州（弥生）		西南日本（現代）	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 頭蓋最大長	176	10	174.6	39	175.9	31	176.7	86	177.0	15	178.1	57	172.8
8 頭蓋最大幅	141	10	140.4	41	141.2	29	141.7	84	138.4	15	139.3	57	134.0
17 Ba－Be高	134	6	132.2	28	127.1	8	136.3	66	130.7	7	127.3	57	131.3
8／1 頭長幅示数	80.0	10	80.4	37	80.2	25	80.1	72	78.1	15	78.2	57	77.6
17／1 頭長高示数	76.1	6	76.1	28	72.2	7	77.1	62	74.1	7	71.2	57	76.0
17／8 頭幅高示数	95.0	6	95.4	27	89.5	7	96.5	56	94.9	7	92.5	57	98.0
45 頬骨弓幅	128	7	130.6	15	132.6	2	132.5	61	131.3	6	130.2	57	123.9
46 中顔幅	96	6	101.2	21	99.6	12	98.7	67	99.8	11	95.9	57	93.4
47 顔高	(108)	4	110.5	21	106.2	6	108.2	45	116.3	9	104.9	14	112.9
48 上顔高	64	6	66.8	23	62.6	7	60.9	66	70.1	12	60.9	55	68.2
47／45 顔示数（K）	84.4	4	84.4	11	80.1	2	82.7	34	88.7	6	81.7	14	90.8
47／46 顔示数（V）	112.5	4	109.3	15	108.9	6	110.7	39	116.7	9	109.5	14	119.0
48／45 上顔示数（K）	50.0	6	50.9	11	47.6	1	47.7	49	53.7	6	47.6	55	55.0
48／46 上顔示数（V）	66.7	6	66.2	15	63.8	6	61.6	57	70.2	11	63.5	55	72.9
51 眼窩幅（左）	41	6	41.3	18	41.9	13	41.8	66	41.6	10	41.1	57	40.5
52 眼窩高（左）	34	7	34.0	14	33.8	7	32.3	65	34.1	10	31.2	57	34.0
52／51 眼窩示数（左）	82.9	6	83.1	14	81.5	6	74.8	62	82.0	10	75.9	57	83.9
54 鼻幅	26	6	26.7	26	25.4	17	25.5	72	26.6	12	26.6	57	25.0
55 鼻高	47	6	47.8	25	46.2	11	44.8	71	49.8	12	46.3	57	48.6
54／55 鼻示数	55.3	6	55.7	23	54.7	11	56.1	69	53.5	12	57.4	57	51.4
72 全側面角	85	6	83.7	10	81.8	2	80.0	48	83.5	10	81.5	55	83.0
74 歯槽側面角	72	2	75.5	11	69.6	3	66.7	47	67.9	—	—	55	67.1

表5．上肢骨計測値（男子、左）

		桑原（縄文）		津雲（縄文）		吉胡[1]（縄文）		北部九州（弥生）		大友[2)]（弥生）		九州[3)]（現代）	
		1号	6号	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨													
1	最大長	—	—	36	284.3	27	283.9	22	302.6	11	291.4	106	295.3
2	全長	—	—	35	280.6	27	279.9	17	296.8	8	285.8	106	290.6
5	中央最大径	23	—	50	24.1	25	24.7	76	23.3	34	23.4	106	21.9
6	中央最小径	16	—	50	17.8	25	18.1	76	17.4	33	17.6	106	16.9
7	骨体最小周	63	—	50	64.0	42	66.6	81	63.9	33	63.5	106	61.8
7a	中央周	67	—	50	69.3	25	72.1	75	67.8	33	68.2	106	63.7
6／5	骨体断面示数	69.6	—	50	73.9	25	73.4	76	74.9	33	75.0	106	79.1
7／1	長厚示数	—	—	36	22.7	27	23.8	22	21.3	11	22.4	106	20.9
橈　骨													
1	最大長	—	—	27	230.6	28	227.1	37	236.5	6	231.5	64	219.9
2	機能長	—	—	28	217.4	28	214.4	28	220.0	9	215.8	64	208.2
3	最小周	43	—	38	44.0	44	48.5	78	43.1	15	44.7	63	40.1
4	骨体横径	16	—	42	17.1	43	19.4	79	17.2	25	17.1	63	16.0
4a	骨体中央横径	—	—	—	—	—	—	50	16.0	25	16.4	63	15.2
5	骨体矢状径	12	—	42	12.0	43	13.0	79	12.5	25	12.4	63	11.7
5a	骨体中央矢状径	—	—	—	—	—	—	50	12.6	26	12.4	63	11.9
3／2	長厚示数	—	—	27	20.5	28	22.6	28	19.8	5	20.5	61	20.4
5／4	骨体断面示数	75.0	—	42	70.2	43	67.8	79	72.6	25	72.3	60	71.4
5a／4a	中央断面示数	—	—	—	—	—	—	50	78.6	25	75.2	—	—
尺　骨													
1	最大長	—	—	19	249.1	21	243.5	12	253.2	9	249.6	62	236.2
2	機能長	—	—	25	219.7	19	216.6	15	224.7	13	222.9	64	209.2
3	最小周	—	—	34	37.7	45	39.9	63	37.4	22	37.2	65	35.8
11	矢状径	13	14	50	14.3	51	15.1	100	13.2	26	15.0	63	12.8
12	横径	15	19	50	16.3	51	16.6	100	17.6	26	17.2	64	16.5
3／2	長厚示数	—	—	25	17.4	19	18.7	15	16.8	13	16.8	63	17.0
11／12	骨体断面示数	86.7	73.7	50	88.5	47	92.2	100	75.4	26	88.0	63	74.9

1）大場（1935）　2）松下（1985）　3）専頭（1957）、溝口（1957）

表6．上肢骨計測値（女性、左）

		桑原4号（縄文）		津雲（縄文）		吉胡（縄文）		北部九州（弥生）		大友（弥生）		九州（現代）	
		R	L	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨													
1	最大長	—	—	21	264.4	20	270.0	11	283.2	4	262.3	36	271.7
2	全長	—	—	19	259.6	20	267.1	8	282.3	4	257.8	36	268.6
5	中央最大径	20	19	40	19.7	34	21.1	35	21.0	20	21.0	36	19.8
6	中央最小径	14	14	41	14.0	34	15.7	36	15.3	20	15.8	36	14.8
7	骨体最小周	55	54	42	53.9	32	59.2	47	56.9	19	57.6	36	54.8
7a	中央周	57	57	40	56.5	22	61.8	33	60.7	19	61.8	36	56.9
6／5	骨体断面示数	70.0	73.4	40	71.3	33	72.9	35	73.2	20	75.9	36	75.3
7／1	長厚示数	—	—	21	20.4	18	22.2	11	19.8	11	22.4	36	20.9
橈　骨													
1	最大長	—	—	24	208.2	23	209.1	17	215.1	2	207.0*	12	199.2
2	機能長	—	—	26	196.4	23	198.6	11	204.3	2	194.0*	12	187.0
3	最小周	41	40	30	36.4	43	41.1	52	37.9	9	40.4	12	34.7
4	骨体横径	15	15	34	14.6	50	16.4	56	15.7	11	16.4	12	14.5
4a	骨体中央横径	—	—	—	—	—	—	24	14.3	11	15.9	12	13.5
5	骨体矢状径	12	11	34	9.8	49	11.0	56	10.9	11	11.2	12	9.7
5a	骨体中央矢状径	—	—	—	—	—	—	24	10.8	12	10.9	12	9.7
3／2	長厚示数	—	—	25	18.2	22	20.9	11	17.7	1	19.7*	11	18.1
5／4	骨体断面指数	80.0	73.3	34	67.5	50	67.5	56	69.3	11	68.7	10	68.3
5a／4a	中央断面示数	—	—	—	—	—	—	24	75.7	11	69.7	—	—
尺　骨													
1	最大長	240	—	12	227.2	20	226.5	6	236.5	1	223.0	12	215.0
2	機能長	214	—	12	198.6	19	201.4	8	207.6	2	207.0	12	189.2
3	最小周	37	35	24	32.8	25	36.1	34	34.4	7	33.9	12	32.1
11	矢状径	10	10	37	11.3	50	13.1	54	11.2	12	12.8	12	10.9
12	横径	16	16	37	13.6	50	14.4	54	16.0	11	15.9	12	13.9
3／2	長厚示数	17.3	—	12	16.4	17	18.1	7	16.5	2	16.7	12	16.8
11／12	骨体断面示数	62.5	62.5	37	83.5	49	91.7	54	70.4	11	82.0	12	77.5

表７．下肢骨計測値の比較（男性、左）

項　目	桑原（縄） 1号	2号	6号	津雲(縄)[1] N	M	吉胡(縄)[2] N	M	北九州(弥)[3] N	M	九州(現代)[4] N	M
大腿骨											
1，最大長	(409)	—	(424)	19	414.1	20	420.2	60	430.9	59	406.5
6，骨体中央矢状径	30	29	31	47	29.0	20	29.8	162	29.7	59	26.5
7，骨体中央横径	24	26	26	47	26.0	66	26.0	166	28.0	59	25.6
8，骨体中央周	87	87	92	47	87.4	66	89.2	161	90.8	59	82.4
9，骨体上横径	27	30	29	43	30.7	47	30.2	115	32.6	59	29.4
10，骨体上矢状径	24	27	26	43	25.5	48	25.0	115	26.2	59	24.3
6／7，中央断面示数	125.0	111.5	119.2	47	111.8	66	114.8	162	106.4	58	103.8
10／9，上骨体断面示数	88.9	90.0	89.7	43	83.1	47	83.5	115	80.5	58	82.8
脛　骨											
1a　最大長	(344)	—	—	22	343.6	25	343.5	52	350.5	65	326.9
8，中央最大径	32	—	—	46	32.3	60	31.0	74	32.0	61	27.8
8a，栄養孔位最大径	36	38	—	38	35.2	55	34.2	153	36.5	60	30.6
9，中央横径	18	—	—	46	20.4	61	21.0	75	22.9	61	21.1
9a，栄養孔位横径	21	23	—	38	22.2	54	23.3	153	25.3	61	23.7
10，骨体周	79	—	—	45	84.5	61	84.7	110	85.6	62	78.4
10a，栄養孔異周	91	96	—	38	92.8	54	93.4	151	96.9	61	88.9
10b，最小周	74	—	—	41	76.7	54	77.8	185	77.4	60	71.3
9／8，中央断面示数	56.3	60.5	—	46	63.3	54	68.0	110	72.5	61	76.1
9a／8a，栄養孔位断面示数	58.3	—	—	38	63.0	54	68.0	152	69.5	60	77.5
腓　骨											
2，中央最大径	16	(15)	18	44	17.8	52	18.8	80	17.0	60	14.5
3，中央最小径	12	(13)	13	44	12.2	52	11.8	80	11.5	59	10.0
4，中央周	45	(45)	51	44	51.3	52	52.8	81	47.2	59	41.5
3／2，中央断面示数	75.0	(86.7)	72.2	44	68.6	52	63.6	80	68.1	59	69.5

1）池田（1988）　2）石沢（1931）　3）中橋・永井（1989）　4）阿部（1955）、鑄鍋（1955）

表8．下肢骨計測値（女性、左）

		桑原4号（縄文）		津雲（縄文）		吉胡（縄文）		北部九州（弥生）		大友（弥生）		九州（現代）	
		R	L	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨													
1	最大長	(392)	—	22	388.2	19	386.2	34	405.5	5	386.8	13	380.1
2	自然位長	—	—	22	381.7	19	381.9	11	403.0	4	378.3	13	375.9
6	中央矢状径	26	26	45	25.2	67	26.3	112	25.7	30	25.5	13	23.6
7	中央横径	24	24	45	24.2	67	24.5	112	26.3	30	25.2	13	23.2
8	中央周	79	78	45	78.0	68	80.8	111	81.5	29	80.4	13	74.2
9	骨体上横径	28	27	42	28.4	56	29.1	86	30.5	30	29.7	13	27.5
10	骨体上矢状径	22	22	42	22.2	56	22.8	86	23.2	30	22.7	13	21.3
8／2	長厚示数	—	—	21	20.3	19	20.8	11	20.8	4	20.3	13	19.8
6／7	中央断面示数	108.3	108.3	45	104.5	67	107.5	112	98.3	31	102.1	13	102.0
10／9	上骨体断面示数	78.6	81.5	42	78.2	56	78.7	86	76.4	30	76.5	13	77.1
脛　骨													
1	全長	—	—	17	319.8	21	318.1	20	324.3	3	313.0	14	301.0
1a	最大長	—	—	17	324.4	21	321.9	30	329.3	4	324.8	14	306.6
8	中央最大径	—	—	42	27.3	62	27.4	46	27.0	24	27.6	14	24.7
8a	栄養孔位最大径	—	—	37	30.5	59	30.3	97	30.8	19	30.4	14	28.1
9	中央横径	—	—	42	17.9	62	18.3	46	20.4	26	19.7	14	18.8
9a	栄養孔位横径	—	—	36	19.4	59	20.3	98	22.3	20	21.1	14	21.1
10	骨体周	—	—	42	73.4	62	75.9	46	74.5	23	75.3	14	70.1
10a	栄養孔位周	—	—	35	81.3	57	82.8	96	83.2	18	81.6	14	78.2
10b	最小周	65	—	35	67.6	67	69.8	82	68.6	24	68.3	14	63.6
9／8	中央断面示数	—	—	42	65.8	62	66.8	46	75.7	23	72.1	14	76.3
9a／8a	栄養孔位断面示数	—	—	36	63.6	59	67.0	97	72.4	18	70.4	14	74.9
10b／1	長厚示数	—	—	17	21.1	21	22.1	20	21.3	3	21.4	14	21.2
腓　骨													
1	最大長	327	—	8	316.9	18	307.3	2	328.0	—	—	14	300.6
2	中央最大径	17	—	32	14.7	54	15.1	34	14.7	—	—	14	12.9
3	中央最小径	10	—	32	10.0	54	10.3	34	9.8	—	—	14	8.6
4	中央周	45	—	32	42.8	53	44.2	34	40.7	—	—	14	36.8
4a	最小周	—	—	20	34.0	41	35.4	8	35.6	—	—	14	32.3
3／2	中央断面示数	58.8	—	32	68.3	54	68.7	34	67.3	—	—	14	67.6
4a／1	長厚示数	—	—	8	11.0	18	11.4	2	10.8	—	—	14	10.8

表9．推定身長の比較

(cm)

	男性 N	男性 M	女性 N	女性 M
桑　原　（縄）1号		158.2		
6号		161.0		
4号				148.9
北部九州　（縄）	8	159.2	6	150.5
津　雲　（縄）*	13	159.9	16	147.3
吉　胡　（縄）*	22	158.9	18	147.7
山　口　（弥）	49	163.3	35	151.4
北部九州　（弥）	80	162.1	52	151.2
西北九州　（弥）	16	158.8	8	147.9
大　友　（弥）	15	159.1	2	149.0
広　田　（弥）	14	154.0	10	142.8
北部九州・山口（古）	40	162.8	15	150.2
吉母浜　（中）[1]	18	159.7	22	146.5

* 右大腿骨最大長の平均値より算出　1）中橋・永井（1985）

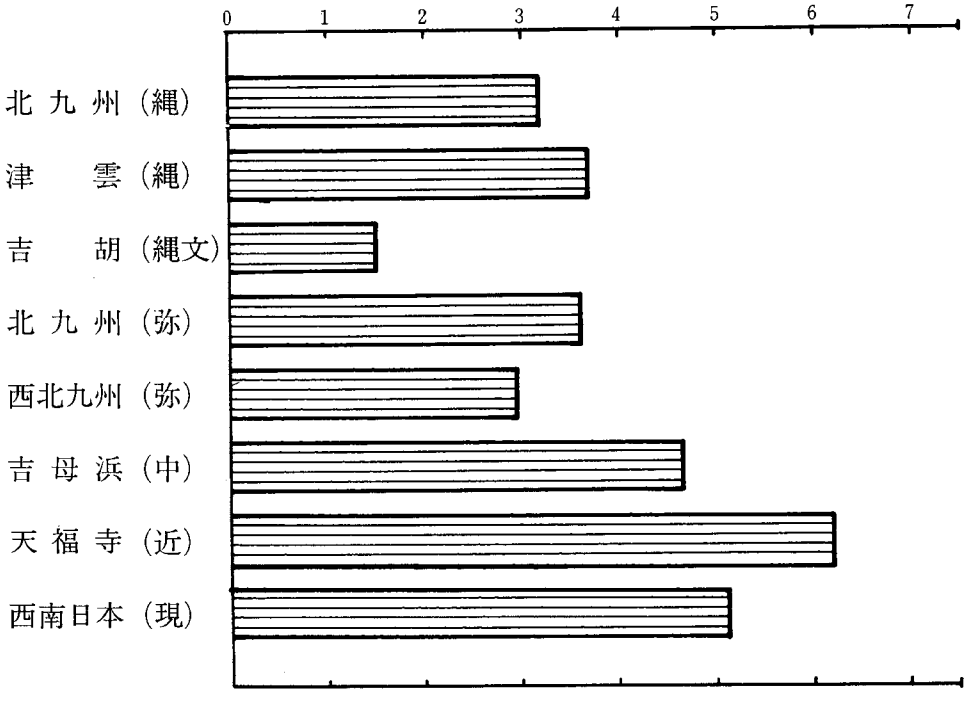


図１．ペンロースの形態距離（頭蓋11項目、男性）

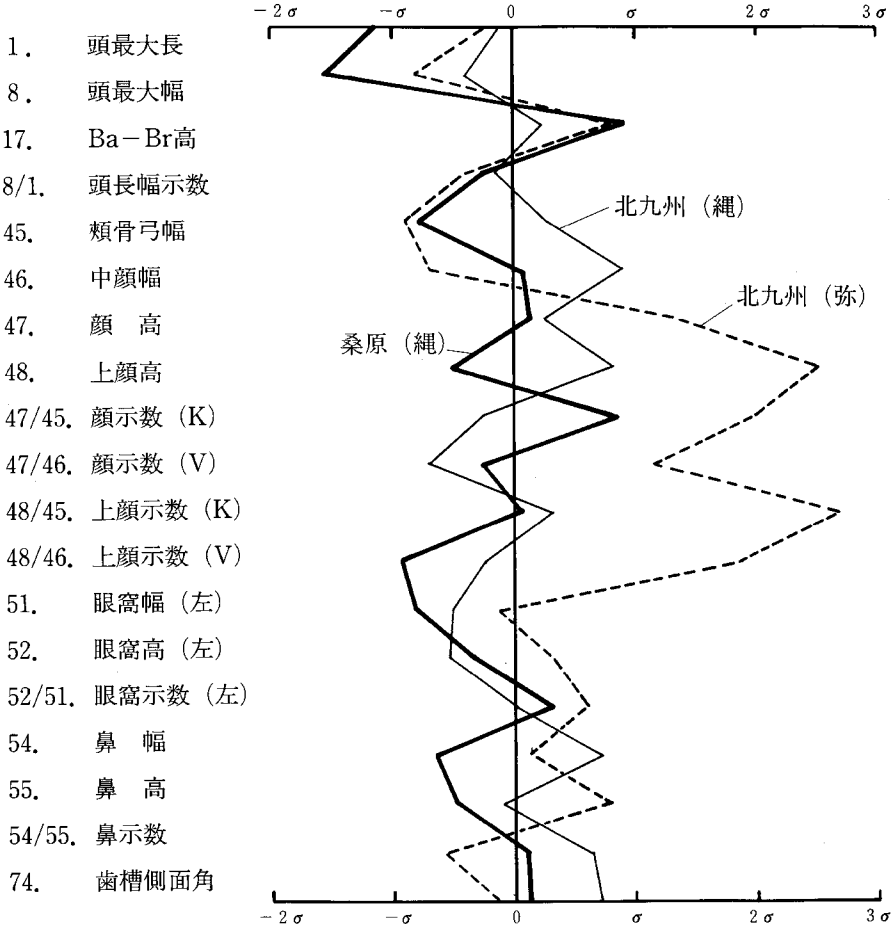
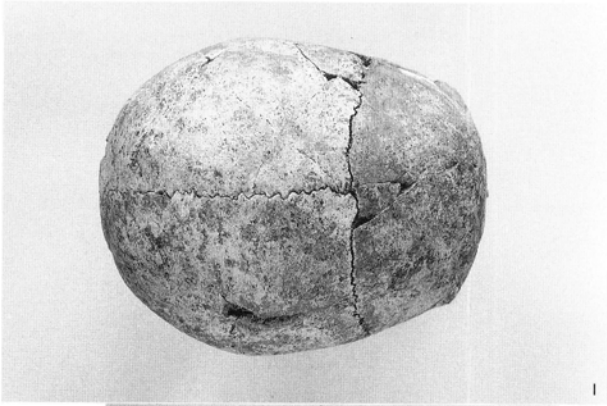
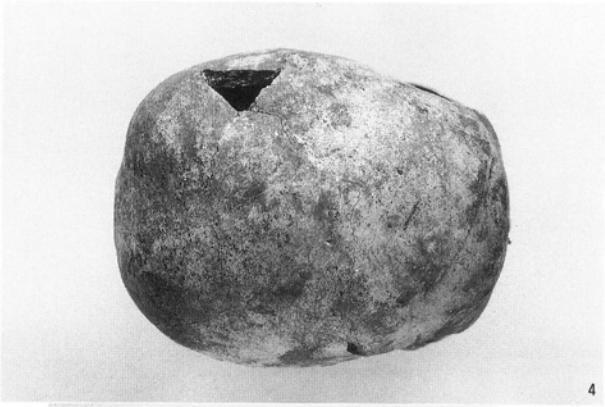
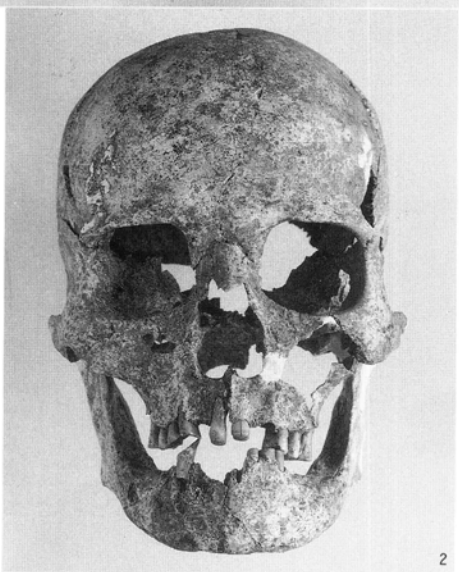
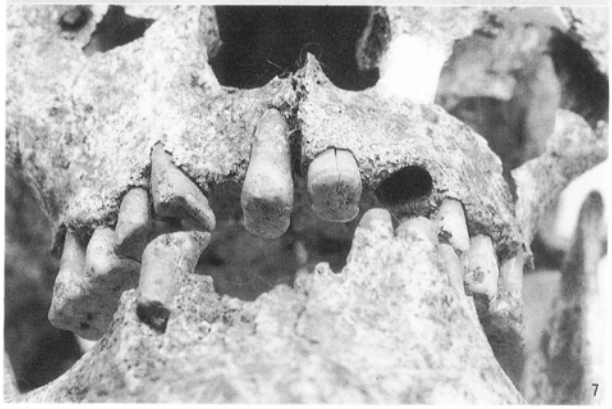


図２．偏差折線（基準線　津雲縄文人・男性）









桑原遺跡出土縄文後期人骨

左列：１号（男性・熟年）
左下－抜歯痕
右列：４号（女性・熟年）

桑原飛櫛貝塚の自然遺物（その１）—貝類について

九州大学　下山　正一

はじめに

自然遺物のうち、貝類は現在の生息条件がよく知られており、貝塚の貝類集団を貝殻捕獲と貝殻保存の観点から研究することで、糸島地域東部における縄文時代後期の人類活動のうち、海岸の生産活動が把握できると考えられる。

調査方法

貝殻組成の垂直変化を調べるため、今回の発掘現場の貝塚中央部のG-４区と縁辺部のG-８区において、貝殻ブロック（25×25㎠の面積、深さ10㎝）を垂直方向の土層単位にそれぞれ３ないし４個採取した。貝殻ブロックは土層単位に対応して、上からⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ層と番号を付けた（Ⅰが最上部）。ただし、G-４区のⅠ、Ⅱ、Ⅲ層とG-８区のⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ層は上からの相対的区分であり、土層番号の対応関係が明らかではない。採取した貝殻ブロックを２㎜目のふるいで水洗しながらふるい分け、ふるい上に残った残渣を回収した。乾燥した回収残渣から貝殻をすべて拾い上げ、種別に分類し、集計した（付表１～７）。ただし、破片化している二枚貝の貝殻は殻頂のあるものを１個とし、破損貝殻、完全貝殻、左右殻別にカウントし、左右殻数のうち、多い方をその種の個体数とした。破片化した巻貝は軸柱と最太部分が一巻き以上残っているものを１個とした。ただし、殻頂部だけのものは破損貝殻数から除いた。また、キセルガイなどの、ごく少数の陸貝も含まれているが、これらは人類活動とは無関係に混入したと考え、カウントからは除外した。

結果—貝の組成

付図１～３にG-４の、付図３～７にG-８の貝類組成を示した。貝類には二枚貝と巻貝がある。従来の貝塚の報告書では両者は貝類として一括されているが、生態、採集の手間等が大きく異なるので、別々に集計した。二枚貝の種ではアサリ、マガキ、ハイガイ、オキシジミ、巻貝ではイボウミニナ、ウミニナ、フトヘナタリ、ヘナタリ、スガイ、クボガイ、クマノコガイが優占している。優占の程度は当時の捕獲量を反映しているものと考えられる。二枚貝の優占種はすべて内湾潮間帯中部の干潟に生息する貝類種群である。巻貝のうち、イボウミニナ、ウミニナ、フトヘナタリ、ヘナタリは内湾潮間帯中部の干潟に生息する内湾干潟種群、スガイ、クボガイ、クマノコガイは外海潮間帯の岩礁や転石帯に生息する外海岩礁種群である。

考察

１．桑原飛櫛貝塚周辺の古地形と貝類採集活動域

桑原飛櫛貝塚周辺における縄文時代当時の貝類の生息地を推定する上で、考慮しなければならないのは、現在の貝類の生息環境と縄文時代の旧汀線である。現在海岸付近の貝類の生息環境はよく知られているが、縄文時代の旧汀線については議論が必要である。糸島地域には東の今津湾から西の加布里湾にかけて標高５m以下の低地が帯状につらなっている。山崎（1955）および樗木（1958）はこの帯状低地部分にかつて志摩郡と怡土郡を分離する海域が海峡として存在したとし、その海峡を糸島水道

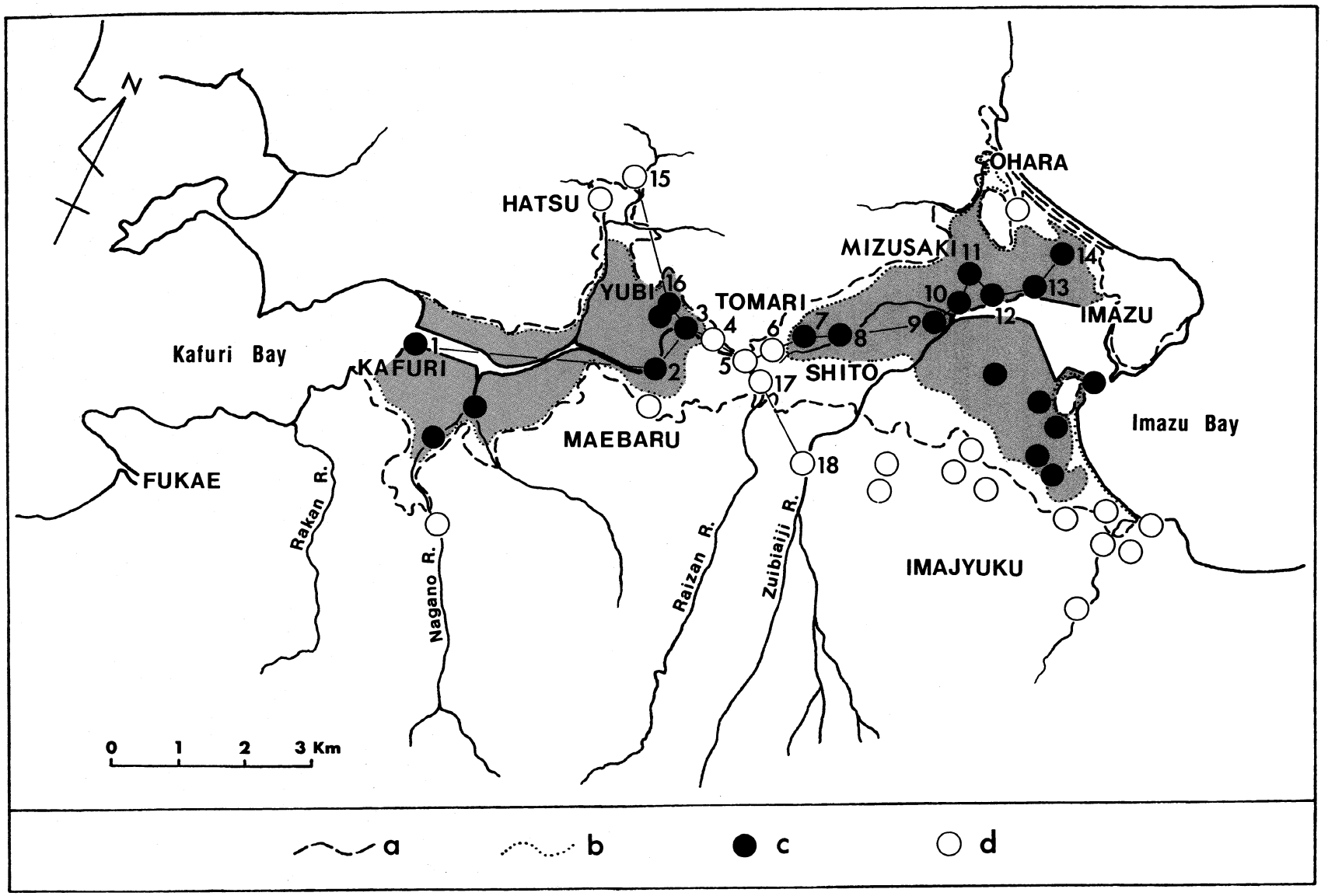


図１　糸島地域における縄文海進ピーク時期の推定海岸線
下山ほか（1986）による。ａ：標高５ｍの等高線、ｂ：標高2.5mの等高線、ｃ：地下に海成層がある試錐の位置、ｄ：地下に海成層がない試錐の位置

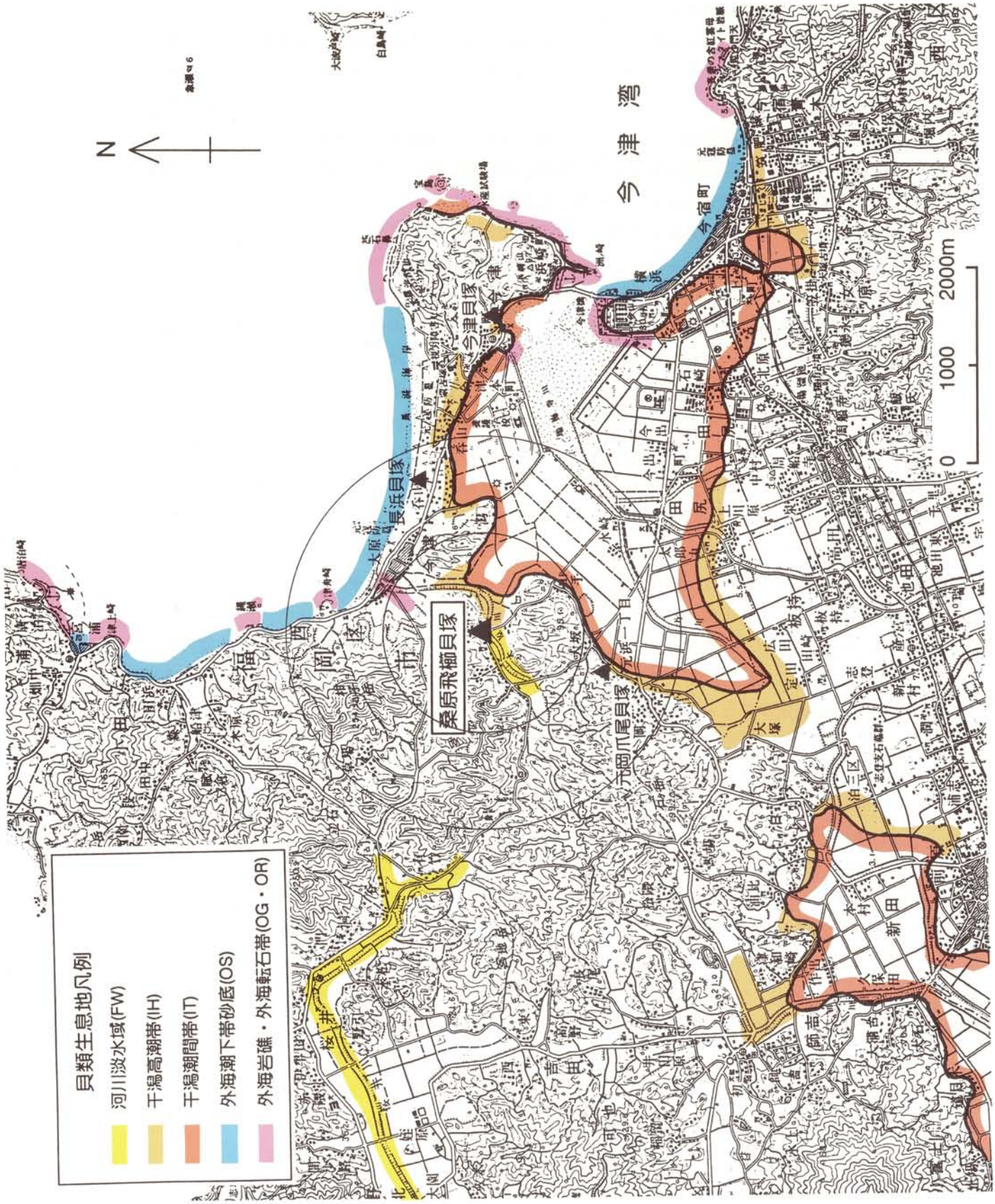


図２　桑原飛櫛貝塚と旧汀線を考慮した場合の貝類生息地の位置関係
生息地の記号（FW、IH、IT、OS、OG、OR）は付表１（１～７）に対応する。

と呼んだ。海峡状の海域が存在したのなら低地の地下にはその証拠である海成層が残されているはずである。下山ほか（1986）は多数のボーリング資料を用いて、低地地下の海成層の分布を調べた。その結果、海成層の存在は標高2.5m以下の部分に限られること、低地中央部の泊付近で海成層が分断されており（図１）、基盤が迫り出しているが明らかになった。つまり低地中央部付近には志摩郡と怡土郡を分離する海峡（糸島水道）はなく、この場所はむしろ両郡を結ぶ尾根にあたることが判明した。

海成層の最大分布限界は縄文海進ピーク時期の旧汀線と考えられる。マガキ貝殻の放射性炭素年代によれば、糸島地域の縄文海進ピーク時期は約3500年前である。桑原飛櫛貝塚は縄文時代後期初頭なので、海成層の最大分布限界線を当時この時期の旧汀線（図２の太い線）とみなして議論を進める。毘沙門山と今山が当時島であったかどうかが海況の推定に重要な要素であるが、現砂丘砂層の地下には更新世の古砂丘砂層が存在するので、砂丘の位置が若干の後退した点を除けば、縄文海進の全期間を通じて砂丘が維持されたと考えられる。したがって、図２に示すように、貝塚形成当時も干潟の広がる安定した入り江が水崎を中心に存在したと考えてよさそうである。

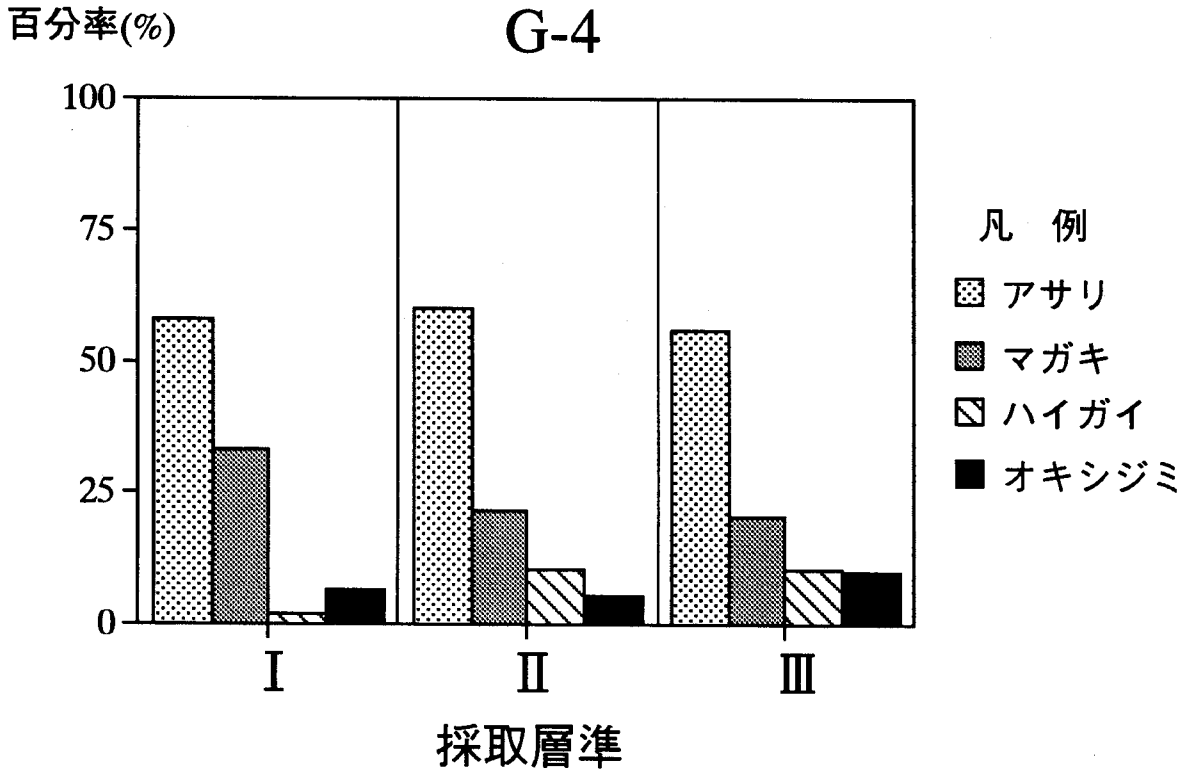
図２に示すように桑原飛櫛貝塚付近には他に元岡爪尾貝塚、長浜貝塚、今津貝塚がある。山崎(1975)は桑原飛櫛貝塚、元岡爪尾貝塚、長浜貝塚の貝殻組成を比較し、形成時期の他、優占する貝の種類や平均サイズの違いが存在することを指摘している。それによると、二枚貝の主要捕獲対象は桑原飛櫛貝塚ではハイガイ、アサリ、マガキ、オキシジミの４種、元岡爪尾貝塚では、マガキとハイガイの２種、長浜貝塚ではマガキ１種である。一方、巻貝の主要捕獲対象は桑原飛櫛貝塚と元岡爪尾貝塚ではウミニナ（イボウミニナを含むと思われる）１種、長浜貝塚ではヘナタリとウミニナの２種が優占する。これらの種群の組合せは桑原飛櫛貝塚と元岡爪尾貝塚は潮間帯中部付近の砂泥干潟、長浜貝塚は潮間帯上部付近の泥質干潟のカキ礁を示唆する。

貝塚の形成時期が出土遺物から判明している。元岡爪尾貝塚は桑原飛櫛貝塚と同時期の縄文時代後期、他はより新しく、弥生時代を含んでいる。桑原飛櫛貝塚と元岡爪尾貝塚は同時期であるが、上記のように貝類組成が異なるので、日常的な貝類採集活動領域を異にしていた可能性がある。木村(1988)の説にしたがって、桑原飛櫛貝塚の日常的な貝類採集活動領域を、貝塚からの半径２kmの行動圏として設定してみる。図２でわかるように、入り江北部の広い干潟領域とその周辺の干潟高潮帯湿地それにすぐ前面の大原川河谷のほか、外海側の長浜海岸西部の砂浜と津舟崎の岩礁が半径２kmの行動圏の中に入る。

桑原飛櫛貝塚の立地環境は干潟から少し谷に入った丘陵のへりにあたる。谷にはカワニナの棲む小規模な河川が存在し、すぐ前にはフトヘナタリの棲むアシ原のような塩性湿地（干潟高潮帯）があったと考えられる。貝塚は湾口から今津湾方向を望む位置にある。大潮干潮時には貝塚のすぐ地先にマガキ、アサリ、ウミニナ、イボウミニナなどが豊富に生息する干潟が見えていたはずである。G-４の上位ではクボガイ、クマノコガイのような外海岩礁の種の比率が増している。また、少数ではあるが、ベンケイガイ、ツメタガイ、コナガニシのような、外海潮下帯砂底種が採集されている。これらの種群は湾の内側ではなく、外海に生息している。半径２km圏内では玄界灘に面した津舟崎の岩礁の潮間帯や長浜海岸の潮下帯で採集できる。長浜海岸の砂浜では腕輪材料となる外海種のベンケイガイの打ち上げ貝殻も採集可能である（図２）

２．貝殻組成の垂直変化

今回の桑原飛櫛貝塚の調査結果と山崎（1975）の報告を比較する。山崎（1975）は土層の上位に向かってのハイガイの量と殻高の減少を指摘している。この傾向は今回の調査でも認められたが、それ



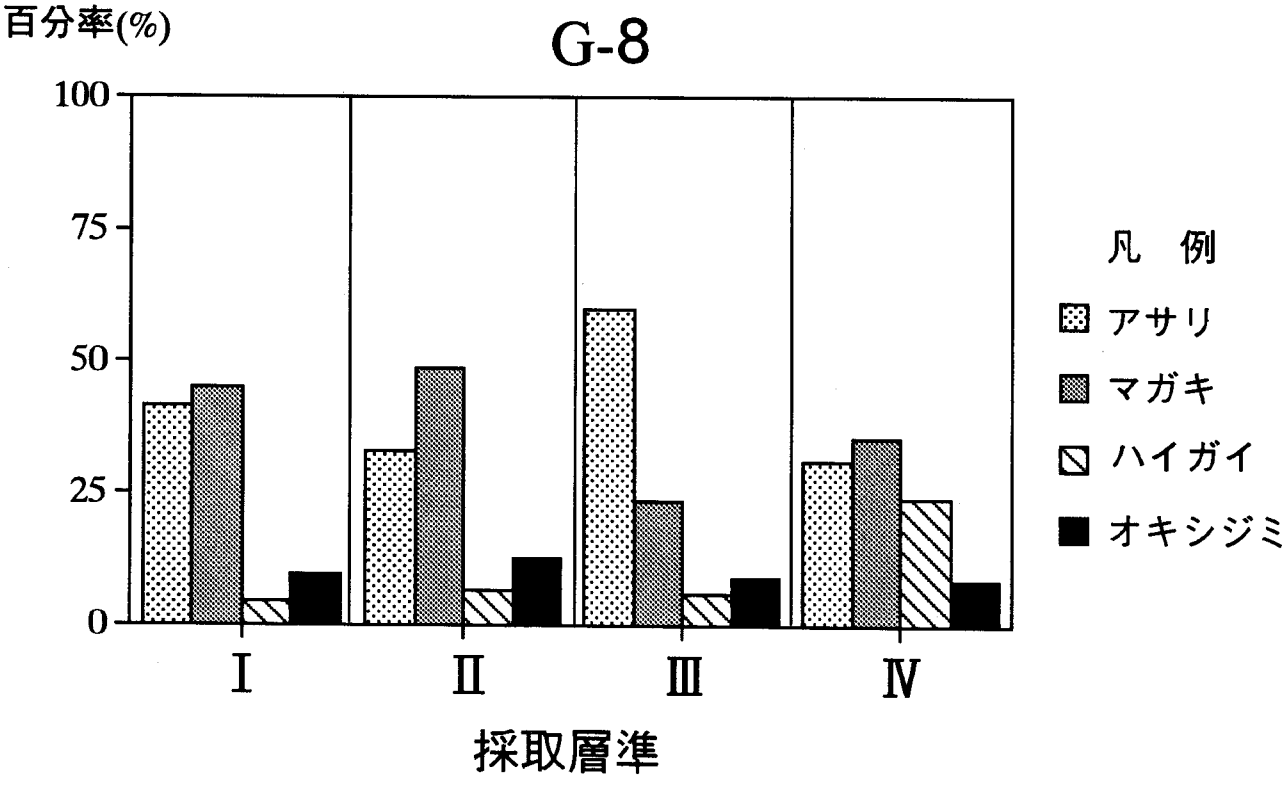
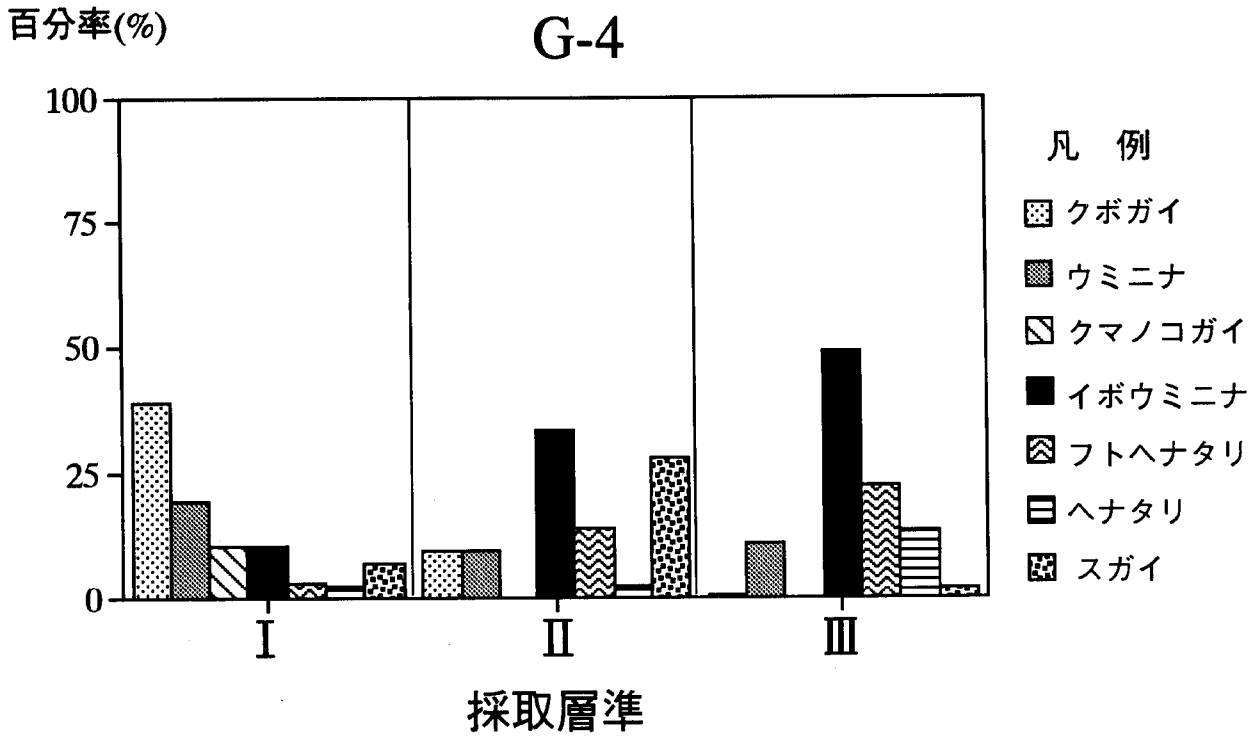


図3　貝塚の二枚貝貝殻集団の優占種4種の組成百分率の垂直変化
I、II、III、IVは貝殻ブロック（25×25×10㎤）の採取層準（Iが最上部）。



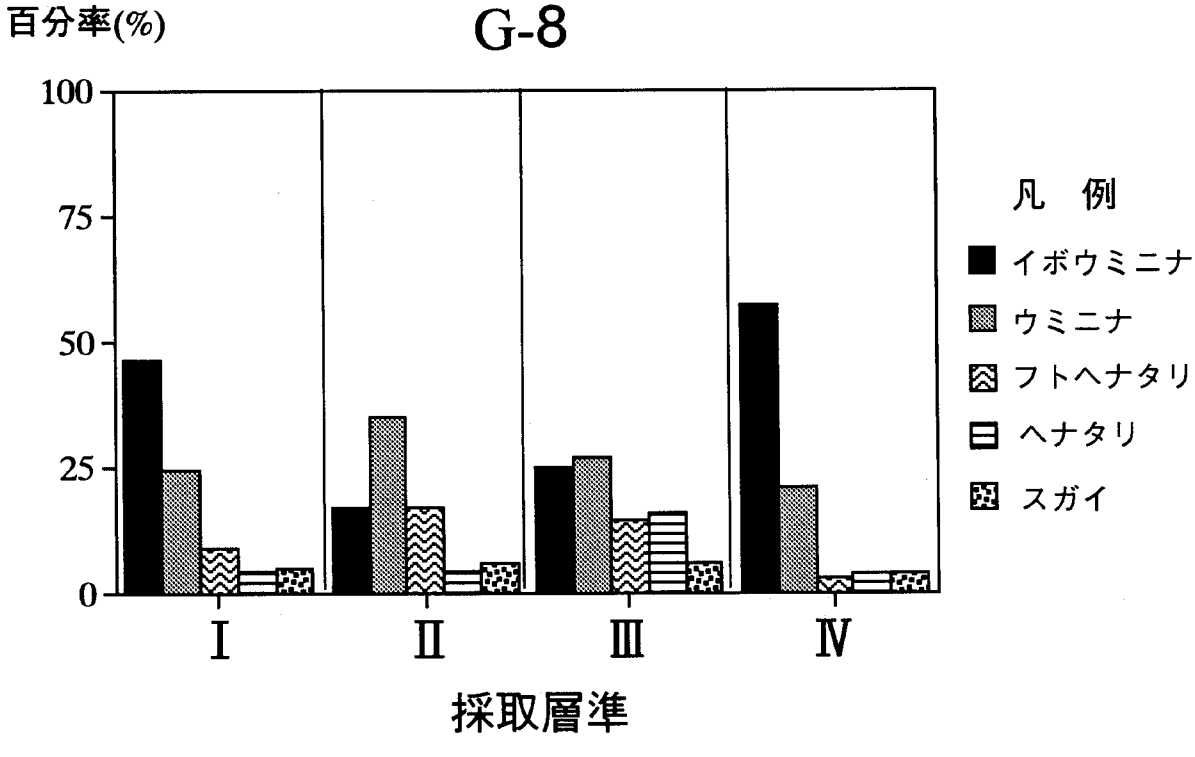


図4　貝塚の巻貝貝殻集団の優占種の組成百分率の垂直変化
Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳは貝殻ブロック（25×25×10㎤）の採取層準（Ⅰが最上部）、G－4とG－8で傾向が異なる。

ほど顕著ではなかった。むしろ、量的にみて桑原飛櫛貝塚の二枚貝の捕獲活動はアサリ、マガキの2種の生産に大きく依存しており、土層の上位に向かってますますこれら2種の優占状態が強まっている（図3）。ハイガイに対する依存程度は山崎（1975）の報告と異なって、かなり低い。

マガキは左殻で内湾の岩礁に付着したり、より古いカキ殻を土台として付着してカキ礁のようなコロニーをつくる。このほか、干潟表面に露出した小礫、貝殻、杭等に付着成長する。左殻の付着痕の観察の結果、今回調査したマガキの付着殻（左殻）はカキ礁のカキ殻ではなく、干潟上にある小礫、貝殻、木の枝等に付着し、単独成長したものである。カキ礁は当時もあったと思われるが、結果的にみて、群棲しているものではなく、干潟に転がっている単独成長のカキを選択的に採集したようである。その理由はわからないが、一般にカキ礁の周りには寧泥が厚く堆積しており、いぼるので歩行が困難なうえ、鋭利なカキ殻が泥の中に隠れており危険である。当時の人はこのような危険を犯したり、手間をかけてまでカキ礁のカキを採集しなかったのかも知れない。

一方、巻貝ではイボウミニナとウミニナが全体を通じて優占している（図4）。この2種は干潟に高密度で生息するので、非常に採集しやすい。ただし、G-4とG-8で傾向が異なる。G-8ではこの2種の優占は垂直的に変わらないが、G-4では土層の上位に向かって内湾干潟性貝のイボウミニナの出現率が減少し、代わりに外海岩礁性貝のクボガイとクマノコガイの出現率が増している（図4）。

3．桑原飛櫛貝塚の貝殻の破損率

桑原飛櫛貝塚では多くの貝殻が破損している。山崎（1975）は貝類処理方法について論じている。それによれば、桑原飛櫛貝塚にはウミニナ・ヘナタリのブロックが存在し、このブロック中のウミニナ・ヘナタリ類の貝殻の殻頂部がすべて欠落している事例が報告されている。山崎（1975）はこれらの貝は殻頂部を石で叩き折って吸い出す方法で食べられたと考えた。そこで、今回の調査でもウミニナ属巻貝の殻頂部の破損率と二枚貝貝殻の破損率を検討してみた。

貝殻破損率（下山、1989）は次の式で計算される、

$$Fr = \frac{DL+DR}{TL+TR} \quad (二枚貝)、 \qquad Fr = \frac{D}{N} \quad (巻貝)$$

ただし、Fr：貝殻破損率、DL：破損左殻数、DR：破損右殻数、TL：左殻総数、
TR：右殻総数、D：巻貝破損殻数、N：巻貝殻総数

a．ウミニナ属巻貝の貝殻破損率

今回の調査でも部分的には山崎（1975）の報告通りの結果が得られた。図5は桑原飛櫛貝塚出土のウミニナ属2種の殻頂部破損率（Fr）をG-4とG-8について示している。巻貝の形態により殻の強度に差があるので、異なった組成の種群で比べるのではなく、ウミニナ属巻貝のイボウミニナとウミニナの2種を一まとめにして比較した。それは、この2種は貝殻の形状と分布において非常によく似ており、当時の人類は両者を区別しなかった可能性があるためである。図5を見てわかるように、垂直的な変化はほとんどない。しかし、G-4とG-8の差が大きい。G-4ではほとんど全ての貝殻が破損しているにも関わらず、G-8では約半数の貝殻の頂部が破損しているだけである。これは、G-4とG-8では当時の巻貝の処理方法（食べ方）に大きな差があったことを暗示している。

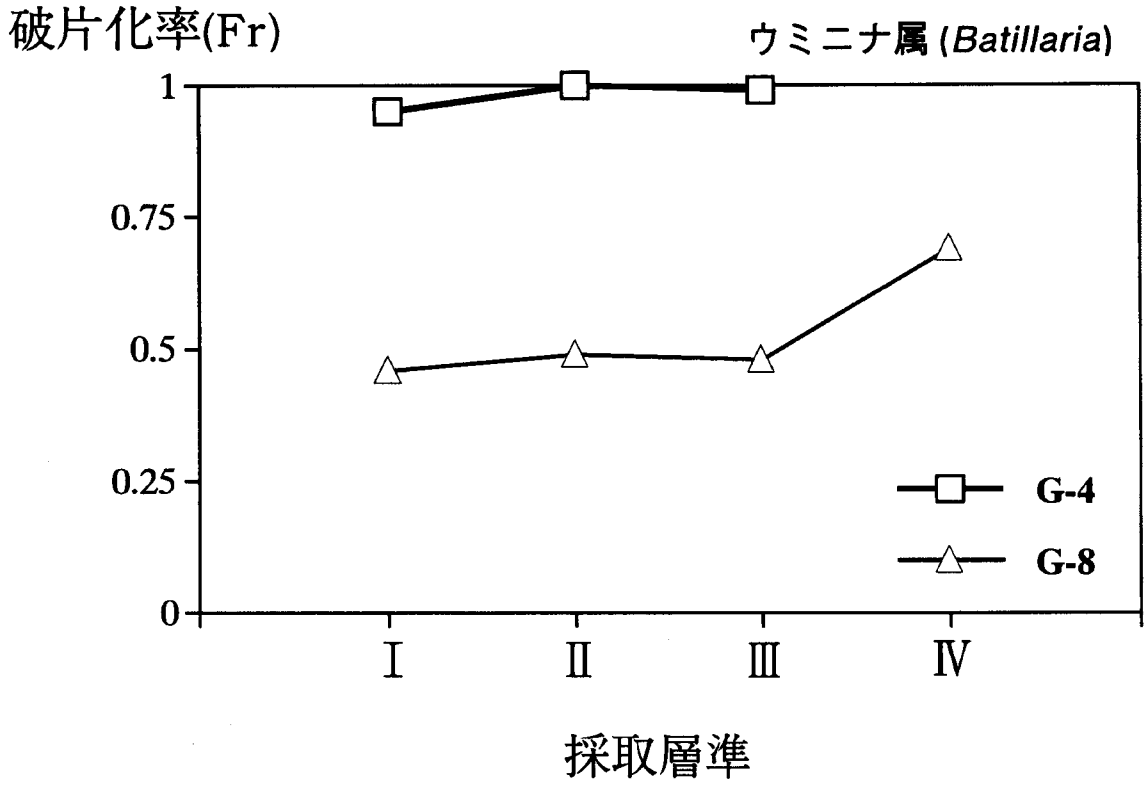


図５　桑原飛櫛貝塚出土のウミニナ属２種（イボウミニナとウミニナ）の殻頂部破損率（Fr）
Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳは貝塚ブロック（25×25×10㎤）の採取層準（Ⅰが最上部）、Ｇ－４とＧ－８で傾向がかなり異なる。

b．二枚貝貝殻の破片化比率

二枚貝貝殻ではアサリ、マガキ、オキシジミの殻の60～85％が破損している。これに対して、ハイガイの破損率は低く、２～35％である。ハイガイの破損率が低いのは貝殻の強靱さを示しているだけとみられる。注意深く観察すると、これらの貝殻の割れ方は不規則なので、貝殻の一定部位が組織的に壊されたとは言えず、単に脆くなった貝殻の機械的破壊である。それにしても60～85％の破損率は大きいので、貝殻を捨てた後、故意に貝殻を上から踏みつけて壊した可能性も考えられる。

参考文献

樗木昇一（1958）：糸島平野の地形発達史―特に糸島水道を中心として―。糸高文林、６号、pp.3-13。

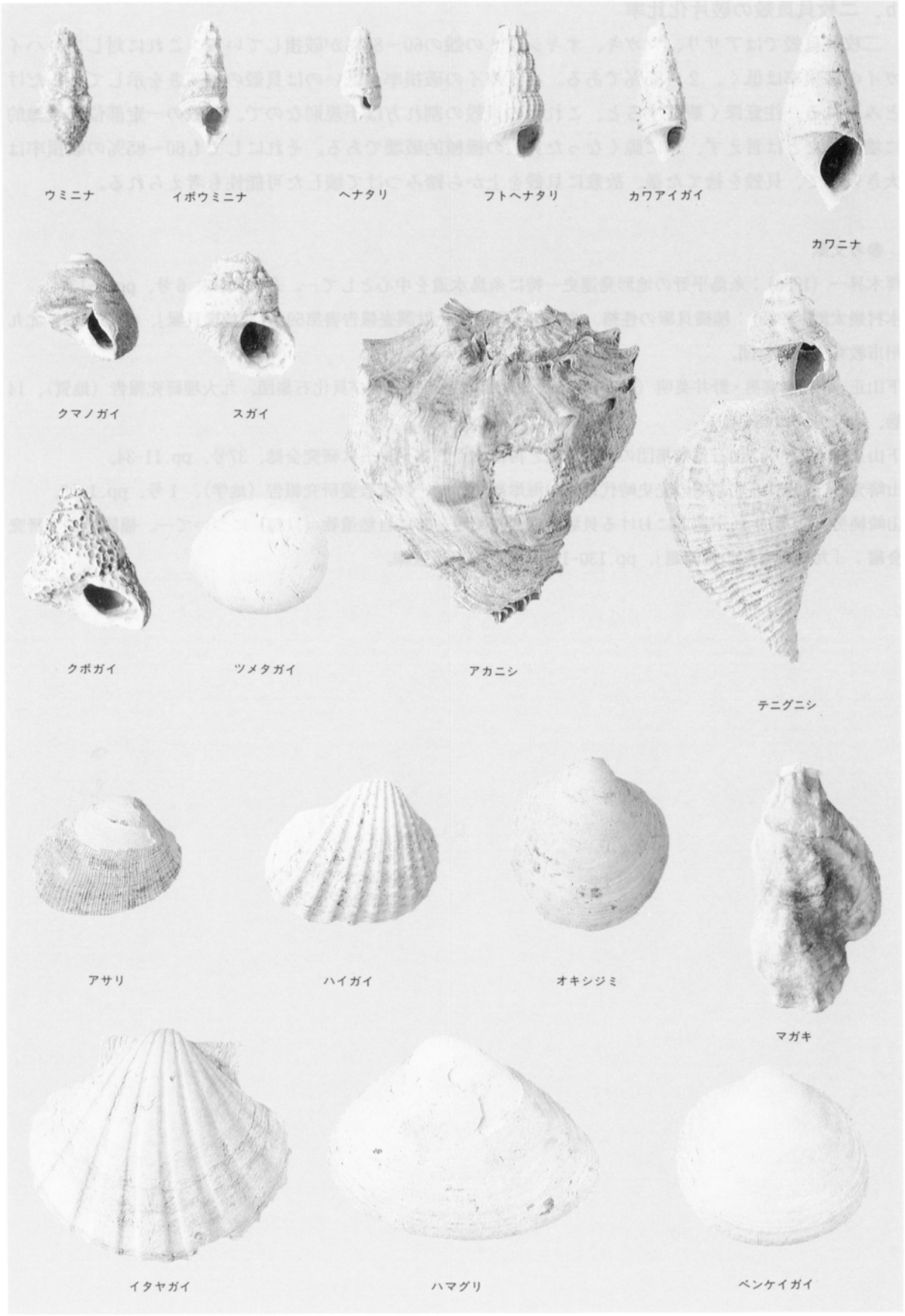
木村幾太郎（1988）：楠橋貝塚の性格、北九州市埋蔵文化財調査報告書第69集、「楠橋貝塚」、pp.58-63、北九州市教育文化事業団。

下山正一・佐藤喜男・野井英明（1986）：糸島低地帯の完新統および貝化石集団。九大理研究報告（地質）、14巻、４号、pp.143-162。

下山正一（1989）：化石貝殻集団の初期情報と再構成。日本ベントス研究会誌、37号、pp.11-34。

山崎光夫（1955）：北九州の先史時代以降の海岸線の移動。九大教養研究報告（地学）、１号、pp.1-18。

山崎純男（1975）：九州地方における貝塚研究の諸問題―特に自然遺物（貝類）について―。福岡考古学研究会編：「九州考古学の諸問題」、pp.130-165、東京、東出版㈱。


ウミニナ
イボウミニナ
ヘナタリ
フトヘナタリ
カワアイガイ
カワニナ
クマノガイ
スガイ
クボガイ
ツメタガイ
アカニシ
テニグニシ
アサリ
ハイガイ
オキシジミ
マガキ
イタヤガイ
ハマグリ
ベンケイガイ

付表　各層準のブロックにおける貝類組成表（1から7）
捕獲と処理方法に差があると思われるので、二枚貝と巻貝を分けて表示している。

桑原飛櫛貝塚　貝殻組成表（1）

G－4　I層　北壁　（ブロック：25×25×10cm³）

二枚貝

種名（和名）	CL	DL	CR	DR	TL	TR	N	%	Hb
アサリ	44	150	40	166	194	206	206	58.0	IT
マガキ	57	59	58	35	116	93	116	32.7	IT
オキシジミ	5	11	5	17	16	22	22	6.2	IT
ハイガイ	5	2	2	0	7	2	7	2.0	IT
イガイ	0	1	0	1	2	1	2	0.7	OR
オオノガイ	0	1	0	1	1	1	1	0.3	IT
シオフキ	0	1	0	0	1	0	1	0.3	IT

Total：335

巻貝

種名（和名）	C	D	N	%	Hb
クボガイ	6	51	57	39.0	OG,OR
ウミニナ	2	26	28	19.2	IT
クマノコガイ	0	15	15	10.3	OG,OR
イボウミニナ	0	15	15	10.3	IT
イシダタミ	4	7	11	7.5	OG,OR
スガイ	4	6	10	6.8	OG,OR
フトヘナタリ	0	4	4	2.7	IH
ヘナタリ	0	3	3	2.1	IT
イボニシ	1	0	1	0.7	OG,OR
ホソウミニナ	0	1	1	0.7	IT
カワアイ	0	1	1	0.7	IT

Total：146

記号凡例
CL：左殻完全，DL：左殻破片，CR：右殻完全，DR：右殻破片，
TL：左殻総数，TR：右殻総数，C：巻貝完全，D：巻貝破片，
N：種の個体数，Hb：生息環境，FW：河川淡水域，IH：干潟高潮帯，
IT：干潟潮間帯，OG：外海転石帯，OR：外海岩礁，OS：外海潮下帯砂底

桑原飛櫛貝塚　貝殻組成表（2）

G－4　II層　北壁　（ブロック：25×25×10cm³）

二枚貝

種名（和名）	CL	DL	CR	DR	TL	TR	N	%	Hb
アサリ	14	156	17	165	170	182	182	59.3	IT
マガキ	24	35	26	39	59	65	65	21.2	IT
ハイガイ	30	2	24	2	32	26	32	10.4	IT
オキシジミ	8	8	2	5	16	7	16	5.2	IT
オオノガイ	1	2	0	4	3	4	4	1.3	IT
カリガネエガイ	0	4	0	1	4	1	4	1.3	IT
シオフキ	0	2	0	1	2	1	2	0.7	IT
カガミガイ	0	0	1	0	0	1	1	0.3	IT
サルボウガイ	1	0	0	0	1	0	1	0.3	IT

Total：307

巻貝

種名（和名）	C	D	N	%	Hb
イボウミニナ	0	125	125	33.5	IT
スガイ	51	53	104	27.9	OG,OR
フトヘナタリ	0	52	52	13.9	IH
ウミニナ	0	35	35	9.4	IT
クボガイ	0	34	34	9.1	OG,OR
ヘナタリ	0	9	9	2.4	IT
カワアイ	0	5	5	1.3	IT
ツメタガイ	0	5	5	1.3	OS
カワニナ	1	0	1	0.3	FW
ゴマフダマガイ	1	0	1	0.3	IT
イボニシ	0	1	1	0.3	OG,OR
アラムシロガイ	0	1	1	0.3	IT

Total：373

桑原飛櫛貝塚　貝殻組成表（3）

G－4　III層　北壁　（ブロック：25×25×10cm³）

二枚貝

種名（和名）	CL	DL	CR	DR	TL	TR	N	%	Hb
アサリ	9	71	4	89	80	93	93	56.0	IT
マガキ	1	14	19	15	15	34	34	20.5	IT
ハイガイ	15	2	15	1	17	16	17	10.2	IT
オキシジミ	4	10	1	15	14	16	16	9.6	IT
オオノガイ	0	1	0	0	1	0	1	0.6	IT
ハマグリ	0	1	0	0	1	0	1	0.6	IT
シマナミマガシワガイモドキ	0	1	0	0	1	0	1	0.6	OG
シオフキ	0	1	0	0	1	0	1	0.6	IT
カリガネエガイ	1	0	0	0	1	0	1	0.6	IT
サルボウガイ	0	0	1	0	0	1	1	0.6	IT

Total：166

巻貝

種名（和名）	C	D	N	%	Hb
イボウミニナ	0	171	171	48.9	IT
フトヘナタリ	0	78	78	22.3	IH
ヘナタリ	0	46	46	13.1	IT
ウミニナ	2	35	37	10.6	IT
ホソウミニナ	1	6	7	2.0	IT
スガイ	5	1	6	1.7	OG,OR
カワニナ	1	1	2	0.6	FW
カワアイ	0	1	1	0.3	IT
クボガイ	0	1	1	0.3	OG,OR
アカニシ	0	1	1	0.3	IT

Total：350

桑原飛櫛貝塚　貝殻組成表（4）

G－8　I層　北壁　（ブロック：25×25×10cm³）

二枚貝

種名（和名）	CL	DL	CR	DR	TL	TR	N	%	Hb
マガキ	42	120	82	64	162	146	162	45.0	IT
アサリ	16	130	25	124	146	149	149	41.4	IT
オキシジミ	4	22	5	28	26	33	33	9.2	IT
ハイガイ	9	6	12	1	15	13	15	4.2	IT
カリガネエガイ	1	2	0	0	1	0	1	0.3	IT

Total：360

巻貝

種名（和名）	C	D	N	%	Hb
イボウミニナ	32	25	57	46.3	IT
ウミニナ	15	15	30	24.4	IT
フトヘナタリ	3	8	11	8.9	IH
スガイ	1	5	6	4.9	OG,OR
ヘナタリ	2	3	5	4.1	IT
カワアイ	1	4	5	4.1	IT
カワニナ	1	2	3	2.4	FW
ムギガイ	0	1	1	0.8	OG,OR
クボガイ	0	1	1	0.8	OG,OR
イシダタミ	0	1	1	0.8	OG,OR
コナガニシ	0	1	1	0.8	OS
ベッコウガサ	0	1	1	0.8	OR
アマガイ	1	0	1	0.8	OR

Total：123

桑原飛櫛貝塚　貝殻組成表（5）

G－8　II層　北壁　（ブロック：25×25×10cm³）

二枚貝

種名（和名）	CL	DL	CR	DR	TL	TR	N	%	Hb
マガキ	9	78	23	89	87	112	112	48.3	IT
アサリ	19	54	16	60	73	73	76	32.8	IT
オキシジミ	3	25	3	21	28	24	28	12.1	IT
ハイガイ	8	3	13	2	11	15	15	6.5	IT
イガイ	0	1	0	0	1	0	1	0.4	OR

Total：232

巻貝

種名（和名）	C	D	N	%	Hb
ウミニナ	15	10	25	34.7	IT
イボウミニナ	4	8	12	16.7	IT
フトヘナタリ	3	9	12	16.7	IH
カワアイ	0	5	5	6.9	IT
スガイ	3	1	4	5.6	OG,OR
ホソウミニナ	1	3	4	5.6	IT
ヘナタリ	0	3	3	4.2	IT
ツボミガイ	1	1	2	2.8	IT
カワニナ	0	2	2	2.8	FW
アカニシ	0	1	1	1.4	IT
アラムシロガイ	1	0	1	1.4	IT
タマキビガイ	1	0	1	1.4	IH

Total：72

桑原飛櫛貝塚　貝殻組成表（6）

G－8　III層　北壁　（ブロック：25×25×10cm³）

二枚貝

種名（和名）	CL	DL	CR	DR	TL	TR	N	%	Hb
アサリ	35	123	38	136	158	174	174	59.6	IT
マガキ	24	44	19	40	68	59	68	23.3	IT
オキシジミ	8	13	11	15	21	26	26	8.9	IT
ハイガイ	14	0	16	1	14	17	17	5.8	IT
カリガネエガイ	0	0	0	3	0	3	3	1.0	IT
オオノガイ	0	3	0	2	3	2	3	1.0	IT
シオフキ	0	0	0	1	0	1	1	0.3	IT

Total：292

巻貝

種名（和名）	C	D	N	%	Hb
ウミニナ	24	12	36	26.9	IT
イボウミニナ	11	21	33	24.6	IT
ヘナタリ	20	1	21	15.7	IT
フトヘナタリ	8	11	19	14.2	IH
スガイ	6	2	8	6.0	OG,OR
カワアイ	3	2	5	3.7	IT
カワニナ	3	1	4	3.0	FW
ゴマフダマガイ	1	1	2	1.5	IT
クボガイ	1	1	2	1.5	OG,OR
イシダタミ	0	1	1	0.7	OG,OR
サザエ	0	1	1	0.7	OR
ホソウミニナ	0	1	1	0.7	IT
テングニシ	0	1	1	0.7	IT

Total：134

桑原飛櫛貝塚　貝殻組成表（7）

G－8　IV層　北壁　（ブロック：25×25×10㎤）

二枚貝

種名（和名）	CL	DL	CR	DR	TL	TR	N	%	Hb
マガキ	30	92	48	37	122	85	122	35.4	IT
アサリ	26	80	20	68	106	88	106	30.7	IT
ハイガイ	79	3	68	3	82	71	82	23.8	IT
オキシジミ	4	17	6	23	21	29	29	8.4	IT
オオノガイ	0	0	0	3	0	3	3	0.9	IT
シオフキ	0	0	1	0	0	1	1	0.3	IT
ハマグリ	1	0	0	0	1	0	1	0.3	IT
サルボウガイ	0	0	0	1	0	1	1	0.3	IT

Total：345

巻貝

種名（和名）	C	D	N	%	Hb
イボウミニナ	27	93	120	57.7	IT
ウミニナ	24	19	43	20.7	IT
ヘナタリ	1	7	8	3.8	IT
スガイ	5	3	8	3.8	OG,OR
カワアイ	2	5	7	3.4	IT
カワニナ	3	3	6	2.9	FW
フトヘナタリ	2	4	6	2.9	IH
クボガイ	1	1	2	1.0	OG,OR
アカニシ	2	0	2	1.0	IT
イシダタミ	0	1	1	0.5	OG,OR
イボニシ	1	0	1	0.5	OG,OR
アラムシロガイ	0	1	1	0.5	IT
ツメタガイ	1	0	1	0.5	OS
カゴメガイ	0	1	1	0.5	OG,OR

Total：208

桑原飛櫛貝塚出土の脊椎動物遺体

早稲田大学　金子　浩昌

はじめに

本貝塚は大原川左岸の台地上に立地し、出土遺物などから縄文時代中期末～後期に相当する。今回の試料は、これまでほとんど報告されることのなかった博多湾岸域の貝塚から得られたものであり、この地域の縄文時代中期末～後期の人々の生活に関わる動物質資源の内容を知る上での貴重な遺跡である。

1．試料

同定試料は第1次調査（Ⅰ区～Ⅲ区）で出土した獣類・魚類・鳥類の骨片である。

2．同定方法

ルーペなどを用いて骨の形態的特徴を観察して種類の同定した。

3．結果および考察

同定結果を表1～10に示す。

動物遺体の概要

現在までに知られた動物遺体の種名を列記する。

Ⅰ魚類

サメ類、マダイ、クロダイ、ヘダイ、サバ、ヒガンフグ、フグ類、スズキ目

Ⅱ爬虫類

ウミガメ類

Ⅲ鳥類

ミズナギドリ、アホウドリ、ヒメウ、カモ類

Ⅳ哺乳類

ヒト、ニホンザル、ネズミ類、イルカ類、タヌキ、アシカ、イノシシ、ニホンジカ

次に出土した動物遺体の種構成、捕獲条件などについての概要を述べる。

・魚類

検出された魚類遺体のうち主体となったのはマダイとフグ類であった。おそらくこの両種は個体数の上ではあまり大きな違いはなかったのではなかろうか。いずれも大型の個体の標本を含み、積極的な漁獲活動をしていたことは疑いない。マダイが多いことから、この貝塚をつくった人々の漁労が外洋に目を向けた活動であったことが知られるのであるが、同時に多かったフグ類も湾口から外洋に棲息する種類であり、同様な条件下での漁獲であったと思われる。

ヘダイ、サバも同じ水域環境下での棲息魚類である。サバは椎骨などの遺骸が小さいので、貝塚からの採集方法に注意しなければならない。クロダイは内湾に多い種類であり、そうした水域下での漁獲が別にあったのかも知れない。

・爬虫類

ウミガメ類の遺骸の検出はごく少ないものであった。外洋を回遊するウミガメの遺骸が検出される例は各地の貝塚で知られるが、この貝塚でどの程度の捕獲があったかは、当時の博多湾内へのウミガメ類の進入の様相を知る上でも興味ある問題といえよう。

・鳥類

種類は少なかったが、ミズナギドリ、アホウドリ、ヒメウなど湾口から外海に棲息した鳥であり、とくに魚の群れとの関係が深いところから、上述した漁労と併せ考えると興味ある問題である。

・獣類

残されている遺骸は、種類、標本の数の上でも獣骨はもっとも多い。しかし、その大部分はイノシシ、ニホンジカによって占められることは表示された内容によってもよく判明しよう。主体となったイノシシとシカとでは、標本数ではシカの方がはるかに多いが、実際の個体数でどの程度の差異があるかは標本のすべてが記録された後に詳しく検討する必要があろう。いずれにしてもこうした獣骨の出土の様相は、縄文時代後期における特徴ある在り方であって、これまでにも知られてきたことではあったが、この地域での捕獲獣類の考古学的な特徴がどのようにみられるか、今後の調査を待って論じられることになろう。

今回送付された試料には、魚類、爬虫類、鳥類そして哺乳類の各綱の主要な動物種が判明し、その概要を知ることができた。しかし、魚類、鳥類にはさらに種類の増加する可能性があり、動物質資源の詳細な情報を得るために今後の資料の追加が待たれるところである。

＜参考文献＞

木下亀城（1961）日本地方鉱床誌「九州地方」、朝倉書店。

表Ⅰ．桑原飛櫛貝塚出土骨類同定結果（魚類－１）

資料番号	地　点	地区	遺　構　名	時代・時期	種　　類	部　　位	備　　考
1	第１地点	Ⅰ	第Ⅱ層	後期初頭	マダイ	上後頭骨、切歯、歯骨・左	
6	第１地点	Ⅰ	Ｂ７(G-1)　第Ⅱ層	後期初頭	マダイ	破片	
7	第１地点	Ⅰ	Ｂ７(G-1)　第Ⅱ層	後期初頭	マダイ	前頭骨、主鰓蓋頭・右	
１０	第１地点	Ⅰ	Ｃ７・Ｄ７(G-2)　第Ⅲ層	後期初頭	フグ	前上顎骨・左	
１５	第１地点	Ⅰ	Ｂ６(G-3)　第Ⅱ層	後期初頭	マダイ	腹椎	
２３	第１地点	Ⅰ	Ｃ６(G-4)　第Ⅲ層	後期初頭	魚骨	肋骨	
２６	第１地点	Ⅰ	Ｃ６(G-4)　第Ⅲ層	後期初頭	マダイ	上顎骨・右	
２６	第１地点	Ⅰ	Ｃ６(G-4)　第Ⅲ層	後期初頭	マダイ	角骨・右	
２６	第１地点	Ⅰ	Ｃ６(G-4)　第Ⅲ層	後期初頭	クロダイ	臀鰭、鰭	
２８	第１地点	Ⅰ	Ｂ５(G-5)　第Ⅲ層	後期初頭	マダイ	破片	
３０	第１地点	Ⅰ	Ｂ５(G-5)　第Ⅱ層	後期初頭	クロダイ	前上顎骨・右	
３１	第１地点	Ⅰ	Ｂ５(G-5)　第Ⅲ層	後期初頭	ヒガンフグ	前上顎骨・右	
３１	第１地点	Ⅰ	Ｂ５(G-5)　第Ⅲ層	後期初頭	フグ類	疑鎖骨	
３１	第１地点	Ⅰ	Ｂ５(G-5)　第Ⅲ層	後期初期	フグ	前上顎骨・右	
３２	第１地点	Ⅰ	Ｂ５(G-5)北壁　第Ⅲ層上面	後期初頭	フグ	歯骨・右	
３７	第１地点	Ⅰ	Ｃ５(G-6)　第Ⅲ層	後期初頭	フグ	前上顎骨・左	
３７	第１地点	Ⅰ	Ｃ５(G-6)　第Ⅲ層	後期初頭	フグ	疑鎖骨・右	
３７	第１地点	Ⅰ	Ｃ５(G-6)　第Ⅲ層	後期初頭	フグ	破片	
３７	第１地点	Ⅰ	Ｃ５(G-6)　第Ⅲ層	後期初頭	マダイ	前鰓蓋骨・左	
４７	第１地点	Ⅰ	Ｃ４(G-8)とＢ２(G-11)の間のベルト　第Ⅱ層	後期初頭	マダイ	歯骨・左	
４９	第Ⅰ地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	サメ	椎骨	
４９	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	サバ	尾椎骨	
４９	第１地点	Ⅰ	第１層	後期初頭	魚骨	小椎骨	
５０	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	マダイ	前頭骨・右	
５４	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	マダイ	角骨・右	
５４	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	マダイ	椎体	
５４	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	スズキ目	尾骨	
５４	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	サバ	椎体	
５４	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	魚骨片	破片	
５６	第１地点	Ⅰ	第１層	後期初頭	魚骨	鰭棘	多数
５８	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	魚骨片	小破片	
５８	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	クロダイ	前上顎骨・左	
５８	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	クロダイ	歯骨・左側破片	

表２．桑原飛櫛貝塚出土骨類同定結果（魚類－２）

資料番号	地　点	地区	遺　構　名	時代・時期	種　　類	部　　位	備　　考
５８	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	クロダイ	角骨・左	
５８	第１地点	Ⅰ	第１層	後期初頭	ヘダイ	前上顎・右	
５８	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	マダイ	前上顎骨・左	
５８	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	マダイ	前上顎骨・右	大きい
５８	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	マダイ	歯骨・右	中大
５８	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	マダイ	歯骨・右	小さい
５８	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	マダイ	骨体	
６０	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	フグ	前上顎骨・左・４	
６０	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	フグ	歯骨・右４	
６１	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	フグ	疑鎖骨？	
６１	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	マダイ	角骨・左	
６１	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	マダイ	上顎骨・左	
６１	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	マダイ	前頭骨	
６６	第１地点	Ⅰ	Ａトレンチ　第Ⅱ層	後期初頭	マダイ	前鰓蓋骨	
６６	第１地点	Ⅰ	Ａトレンチ　第Ⅱ層	後期初頭	フグ	前上顎・左・４	
６６	第１地点	Ⅰ	Ａトレンチ　第Ⅱ層	後期初頭	フグ	前上顎・右・５	
６６	第１地点	Ⅰ	Ａトレンチ　第Ⅱ層	後期初頭	ヒガンフグ	前上顎骨・左・１	
６７	第１地点	Ⅰ	Ａトレンチ　第Ⅱ層	後期初頭	フグ	尾柱	２個
６７	第１地点	Ⅰ	Ａトレンチ　第Ⅱ層	後期初頭	マダイ	尾椎	
６７	第１地点	Ⅰ	Ａトレンチ　第Ⅱ層	後期初頭	魚骨片	第２椎体	多数
６８	第１地点	Ⅰ	Ａトレンチ　第Ⅱ層	後期初頭	マダイ	骨折棘	
７０	第１地点	Ⅰ	Ａトレンチ　第Ⅱ層	後期初頭	マダイ	前上顎骨・右	
７０	第１地点	Ⅰ	Ａトレンチ　第Ⅱ層	後期初頭	マダイ	角骨・右	
７０	第１地点	Ⅰ	Ａトレンチ　第Ⅱ層	後期初頭	マダイ	角骨・左	
７０	第１地点	Ⅰ	Ａトレンチ　第Ⅱ層	後期初頭	マダイ	前上顎骨・左	
７０	第１地点	Ⅰ	Ａトレンチ　第Ⅱ層	後期初頭	マダイ	顎骨破片	
７０	第１地点	Ⅰ	Ａトレンチ　第Ⅱ層	後期初頭	フグ	前上顎骨・右	
７０	第１地点	Ⅰ	Ａトレンチ　第Ⅱ層	後期初頭	魚骨片	破片	多数
７２	第１地点	Ⅰ	Ｂトレンチ　第Ⅲ層	後期初頭	フグ	前上顎骨・右	
７５	第１地点	Ⅰ	貝属上面	後期初頭	クロダイ	歯骨・左	

表3．桑原飛櫛貝塚出土骨類同定結果（魚類－3）

資料番号	地　点	地区	遺　構　名	時代・時期	種　　類	部　　位	備　　考
75	第1地点	I	貝層上面	後期初頭	マダイ	角骨・右	
75	第1地点	I	貝層上面	後期初頭	マダイ	歯骨・左	
75	第1地点	I	貝層上面	後期初頭	魚骨片	破片	4個
80	第1地点	II	2面	後期初頭	魚骨片	破片	
85	第1地点	II	2面	後期初頭	タイ類	臀鰭血管間棘	
86	第1地点	II	2面下	後期初頭	魚骨	鰭	
86	第1地点	II	2面下	後期初頭	魚骨片	破片	
89	第1地点	II	1面下	後期初頭	ヘダイ	歯骨・右	
98	第1地点	III	C8・D8 (G-16) 最下層上面	後期初頭	サメ	破片	
100	第1地点	III	C9・D9 (G-18)　第I層	後期初頭	マダイ	角骨・左	
106	第1地点	III	B5 (G-5)　第I層	後期初頭	魚骨片？	破片	
112	第1地点	III	西壁3面下包含層	後期初頭	フグ	前上顎骨・右	

表4．桑原飛櫛貝塚出土骨類同定結果（鳥類）

資料番号	地　点	地区	遺　構　名	時代・時期	種　　類	部　　位	備　　考
6	第1地点	I	B7 (G-1)　第II層	後期初頭	カモ	上腕骨・左	
21	第1地点	I	C6 (G-4)　第II層	縄文時代中期末末～後期	ミズナギドリ	上腕骨・左、骨体	
86	第1地点	II	2面下	後期初頭	アホウドリ	橈骨	
86	第1地点	II	2面下	後期初頭	アホウドリ	破片	3個
90	第1地点	II	1面下　包含層	後期初頭	ヒメウ	橈骨	焼けている

表5．桑原飛櫛貝塚出土骨類同定結果（爬虫類）

資料番号	地　点	地区	遺　構　名	時代・時期	種　　類	部　　位	備　　考
31	第1地点	I	B5 (G-5)　第III層	後期初頭	ウミガメ類	甲	
44	第1地点	I	B2 (G-11)　北壁第II層	後期初頭	ウミガメ類	肩甲骨／烏口骨	
86	第1地点	II	2面下	後期初頭	アシカ類	指骨片	
109	第1地点	III	1面下　包含層	後期初頭	アシカ類	指骨片	

表６．桑原飛櫛貝塚出土骨類同定結果（哺乳類－１）

資料番号	地　点	地区	遺　構　名	時代・時期	種　　類	部　　位	備　　考
1	第１地点	I	第II層	後期初頭	イノシシ／シカ	肋骨	
2	第１地点	I	Ｂ７(G-1)　第III層	後期初頭	イノシシ	左大腿骨片	
3	第１地点	I	Ｂ７(G-1)　第III層	後期初頭	シカ	角枝	
4	第１地点	I	Ｂ７(G-1)　第III層	後期初頭	シカ	大腿骨	
5	第１地点	I	Ｂ７(G-1)　第Ｉ層	後期初頭	イノシシ	橈骨・左・近位	Fig.36-14
6	第１地点	I	Ｂ７(G-1)　第II層	後期初頭	イノシシ	下顎骨・♂・左・歯欠	
8	第１地点	I	Ｂ７(G-1)　拡張部２面下	後期初頭	サル	大腿骨・左	
8	第１地点	I	Ｂ７(G-1)　拡張部第II層下	後期初頭	獣骨片不明種	破片	Fig. 9 - 1
9	第１地点	I	Ｂ７(G-1)　地山面	後期初頭	シカ	脛骨・右(全面部)	Fig. 9 - 1
１０	第１地点	I	Ｃ７・Ｄ７(G-2)　第III層	後期初頭	シカ	後頭顆　左	
１１	第１地点	I	Ｃ７・Ｄ７(G-2)　第III層	後期初頭	シカ	腰椎・２	Fig. 9 - 1
１２	第１地点	I	Ｃ７・Ｄ７(G-2)　第III層	後期初頭	イノシシ	肩甲骨・左・窩部欠	Fig. 9 - 3
１３	第１地点	I	Ｃ７・Ｄ７(G-2)　第III層	後期初頭	シカ	大腿骨、骨体	
１４	第１地点	I	Ｃ7･Ｄ7(G-2) 北壁　40～50cm	後期初頭	イノシシ／シカ	肋骨	
１５	第１地点	I	Ｂ６(G-3)　第II層	後期初頭	シカ	頸椎fr.	
１６	第１地点	I	Ｂ６(G-3)　第III層	後期初頭	シカ	頸椎	Fig. 9 - 2
１７	第１地点	I	Ｂ６(G-3)　第III層	後期初頭	シカ	肩甲骨・右	Fig.35-21
１８	第１地点	I	Ｂ６(G-3)　第III層	後期初頭	シカ	下顎骨・右(ｐ３－４、M1－３)	Fig. 9 - 3
１９	第１地点	I	Ｂ６(G-3)　北壁第III層	後期初頭	シカ	橈骨・右、骨体内側	Fig. 9 - 2
２０	第１地点	I	Ｃ６(G-4)　第II層	後期初頭	シカ	前頭骨・右・♀	
２２ａ	第１地点	I	Ｃ６(G-4)　第II層	後期初頭	シカ	上腕部・右・遠位部	
２２ｂ	第１地点	I	Ｃ６(G-4)　第II層	後期初頭	シカ	尺骨・左・近位	Fig.36-10
２２ｃ	第１地点	III	Ｃ８・Ｄ８(G-16)　第Ｉ層	後期初頭	シカ	落角（角坐）	切り痕
２３	第１地点	I	Ｃ６(G-4)　第III層	後期初頭	シカ	中手骨、骨体	Fig. 9 - 1
２４	第１地点	I	Ｃ６(G-4)　第III層	後期初頭	中型獣不明種	破片	
２５	第１地点	I	Ｃ６(G-4)　第III層	後期初頭	イルカ（バンドウ位）	下顎骨	Fig.35-12
２６ａ	第１地点	I	Ｃ６(G-4)　第III層	後期初頭	イノシシ	切歯・２・右	
２６ｂ	第１地点	I	Ｃ６(G-4)　第III層	後期初頭	イノシシ	破片	
２７	第１地点	I	Ｃ６(G-4)　第III層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	Fig. 9 - 4
２９	第１地点	I	Ｂ５(G-5)　第III層	後期初頭	シカ	橈骨・右・近位	

表７．桑原飛櫛貝塚出土骨類同定結果（哺乳類－２）

資料番号	地　点	地区	遺　構　名	時代・時期	種　　類	部　　位	備　　考
３０	第１地点	Ⅰ	Ｂ５(G-5)　第Ⅱ層	後期初頭	シカ	基節	
３０	第１地点	Ⅰ	Ｂ５(G-5)　第Ⅱ層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	Fig.36-16
３１	第１地点	Ⅰ	Ｂ５(G-5)第Ⅲ層	後期初頭	イノシシ／シカ	疑鎖骨	
３２	第１地点	Ⅰ	Ｂ５(G-5)　第Ⅲ層上面	後期初頭	獣骨片不明種	角骨片	
３３	第１地点	Ⅰ	Ｃ５(G-6)	後期初頭	シカ	橈骨・左・近位・破片	
３４	第１地点	Ⅰ	Ｃ５(G-6)　第Ⅰ層	後期初頭	シカ	中足骨、骨体	
３５	第１地点	Ⅰ	Ｃ５(G-6)　第Ⅱ層	後期初頭	シカ	上腕骨・右・遠位部	焼けた痕跡
３６	第１地点	Ⅰ	Ｃ５(G-6)　第Ⅲ層	後期初頭	シカ	中手／中足破片	
３６	第１地点	Ⅰ	Ｃ５(G-6)　第Ⅲ層	後期初頭	イノシシ	橈骨片	
３７	第１地点	Ⅰ	Ｃ５(G-6)　Ⅲ層	後期初頭	イノシシ	基節	
３７	第１地点	Ⅰ	Ｃ５(G-6)　第Ⅲ層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	２個
３８	第１地点	Ⅰ	Ｃ５(G-6)　第Ⅲ層上面	後期初頭	シカ	後頭骨	Fig. 9 - 5
３９	第１地点	Ⅰ	Ｂ４(G-7)　第Ⅲ層	後期初頭	イノシシ	脛骨・左、骨体	
４０	第１地点	Ⅰ	Ｂ４(G-7)　第Ⅲ層	後期初頭	シカ	橈骨・左・遠位部	Fig. 9 - 4
４０	第１地点	Ⅰ	Ｂ４(G-7)　第Ⅲ層	後期初頭	シカ	破片	
４１	第１地点	Ⅰ	Ｂ４(G-7)　第Ⅲ層	後期初頭	イノシシ	下顎骨・♀・右(p３－４、第１臼歯)	Fig. 9 - 5
４２	第１地点	Ⅰ	Ｃ４(G-8)	後期初頭	イノシシ／シカ	肋骨	
４３	第１地点	Ⅰ	Ｂ２(G-11)　第Ⅱ層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	
４５	第１地点	Ⅰ	Ｃ４(G-8)とＢ２(G-11)の間のベルト　第Ⅲ層	後期初頭	シカ	大腿骨・右、骨体	
４６	第１地点	Ⅰ	Ｂ４(G-8)とＢ２(G-11)の間のベルト　第Ⅱ層	後期初頭	中型獣不明種	破片	
４８	第１地点	Ⅰ	C7・D7(G-2)とC8・D8(G-16)の間のベルト　第Ⅲ層	後期初頭	イノシシ／シカ	肋骨片	
５０	第１地点	Ⅰ	第Ⅲ層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	
５１a	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	シカ	脛骨・右・近位	
５１b	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	シカ	胸椎	
５２a	第１地点	Ⅰ	第１層	後期初頭	イノシシ	基節	Fig.36-18
５２b	第１地点	Ⅰ	第１層	後期初頭	イノシシ	中節	Fig.36-19
５３	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	獣骨片不明種	小片	多数
５４	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	
５５	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	多数
５７	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	多数
５８	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	獣骨片不明種	歯片	
５８	第１地点	Ⅰ	第Ⅰ層	後期初頭	シカ	歯fr.	

表8．桑原飛櫛貝塚出土骨類同定結果（哺乳類－3）

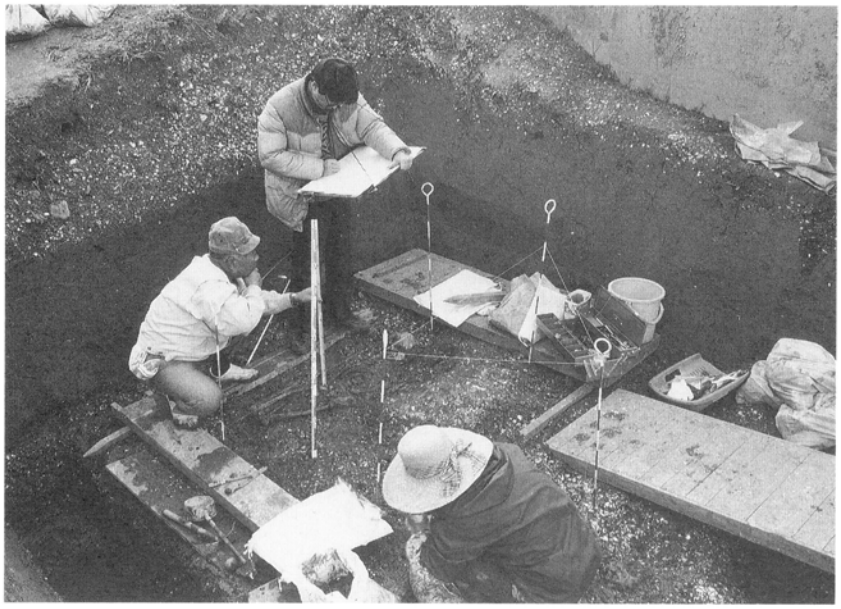
資料番号	地　点	地区	遺　構　名	時代・時期	種　　類	部　　位	備　　考
59	第1地点	I	第I層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	多数
61	第1地点	I	第1層	後期初頭	イノシシ	基節	
62	第1地点	I	第I層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	3点。焼けている
63	第1地点	I	第I層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	多数
64	第1地点	I	第1層	後期初頭	イノシシ／シカ	上顎骨片	
64	第1地点	I	第I層	後期初頭	シカ	鹿角	
64b	第1地点	I	第I層	後期初頭	シカ	肩甲骨・左	
65	第1地点	I	Aトレンチ　第II層	後期初頭	イノシシ	上顎臼歯fr.	
67	第1地点	I	Aトレンチ　第II層	後期初頭	イノシシ	距骨・右	かみ傷
67	第1地点	I	Aトレンチ　第II層	後期初頭	タヌキ	腰椎骨	
69a	第1地点	I	Aトレンチ　第II層	後期初頭	シカ	基節	
69	第1地点	I	Aトレンチ　第II層	後期初頭	シカ	寛骨の後の破片	
69	第1地点	I	Aトレンチ　第II層	後期初頭	イノシシ	踵骨・左	
70	第1地点	I	Aトレンチ　第II層	後期初頭	タヌキ	下顎骨・右	
71	第1地点	I	Bトレンチ	後期初頭	イノシシ	左切歯・1	
72	第1地点	I	Bトレンチ　第III層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	
73	第1地点	I	P-113	後期初頭	シカ	肩甲骨片・右	
75	第1地点	I	貝層上面	後期初頭	ネズミ類	寛骨・左	
75	第1地点	I	貝層上面	後期初頭	獣骨片不明種	破片	多数
76	第1地点	I	第II層	後期初頭	イノシシ	下顎骨・♂(歯欠)	
79	第1地点	I	中世包含層下	?	アシカ	肋骨	
81	第1地点	II	2面	後期初頭	シカ	右、p4	
82	第1地点	II	p-104	後期初頭	イノシシ	脛骨・右遠位部、骨端脱	Fig.35-19
83	第1地点	II	2面	後期初頭	獣骨片不明種	破片	4個
83	第1地点	II	2面	後期初頭	イノシシ	腓骨、骨体	
83	第1地点	II	2面	後期初頭	シカ	寛骨・左、臼部	
85a	第1地点	II	2面	後期初頭	シカ	中足骨	
85	第1地点	II	2面	後期初頭	シカ	橈骨・右・近位	
85	第1地点	II	2面	後期初頭	シカ	下顎骨片	
86	第1地点	II	2面下	後期初頭	獣骨片不明種	破片	3個
87a	第1地点	II	p-68	後期初頭	獣骨片不明種	破片	
87b	第1地点	II	p-68	後期初頭	イノシシ	腓骨片	加工品？
88	第1地点	II	1面下　包含層	後期初頭	シカ	中足骨・右、骨体	

表９．桑原飛櫛貝塚出土骨類同定結果（哺乳類－４）

資料番号	地　点	地区	遺　構　名	時代・時期	種　　類	部　　位	備　　考
９０	第１地点	II	１面下　包含層	後期初頭	イノシシ／シカ	肋骨	
９１	第１地点	II	包含層	後期初頭	イノシシ	肩甲骨・右	
９２a	第１地点	II	地山直上	後期初頭	イノシシ	距骨・右	
９２b	第１地点	II	地山直上	後期初頭	イノシシ	中手／中足骨11、椎骨遠位部	
９２c	第１地点	II	地山直上	後期初頭	イノシシ	下顎骨・左側破片	
９２	第１地点	II	地山直上	後期初頭	シカ	第１臼歯・右	
９２	第１地点	II	地山直上	後期初頭	シカ	角骨、第１臼歯・右	
９３	第１地点	III	C８・D８(G-16)　第Ｉ層	後期初頭	シカ	中足骨・右・近位	
９３	第１地点	III	C８・D８(G-16)　第Ｉ層	後期初頭	シカ	中手骨片	
９３	第１地点	III	C８・D８(G-16)　第Ｉ層	後期初頭	シカ	頸骨・右、骨体の破片	
９３	第１地点	III	C８・D８(G-16)　第Ｉ層	後期初頭	中型獣不明種	大腿骨	
９４	第１地点	III	C８・D８(G-16)　第Ｉ層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	２個
９５	第１地点	III	C８・D８(G-16)　第III層	後期初頭	シカ	頸椎	
９６	第１地点	III	C８・D８(G-16)　第III層	後期初頭	イノシシ	下顎枝	切り痕
９７	第１地点	III	第III層	後期初頭	イノシシ／シカ	肋骨	
９９	第１地点	III	C８・D８(G-16)　北壁　第III層	後期初頭	イノシシ	切歯・１・左	
９９a	第１地点	III	C８・D８(G-16)　北壁　第III層	後期初頭	イノシシ	切歯・２・右	
９９a	第１地点	III	C８・D８(G-16)　北壁　第III層	後期初頭	シカ	橈骨、骨体	
９９b	第１地点	III	C８・D８(G-16)　北壁　第III層	後期初頭	シカ	尺骨、骨体	
９９c	第１地点	III	C８・D８(G-16)　北壁　第III層	後期初頭	シカ	肋骨片	
１０１	第１地点	III	C９・D９(G-18)　第１層	後期初頭	シカ	中節	
１０２	第１地点	III	D９・D９(G-18)　第II層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	
１０３	第１地点	III	(G-18)　第II層	後期初頭	シカ	尺骨・右	Fig. 9－2
１０４	第１地点	III	C９・D９(G-18)　第III層	後期初頭	アシカ	破片	Fig. 9－4
１０５	第１地点	III	B８(G-15)　第III層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	２個　Fig. 9－2
１０７	第１地点	III	p-44	後期初頭	シカ	上腕骨・右・遠位部	
１０８	第１地点	III	p-42	後期初頭	獣骨片不明種	破片	２個
１０９	第１地点	III	１面下　包含層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	多数
１０９	第１地点	III	１面下　包含層	後期初頭	タヌキ	尺骨、骨体	
１１０	第１地点	III	上面　No.16	後期初頭	獣骨片不明種	破片	２個
１１１	第１地点	III	西壁　３面下	後期初頭	獣骨片不明種	破片	
１１２	第１地点	III	西壁　３面下包含層	後期初頭	獣骨片不明種	破片	
１１３	第１地点	III	西壁３面下包含層	後期初頭	シカ	鹿角片	

表10. 桑原飛櫛貝塚出土骨類同定結果（その他）

資料番号	地　点	地区	遺　構　名	時代・時期	種　　類	部　　位	備　　考
74	第1地点	I	貝層上面	後期初頭	角骨の幹		
77	第1地点	I	中世包含層	?	軽石		2個
78	第1地点	I	中世包含層	?	軽石		2個
96	第1地点	III	C8・D8(G-16)　第III層	後期初頭	材		



1号人骨実測作業（九州大学 中橋助教授他）

桑原遺跡群2

— 飛櫛貝塚第1次調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第480集

1996年（平成8年）3月31日

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
電話（092）711-4667

印　　刷　正光印刷株式会社
福岡市西区周船寺3丁目28-1
電話（092）806-5708